

新潮文庫

M O T H E R

—The Original Story—

久美沙織著



新潮社



新潮文庫

M O T H E R

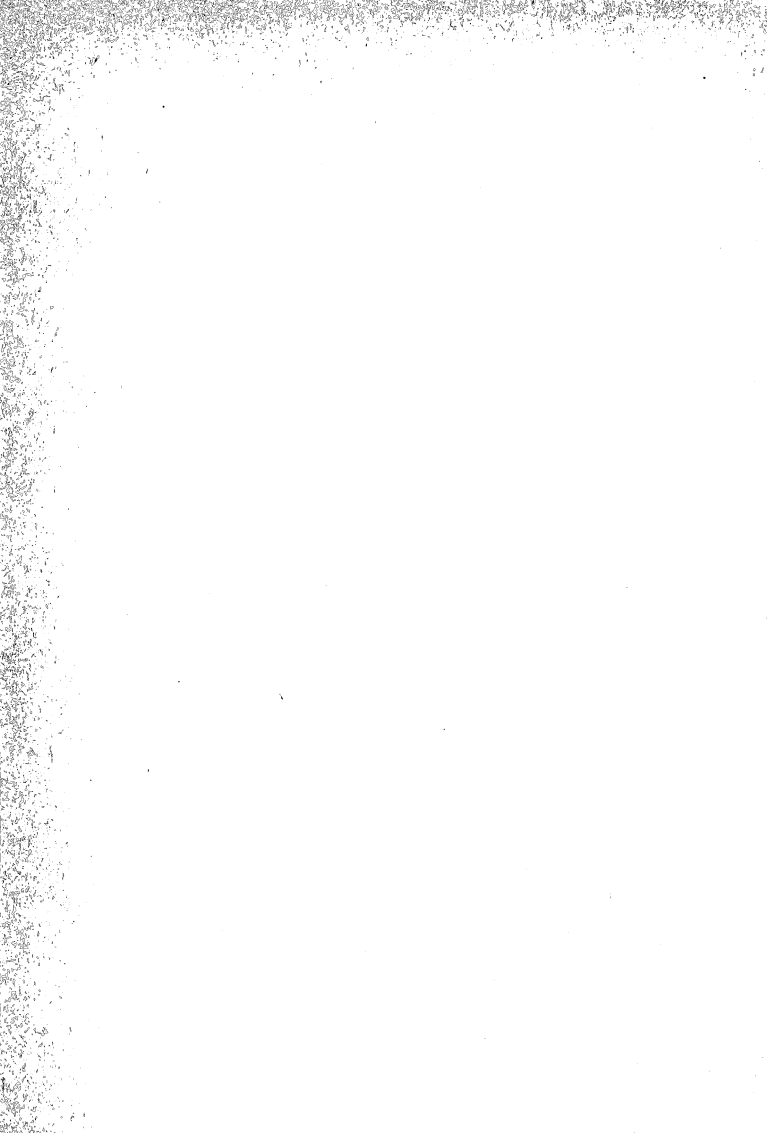
—The Original Story—

久美沙織著



新潮社版

4344



MOTHER

—The Original Story—



1 白 夜 の 村

スノーマンを探すなら、北極のまわりをぐるっとたどってごらん下さい。気のきいた地図か地球儀なら、きつと載っています。小さな小さな村だけど、なにしろ、ほら、あの、白夜で有名ですからね。

このあたりの地方では、夏ならば、日没後も日の出前も長いこと、電灯なしで新聞が読めます。もしあなたが旅行に来ていて、夜中にトイレに起きたついでに窓の外を見たなら、思わずオハヨウを言ってしまうくらいに明るいはずです。つまり、普通に言うところの昼間が、一日の半分よりも、ずっとずっと、信じられないほど長いわけです。

けれど、今は冬。一年で一番厳しい季節。一日の大半が夜なようなものです。朝は遅く、夕暮れは早く、昼は一面薄闇となります。正午にさえ、太陽は、地平線のほんの申し訳ばかり上のあたりに、ぼんやり情けなく見えるだけ。夜明け前などは、これ以上の暗さはおそらく世界じゅうのどこにもそうはあるまいと言えるほどの、正真正銘の真つ暗闇、という具合です。

その深い濃い闇のかなた、一年じゅう雪の消えない険しい山々のどこかから、ふと、一陣

の風が吹いて来ました。

風は、小さな村の全体をくまなく渡つてゆきました。

まるで何かを探しているかのようです。屋根の雪化粧を踊らせ、古ぼけた鎧戸をそつと揺すり、冬枯れの木立を震わせて、どこもかしこも訪ねて歩きました。ひとつもけものもまだ眠っている時刻です。だから風は、ずいぶん遠慮がちで、でもどこかしらせつぱつまった調子でした。さがしものがみつからないまま、がつくりと山に戻りかけた時、風は立ち止まりました。

……ここよ。あたしはここよ。

山のおもとの狭い土地に、注意していないと見落してしまいそうな小さな小さな教会が危なっかしくへばりついています。そのどこかから、返事が返つて来たのです。

……来たのね？　とうとう、来たのね？　あなたね？

あたしよ。

あたしはアナ。

ずっと知つてたわ。待つてたのよ。あなたのこと。あなたはあたしのことちゃんと知つてた？

教えて。

あなたっていったいどういうひと？　どこの誰なの？

風はその間には答えずに、嬉しげに渦を巻いて、そのまま消えてしまいました。

後には、悪い夢の中に自分を半分置いてきてしまったような瞳の少女が残されました。

アナはしばらくの間、じっと動かずに待っていました。金縛りにあった時のように仰向けのままからだをこわ張らせて、どんな気配も見逃さないように、眼と耳と心をすましていました。

けれどそれきり、何にもありませんでした。

……また、行ってしまったのね。

ほうつと息をはいて、アナはからだの力を抜きました。

夢か錯覚か、それとも、ほんとうに何かの合図だったのか、よくわかりません。とにかく、今はまだ、その時ではないらしいと思いました。

安心のあまりちよつと油断したら、頭の中を、たちまち、いつものあのときれときれのイメージが流れました。

牙を剥きだして襲って来る電気スタンドやゾンビ。奇妙な機械のような敵たち。廃墟になった動物園では、虎や象やワニと闘いました。何度か大怪我もしたし、いつだってクタクタでポロポロです。そんな場面のひとつひとつが、いやにリアルに見えて、いいえ、体験できしてしまうのです。何度も何度も感じたので、もう自分の思い出と言ってもいいくらいです。どのくらい前からか、毎晩見る夢でした。夜だけではありません、昼間でも、ふいに気が遠くなるような感じがして、ここではない世界に放り込まれてしまうことがあります。

いいえ、夢と呼ぶのは、きつと正しくないので。夢のようでありながら、夢ではない、それは夢とはまったく別なものなはずです。

アナには、もともと、不思議な力がありました。ひとの考えていることがわかつてしまったり、軽い怪我は撫なでていてるだけで治なってしまったりするのです。小さな頃ころは、つい癩癩かんしゃくを起おここしては近くにあるガラスやお茶碗ちawanを壊こわしてしまうので、さんざん注意されたものです。鳥や動物に話しかけてみたり、さわらずにもものを持ち上げる練習をして、なんとかさういつた力をコントロールできるようにはなりましたけれども、今でも時々自分で自分が怖おそろしくなります。カツとなると、どうやら眼に見えない稲妻いなずまのようなものが走はって何かを攻撃せずにはいられないらしいのです。

遠くで起こっていることを知る力だつて、あるのかもしれませんが。

そんな力が、あの、夢のようなものを見せているのではないでしょうか。

けれど、好きなように使えるわけではないのです。何でも全部わかるわけではないし、どこにでも行けるわけではありません。そうなら、すぐにしたいことがあります。切実に願っています。不都合にもその力は、必ずしもアナの自由にはならないのでした。

どうも誰か特別の相手がいるらしいと気がついたのは、ようやく最近になってからでした。この力が働くのは、特定の誰かについてだけ、らしいのです。

誰かたぶんアナと同じような力を持ったひとがいて、送おくっているのではないかと思ひます。自分の経験していることを、アナの心に。

拒みたくても、無視したくても、どうにもなりません。おまけに、こつちから話しかけようとしても届かないのだから不便です。まるで、そつちが放送局で、こつちが周波数を合わせるダイヤルのついていないラヂオのようなものです。憎らしいけど、わけがわからないけれど、しょうがありません。

そうして、たったひとりの相手なら、特別な相手に決っています。

でも、それは、いったいどの誰なんでしょう？

飛んで来たたたくさんのイメージから、その誰かのことが、少しはわかるようになって来ています。

たぶん、アナ自身と同じくらい年の頃の男の子です。勇敢で元気で、いやな奴じゃなさそうだけど、乱暴だしいい加減だし、デリカシーに欠けているところもあつて、時々アナはついついふくれつ面になつてしまします。

例えば、あの、ニツと照れ臭そうに笑つた赤毛の少女。ぴかぴか光るバッヂを差し出された時、アナの心はチクツと痛くなりました。ぶつきらぼうな手付きに彼女のせつなさ、別れの寂しさがはつきりと読み取れるのに、この放送局ときたら、まるで何にも感じてないので。大切な宝物をもらつても全然たいしたことだと思つていないみたい。ただもう旅の続きのことで頭がいっぱいなのです。

いい匂いの空気に満たされたピンク一色の広場に行った時には、もつと警戒心を持つたつてよさそうなものなのに、不思議な懐かしさを覚えていました。女王さまとかいう怪しい女

に逢つた時なんて、ぼうつと唇を半開きにして、やたらに瞬きをしていました。単純で子供っぽい奴みたいです。あんまり頭は良くないかもしれないかもしれませんが。

けれど、彼の気持ちにぴったり寄り添ってしまう時もありました。

例えば、スチール・ドアを開いた途端、ぱあつと広がった青空を見た時のあの感動。あれはどこかの学校の屋上ではないでしょうか。そこには、もうひとりの少年がいました。放送局の、そしてアナの唇が動きました。

「やあロイド！ さがしたよ。ぼくはケン。きみに是非、協力して欲しいことがあるんだ」
そう。どうやら、放送局は、ケンという名前なようです。

そうして、彼はこのごろはずっと、分厚い眼鏡のロイドといっしょに行動しているらしいのです。

このロイドというのがまたひよろひよろの弱虫で、さっぱり役に立ちません。ナマイキそうなことばかり言つて、敵が出てくるとギャアギャア両手を振り回すばかり。あんまり強そうな相手の時は、頭を抱えて座りこんでしまつていたりさえするのです。足手まといだ、ひとりだった時よりよっぽど闘いにくい、とアナは思うのですが、ケンはどうやらそうじゃない。大事にかばつて守つています。ひとりならもつとどんだん行けるといふ時にも、ロイドのために高いお金を払つて休息したりしています。まったく甘いつたらありません。

一番気に入らないのは、どっちも揃つてマザコンなところですよ。

「あああ。ママ、どうしてるかなあ」

眠れないロイドがつぶやく時、ケンの肩も曇ってしまします。それでいて、強がって、わはは、なんてわざと大声で笑ってみせるのです。

「バーカ。笑わせるぜ。なんだい、まだ乳離れしてないのかい。大丈夫だって。ご近所のオバンどもがちゃんちゃんめんど見てくれるさ。あんだけ金も置いてきたしな。どーせ、おまえがついてたつて、どうしようもないんだし」

「そんな言い方はないだろ」

ロイドはむくむく起き上がって、眼鏡をかけます。

「きみだって、時々夜中にうなされてるぜ、かあさん、とか、ミニー、とか、ミニーとかつてさ。汗びつしよりかいて、叫び声あげて、眼さましたこと、あるだろ。それをほくが、笑ったか？ え、いつべんでも笑ったことがあるか？」

「ちえつ。……つつこむなよ」

「じゃあ、ほくをバカにするのはやめてくれ。だいたい、きみのおかあさんは病気でもなんでもないじゃないか。ほくの、ほくのママは……カンノンの花がみつからないと……ああ、春が来るまえに死んでしまうかもしれない……」

「あいな」

ケンは頭を掻きながら、ベッドに座ります。

「いつとくが、生命が危ないのは、なにもおたくのオフクロだけじゃないんだ。はっきりいって、人類全体に春が来ないかもしれないんだぜ。なにせ地球の危機だからな」

「そんなことわかつてる」

「んじゃ、ママ・ママ言つてないで、とつと寝な！ 明日は山越えだ。いい加減、体力つけてくれよな。頼むぜ、天才少年科学者さんよ」

この時の放送は、枕が飛んで来るところで途切れました。

まったく、その場にいたら文句言っちゃうところだわ、とアナは思います。

ケンのおかあさんは単に遠く離れた故郷の家にいるようだし、ロイドのおかあさんは治らない病気に苦しめられているのはお気の毒だけれども、とりあえずやつぱりちゃんと家にいるのです。逢いたくなったら、逢えないわけじゃないのです。

なのに男の子たちときたら。自分で決めて、自分から進んで出かけてきたくせに、いつまでも恋しがつてるなんて。

「ぜいたくよ！」

声に出して言ってみると、のどがかすれていました。

アナはそつとベッドを降りて、スリッパを履きました。台所に行つて、水を飲むつもりでした。

けれど、部屋の扉をあけたとたんに気付きました。礼拝堂から灯りがもれています。おとうさんも起きています。あんまり眠れなかったのでしょうか。そう言えば、そろそろ夜明けなのかもしれません。

アナは小さくため息をついて、そつと礼拝堂に入つてゆきました。

「……主よ、あわれみたまえ。恵み深き父よ、汝の子ら満ちみてるこの星に、再び平安を与えたまえ」

おとうさんは、十字架の前にひざまずき、頭を垂れて、低いいい声で祈りのことばを唱えていました。アナは寝間着の裾を持ち上げて、後のほうの祈とう席にそつと腰を下ろし、両手を組合せました。

「わたしたちは待ちのぞんでいます。われらの助け、われらの盾を」

……ほんとうに、お願いします。どうか助けてください。

アナは唇を結んだまま、心でだけ祈りました。

教えてください。おかあさんは今どうしているのですか。まだ生きていますか。いつか、無事に帰ってくるのですか。

教えてください。あたしたちは、どうすればいいのか。

「直なひとびとのために光を闇の中に輝かせる主よ、まどうわれらに、今こそ、正しい者を送ってください」

アナのおかあさんは、実はもう一ヶ月も行方がわからないのです。イースターの街に教会の仕事でをかけて行つたきり、帰って来ないのです。

普通の事情なわけはありません。ちょうどその日、イースターから、おとなたちがみんな消えてしまったのでした。ひとびとは噂をしています。宇宙人がさらつてホーリー・ローリー・マウンテンに連れて行つたのだと。これもつまりは、今地球全体に起こっている混乱の

ひとつでしかないのだと。

「その人は汚れなく、悪い知らせを恐れず、光と闇とを正しく見分けます」

アナもおとうさんも、他所のことはあまりよく知りません。

このごろ、新聞や放送をにぎわしている事件、世界じゅうに起こっている忌まわしいできごとや、変な噂、不穏な空気のことは、もちろん、一応知ってはいました。けれど、なにしろスノーマンは雪深い静かな山村です。都会ではじまった流行もすっかり色褪せるまではけして届くことがない田舎です。そんな場所で生れて育つて来たアナには、大変なことはみんな、自分とは関係ないところではじまって終るような感じがします。

「地球の危機」なんてことには、とても現実感を持ってません。

だからこそ、あの本気の少年たちの青臭さが憎らしい気にもなるのですが……。

おとうさんの祈りは続いています。

「その心は堅固で、どんな困難にあつてもくじけることはなく、行く手に聳える高き山々も、必ず越えてゆくでしょう」

おとうさんだつて苦しんでいるのです。おかあさんをととても愛して、心配しているのですから。

おかあさんはたつたひとりしかいない。そのおかあさんがいなくなつてしまつた、どうやらさらわれてしまつたらしい（宇宙人になのか、悪魔になのか、それともイースターの都会の誰かになのかはわからないけれど）なんてことを、「混乱のひとつ」だからといって、片

付けることができるでしょうか？

でも、おとうさんは牧師さまです。家族のことだつてもちろんほんとうに大切なものだけ、まず、神さまから与えられた仕事のことを、第一番めに考えなければなりません。

牧師さまともあろうものが、落ち着きをなくしていい加減なお祈りをしてしまつたり、ましてや、村を捨てておくさんを探しにでかけて行つてしまつたりしたら、村のひとびとはどうなるでしょう。それでなくとも、イヤな噂が広がっています。世界がもうすぐ、滅びてしまふ、という噂が。

だからおとうさんは、今でもちゃんと、いつも通り、あんまりたくさんはない髪かみの毛をキチンとなでつけ、髭ひげを剃そり、ガウンの胸を少しだけ張つて、穏おだやかな微笑ほほえみを浮かべています。不安におびえて訪ねてくるひとびとの肩かたにやさしく手を置いて、大丈夫だから心を鎮しずめてするべきことをするように、と、深みのある声ではげまします。

今でもちゃんと。いつも通り。

でも、こんな夜明けのまだ誰もやって来ない時間には、こんな風にひとりでこつそり御聖おひ堂みにきて、一心にお祈りをしているのです。

自分に行けないから、それは自分の役目ではないから。

誰か、その役目を持ったひとを寄越してください。

そう祈る以外、おとうさんには、どうすることもできないのです。

ひざまずいているおとうさんのその黒い背中が、変に小さく見えて、アナは唇くちを噛かみまし

た。

長いまつげを瞬くと、涙の粒が散りました。

……きつと、あたしが、行かなくっちゃいけないんだ。

おかあさんを探しに。そうして、世界じゅうのひとびとの助けになるために。いつ帰って来れるのか、ほんとうに帰って来ることができかどうかもわからない闘いの旅に。

あの夢のようなものは、きつとその予告編なのです。あの子たちが迎えに来た時にはすぐでかけられるように、ほんの少しも迷ったりいやがったりしないように、心の準備をしておくように、送りつけられたものに違いありません。

でも、ほんとうに？　ほんとうに、そうなのでしようか。次の誕生日が来てやつと十三になる少女なんかには、神さまは、そんな大変な決心を迫っていらつしやるのでしようか。そんな大役を負わせるのでしようか？

「照らしてください。正しき者が道に迷わぬよう、この闇夜に、あなたのもしびを掲げてください。そしてもしも、彼が力つき倒れた時には、どうか安らかなる休息の時をお与えください。われらは旅人を歓迎します。義のために進む者を、血をわけた兄弟の誰にするよりも親切にもてなし、彼のために祈ります」

……みこころならば……！

眼のあたりを拭って、アナはぎゅつと頬に力をこめました。

神さま、あたしのこの生命を使ってください。

怖いけど、がんばります。家を離れるなんてはじめてで、すごく不安だけど。

あたし、闘たたかいます！

「いつの日かきつと、その剣は栄光のうちに掲げられ、その唇くちびるは主をほめたたえる歌を歌うでしょう、そして地には再び……」

「ごめんくださいあい!!」

「……たび……びと？」

振り向いたおとうさんの顔が、驚おどろきと期待に震ふるえました。

いきなり、教会の扉が大きく開かれます。途端に、まぶしい朝の光がぱあつとさしこんで来ます。その中には、あまり大きくない影かげがふたつ、堂々と立っているのです。

「すみません、ちよつとした遺失物届けなんだけどね」

祈りを中断させたことをわびるどころか、ずかずかと入って来るのは、野球チームの帽子ぼうしをはすかいにかぶった少年です。リュックサックを背負い、金色に輝く立派なバットを軽々と左肩にかついでいます。

「誰か、この村の女の子が、レインディアの駅に帽子を落としてったんですとき。教会に置いてるときや取りにくるでしょ。つたく、地球の危機だつてーのに、なんでこんな週番みたいな真似まねをしなきゃならないんだか」

アナは急いで立ちあがり、歩みよりました。

「それ、あたしのです」

「えっ」

男の子の青い眼が、ソバカスだらけの鼻のあたりがニカツとしました。

「そりゃ〜良かった。どこの間抜けなバカ娘だろう、まったくいい迷惑だぜ、って言わないうちにわかつて」

アナは無視して、言いました。

「ケンでしょ。あなたはケン。そして、そちらはロイドね」

「なにッ？」

「どうして……」

雪で反射した強い光の中、一瞬、時が静止しました。

少年たちもおとうさんも、その場で「だるまさんがころんだ」みたいに固まってしまっています。みんなわけがわかっていないのです。できごとのすべてをちゃんと理解しているのは、アナひとりだけなのです。

少しばかり得意な気持ちになつてしまつても、あたりまえですよね。

アナは凜々しく背筋を伸ばし、戸惑い顔の少年たちと次々に握手をしました。

やっと逢えたわね。今日が、その日なのね。

彼等の手がうんと歩いてきた後らしく火照つていてちよつぱり泥んこなことも、いつそ好ましいような気がしました。

「あたしはアナ。あなたがたと、いつしよに行きます」

言いながら、アナはケンの胸に向って思いを飛ばしました。
女の子だからってバカにしないで。ちゃんと役にたつわ。

だから、一番はじめに、あたしのおかあさんを助けだすのに力を貸してよ……!!

「お、おい……アナ？ 行くなって、どこに？」

答えが返って来る前に、おとうさんが、おそろしそうに尋ねました。

「決つてるじゃありませんか、地球を救いにですよ」

ロイドが両手を腰に当てて返事をします。

「ぼくら、これでも、最強の地球防衛軍なんですよ！ もういくつもの事件を解決しちゃつたんだから」

「ぼーえーぐん？」

おとうさんの顎はだらりと落ちました。

「ええ、そうですとも。どうもはじめまして、よろしく、アナさん。お眼にかかれて嬉しい。仲よくやりましょう」

「ええ、そうね」

「それにしても、ぼくは大変疑問なんですけれども、どうしてぼくらのことを知ってらしたんですか」

「後で話すわ。機会はこれから、いくらでもあるんだから」

「それもそうですね。たいへん合理的です」

「おい、待て待て！」

おとうさんが、ガウンの裾につまずきそうになりながら、割って入って来ました。

「ちよつと待ちなさい。いったいなんの話をしているんだ。きみらが地球を救うだつて？ まさか。そんな。こどもたちだけでか？」

「やーれやれ。すぐこれなんだ」

ケンのいらだちが、ふいに無防備にアナの心に飛びこんで来ました。

「どこ行つても、こどもだこどもだつてバカにされるばつか。そのくせ、こどもだつて利用できる限り利用しようと思つてる奴らばつか。まったくこんな地球じゃあ、いっぺん全とつかえしたほうがマシかもしれないってもんだよなあ」

……まあ。この子つて、わりとグレてるのね。

思つた途端に、ケンの眼がアナの眼に出合い、眉がびくびくつとしました。

「なんだか知らんが、良かった。この子がそんなにブスじゃなくて。でへへへ、なかなか色つばいぜ、寝間着姿も」

「まあっ！」

ばあん！

赤くなつた頬を押えながら、ケンは完璧に驚いた顔をしました。どうやら、思つてゐることが伝わつてしまうことに、まだ気がついていないようです。やっぱり、ケンは放送局で、アナはラヂオで、反対方向にはならないみたいです。

「あたしは着替えて来ますから、きみたちは食事でもしてて！」
冷たく言つて立ち去りながら、アナはふんつ、と息をはきました。
ああ、おかあさん。
こんな調子じゃ、先が思いやられるわ。

2 戦士たち

「おっと待て」

スノーマンの駅に向う近道を半分ほど来たところです。ケンはずきを真横に伸し、左手で油断なくバットを構え直しながら、立ち止まりました。

「なあに？」

アナが振り返ってみると、ケンはなにやら深刻そうな顔つきで耳をすましています。

けれども、アナはあんまりうんざりしていたので、その真剣な様子を勘違いしてしまいました。

男の子たちをお風呂にいれ、ありったけのご馳走を食せさせ、お昼寝をさせ、その間に涙ぐむおとうさんをこんこんと説得して、やっと出かけて来たのです。山肌を縫う森の中の道は誰も通った跡がない雪で覆われていて、ひと足ごとに膝まで埋ってしまいます。慣れているアナだって、そんなに早くは歩けません。おまけに空模様がどうもよくありません。夕暮れ前に駅にたどりつくには、もう、どんどん進むしかないのです。

なのにケンと来たら、急に立ち止まったつきり、その理由を説明してもくれないありさま。

冒険はまだはじまったばかりなのに、こんなんじゃ、なんだかさつそく疲れてしまいます。アナは腕組みをして、そつと言ってみました。

「まさか。きみ、うちに何か忘れ物でもしたって言うんじゃ」

「……出やがったぜ。どいてな！」

言われると同時に、アナはいきなり腕を捕まれてグイッと引つ張られました。背中側にかばわれたことはわかりましたが、あまり突然だったので、足がもつれて転んでしまいました。柔らかい雪の上だったからいいようなものの、もうちよつとで、モミの木の太い枝に激突してしまふところでした。乱暴はやめて、と、開きかけた口が、たちまちそのまま悲鳴をあげそうになりました。

何か巨大な白い獐猛なものが、すさまじい雪煙の煙幕を張りながら、四方から襲つて来たのです！

たちまち戦闘がはじまりました。ケンのバットがひるがえり、ロイドのブーメランがうなると、白い塊どもはザアツと雪を蹴散らして飛び散ります。けれどホツとする間もなく、すぐにまた思いがけない方向から飛びかかって来るのです。上からも、横からも、右から左から、そして後からも。

あまりの目まぐるしさに、アナには何が起こっているのか見当もつきませんでした。雪の上に座ったまま、できるだけからだを縮め、顔を覆った両手の指から眼だけを出して、びゅんびゅん動き回るすべてのものからなんとか身をかわしておくのがせいっぱいです。それ

だけでも胸が痛いほどドキドキして、のどがからからになりました。ギャン、と何かがあげた悲鳴が、いつまでも耳の奥にこだまします。遠近感がおかしくなつて、眼の前で起こっていることが、嘘みたいに映画みたいに見えてしまいます。いつそ気絶してしまいたいくらいだけれど、こんなところでほんやりしていたら、ひどく邪魔です。ケンのパットにだつてひっぱたかれてしまうかもしれません。

とにかく、木の陰にでも隠れよう。

おへその下に力をこめて、立ち上がろうとしたとたん。

はっはっはっはっ。

生臭い息が白い煙になつてアナの顔のまわりを踊りました。不意に、目の前に、いやらしくとんがった鼻面がつきだされました。ナイフのような牙の合間から、黒味がかつたピンク色の舌が、信じられないほど長くのぞいて、ひらひら揺れています。獲物をみつけた喜びにギラギラ濡れたように光つた眼にあまりにも近くから射すくめられて、アナはからだじゅうから力が抜けてしまいました。とても立ち上がれません。

だつて、オオカミです！

それも、一度に四匹も！

「き……きやあああつ！」

とうとう声が洩れてしまいました。たちまち突き出された前足はサツと伏せてなんとか避けたものの、オオカミの鋭い爪に、逃げ遅れた左側の三つ編みが先のほうでぶつたりと切ら

れました。サラサラした長い黒髪が半分だけ、ぱあっとひろがりました。顔にかかる髪の間から見えたのは、雪の上にとざりと落ちた三つ編みの端っこ。さっきまで生きていたものが、今はもうただの物質。アナは鼻の頭が冷たくなるほどぞうつとしました。

「なあんだ」

着地するやいなやふつとんで戻って来た憎らしいオオカミの鼻面にゴインと一発、三塁打くらいのスイングを決めながら、ケンと来たら、へらへら笑っています。

「はねっかえり娘かと思っただけど、フツの怖がりなんだ」

言い返したくても、顔がカチコチでのが塞がっていて、とても声になりません。

「そのほうがいい。女の子はね。願わくば、もうちよつと手強い敵の時にもあんまり足をひっぱらないでくれる程度には、鍛えてほしいもんだが。ま、おいおいちゅーことで……おつと！ そらよつ」

また一発。息も乱さず気楽そうにおしゃべりをしながらでも、ケンのバットはびしびし決ります。どうやら、暴力は得意のほうのひとようです。ロイドも背中側でけっこうがんばっている、あたりはだんだん静かになりました。オオカミたちが次々に雪の上に伸びてしまつたからです。みんな、四肢をつっぱらせてびくびく震えてたかと思うと、何か憑きもので落ちたような顔つきになって、耳を垂らし、尻尾をまるめ、すごすご森の奥にひっこんでゆきました。

「ま、こんなもんさ」

乱れた金髪をバサバサツと振って軽く整えると、ケンハ帽子をかぶりなおしました。

「じゃ、行こか。こつちでいいな？」

先頭に立って歩きはじめながら、もう鼻歌なんか歌っています。

……くやしい！

でも、まだしびれたみたい足が動きません。ひとこと言つてやることさえできません。

アナは手袋を外して、雪の上についた両手をギュツと握りしめました。それから、雪を掴んだまま、顔に当てました。冷たくて、いい気持ちでした。

「立てますか？」

そばに膝をついて、アナの顔をのぞきこんだのはロイドです。

「髪、お気のどくです」

「なんでもないわ、こんなの」

いいながら、アナは右側の三つ編みのゴムをほどいて、頭を振りました。

ずうっと前から伸していた髪です。やつと腰のあたりまで長くなっていたのです。切られたのは、ほんの十センチほどだったけれども、全体でひとつの三つ編みにするにもどうにも左右の長さが違いすぎました。しかたなくポニー・テールにしてみましたけれども、やつぱりきつと、みつともないだろうと思います。

どこかではさみを見つけて、ちゃんとそろえなきゃ。

いつもきれいに整えてくれていたおおかあさんは、今はいないのです。なんとか自分でじよ

うずに切らなくってはなりません。

ずいぶん短くなつちやうだろうな。

ふくれつ面を隠せないまま横目で見ると、ロイドは心配そうにこちらの様子をうかがっています。額に汗の玉、眼鏡が鼻の頭までずり落ちて、とてもこどもっぽい顔ですけれど、言うことはしつかりしていました。

「怪我はしてませんか？ 薬ならありますから。遠慮なく言ってください」

「だいたいようぶ」

アナはグツと眼をつぶって、髪のこととは考えないことにしました。

「ありがとう。もう歩けるわ」

「無理しないで。つかまってください」

ロイドは男の子としては大きいほうじゃありませんでしたけれども、思いがけないほどしつかりした力で、アナを支えてくれました。

「あのう。気にしないでくださいね」

「何を？」

「ケンのこと」

ロイドはしばらく黙って唇を噛んでいましたが、アナがじっと待っていると、急に早口に言いだしました。

「あいつって、口は悪いけど悪気はないんです。スポーツ少年ですからね、体力とか運動神

経とか、あるのがあたりまえだと思ってるんですよ。おまけにあれでゼンソク持ちでね、時々発作ほつきを起こすんです。自分が病気を克服してがんばってるんだから、こっちががんばれないわけないって思っちゃまってるんだ。ぼくだってねえ、あいつといっしょに歩きはじめた頃は、ものすごく文句ばっか言われました。確かに、多少の迷惑めいわくをかけはしましたけれどね。少なくとも頭脳労働はこっちの担当だったわけですから。ぼくがいなければ通れなかった道だつてあつたんですから。それとそれとでプラマイ・ゼロ、対等な関係つてもものでしょう？ まあ、ぼくとしては、そんな風に思ってるわけなんですけど、時々、自分で自分によく言いかけせなきゃなりませんよ。なにしろひどいことばかり言われますからね。それでも、腹たてちゃいかん、許してやらにゃいかん、あのバカはまだ『無知の知』の境地に至つてなんかいないんだ、つてね、いっしょうけんめい思つて、そんなこんなで、なんとかこのへんまで同行して来たわけです。あいつだつて、実際、ひとりで行くよりか、仲間がいるほうが絶対嬉しいはずでしょ。なのに、けしてそうは言わないですからね。ほんといつて、ちゃんと感じてもないんじゃないかな。つまり、情動の一部が欠損しているというわけですが。だから、あなたが、いっしょに行つてくれることになつて、ぼくは大変に嬉しく思っているんです。なにかと辛い道ちがひのりでしょうが、いろいろと苦勞がありましようが、少なくとも最初からペースについて来れなくなつたつて、気に病む必要なんか全然ありませんからね。女の子でいらつしやるんですし、地球防衛軍としても若葉マークでしょう、大手を振つて甘えてくあまださつていいんです。それで、ぼくもあいつも、少しは人間的に成長するかもしれないって

もんじゃありませんか。ねえ？」

「……………」

アナがぼかんとしていると、ロイドは急に眼をくるくるさせ、頬ほおから首まで真っ赤になりました。

「だっ、だからっ、つまりそのっ」

「うん。ありがとう。はげましてくれたんでしよう。元気、出たわ」

「いつ、いえっ、そんなっ。すみませんっ。さしでがましいことをっ。あの、ぼ、ぼくって、ぼくって……やつば、おしゃべりすぎます？」

そんなことないわよ。

アナはゆっくり首を振りました。

ケンの考えてることなら読めるけれど、あなたの心はそうじゃないから。いっぱい話してくれようがいい。そのほうがちゃんとかかる。

だっ、たった三人きりの仲間なんですものね。

仲よくしていききたいもの。

アナがハンカチを出して見せると、ロイドは怪訝けげんそうに眉まゆをひそめました。

「汗。すごいから。風邪かぜひいちゃう」

「え？ あ、あ、匂においました？ こりやどうも……うわ」

ロイドは受け取ろうと出した手を、サツとひっこめました。丈夫そうな皮手袋は、長い旅

路にもものすごく汚れていて、ぴっちりアイロンのかかったアナのハンカチにはとても触れなかつたのです。

あわてて袖で拭こうとするロイドを押えると、アナは無言でつまたてをして、ハンカチを使つてあげました。前髪をあげてみると、さすがに賢い少年、なかなか立派なおでこでした。

「も、申し訳ない」

「いいの」

仲間でしょう？

アナが鼻に皺を寄せてとびきりの笑い顔をしてみせると、ロイドもギクシヤク不器用そうに笑い返してくれましたけれども、ほとんどべそと区別のつかないような表情でした。

「……おまえらなあっ！」

ふと、顔をあげると、ケンのソバカス顔がすぐ横で怒りに燃えていました。

「何ヒマなことやってんだ。根っこでも生えたのかよ。俺はもう五百メートルも向うまで行って戻つて来たんだぞ。立てるなら歩け、歩けるなら急げよな、バカッ！」

そうして言いたいだけ言うつと、ガツパガツパと雪を飛ばしながら、走つて行ってしまします。

あの調子なんです、いつも。

と、ロイドの眼が言いました。

でも、悪気はない、んだったわね？

と、アナの眼が答えました。

そうなはずなんですけど。

……やれやれ。じゃあ、まあ、行きましようか。

スノーマンの駅にたどりついたのはまだ日の高いうちでしたけれども、雪でダイヤが乱れていて、列車は、ハロウィーンという名前のほんの隣の町までしか走ってくれないのでした。それを聞いたとたんに、ケンはますます不機嫌になってしまいました。

待合室でも、ふたりとはうーんと離れた椅子に座つてずっと何か考えこんでいましたし、列車に乗ってからと来たら、車内が空いているのをいいことに、ひじかけに汚いブーツの足を乗せてでーんと寝ころび、どこからか拾つて来たらしい小枝を楊枝みたいにくわえたりして、窓の外を見たつきり。まったくガラが悪いつたらありません。

憂鬱なので、心のラザオを働かせようとしてみましたけれど、どういうわけかうまくゆきません。何を考えているのか、わかりません。

アナはこつそり、ロイドに尋ねました。

「彼、なんで怒ってるんだと思う？」

「うーん。怒ってるっていうより、イラついているんじゃないですか」

ロイドは網棚から拾った新聞の経済欄から顔をあげて答えました。

「一刻も早く地球を救わなきゃならないっていうのに、おとなたちと来たら、鉄道ひとつ満
足に運営してくれないんですからねえ。まったく困ったもんですよね」

「あたしたち、ほんとうはどこまで行くはずだったの？」

「さあ。あいつの考えてることはよくわからないけど。……とりあえずサンクスギビングか
な。物資を調達するには、一番便利ですし」

「大都会だものね」

「あ。行ったこと、ないんですか？」

うなづくアナを見て、ロイドは目尻めじりに笑い皺を寄せました。

「そんなに大した街じゃありませんよ。ゴミゴミしてて。暴走トラックはいるし、物価は
高いし。空気が悪くって、ケンなんかすぐゼンソクを起こしちゃって大変でした。昼間にこ
どもだけで出歩いてると、学校をサボってるんじゃないかってすぐ叱しかられますしね」

「ひよつとして、あなた、サンクスギビングのひとつなんだ」

「そ、そうですけど」

照れたようにロイドは口をぱくぱくさせました。

「ケンの家だってそう遠くはないですよ！ あそこなら、歩いてもいいけます」
へえ。

じゃあ、ふたりとも、けっこう都会っ子なんだ。

アナは思いましたが、もうひとつの気になっていたことのほうを口にしました。

「サンクスギビングにはきつと、あなたの学校があるわね。屋上から、遠く地平線まで、山と空が広がってるのが三百六十度見える学校が。そこで、あなた、ケンにはじめて逢ったでしょう」

ロイドがとび色の瞳を大きくしてまっすぐにぶつけて来るので、大当たりだったことがわかりました。やっぱりあれはただの夢じゃあないのです。ほんとうのことを、遠くから、感じていたのです。

そうだろうとは思っていましたが、確かめることができて、やっぱりずいぶん安心になりました。

「あのね」

唇を舌でしめして、アナはしゃべります。

「実は、あたしね、あなたたちがこれまで体験してたことを……」

「おかつろぎ中のところ悪いんだが」

振り向くと、ケンがまたいつの間にか背後に立っているのです。威圧するように椅子の背に腕をかけて、アナの顔を見降ろしていました。

「なあ、教会のお嬢さんよ。いろいろ考えたけど、やっば、あんた、帰ったほうがいいぜ」
なんて唐突な！

「でも……！」

「オヤジさんも心配してたしき。はつきり言って、足手まといなんだわ」

ケンの口の端のくわえたまんまの枝が、しゃべるたびにクイクイ揺れました。

「悪いこと言わねえから、駅ついたら、戻る電車を待ちな。なんなら、下りが来るまで、見送っててやってもいい。べんとーも持たせてやるからさ」

「待って、ケン。あたしはね」

「ききわけの悪い女はモテないぜえ」

「真面目に聞いてよっ。ちゃんと説明するから。あのね、あたしはね、ずっと夢を見ていたの、あなたたちが」

「地球を救う夢を見てたって？」

フフン、と笑って、プツ!! と息を吐くと、枝は列車の壁にしっかりと刺さってしまいました。

「オーケイ、じゃあこつちもマジに言おう。ハロウィーンは、どうもキナ臭い。怪我しないじゃあ、すまされないかもしれないぜ」

「町が占領されてるとでも？」

ロイドが言うと、ケンは眉をかがげて肩をすくめ、声をひそめました。

「気づいてねえか。駅員も車掌も、どーもおかしい。眼がな、変に据わってんだ。制服もブカブカだったりしてよ。おまけに、こいつはハロウィーンまでしか行かないって言うだろ。来た時や順調でハッピーだったのに。ひよつとしたら、あいつら、本物の駅員じゃないかもしれないとは思わないか？ ハロウィーンから乗って来た何か悪いモンが、ほんものとするり

変って、俺たちを畏おそにひきずりこもうとしているのかもしれないとは？」

アナとロイドは青い顔を見合せました。

世界は、ほんとうに、もうそんなにメチャクチャになってしまっているのでしょうか。

ふたりが揃そろって見上げると、ケンはニカリと笑いました。

「ま、考えすぎならいいがな」

「戻る便がないい？　なんでっ」

もう夜も更よけたハロウィーン駅に、ケンの怒ど鳴り声こゑがキンキン響ひびきました。すごんでみてもまだボーイ・ソプラノだったりするあたりが、なかなか情なさけけありませんでした。

「ついさつき雪崩なだれがあつたんだ。復旧に二・三日はかかるそうだ」

「なんでそんなに遅おそいんだよ」

「あれこれあつて手が足りないんだ。しょうがないだろ」

「くそ！」

「あーこら、おまえ切符きっぷは！」

「そらっ。キセルじゃねえぜ」

「……くそガキめ……親の顔が見たい」

プツプツ言う駅員さんにガンを飛ばし、拳骨げんこつを噛みながら、ケンがこっちにやって来ました。アナとロイドは先に改札を抜けて、外の風に当たっていたのです。

「くそつ。だめだ。当分電車は走らない。こんな町で、どうしろって言うんだ」
「そうカツカしないで」

ロイドがなだめようとしても、腕を振ってふりはらいます。相当に頭に来ているみたいで
す。

「嘘つきどもつ。嘘だ。絶対に嘘に決ってる。雪崩になりそうな崖がけなんかどこにもなかった
じゃねえか！ 誰も彼も宇宙人のスパイかよつ！」

「だったら、そんなこと大声で言わないほうがいいんじゃない？」
「すごい目つきでにらまれてしまいましたけど、アナも負けてはいません。」

「それと。あなたは気に入らないだろうけどね。こうなったら、ほんとうにまったく申し訳
ないけれど、あたしも、おふたりといっしょに行動させてもらいたいわ。そんなスパイのひ
とたちばかりの中に、たったひとりで残されたりしたら怖こわいもの」

「わあってるっ！」

「怒鳴らなくても聞こえます」

耳を塞ふさぎながら、アナはため息をつきました。

あたしだって喜んで来たわけじゃないのよ。でも、お互いに気が進まなくなつたって、やつ
ぱりいっしょに行かなきゃならない運命なのよ。神さまが、そう、導いてくださっているん
だもの。しょうがないじゃあないの。

いつまでもグズグズ言うなんて、男らしくないわ。

「とにかく、まず、宿を探そう」

ロイドが言いました。

「ここらには雪はもうないけれど、まだけっこう寒い。明け方にはもっと冷えこみが予想される。アナさんもいるし、敵がウヨウヨいるかもしれない中で、野宿はどうかと思う。体力の浪費はつつしみたい。金銭的なゆとりはまだあるんだろう？」

「ああ。賢いおまえの言う通りだよ。できたら、公衆電話も見つけたい。そろそろ、オヤジに連絡とつとかないとな」

あぐら。まあ。

パパに連絡ですって？ 里どころついちゃって。可愛いこと。

思わずクスツと笑ってしまったアナを鋭く見とがめると、ケンの額に巨大な「む」の字が浮びました。

「違うぞ！ そんなんじゃないっ!!」

「なにが」

「だって……おまえ誤解したろっ！ 違うんだぞ。オヤジはNBS国際ネットの人間なんだ。今ずっと、政治のほーの偉いさんとかといっしょにつめてる。あんまりヤバイネタが流れちまうと国じゅうがパニックになるし、マスコミを乗っ取られでもしたら最悪だからな。あつちはあつちで最前線にいる。世界じゅうのほんものの情報がナマで入ってるのは、あそこだけなんだ」

「……へえ……」

親子そろって放送局か。

ちよつぱりおかしかつたけど、胸が痛くもありました。

政府のひとつといつしよに仕事をしているなんて、ケンのパパはきつと、放送局でもうーんと偉いほうのひとつなのに違いありません。職業に貴賤きせんはないとは言え、マスコミのバリバリのエリートと来たら、やっぱり相当にカッコ良いです。ど田舎の、今にも潰つぶれそうな教会の、貧乏びんぼうつたらしい牧師の家とは、全然違つた暮くしをして来ているのかもしれない。

思えば、金髪きんぱつでブルー・アイズで野球が得意、だなんて、ガサツそうでも実は、立派におぼつちやまなケンだつたりします。

そんなだから、ゼンソクなんて軟弱なんじやくな病気になるんだわ。

いじわるく考えてみても、胸のチクチクはあんまりおさまりませんでした。

「だから、時々電話してみんなだよ。電話線だつて、いつまで使えるかわかりやあししないしな。最新情報を手にいれられるのはオヤジなんだ。だからなんだ。変な勘繰かんぐりはやめてくれさあ。わかつたら、いいから、歩いた歩いたつ！」

んもう。いちいち怒鳴らなくつたつてわかるつたら。

はいはい、と、おざなりに手を振つて歩きだすアナの変な気分を察したのか、やさしい口イドは、なんとなくそばに寄つて来てくれました。

「疲れませんか？ 何か持ちましようか？」

「だいじょうぶ」

ほんとうにジェントルマンなロイドです。

「あなただつていつぱい荷物があるでしょう。あたしは、自分で持つていけるくらいしか持つてないから。そんなに甘やかさないで。……ねえ？」

「なんです」

「そう言えば、ロイドの家は？　パパって何をなさつてらつしやるの？」

言つたとたんに後悔こうかいしました。ロイドのまだ中性めいて華奢まがしやな横顔に、フツとおとなっぽい鬚かげが浮んだのです。

「離婚、したんです、両親」

「……………」

「ははは。そんな顔しないでください。よくある話です」
でも、アナは知っていました。

ロイドのママは、とても大変な病気で寝たきりになつてゐるひとなはずです。ロイドのパパは、そんな可哀かわいそうなひとを捨てて出ていつてしまつたのでしょうか。そんなひどいひとだつたのでしょうか。

そんなひとのことを、思いださせてしまつたのでしょうか？

アナがいつまでも黙つてゐると、ロイドはちよつと頭を掻かいて、話しました。

「父は電子工学者です。ケンのオヤジさんとは分野が違ちがうけど、そっち方面じゃあ最先端な

んですよ。ただ、だからこそ、どうしても忙しくつてね、母には不満だったんだろうけど。ぼくには、最高にいい父でした。こどもの頃から、アップルやアタリやニンテンドーのコンピュータをいっぱい買ってくれたし。ぼくがゲームに飽きて、分解したりプログラムをいじったりするほうに興味を持つてからは、キットもいろいろ与えてくれてね。仕事柄、ちょっと古くなっちゃったハードがいくらでも手に入りますから、別れてからも、そこらへんだけは繋がつてて。サンクスギビングのぼくの部屋なんか、床から壁から全部コンピュータですよ。全部稼働すれば、そこらのスパコンに負けないくらいいのメモリになる」

「それで、あなたも、機械類に強いひとなつたのね」

すごいわ、と言つたつもりなのに、ロイドの眉は、なぜかますます曇つてしまいました。

アナはあわてて、つけくわえました。

「羨ましいわ。あたしコンピュータなんて全然わからないの。小さい時から、英才教育を受けることができたなんて、ラッキーだったわね。就職にも有利よね」

「けど、だめなんです！」

ロイドはギョツと拳を固め、眼鏡の下のまぶたを力いっぱい閉じてしまいました。

「人間は機械じゃない。コンピュータなんかじゃ救えない。ああ、ぼくも、医学か、せめて生物学を勉強しておくんだつた。幸い知能指数は低くないんだし……」

ロイドの声は震えていて泣きたいのを我慢しているみたいでした。もしかすると、ほんとうはもつといっぱいもつと詳しく話したいことがあるのに、これ以上は平気では言えなかつ

たのかもしれない。

……おかあさまのこと、か。

気がついて、アナは口をつぐみました。

ロイドは、おとうさまを尊敬してる。そうして、たぶん、おとうさまに似てる。でも、だからこそ、ちよつぱり対抗意識、あるかもしれない。

おとうさまがお忙しくって、人間のお世話はあるまり得意じゃないひとだったりした分を、ロイドは自分が代りに埋めなきゃって思っているんじゃないかしら。そういうところまで、おとうさまにそっくり似ちやうのが怖いから……だから、すぐにおおげさなくらいフェミニストなんじゃないかしら。よく知らないあたしにも、うんと丁寧で紳士的にふるまってくれて。

そうしてもちろん、ほんとうに大切なのはおかあさま。

有名なエディプス・コンプレックス。

おとうさまがしてあげられなかったことをおかあさまにしてあげるために、カンノンの花を手に入れておかあさまの病気を治してあげること、生命を賭けずにいられない、とか？ 横目でうかがうと、ロイドは、ずうっと前に行くケンの背中を見つめていました。目を赤くして、頬を青ざめさせて、ふらふら歩きながら、頭だけはしゃんとあげてうんと前をにらんでいたのです。

まるで、大切な仲間であるケンを、ずっとたつたひとりのともだちだったはずのケンを、

どこかほんとうには許せないでいるみたいです。競争心、ライバル意識でしょうか。憎らしいと、悔しいと、思っているみたいでした。

「……同じね、あたしたち」

手の中にそつと指をすべりこませると、ロイドの緊張が解け、びくんと震えました。

「ケンも立派よね。世界を救うためにわざわざお家を出て来たんだもの。でも、あたしたちは違う。同じように選ばれてこんなことになったって言っても、あたしたちが来たのの直接の動機は、自分たちのおかあさまのことでしょう。ね？ ちよつと、情けないね」

逃げようとするロイドの手を、アナはそつと握りしめました。

「でも、それはそれでいいじゃない？ 母を尋ねて三千里して、ほんのついでで地球の危機救っちゃうなんて、オシャレじゃない？」

「……アナ……」

ロイドの手に力が籠り、アナは思わず顔をしかめました。

「あつ、すみません、痛かった？」

「うん、ちよつとね」

「すみません、すみません」

「謝ることないわ。自慢していいじゃないの」

「自慢？」

「そうよ」

ポニー・テールがびよこんと揺れるほど、アナはうなずきます。

「ねえロイド。あなたは、たぶん、町にいた頃はただの眼鏡の秀才だったんだろうけど。今はもう立派な戦士よ。力だつて、こんなに強い」

赤くなつた手をひらひらと翳して見せると、ロイドはしばらく黙つてアナの顔と、手と、左の瞳と右の瞳とを、ゆっくり順番に見つめました。そうしてそれから、急にまだ空中にあるアナの手を掴み、グイッと引き寄せて、自分の唇に押しあてました。

冷たいような熱いような、ひどく短いキスでした。

「ありがとう」

うろうん。首を振りながら、アナの胸も高鳴りだしてしまつていきます。いきなりこんなことをされるなんて、仲間なはずのロイドがやけに大人っぽい目つきになつて自分を見るなんて、まったくショックです。

「とても嬉しい。どうしてだろう、なんだかすごく幸せだ。すごく勇気がわいて来た。ぼくらが戦士なのならば、あなたは闘いの女神なのかもしれない……いいや、やつぱり女戦士なんだろうか。アナ、ぼくはあなたに誓います。ぼくはこのぼくにできる限り、あなたを守る。ぼくの生命を賭けてでも、守ってみせる。だから、あの考えなしのケンの奴が何をどう言つても、どうかずつといっしょに行つてくださいね」

「あのね」

早鐘の胸を隠して、アナはいたずらっぽく笑いました。

「とつても光栄だし、嬉しいし、ありがたいけど。そんな愛の告白みたいなこと言っちゃだめよ。おかあさまにカンノンの花を届けるまでは、あなた、あたしごとき踏んづけてでも、生き残らなくっちゃ、でしょ？」

「……カンノン……？」

ロイドの顎がさがります。

「なぜそれを？ まだ、ほく、そんなことをあなたに教えてはいないはずなのに」

「だからね。つまり、あたしは」

「お・の・れ・らあああ……」

またしてもです。

アナが、自分の特別な能力についてちゃんと説明しようとしたとたん、ケンが茹でエビみたいななかつこうでこちらをにらんで立っていたりして、それどころではなくなってしまうのです。確かに、いつの間にか、どんどん歩くのが遅くなって、どんどんケンと離れてしまったのは、悪いと言えば悪いのですが。

「よくもまあこんな時にイチャつこうなんて気を起こせるもんだな。まったくどういう神経なんだよ。TPOつてもんを教わってこなかったのかよ。ひとが緊張して警戒して、真剣に必死に宿探してつづーのによ。そういう態度はないだろ、そういう態度はっ！」

「いや、誤解だ、ケン」

「そうよ。あたしたちは何も」

「ああ、ああ、うるせえな。言い訳なんかいらねえ。いーよいよ、めんどろなことはみんな俺任せにして、にやんにやんしてくれてもいいよ。好きなだけやらかしてくれ。ただしだ」

いからせていた肩からふうつと力を抜くと、ケンはずらりと眼を光らせました。

「敵さんが団体さんで出ちまつた時くらいは、マジホンで協力してくださいよネ。たのまつせ、おふたりさん」

「団体さん？　つて……うわあっ！」

街灯が暗くて、わからなかつたのです。でも、気がついてみると、こどもたちは、もとい、戦士たちは、いくつもの赤く光る瞳にぐるりを囲まれてしまっています。ふらふらと揺れながら輪を縮めて来るのは、どうやら、この町のおとなたち。オーバーオールのおじさんもいれば、買物袋をさげたおばさんもいます。「ヒッピー」の時代からタイムスリップして来たみたいなおにいさんもいます。その他おせい、まずはどこの町でもよく見かけるようなフツのひとびとが、みんな、正気とは思えない足取りで、じりじりと三人に近付いてくるのです。

「これはどうしたことだ。いったい、どうなってるんだ？」

ロイドは不意に、ケンの両腕を後から羽交い絞めにしました。

「おいっ、おまえ、何か、このひとたちを怒らせるようなことでも言ったんじゃないのか？　味噌煮こみウドンとか、もみじ饅頭とか、ザザムシの佃煮とか、聞き手の感性次第ではサベ

ツ的ブジヨク的と受け取ることができないこともないような発言を、ついついしてしまったんじゃないのか？」

「んなこととするわけないだろ！ 離せよ、俺はただ、ホテルの場所を尋ねようと思っただけでい」

「ほんととか？」

「ほんとだよ、離せたら」

ロイドのホールドから逃れ、さつそく金色バットを「スター・ウォーズ」で覚えたニツポ式ケンダーの下段のかたちに構えながら、ケンはずつづつぶやきました。

「したらよー。なんかなー、幽霊屋敷がどうのこうのって噂してんだわ、こいつらが。幽霊屋敷だぜ、幽霊屋敷！ いかにもなんかありそうだろ。だから、つい、聞き耳立てるだろ。したら、誰もいない館の中から、ピアノの音が聞こえて来るって言うじゃねえか」

「ピアノ。なるほど」

ロイドが顔をあげ、ケンがうなずきました。アナには何がなんなのか、さつぱりわかりません。

「だろ。だから、もつとよく聞きたいと思ってちよこーつと近付いてたらばさ。いきなりなんだよな、「なんだおまえは」「どこの学校だ」畳みかけるようによお、「こんな遅くに外を歩いていて、おとうさんおかあさんは心配しないのか」なんちゅうーから、思わす……」

「思わす？」

「何をしたんです」

「関係ねーだろ」って言っただけだよオ！」

アナは眼を覆おおいました。よりによって、おとなを怒おどらせた時最高に効果的なセリフを使つかってしまふなんて。ケンって、やつぱり、あまりにも頭が悪いのか、要領が悪いのか、正しょう銘めいグレいているか、どれかなのに違ちがいありません。どれにしても、とてもじゃないけど、地球防衛軍のリーダーにふさわしい資質とは言えないような気がしてしまうじゃありませんか。

こんな奴を頼っていたのでは、生命がいくつあっても足りないじゃありませんか。

「夜遊びは非行のしるしだ、一歩めだ！」

突然に、おじさんの攻撃がはじまりました。ケンもロイドも、もうさんざんいろいろな町で言われなれてしまったのか、たいして動うごきませんでした。教会育ちのアナは不意に耳に飛び込んで来た「非行」のひとつと、いきなりヒット・ポイントの三分の一近くをもぎ取られてしまい、あわてて両手で耳に蓋ふたをしました。

「よその子も、見て見ぬふりはよしましょう。みんなうちの子世界の子、みどりの地球の大事な子」

おばさんはカルチャー・スクールのテキストをメガホンにしてすごい声をあげました。

「うがあ！」

なにかがツポにはまってしまったようです。ロイドは痒かゆがったのたうちまわります。

「そんなに若いうちから不純異性交遊なんてナマイキだぞお。おまえのおかあさんは泣いているぞお」

おにいさんはテケテケと昔懐かしいエレキ・ギターのBGMつきでニヤニヤ言いましたが。

「へん。そういうあんたのかあさんだって、さんざん泣いたろ？」

ケンに怒鳴り返されて、ギクリと立ち止まりました。

「今だ。例のものを覚え！」

ケンはその他おおぜいをニツポン・ケンドーのかたのさまざまで威嚇しながら、声をかけましたが、なにしろ全身ポリポリ掻きながら転げまわるのに忙しいロイドです。リュックを肩から外そうとしてはいるのですが、たびたびすさまじい痒みに襲われるらしく、ひくひく悶えて、うまくいきません。手伝ってあげたくても、ケンは手が離せません。アナは両耳を塞ぐのをあきらめて、リュックに突進しました。その間に、第二段の攻撃が、押し寄せてきました。

「不良、不良、不良！」

「学生の本分は勉強だ！」

「こどもは勉強してりゃあいんだ。勉強しろ。勉強しろ。勉強しろ」

たいへんです、ケンの耳にも巨大なタコが発生して八本足をくねらせながら窒息攻撃をかけてきます。倒れたままのロイドやアナの上にも、熱々のタコ焼きが雨あられと降り注いでくるではありませんか。このままでは、全員絶望です。負けてしまいます。

「ケン、例のものって何？」

青のりや紅シヨウガをふりはらいながら、なんとかかんとかりユツクのベルトを外すのに成功したアナが、叫びました。

「スプレーだ！ 強モカ・スプレーって書いてある奴がないか？ まさか、全部使っちゃまってないと思うんだが」

「え？ スプレーって缶かんよね？ フロン使ってないでしょうね。……あ、これ違う。エビアンじゃないの。やーね、ロイドったらお肌はだに気を配ってたりするのかしら。わあん、ないない。鞆たばんの中身なかみくらい整頓せいどんしておいてよお。あ……さわった……それっぽい……あつた！」

「よおし、ぶちかませ！」

ぶしゅーっ!!

アナがノズルを押し、あたりに霧きりがたちこめると、すさまじい効果がありました。タコもタコ焼きもあつという間に消え去つてしまいます。おじさんもおばさんもおにいさんもその他おおぜいのみなさんも、いつせいにハツと我に返つて、眼をぱちぱちさせだします。そうして、とたんにみんな、それぞれの用事を思いだして、そそくさと立ち去つてしまいました。

「ほえっえ、のーゆーぬぬに（これって、どういうクスリ）？」

まだ漂ただよっている霧を吸い込まないように片手で鼻をつまみながら、恐おそる恐るアナがつぶやくと、ケンはホツとして微笑ほほえみながら、バットを下ろしました。

「だいじょうぶ、毒じゃない。吸いこんでも、だいたい、俺たち力いっばい若いもんにはあ

んまり効かない」

「？」

「そいつは、めざましなんだ。完徹カンテツ続きでも仰天ゴウテンするほど眼がさめる。だるい頭がシャッキリ冴さえる。服用後かつきり三時間は羽根ぶとんにくるまったって眠れねなくなるくらいなんだとき。締切しめきり前のプログラマーだの小説書きだの、くたびれ果てたおとなどもがよく使うんだと。ロイドは、よく知ってるんだ」

「それで……けほけほっ……あのひとたちの眼をさませたってわけ？」

毒じゃないと言われても、霧はなんだかのどに沁しみましました。

「そうだ。あいつら、集団催眠きぐんにかかっているからな。人間ならまだいいんだが、俺は前に動物園でひでえ目にあつたよ。催眠術きぐんにかかったゴリラってのは、催眠術きぐんにかかった皇帝ペンギンの百倍やつかいだつたが……やれやれ。なんだなんだ。しょうがねえなあ、天才さんは」

ケンはずきさのあまり失神しているロイドの脇わきにしゃがみこみ、その額のあたりに片手を翳かきしました。アナは思わずアツと叫きびそうになりました。ケンのでのひらが突然ぼうつと鈍かく発光しはじめ、ロイドがもがいたからです。

……サイコ・ヒーリング……!!

それは、アナもよく知っている技でした。実は、ケンよりもっと上手に、強力に、できないこともない、例の『不思議な力』の一種と、まったく同じものの、初心者タイプでした。

けれど。アナは何も言いませんでした。緑がかつた光に照らされているケンの真剣な横顔を、もう少し見つめていたような気持ちがありました。そこには、普段の乱暴で下品な感じは、まったくありませんでした。神聖で敬虔で、奇跡を行なうことを許された者だけの静かで落ち着いた表情でした。

緑色に燃えるてのひらは、ゆっくりと、慣れた感じに、ロイドのからだじゆうを、上から下へ下から上へたどって行きます。からだから数センチほど離れた位置を、撫でるようにして。アナならば、そんな悠長な面倒なことはしません。うんと離れたところでも、相手が見えてさえいれば、エイツ、と気合いひとつで、一瞬のうちにすんでしまう治療でした。けれど。

アナは邪魔をしたくありませんでした。

やっぱりケンも力を持つていたのです。なんだかワクワクするじゃありませんか。だって、そりゃあ本人にも自覚はないかもしれないけれど、きつと、その力で、ずっとアナを呼んでいた、求めていたんですから。口でいくらひどいことを言われたって、たましいの叫びを否定することなんかできっこないのです。

元気が出てきました。自信がわいてきました。

これだったら、いっしょにやっけて行けるかな、と思いました。

ただし。ケンはなにしろこの性格です。

あたしはあなたよりも上手にできるのよ、なんて変に横から口出しをしたら、また耳鳴り

がするほど怒鳴られてしまうかもしれません。

ガミガミ言われるのも、まあ、それほど、悪くはない。もう慣れっこになっちゃいましたから、ケンがもしあんまり親切だったりおとなしなかつたりしたら、どこか具合でも悪いんじゃないかって不気味になつてしまひそうです。不機嫌たらしく、ブツブツ言われるのも、なんとなく、絶対にいやだつてわけじゃあないような気がして、アナは自分で自分が不思議でした。

それにしても、ロイドつたら。だめねえ。必ずきみを守る、とかなんとか。言つてくれたばかりだつて言うのに。今回なんか、あなたよりあたしのほうが、ちよつぱり役にたつちやつたみたいよ。どうする？

アナが思わずウフフと笑いを洩らした頃。

「……うーん……」

そのロイドも気がついたようです。

ケンはホツとため息をついて、立ち上がりました。もう、あの聖人めいた顔ではなく、いつものやんちゃ坊主ぼやうずに戻つてしまつています。まだ寝惚ねぼけているみたいなのロイドの衿首えりくびをネコでも運ぶようにつまみあげて、ガクガク揺ゆすぶつています。

「おいつ、行くぞつ。しつかりしろ」

「あ……ああ？ あ、悪い」

「ほれ。歩けるか。歩くぞ」

これだものねえ。

どどん歩きだしてしまった少年たちの背中を見つめながら、アナはそっと首を振りました。

治療が必要な人間はもうひとりいるって言うのに。もうフラフラのクタクタなのに。まるで気がついていないのです。動けないほどの大怪我をするか完全に気絶してしまうかでもない限り、面倒を見てもらうわけにはいかないようです。口がきけるうちは、痛いなら痛い
と自分で申告するのが当たり前だろうとも思っているのかもしれない。

あくまでも、思慮は浅いひとみたいです。おとめごろなんて複雑なものは、一生理解できないかもしれない。

いいわよ、いいわよ。

ケンが振り向かないのをいいことに、カツと気を集中させてたちまちのうちに自分で自分を治してしまいながら、アナはまた、ちよっぴり胸が痛いのに気がつきましたけれども、なにしろうかうかしていると置いてきぼりにされてしまいます。

走りはば飛びをする時のように、スタート・ラインでちよこんと景気付けのジャンプして、走りだしました。男の子たちときたら、雪がなくなつた途端に、まったく、歩くのが早すぎるのです。

3

幽霊屋敷ゆうれいやしき

「これより私有地・危険につき立入禁止」

「超自然！ほんものの迫力！
はくりよく

あなたはまだこの恐怖を知らない。
きょうふ

幽霊屋敷

（正義の味方若干名募集中 ゆうぐうす）

「売り主直売 中古別荘 公開中

美麗内装済み・優良物件・事務所店舗可
てんぽ

マクシミリアン・ド・ローズウオーターまでご連絡ください

Tel 09-666-113-4242

三つ並んだ看板の向うには、いかにもそれらしく古めかしい館が、ツタとバラの鬱蒼たる
やかた
うつろ

茂みの中に見え隠れしています。月もおぼろに叢雲の、変に生ぬるい柔風の、じつとりと肌
にまといつく湿り気の、いかにもそれらしい夜でもありました。絹を裂くような美女の悲鳴
が聞こえても、吸血鬼だのオオカミ男だのが登場してくれても、全く違和感がない風情です。
この看板たちを、別にすれば。

「いったい、どれが本気なんだ？」

ケンがつぶやきました。

「たぶん、全部本気なんでしょうが……全部冗談かもしれませぬ」

ロイドが答えました。

「いつそ、そのローズウオーターさんに電話して聞いてみたらあ？ うまくすれば泊めてく
れたりするかもよ。それってお得じゃない？」

あくび混じりにアナが言うと、男の子ふたりがジト目を集めました。「女つてのはこれだ
から……」とどちらの顔にも書いてあるような気がして、アナはあわてて続けました。

「だって。あなたたちはウチでたつぷりお昼寝したでしょう。あたしは夜明け前から起きて
たし、そのまんままずーつと起きつばなしよ。もう眠くてまぶたがくつつついちゃいそう
だわ。なのに、どうして今あわてて幽霊屋敷なの？ こんなとこに来なきやならなかつた
の？ ちよつと寄り道をしようつてもりなら、募集されちゃっているからこの際元気に腕
試ししてみようとかなんとかいいうことなのならば、あたしは悪いけど降りるからね。そんな
の。バカバカしい。帰ってぐつすり眠るほうがマシだわ」

「……この、ワガママ女……」

ケン は 苦 々 し げ に 言 い 捨 て ま し た 。 ロ イ ド に ま あ ま あ と 肩 を 抱 か れ て も 、 そ つ ぽ を 向 い て し ま い ま す 。 男 同 士 は し ば ら く 顔 を く つ つ け 合 わ せ る よ う に し て 相 談 し て い ま し た が 、 ど う や ら 考 え は ま と ま ら な い み た い で す 。 そ れ に し て も 、 ど う し て こ う す ぐ に 仲 間 外 れ に さ れ て し ま う の で し ょ う 。 二 対 一 、 み た い に な っ て し ま う の で し ょ う 。

ア ナ が ぶ う つ と ふ く れ つ 面 を し て い る と 、 気 配 り ロ イ ド は 今 度 は こ ち ら に や っ て 来 て 、 ア ナ の 腕 を 宥 め る よ う に ほ ん ほ ん 叩 き ま し た 。

「説明が遅れて申し訳ない。つまりは、ピアノ、なんですよ」

「ピアノって……誰もいないのに聞こえて来るってあれ？」

「そうです。その情報がなかったら、ほくらだって、何もこんなに急いでわざわざお化け屋敷になんか入ろうとは思いません。けれど、もしもそのピアノが歌っているのが、ほくらの探しているメロディのひとつだとしたら、どんなに困難だって、行って、ちゃんと聞かなくっちゃあならないんです。それが、この一見行き当たりばつたりの旅の目的なんです」

ア ナ の ほ っ ぺ た は み る み る う ち に し ぼ み ま し た 。

そ う 言 え ば そ う で す 。 地 球 の 危 機 を 救 い に 行 く 人 だ っ て こ と は ち ゃ ん と 知 っ て い ま し た け れ ど も 、 ア ナ は 、 そ の た め の 方 法 に つ い て は 、 何 に も 知 ら さ れ て い ま せ ん 。 特 に 考 え て み た こ と が あ り ま せ ん で し た 。

た だ 、 ど こ か に 何 か す こ ぶ る 強 い 奴 が い て 、 そ い つ を 、 例 え ば ケ ン の 例 の 金 色 の バ ッ ト で

ゴインと打って打って打ちまくって降参こうさんさせればそれでいいような気がしていましたが。思えば、そんなことで参ってしまうような相手ならば、おとなたちがこんなに苦労をしているわけがないではありませんか。

「……はじめから話して」

落ち着いた声で、アナは言いました。

「あたし、なんでも知っていると思っていたけれど、そうじゃあなかつたみたい。ちゃんと覚悟かくごを決めるために、全部知りたい。ちゃんと話して」

ロイドはうなずくと、まだあさつての方角を向いていたケンの腕を取って、そつとアナの正面にひっぱって来、その耳に何ごとか囁ささやきました。ゆらりと肩を揺らすようにして仁王立におうたてちになったケンは、ぶつきらぼうな口調で途切れ途切れに、自分のこと、世界のこと、これまでにあつたことを話し始めました（ケンのことばづかいはどこどころあまりにも乱暴でしたし、やたらに長くなってしまうので、ここでは要約して書いておきます）。

——ケンがある日いつものように眼を覚ますと、家じゆうに邪悪じやあくな空気が満ちていた。生命のない物たちが悪魔あくまにでも操あやつられているかのように暴れ狂い、母やふたごの妹たちを脅おびかした。少年野球で鍛きたえたからだでがんばって、なんとか秩序ちうじよを取り戻もどしたものの、わけがわからない。電話を取って、いやに長い出張にかけたきりだった父親に、何か困ったことがあつた時にだけ連絡しろと言われた番号をまわすと、父ははじめてほんとうのことを教えて

くれた。

地球はいま危機に瀕している、謎の宇宙人がこつそりと侵略を開始していて、各地が異常な事態にままわれている、だからこそなかなか家に帰ることもできずに仕事に没頭していると言うのだ。

「実はな、ケン。うちは特に、その宇宙人と妙な因縁がありそうなのだ。ひいばあさんのマリアが行方不明になった話は知っているだろう。ひいじいさんのジョージのほうも、いっしょに神隠しにあいながら、何故かひとり戻って来て、それからの人生を全部 P S I の研究につきこんでしまったことも。そうして、ケン、おまえはひいじいさんにとてもよく似ているんだよ。物置に行ってみろ。ひいじいさんの残したものを調べてみてくれ」

ケンが驚いて何も言えずにいると、父はしばらく口ごもってから、さらに続けて告白をした。

「それにおまえには、P S I としか呼ぶことのできないような力があるはずだ。覚えていないか。赤ん坊のころ、おまえは野山の鳥やけものと話し、ちっちゃなすり傷をいくらこしらえても夢中で遊んでいるうちに治してしまった。そんな力は、アルファベットを書き取れるようになつて左利きを矯正した途端に消えてしまったが。……実はな、ひいじいさんはほとんど文盲でおまけにギッチョだったのだ。それも、右手じゃあケツも拭けないほどの徹底した左利きだった」

物置に降りて、ケンは、ひいおじいさんのほとんどエジプト文字のようなもので書かれた

日記を発見した。それは、たとえば父にはまったく理解できなかったに違いないけれども、ケンにはなぜかすらすら読むことができたのだった。そこには魔法の国マジカントにたどりつくための秘密のあいことばが隠されていたのだった……！

「……え？ ちょっと待ってよ」

ケンが息つきをした隙すきに、アナはつい口を挟はさんでしまいました。

「マジカントって何？ これってSFじゃあなかったの。なんでいきなりファンタシーになるのよ？」

「ファンタシーだってSFの一部だろ」

つか疲れたようにケンがつぶやくと、

「違う違う。SFがファンタシーの一種なんです！」

ロイドが反論しました。

「すべてのものがたりはつまりはファンタシーなんですからね。狭義きやうぎのファンタシーは確かに、『剣と魔法』のジャンルのことを言い、SFの枠わくの中で語られることが少なくありませんが」

「ははあん。そうなの。ごめんごめん。ブンガク談義なんかどうでもいいわ。それで、それから？」

——あいことばはわかつたものの、マジカントへの道は楽ではなかつた。さまざまな敵と闘い、事件を解決しながら、ケンはず少しずつ、幼い頃に持つていた力を取り戻し、強めていった。その間に、世界じゅうの秩序がどんどん乱れていくのも目撃した。そうしてやつとの思いでマジカントにたどりつくつと、そこには、魔法の女王、クイーン・マリーが待つていたのだつた。

その目ざめる時が昼になり眠る時が夜になると言われる強大な力を持つはずの女王だったが、今は地上世界から魔法世界にまで広がりがつある謎の侵略に対抗する手段をなくしてしまつてゐる。それはどうも、けして思いだすことのできない古い歌と関係があるらしい。その歌を、こまぎれになつて世界じゅうに散らばつてしまつたメロディを、すべて取り戻し思いだして再び歌うことができるようになった時、世界の母なる女王の力が蘇り、侵略者に致命的なおしおきをくわえることができるに違いないというのだ。

ゆえに、ケンは、探して回ることになつた。なくしてしまつた思い出の歌を拾い集めて、女王に届けるために。そうして旅は再びより広範囲にはじまり、ロイドを得、今アナを仲間を迎えたのだつた。これまでに集めたメロディは三つ、三小節分。ケンの家に放り出されてあつたオルゴールから、カナリヤ村のローラさんから、動物園のサルから、それぞれ一小節ずつ。七つ探して、女王がまだ覚えてゐる最初の部分に繋げれば一曲になるらしい。八小節を集め終れば、世界を救うことができるはずなのだ……。

これまでに集めた分のメロディを、ロイドがオカリナで吹いてみてくれました。それはあまりにも短くて、半端で、まだとても「歌」とは呼べないほどのものでしたけれども、なんとなく物悲しくとても懐かしい気持ちになるような旋律でした。

「……そうだったの」

アナは深々とため息をつきました。

SFはともかく魔法と来るとどうも眉に唾をつけたくなってしまうあたりがかえって現代っ子としては古臭いタイプのアナではありましたが、なにしろ世界の滅亡が目前に控えている今日このごろです。認めるも認めないも、信じるも信じないもありません。

そういうことなら、確かに、ひとりでに鳴っているピアノは、いかにもです。

それに、はつきり言つて、アナは音楽はわりと得意でした。そんな苦勞をして探したメロディをただそらで覚えてるなんて、心許ない感じですよ。ちよつと口遊んでみるのではなく、わざわざオカリナで吹いてみせてくれるあたりも、怪しいような気がします。

ひよつとしたら、男の子たちは音痴だったり、楽譜が書けなかったりするのかもしれない。最悪の場合、聴音そのものがまちがっていいないとも限らないじゃありませんか。せつかく覚えたメロディが調子っぱずれじゃあ、魔法の国の女王さまだつてガックリしちゃうに決っています。でも、アナなら、絶対忘れないようにちゃんと五線譜にしておくことができますし、オルガンでなら音符が五つの和音までちゃんと聞き取れるし、すぐきれいなソプラノで正確に歌つてあげることができます。なんといいつても、ものごころつくかつかないかの

頃から、聖歌隊で鍛えて来たのですから。

もしかして、あたし、そのために呼ばれたんだつたりして。

……こんな想像って失礼かな？

心の中でこっそり舌を出しながら、アナは元気に言いました。

「わかったわ。じゃあ、行きましょう！ 幽霊屋敷に！」

そうして、さっそく先にたつて、歩き出したのですが。

「ちよつと待った」

またです。ケンが邪魔をするのはです。アナが何か肝心なことをしようとすると、いつもこれです。どうせきつと、先頭に行くのは俺だ！ とかなんとか、くだらないこだわりで文句をつけたいのには違いありません。

ゆつくりと振り返つてうわ目使いににらんでやると、なんとケンはまぶたを半分にしてだらりと力なく立っているではありませんか。肩にも、腰にも、まるで力が入っていません。

「どうしたの？」

「悪い。やっぱ、後回しにしよう」

「なんで」

ひとがせつかくけなげにも決心を固めたつて言うのにつ！

と、アナは思いました。

「腹が減った。いくさはできない」

そう言われた途端に、アナのお腹も、ぐうつと鳴ってしまつたのです。

「ほーっほっほっほっ。気持ちのよろしいものでございますねえ、お若いかたの食欲は。まあまあ、どうぞどうぞ、ご遠慮なく、ご遠慮なく。みなさま、育ち盛りでいらつしやるのでございますから、ほーっほっほっほっ」

おじさんのくせにびらびらフリルがいつぱいのブラウスなんか着て、端から端までずらりと指輪の並んだ手で口を隠しながら笑うローズウオーターさんに見守られながらのご飯は、正直あんまり気持ちのよろしいものではございませんでしたけれども、なにしろほんとうに腹ぺこでした。三人は、普段はけっこうクライで避けてしまう食べ物（例えば、ケンはピーマン、ロイドはアンチョビー、アナは味の濃いもの全般など）でも、すっかり夢中で平らげてしまいました。

食事の終り頃に、銀色のお盆を掲げてミルクたつぷりのコーヒーを運んで来てくれたのは、ローズウオーターさんのひとり娘のエバンジェリンでした。

「ほら、ご挨拶をして」

おとうさんに言われても、陶磁器のような白い頬を赤くして、うつむいてしまふばかり。ひどく内気な子のようです。

ただしお洋服は、たぶんおとうさまの趣味なのでしよう、まるで童話の中のおひめさまのような、袖も裾もたつぷりとした優雅なドレスです。そうして、それがちゃんと似合つてし

まう稀有なタイプの少女なのでした。

髪かみの毛は亜麻色あまのくるくる縦ロール、瞳ひとみは水晶すいしゅうにあるような不思議なバイオレット。長いまつげの影かげから、その紫色むらさきいろの瞳ひとみがそうとそうと、満腹してひっくりかえってふうふう言っている誰かさんを見つめていることに気がついたのは、ひとりアナだけではありませんでした。

「ははあん？」

ローズウォーターさんは片方の眉をかがげました。とぼけているような眼めを、娘とケンと、また娘とケンと何度も往復させると、お髭ひげをひねって、ニタリと笑いました。アナの胸は何故か、とてもいやな感じにドキドキはじめました。

「さて、みなさん」

氣取った物ものごしいはじめたローズウォーターさんのことばは、なんだかいやな予感がして、ひとことも聞きたくないような気がしましたけれども、そういうわけにはいきません。「お申し出いただきました件につきまして、わたくしから、ひとつご相談がございませぬ。の屋敷やしきを幽霊ゆうれいどもに乗っ取られてより、当方がたいへん困惑こんごういたしておりますことはすでにご承知おきと存じます。かの館やかたが無事化け物どもの手から取り返され、またもとのように美しい別宅として使えるようになることは、心の底よりのわたくしの願ねがいでもございませぬ。そのようなたいへんなお願いを聞き入れてくださるとおっしゃる奇特きせきなかたがたには、こちらから今さら、何も申し上げる筋合ではございますまい。しかし」

意味深な間を取つて、順繰りに三人を見まわしてから、ローズウオーターさんは、まっすぐにケンに視線をぶつけました。ぼんやり椅子にもたれていたケンが思わず姿勢を正し、まぶたをぱちぱちさせてしまうほど、強く光る瞳でした。

「実はですな。かの屋敷は、このエバンジェリンに与えるつもりのもので、いつの日かめでたくどなたにか嫁ぐ時まで、清く正しく美しく暮すはずの館。本来、かの地には、父であるわたくし以外の男は許さぬ、汚れなき子どもらと女性のみ立入りをしか認めぬことになっておりましたのでございます。基礎工事を行なう時に、わたくし、ご先祖さまに、そのように誓いまして、それを守ることによつて、わが娘の純潔と幸福を賜わるよう願をかけてしまつたので」

「ぐええつぶぶ！」

ケンがものすごくお行儀の悪いことをしました。みんな思わずシーンとしてしまいました。が、最初に気を取り直したのはローズウオーターさんでした。レースの縫取りのあるハンカチを出して額や頬を拭いながら、なに食わぬ顔で続けました。

「もちろん、もちろん、わたくしとて理解はしております。今さら、『汚れがうんぬん』などど申したところで、なにしろあれだけ長いこと化け物に占拠されていた場所、とんちんかんであることはわかつております。けれど、これが愚かな父ごころと云うものなのでございませうか。かの地に正義の光が取り戻されるその瞬間にこそ、そこには、わが娘に無関係な男性には、けして存在して欲しくなかつたりしてしまふのでございますよ、はなはだ

勝手ではございますけれども、ご理解をたまわれましたでしょうか？」

「それじゃ、つまり、怪物どもを退治しなければいいんでしょう？」

ロイドが言いました。

「ほくらに邪魔な分だけはどうつかりやつつけちゃうかもしれないけど、けして根こそぎ駆除したりしなければ、何も問題はないんじゃないですか？ そうすれば、お嬢さんに関係のない男はどうのこうのなんて配慮をする必要はなくなるはずだし。ほくらは要するに、ピアノが鳴らしているっていう曲を聞きたいだけなんですから」

普通の口調でなにげない顔つきでしたけれども、力いっぱいイヤミなロイドでした。それも、こんな見るからにお金持ちそうなおとなに向って、素晴らしいご馳走をたっぷり食べさせてくれた恩人に向ってです。立派にやりあっているのです。

都会っ子って根性座ってるな、と、アナは思いました。

「わかりましたとも。ちゃんと気をつけて、幽霊さんたちはできるだけ傷つけないようにしますから、鍵貸してください」

けれども、ローズウオーターさんだって、だてに年は取っていないなかったみたいです。

「ほーっほっほっ。またまた。ご冗談がお上手でらっしゃる」

せつかくの慇懃無礼なセリフも、ころころと笑ってうつつちゃってしまいました。ロイドの眼鏡がぴくんと動きました。

「じゃ、勝手に押し込みますからね。扉の一枚や二枚、破損するかもしれませんが、ご承知

おきください」

「それは、あなた、不法侵入というものになりますでしょう」

「あのですねえ。法とおっしゃいますけれども、そんなものがいつまで通用するかもわからない、世界の危機なんですよ。なのに、どうして、そんなつまらないゴネかたをするんです。そんなに、幽霊屋敷が大事なんですか？　なあ、おい、ケン、きみも何か言ってくれよ」

ロイドがらしくもなく憤慨して、口添えを求めたというのに。

「ぐー」

ケンと来たら、いつの間にか、椅子の背にがつくりもたれてすっかり眠りこんでしまっているではありませんか。

「お眼鏡さん、お眼鏡さん」

思わずガツクリするロイドに、ローズウォーターさんがどことなく下品な感じに手招きをしました。

「だからね。そうは言っていないでしょ。あのね、ものは相談ですけども。……ちよつとお耳、お耳を貸してちょうだいな」

ロイドはおつくうそうに立ち上がり、ローズウォーターさんの赤い唇に横つ面を近づけました。ご亭主がなにごとか囁くと、その眼がまんまるになりました。すぐに何か言いかえそうとして制止され、また何か言われ、説得されつづけ、とうとう、何かヒソヒソ共犯者めいた相談がはじまってしまったのですが。

アナはそういった全てを聞くともなくぼんやりと聞き流してしまいました。内緒話の仲間外れにされたことを不快に思うよりも、すぐ横の椅子で、太平楽に居眠りをしている「世界を救うはずの少年」の、伏せたまっげの影の長さから、目を離すことがどうしてもできなかつたのでした。

この呑気さはどうでしょう。

お腹がいつぱいになつたら眠くなる、ちよつと気にいらないとわめき散らす、ほとんど自分のことしか考えてないみたいに見える。ケンときたら、まるで赤ん坊です。でもその両肩には、地球がまるごと一個乗つかつているのです。

信じられないわ。

と、アナは思います。

彼がそんな重要人物だということも。その彼と、自分が、いつしよに旅する仲間であるということも。みんな夢の中のできごとのように、頬をつねってみたくなるくらいです。

そうして、部屋の隅っこのほうからは、お館の内気な美少女の紫色に濡れた瞳が、いびきをかいて眠りこけるヒーローにいつまでもうつとりと注がれているのです。それは傍で見えて胸が痛くなるほど、あまりにも強烈な憧れでした。

知らないわよ、あたしは。

アナは思いました。

あの子の目にケンは、きつと天使長ガブリエルさまみたいに素敵にカツコよく凍々しく見

えているんだわ。そんな彼がおとなたちも尻込みするようなお化け屋敷を奪還して来てみせたりしたら、もう完全に熱が冷めなくなっちゃうじゃあないの。

得意なような、不安なような、奇妙な気持ちでした。

こんな時にぐうぐう眠っちゃうなんて、あなたが悪いのよ。どうなったって、知らないから。自分のことは自分で責任取りなさいよ！

翌朝アナは、みんなより早く眼を覚ましました。

町はずれの丘の上のローズウォーターさんのご本宅では、誰も彼もまだぐっすり眠っているようです。でももう窓の罫戸の隙間が横縞に、ぱあっと明るくなっています。いつも朝のミサの準備のために起きる時間は、もうとつくに回ってしまったのかもしれない。そう言えば、あのスノーマンの教会の小さな部屋以外の場所で眼を覚ましたのは、生れてはじめてなのでした。

アナはそつと身を起こすと、窓を開けに行きました。太陽はまだ低く、春まだ遠い丘の斜面には枯れた草がうつすらと広がり、流れる霧に静かに撫でられて寒そうに震えています。けれども視線を回すと、町に降りる道の近くにはもう何かの花が咲いているのが見えました。赤や黄色、ピンクのもあります。

ハロウィーンは、隣駅とはいっても、あの山裾の雪深い故郷の村よりはずっとずっと暖かい、暮しやすそうな町なのでした。

お花を見に行こうかな、とアナは思いました。

すぐたくさん咲いていたら、少しくらい摘んでもいいかしら。

ゆうべ、あのご飯の後で、こちらでエバンジェリンの家庭教師をしているというおつかなそんな中年のおばさんに切りそろえてもらった髪が、なんだか軽くて頼りないのです。揃えるだけにしてくださいなと何度も念を押して頼んだのに、家庭教師さんはへたくそで、なかなか裾がまつすぐにならなくて、そのくせ強情で完璧主義で、もういいと言っても自分の納得が行くまで止める気配がなく、気がついた時には三十センチも短くなつてしまつていたのです。もう肩胛骨にさわるかさわらないかのところ。編んでしまうと、なんだか小さい子みたいに変な髪型になつてしまいました。

思わず涙ぐむと、家庭教師さんに言われました。冒険をしようなんて女の子は、すつきり短く思い切りボーイッシュな、シヨート・カットにしてしまつたほうが便利なんじゃありませんか。

まぶたの裏に、フランス人形のようなエバンジェリンの巻毛が浮びます。おとぎ話の王女さまのようなドレスを、あの子はきつと、何枚も何枚も持っているでしょう。紫水晶の瞳にパールを被せるように伏せたまつげや、きゅつと小さくオチヨボ口にしたつきりただの一度も開かれなかつた赤い唇が浮びます。泥んこになつたり、オオカミに襲撃されてスツパリ半分だけ髪が短くされたりするようなことは、あの子にはきつと一生起こらないのに違いありません。

同じくらしい年頃の女の子同士なのに、アナとエバンジェリンは、お陽さまとお月さまほども違っているみたいです。

そのところを考えると、なんとなく、胸がチクチクします。こんなに幼稚っぽくなってしまった髪に、せめて、小さな花のいくつかくらいオトメチックに飾りたい。そんな風に思わずにいられないのです。

でも。

なにしろ、今は地球の危機なのです。そうでなくても、すべての生命が滅亡の危機に瀕しているのです。わざわざ今、きれいに咲いているものを、摘んで殺して弄ぶなんて。ずいぶん残酷じゃないでしょうか。

小さな名もない野の花だからこそ、光や土の恵みを、雨や風や虫たちのダンスを、せめてそのはかない寿命いっぱい、楽しませてあげたい。

そんなことも考えます。

いつの間にか祈りのかたち組んでしまっていた両手に頭を伏せて、アナがさまざまなもの思いにひたっていると。

「こんやくだあ?!」

隣の部屋からすごいわめき声が聞こえました。あれはケンです。

アナは急いで寝間着を脱いで旅の服を羽織り、廊下に出ました。わめき声は続いています。が、ぶあつい扉が邪魔でよく聞こえません。

「開けていい？ あたしよ！」

声が止み、アナがノックをしていた手を下ろした途端に、内側から扉が開かれました。お眠み用の三角帽子をかぶったままのケンが、例のすさまじい目つきをして、すぐ近くからアナをにらみました。

「どうせおまえもグルだったんだろう!! なんてことをしてくれたんだよ！」

「なにが？」

ドキドキしながら、アナはきつぱりと首を振りました。

「何のことよ。どうして朝からそんなに機嫌が悪いの。何を喧嘩しているの。あたし、何にも知らないわ！」

「ほんとか」

「ほんとよ。さっきの声、なに？ 婚約、って聞こえたけど」

「ああ。……まあ、入れよ」

一歩足を進めると、ケンがボタンと扉を閉めました。窓を閉めたままの部屋が真つ暗になつて、あつち側のベッドに起き上がったロイドの表情を読むことができなくなりました。

「いったい、どうしたっていうの？」

できるだけ静かな声でアナが尋ねているのに、ロイドは答えません。どうやら横を向いたままのようです。ケンがずかずか前に出ながら、憎々しげに言いました。

「こいつ、ひとを、勝手に、知らない女の婚約者にしちまいやがった！ 代理人つてことで、

契約のサインをしちまったと言うんだ！」

めまいがして、アナの頭は真っ白になりましたけれども、すぐに話はわかりました。

つまり、ローズウオーターさんはシャイでひっこみ思案な娘のつましい憧れを、さっそく叶えてやることにしたのです。エバンジェリンをケンのお嫁さんに迎えることを条件にしてくれるなら、鍵を貸してやるとも言ったのに違いありません。

「つたく、油断も隙もありやしねえ。アナ、知ってるか？ そのエバなんとかいう女。どうせひどいブスだろう？」

「そんなことないわ。すごく可愛らしい、今どきめずらしいくらいおしとやかなひとだったじゃないの。見てなかったの？」

笑い顔を作ってはみたものの、自分のことばが、のどを唇を内側からチクチクと刺しました。

「見てねえよ、ブタの丸焼きだのエビ・フライだのの尊顔は心ゆくまで拝ませてもらったけど。じゃあなんだ、そいつ、ひよつとして大年増のオールド・ミスか？」

「ローティーンだと思わ。ほんといつて、八つくらいかもしれない」

「そんなガキがなんで今からツバつけられたがるんだ」

「上流階級だからじゃないの？」

「まさかホラー・タイプじゃないだろうな。夜中に天井まで首が伸びるとか、人体使つての日曜大工が得意だとか、主食がゴキブリだとか」

「気持ち悪いこと言わないでよっ！」

「じゃあ、なんで、行きずりの俺おれなんかと婚約しなきゃならないんだ？」

あなたに恋こいをしたからじゃないの！

言えないセリフがアナの胸の奥おくでイガイガしました。

「あのね。あそこは男子禁制なんだつて。エバンジェリンの大切なひとでなければ、入れてもらうわけにいかないんですつて。だから、ロイドも、困った果ての選択せんたくだったんだろうけど……」

ベッドの上のシルエットが、小さく何度もうなずいたように見えました。

「けっ！ 狂くるってるぜ」

ケンは前髪を掻かき上げようとしてナイト・キャップに触ふれ、それを床ゆかに投げつけました。

「冗談じゃねえ。そんな方便なら、なんでロイド、おまえ自身が引き受けなかつたんだ？」

「だいたい、おまえはどうするんだ。俺おれらが化け物とつくみあつてる間じゆう、ここんちでのおんぶり骨やすめでもするつもりか」

「……婚約者の親友なら……同行してもいいつて……」

途切れ途切れにロイドがつぶやきましたが、

「しんゆううっ?!」

ケンに胸倉むねぐらを掴つかみ上げられて弱々しく口ごもりました。

「そいつあいつたい、どこのどいつのことだい？ えっ、まさか、俺が今この世で一番鼻持

ちならねえと思つてる眼鏡野郎のことじゃあねえだろうなっ！」

「やめてよ、ケン。大声出さないで。みんな起きちゃうじゃあないの」

「あ、そーかいそーかい」

ロイドをつき離すと、ケンは改めてアナに向き直りました。筋肉のついた肩が、ぜいぜいと上下してきます。こんなに興奮するとゼンソクの発作ほっつきを起こすんじゃないかしら、とアナは心配になりました。

「なるほど。そうか。おまえもやつぱりグルだったんだ。このバカがバカなことしかすの見てたのに、止めようつて気を起こさなかつたわけだ」

「逆恨みよ！ あんな時、さつさと眠っちゃつたケンが悪いんでしょ。あなたのマナー違反がもともとの」

「マナーだあ？ じゃあおまえらのやつたことはお作法通りだとも言うのか」

「そんな揚足あげあし取らなくつたつて」

「あー、わかつたわかつた」

ケンは憎らしい目つきをして、へらへらと手を振りました。

「無理ない。確かに、あんたもそのほうが便利だもんね。俺に可愛い彼女ができれば、今後ずつと、心おきなく、こいつと仲良しこよしができるつてもんだ。あくこりや、悪うございしましたね。何もそんな、俺ごときに気い使つてくれなくつてよかつたんですね。なんなら次の宿からは、おたくらふたり同じ部屋にしな。もともと、俺は、ひとりっきりのほうが性

にあつて……」

「ばち・ぱちーん！」

ケンの頬ほつぺたが、右も左もぷっくりと腫はれあがりました。どちらかという toward 左側のほうがより痛そうに赤くなりました。アナはテニスでもバック・ハンドのほうが得意です。しばらくの間、火花が散るような視線がぶつかりあいましたけれども、ケンもアナも、どちらもなんにも言いませんでした。

アナは眉まゆを怒おこせたまま、心の中ではそつと力のラヂオのアンテナを伸しチューナーをいじつてみました。けれども、ケンが何を考かんえているのかを知しることは、やつぱりできませんでした。ケンの放送局ほうそうきょくも、アナのラヂオも、顔を逢あわせるまではあんなによく働はたらいてくれていたくせに、思おもえば仲間なからしくななってからここつち、いいつしよしよにいるようになってからと言いうものは、急に調子ていしが悪わるくななってしままつたみたいです。手を伸のせば触ふれるところところにいる今いまなのに、口くちをきいたことこともななかつた頃ころのほうほうが、心こころがううんと近ちかかつたたみたいだだなんて、ままつたく皮肉ひにくななことことででした。

無む駄だな時ときが流ながれました。

アナはそつと視線しせんをそらし、ケンに背せ中ちゆうを向むけて歩あきだだしました。止とめられるかかもしれなないと思おもつたので、かえつて、スタスタものすすごい早足はやあしででした。

声こゑはかかりませせんででした。

誰もいいない廊下らうかに出でて、扉とびらを閉とめて。三歩さんぽ歩あいてささつき出でて来きたばかりばかりの自分おのれの泊とつた部ぶ

屋に戻って、反対側から扉を閉めて。

その扉にもたれたまま、アナはしばらくの間、ただじつと動かずに、天井や窓の外をながめました。頭の中を、何かがいたりきたり暴れていましたけれども、そいつはたぶん、自由にしてやったらひどくややこしい事態になりそうな、醜い子鬼のようなものでした。だからアナは心に鉄格子をつけて、考えごと一切を封じ込めました。しばらくは唇がわななきチリチリと首筋の毛が逆立ちしましたが、やがてそれもおさまりました。

外は明るくて、気持ちがよくさそうでした。

とても地球の危機になんか見えない、まだ早春とも言えないくらい、やさしく穏やかな朝でした。

それでもやっぱり、地球の危機なのでした。

ちよつとした仲間割れなんかで進軍を止めてしまうわけにいかないことくらい、三人ともよくわかっていました。

だから、いまいち気分がスッキリしないまま、ローズウオーターさんと無口な娘にハンカチを振って見送られて町を横切り、問題の幽霊屋敷に、またやって来たのです。

すったもんだのあげく借りだした鍵は、もちろんちゃんと扉に合いました。錆びついた鍵穴がギギイといやな悲鳴をあげて、重たい桎の戸が開きます。通り抜けると、自動ドアみたいにすぐにボタンと閉ってしまいました。

入ってすぐが、大きな広間でした。カビ臭いようなひんやり冷たいような、気分の悪い空気で満たされています。窓がみな外から釘を打たれているので、昼間のおもてを歩いてきた目には、そこは、いやに完全に真つ暗でした。

目が慣れるまでは動くといけないので、三人は、しばらく黙って立っていました。何か口を大きくことが憚られるような雰囲気でした。古いマントルピースから、無雑作に置かれた中国製の壺から、埃まみれの天鵝絨のカーテンの陰から、今にも何かが出てきそうです。高い丸天井の隅のほうは特に闇が濃く、禍々しいものたちがじつと息をひそめて、こちらの様子をうかがっているような気配がしてなりません。

不安と後悔とせつなさ。アナは、心がむしゃくしゃして、わめきだしたいような気持ちでした。このままいつまでも永遠に、じつとしていなければならぬような、そうだったらまちがいなく気が変になつてしまふような、そんな気分です。ケンとでもロイドとでもいい何かくだらない冗談でも言い交わして笑いあいたい、もとの元氣な雰囲気に戻したいと思ひますけれども、もしも誰かが声をかけてくれたとしても、変に拗ねてまた喧嘩を売つてしまふような気もするのです。

いつそのこと、さつさとお化けが出てくれればいいのに！

わあつと大声をあげて、思い切り自棄つぱちの大暴れをすれば、気が晴れるのじゃないでしょうか？

キーッ。

どこか遠くでドアが閉るような音がして、アナの心臓はのど元まで飛び上がりました。

「……ど、どうします?」

たまりかねたように、ロイドが言いました。

「どっちに行くんですか?」

「知るか」

短くケンがつぶやきました。

「でも、行かなきゃ。ピアノを探さなきゃ」

「好きに決めればいいだろう。俺は自分のことさえ自分で決めることができない男なんだからな」

ケンの声に、自嘲じちやうの苦笑がまじりました。

「……そんな言い方はないだろう」

ロイドの声もとても低くて、自信なさげでした。アナは、ケンがまた何か怒鳴り返すのではないかと思いましたけれども、返事はありませんでした。そのほうが、なおさらよくありませんでした。

「キヒヒッ、キーツキツキツキツ!」

不意に、三人の足元に、金属のこすれるような声があがりました。

見ると、一匹ひきのネズミが、両目を三日月型にして、ピンと立てた鬚ひげを揺すぶりながら、ニヤニヤ笑っているのです。アナはあわてて心のモードを切り替えました。すると、とたんに、

ネズミのことばがわかったのです。

「こりやあ面白^{おもしろ}い。珍しい。まったく麗^{うつく}しい光景だねえ、人間が三匹も連れ立ってやって来てわざわざ喧嘩^{けんか}をしているよ。キヒツキヒツキヒツ」

「ネズミさん！」

アナは心とことばで言いました。

「どうか教えてちょうだいな。弾^ひき手もないのに鳴るピアノって、どっちにあるの？ どっちに行けばいいの？」

「ピアノ？ ピアノってのは、あれかい？ いっぱい穴が開いていて、滋養^{じやう}豊富な食べ物かい」

「それはチーズ」

「じゃあ、びちびち跳^はねて、水つぼくって、ガブツとやるとちよっぴり苦い骨のあるあいつかい」

「それはお魚でしょう。食べ物じゃないの。ピアノっていうのはね、ほら、白い板と黒い板がいっぱい並んでいて、叩^{たた}くと音の出るものよ」

「ああ、あれか。そんなの自分で探しな。知ったこっちゃないね。キヒヒツ」

からだじゅうを揺^ゆすって笑ったかと思うと、ネズミはびよんとジャンプをして、アナの肩^{かた}にはいあがりました。

「でも。おねーさん可愛いから、こっそりいいこと教えてやろうか」

「なあに？ 教えて、教えて！」

「だからねえ……」

ネズミが声をひそめたので、思わず耳を傾けたとたんに。

ガブリッ！

「きやあつ！」

耳朶みみたぶを噛かまれてしまいました。

「ひとを頼たよりにするんじゃないよ。知らない相手を信用するなんて大間違まちがい！ この館やかたにや

あ、あいにく善玉キャラなんか一匹だつて登場しない。ひとたび中に入ったら二度と生きて

は帰れない、地獄じごくの幽霊屋敷さつ！ 甘い考あまえは捨てるこつたね、キヒヒヒッ！」

アナが払はらい除のけようとするよりもだいぶ前にネズミはするりと逃げ、素速く背中側に回つてへばりついてしまいました。そうして、大事な髪かみに食くいついて体重をかけてぶらさがり、引き籠ひきころうとするかのようにひっぱるのです。

「あああつ」

思おもわずのけぞつたアナの白いのどを狙ねらいすまして、第二・第三のネズミが長四角型の前歯を剥むいて飛びついて来ました！

「危あねえつ！」

ケンのバットがなぎ払はらつてくれなかつたら、食い千切られてしまうところでした。思わず両手でのどを押えるアナの髪にくつついていたネズミはすぐにロイドがナイフでこらしめて

くれましたけれども、そのロイド自身の背中には一ダースものネズミが取りついているので、棒倒しでもするようには、ネズミの背中にまたネズミが乗るようには、どんどん高いところまで駆け登って来ます。もう頭のとつぺんに到着して、長い尻尾でロイドの眼鏡のつるをからめて奪い取ろうとしている憎らしい奴までいます……！

気がつけば、キイキイチュウチュウ、そこらじゅうものすごい騒ぎです。あたり一面のネズミ、まるでネズミの絨緞のよう。床いっぱいのネズミが、次々に押し寄せ襲いかかります。丈夫な前歯でカリカリと、どこにでも噛みつこうとするのです。

長袖の上着に長めのスカート、膝まであるブーツを履いて手袋をして、からだじゅうほとんど覆い隠すようなかつこうをしていたのが、まだしもの幸いでした。けれども、ネズミたちも心得たものです。からだ中に取りつき、揺さぶりをかけてきりきり舞いをさせてフェイントをかけておいて、顔や首の素肌が剥きだしの柔らかい部分をきっちり狙って来ます。スカートの中にもぐりこんで暴れようとするエッチなネズミもいたりするので、まっすぐ立っていることさえ容易ではありません。

顔をかばい、スカートをかばい、必死でネズミたちを振り払っているうちに、アナはどんどん疲れてきました。もう今にも目が回りそうです。息が切れて、ぼうつとしても、休む暇もない。あたりの様子をはつきり見ることもできません。ケンがバットを振りまわす音が聞こえます。ロイドの振るうナイフにキイツと小さな悲鳴があがります。男の子たちは負けてばかりはいないみたいです。でも、敵は、なにしろ数が多すぎます。避けても避けても、逃

げても逃げても、次々に新手あらたが現れます。まったくきりがありません。始末に負えません。白い黒いの、灰色の。指の隙間すきまから見えたネズミたちは、みんなとても痩せていて、殺気だっています。よっぽど空腹なのでしょう。自分よりも何倍も何十倍もからだの大きな人間のこどもを、上等のご馳走ちそうだとも思っているのでしょうか。もしかして、リュックの中にある非常用食糧じょうようじょうりょうを分けてあげたら、許してくれはしないかしら、とアナが考えはじめた時。

「……あつ！」

どこからか肩に飛びついて来た憎らしいドブネズミの長い尻尾しっぽが、鞭むちのようにぴしりとしなって、アナの両眼りょうがんを打ちました。すぐに秘技・平手打ちでひっぱたき落として仕返しをしてやりましたが、焼けるように痛くてとても眼を開けることができせん。それでも床ゆかじゅうをちよろちよろされて、足元が不安定でならなかったのです。頭では敵だとわかっているのですが、アナには、わざと踏むことなんてとてもできません。眼が見えなくなつた今、もうただの一步も歩けません。思わずグラリとからだが揺れたところに、またしても何匹ものネズミに飛びかかれて、たちまち、バランスを失って倒れてしまいました。下敷になつたネズミたちが哀れあはれつぽくキュウキュウ鳴きましたが、仲間のはずのネズミたちはもう興奮して今だとばかりにザアツと駆け登つて来ました。立ち上がるヒマありません。たくさんたかさんの小さなものがキイキイ鳴きながら、脚あしを腕うでを肩を頭を這はい回ります。ぴくぴくよく動く髭ひげのくすぐつたさ、からみつく尻尾の気持ち悪さ。顔のどは、まだなんとかがかばつてい

ますけれども、カリカリ齧る歯がもう服を破つてしまひそうです。お腹にでも噛みつかれたら、きつとものごく痛いに決つています。アナは気が遠くなつて……。

……気がつくと、上体を乱暴に引き起こされたところでした。腕を掴んで膝立ちにされ、からだじゅうをバシバシ叩かれて、シヨックのあまりまた失神してしまひそうになりましたが、それが、しぶといネズミたちを引きはがすためだったのがわかつて、ほうつと力が抜けました。

「しつかりするんだ。掴まつて！ 腕をかけて、つないで」

跳ね上げられた腕と腕がさわりました。アナは夢中で両手を組合せ、指をからめてしつかりとつなぎました。膝の裏と肩の後を支点にして、グンとからだを横抱きに持ち上げられたかと思うと、そのまま風を切つて運ばれました。

「……こつちだ……！」

向うでロイドの声がかかります。じゃあ走つてくれているのは、ケンなのでしょうか。この腕が掴まっているのは、ケンの首なのでしょうか。さつきまで、あんなに機嫌の悪かつたケンが、ちゃんと助けてくれたのでしょうか？

まだ頭が朦朧としています。船酔いでもしたように気分が悪く、からだじゅうどこにも力が入りません。もう少しじつとおとなしくしていれば、元気になるのでしょうか。

いくつかの扉が開かれ、いくつかの部屋が駆け抜けられました。階段や、坂道みたいなところもありました。いつの間にか、あんなにうるさかつたネズミたちの声が遠ざかり、代り

に、はあはあとせいぜいと乱れた呼吸の音ばかりが耳につくようになりました。他人の呼吸をこんな近くで聞いたのははじめてでした。苦しそうでした。重いでしょう、下ろしてちようだいと言おうとしたのに、声になりません。悪いなと思いつながら、アナは、ただ祈り続けることしかできませんでした。早く一刻も早く、この場から逃れられますように、と。

少年たちは、ほとんど立ち止まりもせず、いつまでもどこまでも走り続けました。時々、何かが襲つて来ては、ロイドのナイフやスタン・ガンで、ケンの足蹴りや頭突きで、押し退けられているのがわかりました。

ガクガク揺れて、落つことさえそうになる時も少なくありませんでした。回した腕に必死に力をこめてしがみつくと、ごわごわした布地にびったりと顔が張りついてしまいました。まるで、ケンの胸に寄り添つてみたい、と思つたとたん、頬が燃え、からだじゅうに心臓が出張したかのように、どこもかしこもドクンドクンと脈打ちはじめました。しかもなにしろ、こんなにしつかりくつついているのです、そのことがみんな、ケンにわかつてしまいうです。

それが悔しいのか嬉しいのか、得意なのか恥かしいのか、今自分がイヤでたまらないのか、けつこう気持ちいいと思つているのか、アナには全くわかりませんでした。そんなことを分析したり深く考えたりするヒマはまるでなかったのです。吐き気を堪え、痛む眼を我慢しているだけで、せいっぱいでした。すべては知らないうちに、回りを通り過ぎて行きます。いっしょに戦うべき仲間なのに、こんな面倒をかけてしまっているのです。なんて情けない

んでしよう。

目尻から耳に流れこむ熱い涙は、だんだん、ただ痛みのためだけではなくなってきました。ここを無事に出ることができたら、あたしは、もう家に帰ろう。

そんなことも思いましたけれども、ほんとうに、もう一度お陽さまの下に立つことができるとかどうか、わかったものではありません。

戦士たちはどうやら迷子になったらしいのです。なんだか同じようなところを、ぐるぐる回っているみたいです。ピアノのある部屋どころか、出口の方角だって、もうチンプンカンプンなんじゃあないでしょうか。いったりきたり、登ったり降りたり、道に迷ってしまった人間がやりがちの行動パターンが、このところずっと繰り返かえされているのです。忙しいのに単調な、いやな時間が流れました。

「……違う！　ここも行き止まりだ！」

先のほうで、怒ったようにロイドが言う声がしました。ケンはそのもと言わずに踵を返して、今降りて来た階段を登りはじめ、途端にギクリと足を止めました。

「……どうしたの……？」

擦れた声をようやく絞り出すと、ケンの胸が揺れました。薄くあけた眼に、眉から眼にかけてはとも真剣なのに、口許がはげますように笑っている、不思議なケンの表情が、ななめになってアナを見降ろしていました。

「立てる？」

声も静かでゆっくりで、いやにやさしい感じでした。

「うん」

「じゃあ。下ろすよ」

膝をかがめて、そうとつまず先をつけて、それからゆっくり起こしてくれたのですけれども、長い事絶叫マシーンに乗りっぱなしだったみたいなのからだはやはりふらふらで、どの方向が地面に対して垂直であるのかを自力では決めかねました。よろけるアナの肩をあわてて押えながら、ケンはずき、さっきのいつもよりだいぶやさしい声のまま、そつと言いました。

「返っていて」

まだ痛んでしかたのない眼をごくごく薄くだけ開けてみて、アナは見ました。階段の向うから、鈍く輝く鎧姿の騎士がふたりも、ゆっくりゆっくりと降りて来るところだったのです！

そう言えば、ガシャン、ガシャン、と重たいものがぶつかるような気味の悪い音が、ずっと聞こえていたのでした。だんだん近付いて来ていたのでした。

叫ぼうとして振り向くと、ロイドはロイドで、見るからに幽霊らしいふわふわと空中を漂うものと無言でにらみあっているではありませんか！

じりり、じりり、とケンが下がって来ました。

もそり、もそり、とロイドが上がって来ました。

中からさえ、全く同じかたちの幽霊たちがわんさか出てくるじゃありませんか！

「なんてこった。増えちまった！ ははあん、こいつは一種のめざまし時計なんだな。やられる一步手前になると、アラーム音を発して仲間を呼び寄せる習性があるらしいぞ。ううむ、手強い。そうだ、アラーム・ゴーストと命名しよう」

こんな時だというのに。ロイドもほんとうに学究肌ですね。

その頃、反対側では。

「メーンツ！ ドウツ！ ……コテええツ!!」

ケンが騎士たちにバットで殴りかかっておりました。なかなか筋は悪くないのですが、何しろ敵はふたりです。どちらもギクシヤクと動きこそ鈍いのですが、すごい力で槍や剣を繰り出して来ます。ケンはちよこまかすばしこく動き、せいじつばい機敏に攻撃を繰り返していましたが、なにしろ身長が大違い。あつちは二メートルもあるんですからね。リーチにハンディがあります。そのうちにととうとう、騎士のひとりが振り下ろした槍で肩に強烈な一撃を食らい、思わずバットを落としてしまいました。

「ううう、まずい！ し、しびれて、腕がしびれて、バットが持てな……ごほつごほごほつ！」

ガシャン。ガチャリンリン。ガシャン。シャリシャリ。上側は上側で騎士たちがすぐそこまで近付いて来ていて、今では、一足ごとに鎧の継ぎ目が擦り合わされる音までが、聞こえてしまうくらいです。なのに、ケンときたらこんな時に突然発作をおこして咳こんで苦しん

でいるばかりなのです！

「こっちも……うわあ、こっちも、もうとても……ええーいっ!! わあ、また増殖してしまつた! どうしよう」

びりりりり! びりりりり! 一匹やつつけるごとに、四・五匹の幽霊が増えるのです。

刻一刻と増え続け、今では階段の下側はほとんどお化けの寿司詰め、幽霊のラッシュ・アワ
ーといったありさまになってしまつてはありますせんか。

アナは階段の隅にうずくまっています。

寒くなんかないのに、汗をかいているくらいなのに、からだの芯からガクガクと震えが走
つて止りません。見ているものがブレるくらいのに、頬がぶるぶる揺れてしまうくらいのに、押
えようとしても押えられない震えです。首をすくめ、指をくわえ、アナは拗ねていじけた幼
稚園のこどものようにきつくきつく膝を抱えこみました。

「……いや……いや」

あとからあとから涙があふれ、意識していないのに頭がブンブン横に振られました。男の
子たちが今にもやられてしまいそうなことはわかつているのに、何かほんのちよつとでも手
伝つてあげられることがあつたらとほんとのほんとの思っているのに、恐ろしくて、信じら
れなくて、たまらないのです。

逃げ出したい。ここからいなくなりたい。

誰か、こんなこと、悪い夢だと言つて……!

「うわあっ!!」

とうとうロイドが倒れました。アナのつま先の向う側、下り階段に這いつくばるようにつぶせて、眼鏡のずれた苦しそうな顔で、何か言っています。こちらのほうにぎこちなく手を伸べて、何かを掴もうとしているかのようです。何か頼んでいるようでもありません。

けれども、アナはなぜか思わず、もう少しで触られそうになったつま先をひっこめてしまったのです。頭の中では、大切な仲間なんだ、助けてあげなきゃいけないんだとわかつていのに、動けないのです。どうすることもできないのです。

なんて自分勝手な、ひどい仲間でしょう。こんな覚悟で、地球の危機を救いに行くんだなんて、なんて思い上がっていたのでしょうか。

アナの眼に、ドツと熱い涙があふれました。
すると。

その瞬間。うつすらと、ロイドが、笑ったのです。

まるで、『いいよ、それでも』と言うように。

女の子は戦いになんか向いていないんだ。だから、それでいい。しかたないんだ。恨みはしない。それより、きみのことをちゃんと守ってあげられなかった力のないぼくを、どうか許しておくれよね？

ロイドの心を、読んだような気がしました。

濡れて、揺れて、ずっと不自然なくらい大きく見開かれすぎていたアナの瞳が、不意に静

かに澄みきました。同時に、からだじゅうの震えが、ぴたりと止りました。

立ち上がると、アナは、両脇に垂らした拳を軽く握り、息を止めて、眼を伏せました。

アンテナのような、避雷針のような物になった自分を想像します。宇宙を巡るエネルギーの膨大で自由でパワフルな流れが、自分の中に呼ばれ、集まり、蓄えられて行くのを感じます。そうしてそれがいっぱいいっぱいに張り詰めた時、アナはまだ赤い瞳をカツと開いて、唇から声にならない気合いをほとばしらせました。

「……………!!」

光です……………!

明るすぎて、真つ白すぎて、しばらくは何も見えなくなるほどの強い強い一点の光が音もなく出現し、たちまち破裂するように広がりました……………!

傷ついた戦士たちの網膜が、やがて視力を取り戻した時、あたり一帯には、彼等以外何ひとつ動くものはありませんでした。化け物どもは、あの強い光に押し潰され侵食されなぎ払われるようにして、消え去ってしまったのです。

「……………な、何が起こったんだ……………?」

のろのろと立ち上がりながら、ロイドが言いました。

「まるで超新星の爆発みたいだった。はたまた、あれが噂のホワイト・ホールつてもものなのだろうか?」

「ううう。ひでえじゃねえかよ、アナ」

唸るようにケンが言い、まだぼんやりしているアナの肩を揺すぶりました。どうやら発作はおさまったみたいです。

「水臭えぜ。あんなとつときの大技があるのに、なにもつたいぶつてたんだ。サツサとやってくれりゃあ、苦労しないのによ」

「えっ、アナが？ やっつけちゃったんですか、あれを全部？」

「だろ？ このひとは、俺なんかよりよっぽど強力なPSIだったらしいな。まあ可愛い顔しちやっつて、おつかないおねーさんだこと」

からかうようにケンに顎を撫でられて、アナはやっとハッと正気に帰りました。

「さわらないでっ！」

「た、たんまつ！ わかったわかった」

ケンは手をひっこめながら、ニカニカしました。

「おー怖い怖い。頼むぜ。癩癩のあまり、俺らを消し飛ばさないでくれよお」

「……………」

「やれやれ。まいったな。それにしても信じられないねえ。さっきなんか、こーんなちいぢやなネズミどもにちよつと甘えられたくらいで今にも死にそうな顔してたのにさあ。俺ごとき胸元にギユウツとしつかり抱きついてくれたりしてたのになあ。どうでしょ、この豹変。女にやまつたく適わないねえ……おっと！」

三度めの平手打ちは、手首を掴んで止められてしまいました。アナが睨むと、ケンはもう

一方の手のひとさし指を立てて、ちゅちゅちゅ、と揺らしてから、やっと離してくれました。「……そうかあ、すっごいなあ……すっごいんだ、アナって……」

ロイドはしきりに感心してくれましたが、アナはなんとなく気分が晴れません。

ほおらね、これで見直してくれた？

ニッコリ笑って、冗談めかしてそう言いたいのには、なぜか胸を張ることができません。

意識して、あの恐ろしい力を「破壊すること」に使ったのは、はじめてでした。そりゃあこれまでにも、発作的にお茶碗やガラス窓を割ってしまったことはあります。でも、何かをほんとうに「殺してやりたい」「木端微塵にしてやりたい」「跡形もなく滅ぼしてやりたい」と思ったことなんて、ただの一度だってなかったのです。

これまででは。

でも今、非情なくさの旅の途上にある今となつては、何度も、何度でも、全身全霊を賭けて戦わなければなりません。それが戦士というものです。自分を、仲間たちを、世界を守るためには、中途半端な甘い覚悟ではとてもやっていけそうにありません。いろんなものを殺したり、叩き壊したりして行かなければ、道はできないのです。旅の終点に、届かないのです。

アナの心の中をひゆうひゆうと冷たい風が渡って行きました。なんだか、広い広い野原の中に、たったひとりぼっち取り残されてしまったような、心細い感じがしました。

その気になってみたら、あたしの力は、恐ろしいほど強かった。バットよりブーメランよ

り、ずっと強かった。

じゃあ、あたしって、ケンより、ロイドより、強いつてこと……？
もう止らない、この戦い。

そうしてあたしは、守ってもらおう側じゃなく、守ってあげる側に、進んで戦う側に立たなければならなくなってしまうんだ。この恐ろしい力も、神さまが与えてくださったものならば、無駄にするわけにはいかない。ちゃんと考えて、自分の責任で、自分から進んで、使つていかなくつちやならないんだ。

肩も手足も、心も、この素晴らしい力も、アナにはあまりにも重たすぎました。

ぶるぶるつ、と武者震いが走りました。

「……アナ……？」

のぞきこむケンの心配そうな顔に、無理をして唇の端っただけ微笑んで見せましたけど、それがかえってよくありませんでした。強がった眉が細かく揺れたかと思うと、おおきな涙の粒がひとつ、ころん、とこぼれてしまいました。

「ど、どうした？ どつか痛いのか？」

ああ、もう。男の子って、なんてバカなんでしょう。鈍感なんでしょう。

そんなんじゃないわよ！

イヤイヤするように首を振っているうちに、ほんとうにすっかりダメになって、アナはわあわあ泣きだしてしまいました。驚くケンの首っ玉にいきなりしがみつき、埃臭いジャケツ

トに鼻も頬ほつぺたもグシグシ擦りつけながら、吠えるように思い切り声をあげました。そうして、ケンの手が、腕が、さんざん戸惑とまどったあげく、やっとそと背中を抱きしめてくれた時にはじめて、やっとほんの少し気がおさまったのでした。それでもまだ惜しくつて、しばらくクスンクスン鼻をならしながら、甘えたりもしてしまつたのですけれども。

「……幼稚なやつ……」

そうつとうわ目使いに見上げると、ケンはサツと知らん顔をしました。天井の関係ない方角を見つめたつきり、鼻の穴を広げ、唇をねじまげ、怒っているような照れているような妙みちちきりんな表情にソバカス顔をこわ張らせて、緊張しているのです。

アナは思わず、吹きだしてしまいました。

「幼稚なやつ」はどつちでしょう。口先や意識の表層では、エッチなことやおとなびたことを言ったり思ったりするくせに、まだまだてんで純情なケンなのでした。

「ごめん。ありがとう」

アナがからだを離すと、ケンはたちまち全身の力を抜きました。あんまりあからさまにホツとされたのは少々むかつかまりましたけれども、なにしろ相手はケンです。複雑怪奇なおとめごころとその結果の衝動的な行動について、ちゃんと理解してフォローして欲しいなんて、要求するほうが、どだい無理なのかもしれません。

そつとため息をついた時。

「おーい、こつちこつち。来て来て！」

階段の上の部屋から、ロイドが顔をのぞかせました。

「驚いたよ。さつき気付かなかった扉があるんだ。そのくせ、何度も通らされた廊下がどこにもなくなっていたりしてね。あの光は、迷路を作っていたニセモノのドアも消してしまつたのかもしれないな」

「よおし！」

ケンはすぐさま、駆け出しました。

行こう、と声をかけてくれさせずに。

アナはもう一度ため息をつくとき、急いでふたりを追いかけてきました。

邪悪な者たちが作りあげた幻の回廊が消え失せてしまえば、館じゆうを探検するのはわけのないことでした。三人はやがて、おおきなピアノのある部屋に立つことができました。

「……きれいな……」

それは、ちょうどエバンジェリンの瞳のような深い紫色の、グラランド・ピアノでした。アナが歩みよって鍵盤の蓋をあけると、とたんに不思議なメロディが流れました。

こうして幽霊屋敷探検の目的は、みごと達成されたのです。

しかし。

この時はじめて、三人は思いました。ローズウォーター邸に戻れば、もうひとつ難問が控えているのです。

「……な。このまま、逃げちゃわねえ？」

「気弱そうな作り笑いを浮かべながら、ケンが言いました。

「鍵はどうするんですか。返さないんですか？」

ロイドが、だめだめ、と首を振りました。

「それはあんまり正義の味方らしくないと思いませんか？」

「アナは何にも言いませんでした。口を開いた時、どんなことばが出てくるのか、自分でもさっぱり予想がつかなかったからです。」

その頃。

ローズウォーター邸の二階の、エバンジェリンの部屋の鏡という鏡が、突然、全部いつせいに割れて碎けて散りました。戦士のマントに紫色の糸で「E」の飾り文字を丁寧ていねいに刺しゅうしていたエバンジェリンは、あんまりびっくりしたので、うっかり指を刺さしてしまいました。

真っ白い指先にゆつくりと滲にじんでくる血を、エバンジェリンは、しばらく黙だまって見つめていましたが、やがて蒼白蒼白な顔つきに固い決心をみなぎらせて、おとうさまのところに行きました。彼女にしてはせいっぱいの全速力で、走って行ったのです。

「どうもどうも、ほんとうにありがとうございます。みなさんは真の勇者です、正義の戦

士です！ どうかたつぷり食べて、ゆつくりおやすみになつてください、どうぞどうぞ、ご遠慮なく。あ、ですが、実はですな」

また違うデザインの、でもやっぱりフリルひらひらのブラウスの袖口のレースをすり合わせるようにして採み手をしながら、ローズウォーターさんがまた、いかにも意味深な間を取りました。

三人は思わず顔を見合せました。誰も彼もなんとも暗い表情でした。もしも、ケンはまだエバンジェリンのフィアンセなんだからこのままこの町に残つてくれなければ困る、などと言いだされたら、いったいどうすればいいのでしょうか？ こんな、海千山千の、口八丁手八丁の、たたき上げの（？）おじさんを相手に、ちゃんとうまく言い訳をして、言い逃れをして、説得をすることができのでしょうか。それとも、世界を救うための旅は、こんなところで挫折してしまうのでしょうか。

「例の……そのう、婚約の件ですが」

あああ。三人は三人とも、ギョツと眼をつぶってしまいました。
ところが。

「なし、に、してただけませんか。いやはやはなはだ勝手なことを申し上げてまったく心苦しくはあるのですが」

と、言われたではありませんか。

「え」

「ええっ?!」

「ほんとにいい?」

三人の声には、ついつい元気があふれてしまいます。

「いやはや、ほんとうに面目ないことなのですが。実はでございますよ、こんなこと申し上げるのはたいへん心苦しいのでございますけれどもですね。うちの愚娘が申しますには、『結婚の約束をした相手に思いをこめて縫い物編み物刺しゅうなどの手芸をしている最中に、もしもあなたの愛用の櫛くしや鏡かがみが壊れたら、その結婚はあまりにも不吉ですから、すぐに中止しましょうね♡』と、權威けんいある占い・おまじないブックに明記されているのだそうでございますんですわ。それがまあ、驚おどろきました。本日さきほど、娘の部屋中の鏡が、そりやもうみごとに」

「割れちゃったんですか?」

「はあ、全部」

思わず青空のような笑顔を浮かべたケンケンは、アナに肘ひじでつつかれて、あわてて口許くちもとをひきしめました。

「それはあいにくでした。じゃあ、あの契約書けいやくしょっていうやつも返してもらえますね?」

「はい、こちらです」

たぶん、あの白い光が影響したのでしょう。ハロウィーンの町のひとびとも、すっかり正

常に戻っていました。

だから。

駅までの道をおおはしやぎで行進しながら、紙ふぶきを撒^{*}いていた三人が「ゴミを散らかしてはいけません！」って叱^{しか}られてしまったのは、なにも宇宙人のせいじゃあなかったんですよ。

4 砂漠にて

砂、砂、砂、砂……。

どこまでも単調で変化にとほしい、絵に描いたような殺風景。さつき見た景色と、ちよつと前に見た景色と、ずっと前に見た景色と、もうどれがどれやらわかりません。まるで悪夢の中を歩いているみたい。

行く手に砂丘、右に砂原、左は巨大なお砂場です。空気までが、砂塵に黄色く煙つています。あえて言えば、振り返つて見る後側だけがほんの少しはマシかもしれません。たつた今こしらえた自分たちの足跡が、よろよるとふらふらと伸びていますから。でも、そのたつたひとつのアクセントさえ、からだで感じることができなほどのささやかな風にゆつくりと埋められて、いつの間にかどんどん消えていってしまうのです。

時々登り坂にさしかかります。この丘陵のてっぺんに立てば、今度こそ、何か変わったものが見えるかと知らず知らずのうちに胸を高鳴らせても、いざたどりついて見れば、またしても良く似た光景。どこまでも果てしなく続く砂と砂と砂ばかり。

三人は、へとへとで、うんざりで、すっかり退屈しておりました。

いつたい、どのくらい歩き続けたのでしよう。

やめようと言いだす勇氣(?)は、誰にもありませんでした。引き返すのとこのまま行くのと、どちらが長いものかわかったもんじゃあない。だいたいこんな途中で諦めてしまったら、心がくじけてしまいます。くじけた心を慰めるお散歩には、あまりにもむかないコースでした。

ちなみに、このアドベント砂漠に関して、例のベストセラ―「冒険好きな少年たちのため
のハイキング・ガイド・ブック——きみも自然とふれあいを!——」の紹介文をちよつと引用してみます。

「危険で危険で巨大。詳細な地図はない。前大戦の際A国とB国が衝突した現場であり、英
領のたたりがあると莫大な財宝が埋められているとか、まことしやかな噂多々あり。北部
山岳地帯にはイエティ型怪物およびオフロド・バイク暴走族が出没するとも言われている。
超弩級マゾヒスト向き。嚴重で周到な装備をし、保護者同伴のこと。さもなきや地獄へまっ
しぐらだぜ! お勧め度・マイナス一〇〇 〽〽〽〽」

誰ひとりこれを読んでいなかっただのが、三人の不幸でした。「こどもは風の子」と言いま
すが、やっぱり時々本屋さんに行って欲しいものだと思います。

非読書家ぞろいの地球防衛軍は、まさか、そんなに大変な場所とも知らず、軽い気持ちで

踏みこんで、そのまま深みにはまってしまったのでした。なにせ正義の味方ですから、そんなじよそこらの苦労は苦労とも思わないような強がりを、つい、お互いしてしまったりもするものでした。

ただし。まだ少なくとも、道には迷っていないはずですよ。ロイドが、すごくいい腕時計をしていたからです。昔おとうさんがお別れの時にくれたお手製のその時計は、標高八千メートル級の山地でも水深百メートルほどの海中でも、正確な時を刻み続けるはずですよ（フツの人間は、時計が壊れるよりもだいたい前に天国ですが）。ストップ・ウォッチと計算機と万歩計と脈搏計と血圧計と消費カロリーの表示機能と簡単なテレビ・ゲームがついていて、さらに、短針を太陽の方向に合わせると二重ディスクの内側の表示がズバリ北を示してくれるのでした。

東へ東へ、できるだけ一直線に向っているの、午後を回りはじめてしばらくたった今、日差しは、戦士たちの背中側から照りつけているのでした。このままどんどん進んで行けば、そのうちにはあのホーリー・ローリー・マウンテンが見えてくるはずなのです。

そう！ あのにつききホーリー・ローリー・マウンテンが……！

ほんのチラッとでも見えさえしてくれれば、わりと元氣にがんばれそうなものなのですから、れどもねえ。

直射日光はきついし、荷物は重いし。一步踏み出すごとにくるぶしのあたりまで細かい柔らかな砂の中に埋りこんでしまうのですからたまりません。淡々とコツコツと辛抱強く歩く

だけでも、まったく重労働でした。

中でも一番へばっているのは、ロイドです。めったに読書こそしませんが完全な書齋派、アウトドア活動は大の苦手なのですから。コンピュータは熱や埃に弱いので、特に清浄に一定に空調の効いた部屋に置いておかなければなりません。これまでロイドの人生の大半は、そんな部屋の中で過ぎて来たのです。そういうカラダになってしまっても、無理のないことではありました。

帽子の後半分にハンカチを挟んで垂らしたあんまりみつともよくないかつこうで汗と首の日焼けを防いでいるロイドでしたが、たちまち体力がなくなつて来ました。へろへろよたよた、情けない歩きかたしかできません。最初のうちこそ、靴に入った砂を神経質に嫌がつてしょつちゆう立ち止まったり紐を締めなおしたりわざわざブーツを脱いでさかさにしてポンポン叩いたりしていたのですが、今ではもうすっかり諦めて、自棄つぱちのように、ドサツドサツ、と全体重をかけた歩きかたになりました。ひとりあたたま三缶も持ってきたスポーツドリンクも、どんどんガブガブ開けて飲んでしまったので、あとのふたりよりは多少装備が軽いはずなのですけれども。

「……なーあ、そろそろお、やすまない、かああ??」

しゃべりかたも、聞いてるほうの力が抜けるほどすつかりダレてしまっているのです。た。「こんなとこでか?」

ケン は シャツの胸元をパタパタさせて中に風を送りながら、苦笑しました。

「もう少しがんばれよ。きつと、そのうち、オアシスか何かがあるさ」

「むっ。……こら。いかん、それはまずいぞっ！」

ロイドは急に怖い顔こわいになってそっくり返りました。

「『オアシス』というのは商標なのだ。正確には、ワード・プロセッサと言わなければならぬのだぞっ！」

声を出した分ますます力がなくなつて、ふにやふにやふにや揺ゆれながら、ロイドはあきれふたりに講義でもするように言い続けます。

「『バンドエイド』は救急バンドソーコードだし、『セロテープ』は粘着ねんちやくテープ、『エレクトーン』は電子オルガンなのだ。ではここで質問です。『ホチキス』は、何と言うのが正しいでしょうかあつ？」

「はい」

「アナさんの手が早かった。答えは？」

「ステープラー」

「びんぼおん！ セーかいです！」

ニッコリ笑つて片手を宙につきあげたとたん、ロイドの目玉がくるつとひっくり返つて白くなり、顔色もガミラスになりました。そうして木が切り倒たおされる時のようにゆっくりと傾かたむきはじめ、砂を蹴かたててデーンと倒れ、そのまま動かなくなつてしまいました。

「……やれやれ。しょうがない。休むか」

ケン、自分の影が少しでもたくさん気絶したロイドの上に落ちるような位置を選んで腰を下ろすと、背中のリュックを開けて、ポカリスエットを、おっと失礼、某スポーツドリンクの缶を、二つ取りだしました。

「ほら」

そのうちのひとつをアナに放つてくれるのです。

「いいわよ、あたしもまだ三つあるし」

「じゃあ寄越しな。俺が背負う」

アナは瞬きをせずにケンを見つめました。

「なんだよ。取りやしねえよ。ちゃんと全部返すって」

「そうじゃなくって」

笑ってみると、乾ききつた唇がちよっぴりひきつれました。

「じゃあ、これは、ロイドにあげましょうよ。そっちをひと口わけてちょうだい」

ケンは黙って肩をすくめると、プシュツッという音をさせて缶を開けました。乾いたのどが思わずゴクンとなつてしまうような音でした。

顔を上に向けて、高いところを傾けると、スポーツドリンクはちゃんとこぼれもせず、にまっすぐにケンののどに注ぎこまれました。陽に灼けて赤く、汗の流れの上に砂埃がはりついているのがまるでアマゾンの地図みたいなのどでした。

「……ふうっ。あと、やる」

渡された缶は、まだ半分以上入っているみたいでした。それはともかく。

間接キス、そんなにやなわけ？ 失礼しちゃうわ。

と思ったりしたので、アナのほうもやつぱり黙って肩をすくめました。

しっかり口をつけて、ゆっくりゆっくり啜りこんで味わいます。スポーツドリンクはもう相当に温かかったけれど、からだじゅうに沁みわたる感じがしました。うんとたつぷり時間をかけて大切に飲んで、ふと視線を感じて顔をあげると、ケンをあわててそっぽを向きながら、うっかりのどポトケを動かしてしまいました。そしてそれをごまかすかのように、急いで言いました。

「ちくしよお……鉄道さえ生きてりやなあ！」

「そうね」

返そうかな。でも、そんなことしたら、怒るかな。

たぶん怒るな。

アナは何にも考えなかつたようなふりで、ゆっくりゆっくり飲み続けます。

「鉄道さえオツケイだったら、こんなくそかつたるとこはさ、涼しい車内に入るん座つたまんま、コーラでもバカスカ飲みながら横目で見えて通れたのにさ。キャアーツ、うっそお、イヤーン砂漠よお、かあいー♡、なーんつって、ピースでも出して順番に記念写真でも撮って、最後に俺が写ろうとした途端に通過しきつちまってガーン、ガツカリ、だつたりしたんだろーに」

「……………」

ああ、もう最後だ。

最後のひと口分をアナはそうつとハンカチに注ぎ、それで、まだ伸びているロイドの顔や首を丁寧に拭いてやりました。後からちよつとベタベタするかもしれないけれど、取り敢えず涼しくはなるはずです。

あんなにきれいだつたハンカチが、いつの間にかすつかりポロポロの雑巾みだいになつてしまつていました。軽く絞つたその雑巾ハンカチをロイドの立派なおでこに乗せてやつて、ふと見ると、ケンは膝を抱えて、砂漠のあなた、これから歩いて行こうとしている地平線のほうを見つめていました。つい今バカ話をした奴とも思えない表情です。軽々しく声をかけることができなほほど、真剣に一心不乱に、何かを考えている横顔でした。

しかたなくアナもきちんと体育座りをして、ほんやり砂漠をながめてみました。光と影と、砂だけ。

ゆるやかな丘とゆるやかな谷、遠近感がおかしくなつて来るような、あくまでも単純で退屈な風景。

それでもずつとじいつと見ていると、かすかにかすかに砂が動いているような気がしました。まるで人間とはうーんと尺度の違う時間を生きている巨大な生物のように。星だつて、生れたり死んだりするんですもの。砂漠だつてもちろん、誕生し、育ち、滅びてゆきます。今あるこの砂漠は、砂漠の生涯のいつたいつ頃にあたるのでしょうか。老人か、青年か、そ

れとも赤ちゃんか。

……赤ちゃん……？

アナは眼をあげ、あたりを見回しました。両手を当てて、耳をそばだてました。

「どうした—」

ケンが敏感にこつちを向いて尋ねます。

答えずに、アナはしばらくじつと肩に力をいれ眼を閉じて意識を集中しましたが、ダメでした。

「……気のせいだったみたい」

ふうつと力を抜くと、じんわり汗がにじみました。

「なにが」

「赤ちゃんの声が聞こえたの。そんな気がしたの」

「赤ちゃん？」

「うん」

「山猫なんかじゃねーのか？」

「……そうかもしれない」

素直にうなずいたアナでしたが、ほんとうは、絶対に猫なんかじゃあないと思いました。

だって、それは、ただの泣き声じゃありませんでした。アナの名前を叫んでいたのです。まるでおかあさんを呼ぶ時のように、強く、激しく。

「アナーツ、アナーツ、来て、はやく来てください、私はここです、ここですよお！」

でも、そんなの、やっぱり、気のせいかもしれません。なにしろ考えごとをするには暑すぎます。どんな幻や錯覚が訪れたって不思議はありません。

アナがほうつとため息をついた途端。

「うっ……なんだあれは！」

ケンが指差す空の一面に、陽光を反射して時々キラリと光る何かがいくつもいくつも見えたのです！

それらはジグザグ飛びながら、幾何学的な凶形に隊列を組んでゆきます。演習をしているようにも、班ごとに集合しているようにも、点呼を取っているようにも見えます。しばらくじつと眼をこらすと、どれもみな同じ、だいたいお皿をひっくり返したような形の金属つばい物体であることがはつきりとわかりました。十も二十も、いいえ、もつともつとたくさんいます。どんどん数が増えてゆきます！

「フライング・ソーサー!!」

ケンは青い眼をカツと開きました。

「UFOなのね！ あれ、敵の宇宙人？」

「知らん。たぶんそうだろう。えーいくそ、どのくらい距離があるかわからないと、いったいどのくらいでかいかわからないな……うっ、まずい。こつちに来る！ 隠れるんだ！」

「うん！」

ふたりはロイドのからだを両脇から支えて、ザアツと斜面を滑りおり、円盤から影になるように身を伏せました。

飛んだ砂でもかかったのでしょうか。

「うわあ、ぺっぺっ。なんだなんだ！」

やつとロイドが目を見ました。

「しっ！」

ケンが唇に指をたてました。

「伏せてろっ。なんなら砂かぶれ。潜っちゃまえ」

「敵か？」

「円盤だ」

「円盤だとっ？ 見たいっ」

「こら顔を出すんじゃない、バカッ！ おいロイドッ！」

ケンが腕を伸して押える間もなく、犬かきをするような四つん這いのかっこうでアツと言うまに砂を登りかけたロイドでしたが。

「動かないでっ！」

アナの剣幕に、さすがにびたりと止りました。

「そのまま！ そうっと、じっとしてて。サソリがいる」

「さっ、サソリいつ?!」

半分ずれた眼鏡の下で、ロイドはたちまち泣きべそ顔になりました。アナの眼の示している方向の砂面に、ゆっくりと、首の皮がねじれるほど無理に頭を回すと、見えました。ロイドの耳からほんの三・四センチほどのところで、狂暴きやうぼうそうな赤いものが、頭部を低くし、長い尾部をピクピク苛立いらだたしそうにうごめかしながら、攻撃のタイミングを計っているのです。うへつ、とロイドは眼を閉じました。

「な、な、なんとかしてくれエ」

「わかつてる。動かないで！」

厳しく言うと、アナはまぶたを半分にして意識を集中し、サソリの心にそうつと心の手を伸しました。

「だいじょうぶ。だいじょうぶよ。いい子ね。こわがらないで」

アナはつぶやきます。

サソリはとまどっています。空気に撫なでられているような、妙みょうな感かん触しよくです。

「そのひとを刺さしたって何の得にもならないでしょ。めんどうな思いをするだけ。あなたのほうが強い。あなたはだいじょうぶ。だから力を誇こ示じしないで」

サソリのシツポのピクピク・リズムがほんの少し鈍だぶります。

「ごめんね。悪わるかったわ。びっくりさせて。あたしたち、あなたのテリトリーを侵おすつもりじゃあなかったの。ただ、知らなかっただけ。ウツカリしただけ。もうすぐ行くから。いなくなるから。だから、このまま、ほうっておいて。ね？」

サソリは動きをとめて、首をかしげます。知らない誰かに話しかけられたことなんかこれまで一度だつてなかつたのです。まして、そうつとそうつと慰めるように撫でられたりなんて。

普段なら、ちよつとでも自分の気に障った奴には、すぐにブスリ毒をお見舞いしてやるのですが。

こんな時つてどうしたもんだらう？

サソリは困つてしまいました。困つてしまうと、からだから力が抜けました。

アナは、片手で額の汗を拭きながら、かすかに微笑みました。

「いいわ！ 今ならだいじょうぶ。ロイド、ゆつくり下がつて。ゆつくりよ。絶対にその子を驚かせないように」

「ああ……こつち？」

「ええ。そのまま、そうつと降りて」

大きなものが動きました。自分の上に落ちていた大きなものの影がすうつと引いてゆきました。

サソリはビクツと尾部を震わせましたが、あのやさしい空気のようなものが、すかさず背中と言わず足といわずあちこちを撫でて慰めてくれるので、ついついうつとりしてしまつて、思わずタイムィングを逃してしまつたのでした。

「ありがとう」

空気のようなものが言いました。

「あなたがほんものの勇氣を持ったサソリさんで良かったわ。どうもありがとう。元気でね。さよなら」

空気のようなものが、サソリの眉間を、チョコンとつついて消えようとした時。

「でやあああつ!!」

避ける暇も止める間もなくにもありませんでした。突然、電光掲示板につきささるほどのホームラン・ボールとなつて、サソリの赤いちいさなからだは、遙かかなたまですつ飛んで行つてしまいました。

「なつ……なんてことするのよおつ！」

両手の拳骨で背中を連打されて、ケンは、びっくりしました。

「イテイイテイテ、やめるよ、おいおい？」

からだをすくめながら、アナに向き直りました。

「なんだよ、なに興奮してんだよ？」

「バカっ！ ケンのバカっ！」

アナは砂を掴んで投げました。眼つぶしを食らわすつもりだったのに、敏捷なケンになんなく避けられてしまい、今度は両手をシャベルにしてガツパガツパとひっかけてやりました。抵抗をあきらめたケンは頭っから砂だらけになって、茫然と眼をぱちぱちさせました。

「あの子はあるなおとなしなかったのに。聞き分けよくしてくれたのに。攻撃されたんなら

ともかく、なんにも、なんにも、悪いことなんかしなかったのに、なんであんなことしたのつ！ バカッ！ 乱暴者つ、暴力主義者つ！」

「だ、だつて……サソリだぜ？」

「敵じゃないでしょつ！」

「でも」

ああ、なんてこと。

アナは思います。

宇宙人に操られておかしくなつた動物たちとは違ふでしよ。生命。同じこの地球の仲間。こんな広い、こんな茫漠たる砂漠の中で、たまたま偶然出会つた、唯一の生き物。

たがいに距離を守つてさえいれればそれでいいのに、共存できるのに。危険だから、邪魔になるから、うつとうしいから、嫌つちやうの？ いなくなつたつて別にどうでもいいつて、絶滅させちやおうとでも言うの？

いきなりバットでぶつ飛ばしちやうなんて。とてもじゃないけど、正義の味方のやることとは言えないじゃないのつ！

「いじめつこ！ 卑怯者つ！ 渋谷税務署つ！」

「またわけのわからぬことを」

ケン鼻の穴を膨らませました。

「てめーなあ。舐めるんじやねーぞ。どーせ例の、女の感性だかなんだかつてわけのわから

ねーやつで盛り上がってんだろーがな、こっちやそれどころじゃねえつんだ。妙な言いがか
りはいい加減にしろよ」

「言いがかりですって？」

「ああ、そうさ！ そーでなくても暑くて退屈たいくつで頭が変になりそーだ。ピーチクパーチク黄色い声でわめくのはよしにしてくれ。だいたいな、世の中はおまえを中心にまわってるわけじゃーない。PSIとしてレベルが高いのは確かかもしれねーがな、そいつばかりは認め
てやるが。いつでも何でもおまえの判断が正しいわけじゃあないはずだぜ。俺おれだって、しま
いにゃあ怒る。いつでもやさしい男だと思ふなよ」

「誰が？ やさしいですって？」

「アナは天を仰あまぎました。」

「おお、主よ。どうかこの少年をお許してください。彼はなんにもわかってないんです」

「……てめえ……俺がいつ、俺のために祈りしてくれて頼たのんだよっ！」

「ちよつとちよつとふたりともっ！ 敵が動きだしました。見つかりますよ、早く隠れて」
「しまった」

「そうだったわ」

あわてて砂丘さまやうにからだを伏せ、ケンからじりじり離れながら、アナは見ました。

円盤はついに全員集合したみたいです。渡り鳥のように整然ならと並んで飛んで行きます。
時々、まるでウインクでもするみたいにキラッと光ったりもします。

いったいどこに？ あんなにいっぱい揃って、何をしに行くと言うのでしよう。うーんとうーんとあっち方面に行くと、確か、サンクスギビングのあたりに出るはずじゃあないかしら？ そこにはケンとロイドの家がある。

まさか、あの大都市を攻撃するつもりじゃあ……。

アナは思いましたけれども、口にはしませんでした。

仰向いた少年少女の顔の上に次々に影を落としながら、円盤たちは通過しました。眼下に、宿命の敵・正義の味方三人組がひそんでいることになど、気付きもしません。それとも、あるいは、ちゃんとわかっついていて無視しているのでしょうか。まるで頓着してないだけかもしれません。こんなこどもを相手にしている暇はないとか、それだけ重要な任務に急いでいるとかいう事情があるのかもしれない。だとしたら、ずいぶんとバカにされた話ですが。

今の三人には所詮どうすることもできませんでした。

アナは、そつと両手を伸して、左側にいるロイドの上着の肘と、右側にいるケンのシャツの裾を掴みました。

それでも、男の子たちはどちらも身動きひとつしませんでした。まなじりを決し、キリリと唇を結んで、空高いところをのんびり（のように見えましたが、ほんとうはすごく速いの）に違いありません）移動していく敵の団体をにらんだまま、長い長いこと、ずーっと黙っているのです。

どちらの横顔にも、きつぱりゴチック文字で「悔しい!!」と書いてありました。

「チクシヨウ！」「バカヤロー!!」『今にみていやがれ』e t c. e t c. ……ここには表記できないようなことも、実はさりげなく書いてあったりしました。

今、戦わずにすんだことに、どうしても『良かった』とホッとせずにはいらなかったアナは、少しばかり恥かしく思い、少しばかり呆れ、少しばかり羨ましくなりました。まったく、男の子たちって単純なんですよ。生きてくの、絶対楽ですよ。女の子より。

そんな風に、それぞれにそれぞれの思いを抱えて放心していたので、しばらく誰も気がつかなくなりました。

「うっ、なんだ？」

最初に発見して、思わず立ち上がってしまったのは、またしてもケンでした。ほとんど遠視ぎみなほど視力が高いのです。

「みろ！ 列の最後を！」

言われてみれば、確かに、円盤の大群の後に黒いちいぢやな点のような鳥のようなシルエツトが見えます。あたかも、カルガモの親子の後を何を勘違いしたのかくっついて歩いてるスズメ、クジラと競争するアジの稚魚、いえいえ、クイーン・エリザベス号にミーハーしている手漕ぎボートみたいです。余裕しゃくしゃく巡航していく連中の後を、たっただひとり息もたえだえになつてやつとなんとかついて行っている、という感じですよ。

「……飛行機みたい」

アナがつぶやくと、

「DP44型戦略戦闘爆撃輸送機だあつ!!」

ケンは大量の唾を飛ばしながらわめき散らしました。

「そこらの二束三文のグライダーみたいに言うんじゃねえ、ううつ、この眼が信じられねえ、なんて幸運なんだ。生きて飛んでるDPを見る事ができるなんて、この感動。この衝撃。

俺は、もう、このまま死んでもいいつ!

オーバーにも感涙にむせぶケンに、冗談じゃないわよとふくれながら、よくあんな点みたいなものの種類を見分けることができるものだときれながら、アナはそつと気持ちを隠して尋ねました。

「なにそれ?」

「だからなあ。超低速でも超音速でも安定した飛行をし、翼が畳めるからヘリコプター並みに狭い場所に離着陸でき、慣性誘導装置やらレーダー・スコープやら積みこんでやたらめつたら自動化されてて、数千発の空対空および空対地ミサイルも搭載可能、でも本業は戦闘員の輸送で、例えば高度一二〇〇フィートから五十人の完全武装兵士を五分以内に安全に確実に目的地に落下傘降下させることができるだけのとんでもない繫鉄装置を持った画期的兵器、空軍の花形、対ゲリラ戦の切札、必殺仕掛人、どんな敵もかなわない歴戦の覇者、キャッチ・フリーズ「ゴー・アヘッド、メイク・マイ・デイ」通称「ダーティー・ハリ」たああいつのことなのだあつ!

ひと息にしゃべりきって、まだハアハア興奮のおさまらないケンには、ほんとうに悪いと

思うのですが。

アナはつい言っちゃいました。

「……あれが？」

ロイドも言っちゃいました。

「ケンって戦争オタクだったんですね。危ないなあ」

「……ううう……悪いかつ！ ああ、それにしても、あのお姿。ああ、なんておいたわしい……とほほ」

ケンは落つことしたんじゃないかと思えるほどに深々と、首をうなだれました。DPなんかの飛びかたは、その栄光の過去を力いっぱい裏切るほど、ヨタヨタとヨボヨボとヨロヨロとしていたのです。

「だいたい、どんなにすごいと言われても、しよせんはオールド・ファッションド・ウエポンです。」

戦争が激しかったのは三人がものごころつくよりもずっと前のこと。その後の世界平和の時代に、すこぶるつきに強力な兵器の類はすべて解体されて別の何かの部品になりました。中には壊しようがないので、博物館や歴史資料館行きになったものもあります。どうやって整備すればいいのかを知っている人間がひとりもいなくなり、へたに触ると爆発するかも知れなかつたりするので、超特大の粗大ゴミとなつて、みんなに迷惑がられているものだけであるくらいです。

でも、思えば、だからこそ、とりあえず飛んでいるそれがとても貴重なのだと言えたりします。

そして、その骨董品が、この非常時にひとりあんな大勢の敵に敢然と挑んで戦おうとしているのだとしたら、これはもう実になんともはやとんでもない場面を目撃してることにならないでしようか？

ようやく、胸がドキドキしはじめたアナが思わず両手を祈りのかたち握りしめて見守りはじめた時……皮肉なことに、ちょうどDPなんかの飛びかたがすっかりおかしくなってしまったのでした。高度が下がり、速度が落ちます。おすん、なんてオナラみたいな煙も吐きます。当然、敵には、ぐんぐん引き離されてしまいます。やがて、機首がふらふら揺れて踊ったまま止らなくなったかと思うと、翼の片方がポツキリ半分折れ、あつと言う間にスピンがはじまりました。最後尾にいた円盤のひとつがあつげにとられたかのようにその場に立ち止まり、もがき苦しむDPをしばらく黙って眺めていましたが（きつと中では宇宙人たちが「やーいやーい」だの「何しに来たんだあいつ？」だの「ご苦労さんだったなあ」だのと会話しているに違いない、とアナは思いました）そのうちに、前を行つた誰かに寄り道するんじゃないと叱られてもしたのでしょうか、あわてて追いかけて消えてしまいました。

「お、落ちるんじゃないやねええええっ!!」

ケンの悲愴な悲鳴が聞こえたのでしようか。今にもそのまま墜落してぺつちゃんこになつてしまひそうだったDPの翼が、不意にパタンと元に戻り、機首が立ち上がり、機体が立ち

直り、高度はどうしようもないほどなくしてしまつていたものですからすかさず着陸態勢にうつり、みんなハウツと胸を撫で下ろしましたが……なんとそれは今度はまっすぐこつちに來るじゃありませんか。きつと、この、今三人が隠れている小高い斜面に不時着するつもりなのです！

「う……うわあつ……!」

「きやああつ」

ロイドが、アナが、走りだしました。膝が顎にぶつかるほどの勢いで。砂はとてつもなく走りにくく、振り向けばDPの機首、なぜかまるでニッコリ笑つた猫の顔みたいに見えるコクピット部分が、ひとコマごとにどんどん近付きどんどん大きくなり、しまいには視界いっぱいにくれあがりました。

あ、横に走ればいいんだ！

気がついた時にはもう勢いがついていてへたに急にコースを変更したりしたら転んでしまひそうです。おまけに、今から脇に逃れても、翼でなぎ払われるのは避けられそうありません。金屬的な轟音に耳の後がそけだつて來ます。足がもつれます。

PSIパワーを使っちゃおうか？

ケンの顔色をうかがおうと横を向いてもいらないのです。驚いて、首を回して見て、アナはゾツとしました。ケンときたら、丘のてっぺんで、両足をふんばり両腕を広げているのです。まるでDPなんかを抱き止めてみせようともいうように……! !

「ケン！」

必死の声は迫り来る音にかき消されます。思わず戻つてケンをどついてやろうと思つたア
ナに、

「伏せろっ！」

言いながら、ロイドがタツクルをかけて来ました。アナは顔面から砂に激突し、そのまま
ぎゅうつと押し倒されました。思わずカッと頭が白くなつた瞬間、音が、影が、巨大な質量
を持つものの気配が、ロイドのからだごし、背中の上一面に覆いかぶさつて来て……。

ああ、おとうさん、おかあさん！

アナの頭にだあつとさまざまな考えが浮びました。

こんな時、真つ先に呼べるような好きな男の子がいれば良かったのに。ケンは、ロイドは、
誰を呼んでいるのかしら。それにしても、人間死ぬ時つて生れてからその時までのことを全
部思いだすつていうけど何にも浮ばないわね。変ね。ほんとに何にもないみたい。情けない
わねえ、あたしそんなに記憶力ないのかしらん？ それにしてもまだかな。ずいぶんのんび
りしてるのね。そうか。ひよつとすると、死ぬ時つて一秒が一秒じゃなくなる、うーんと長
くなるんだわ。やだな。いい加減サツサとしちゃつて欲しい。まさか、全部ちゃんと思いだ
すまで死ねないなんて言うんじゃないでしょうね。いい加減な思ひだしかたすると、天使さ
まに『こらこら、そこは違う！』つてチェックされちゃうとか……わあん、そんなのつて厳
しい。死んでまでテストされるなんて絶望的よね。死んだほうがマシだわ……あらいけない。

真面目に記憶蘇らせなきや、叱られちゃう。……天使さま？ ごめんなさいね？ おられます？

そうつと眼を開けると、黄色いものが見えました。
黄色い、砂が。

午後の太陽に焼かれている砂と砂と砂が。アドベント砂漠で見られる最もめずらしくない物体が、見えたのでした。

あわてて身を起こすと、ロイドが背中から転げ落ちました。可哀想に、また失神してしまつていたようです。

そうして、アナは見ました。

さつき見た姿勢のまま、まだちゃんと立っているあの大馬鹿者の背中を。砂漠を渡る風が、彼の金髪を、よごれまくつたシャツの裾を、はたはたとなびかせていました。あたりはとも静かでした。

飛んでいた野球帽を拾って持つて行くと、ケンもまた、意識を失つていたのでした。青い眼をカツと開き、前歯をむいて幸福そうに微笑んだ、かなりマッドな表情のまま。機首は、ケンの鼻先からわずか三センチのところまで止っていました。

「……バカねえ……」

どんな怪力の持主だつて、飛んでくる飛行機を抱きとめることなんてできっこないとは思わなかつたのかしら？ それとも、愛するDPなんとかに激突されて死んじやうなら本望だ

とても思つたのかしら？

無責任ねえ。

地球の平和はどうするつもりだったのかしら。

パソコンと野球帽をかぶせてあげると、ケンの顔がフツと変り、膝が折れて、砂漠に崩れ落ちました。

同時に、コクピットの窓というかドアというかが持ちあがつて、中から誰かがゴーグルと飛行帽で武装した頭部をつき出したのです。そのひとは、心配そうな小さな声で尋ねました。

「輓いちまったか？ わし？」

「うろうん」

アナは首を振りました。

「だいじょうぶです。気絶しただけ」

「あー、やれやれ。良かった。免停になるとこじやった。ほっほっほー。どれ、よっこらしよ」

骨つばいからだをボキボキ鳴らしながら降りてきたのは、白い眉白い髭、見るからに元飛行機乗りのかつこうをしたおじいさんだったのです。

「名前？ そんなものはもう忘れてしもうた。砂漠じじいとも呼ぶがよい」

熱いコーヒーのお代りを注いでくれながら、おじいさんは驚のような鼻をちよつとカッコ

つけてピクリと蠢かせました。

そうです。コーヒーです。ダイナーの最後のコーヒーです。

三人は、砂漠の真ん中で、たっぷりご馳走をいただいたのです。

それというのも、どこかしらおかしくなっていた飛行機のコンピュータを、失神から覚めたロイドがテキパキと直してあげたからこそ、です。DPに関する質問や賛辞を次々にぶつけて、おじいさんを困らせたり嬉しがらせたりしたケンのおかげもありました。もちろん、アナだって、可愛い女の子であるってことそれだけで、充分に招待されるだけの価値はありますけどね。

再び飛べるようになった飛行機に乗って、一気におじいさんの家までやって来てみると、そこは昔の軍の秘密基地でした。設備のほとんどは作動せず、屋根もあちこち欠けてしまっておりましたが、雨露はしのげますし、通信や交通の手段もあります。だからケンはさつそくおとうさんに連絡をとりました。大量のフライング・ソーサーの情報を伝えるとおとうさんは緊張した声で「がんばれよ」と言ったそうです。食糧や生活物資もちゃんと蓄えてあります。日が暮れてからは、カンテラを使いました。少し油臭かったけれど、火の燃えている周りに輪になってコーヒーを飲むのはなかなか素敵な雰囲気でした。滅びかけの基地の壁に、四人分の影がゆらゆらと広がりました。

「この砂漠にはなあ、昔わしの部下だった連中がずいぶんたくさん眠っておる。じゃからどうしても離れがたくってな。わしはつまり、一種の墓守りなんじゃよ」

遠い眼をしてつぶやくおじいさんに、ロイドがそつと言いました。

「世界じゆうに起こつてゐることは、ご存じですか？」

「ああ。漠然とはな」

「あの飛行機を、しばらく貸していただくわけには行きませんか？」

「なんてことを！」

ケンには悲鳴をあげました。

「あんな貴重品をお借りしたりできるわけがないじゃあないか！」

ケンはおじいさんの前ではなんだかいつもよりずいぶんていねいです。

おじいさんは器用に片方の眉毛だけをあげたまま、上下のまつげの目立つギョロ眼を剥いて、三人の顔を順繰りにのぞきこみ、低い声で言いました。

「話してみい。おまえさんがたのほうの事情を」

そこで三人は代りばんこに物語りました。時々おじいさんが短い質問を挟み、説明がどんどん複雑になりました。身振り手振りを入れるたびに、誰かの影が長くなったり短くなったり、影同士が戦い合ったり抱き合ったりしました。

「……なるほど」

話が終ると、おじいさんは黙つてしまいました。腕を組んで、白い眉の下で皺の深い眼をぴつたりと閉じたまま、あまりにも長いこと少しも動かないのです。

三人はそうつと顔を見合せました。

「眠ねむっちゃったのかなあ」

ロイドが小さく言いました。

「お疲つかれになったのよ、きつと」

アナがうなずきました。

「かもな。年寄りは早寝早起きだから……」

言い掛けた途端おじいさんがギツと睨にらんだので、ケンをあわてて口を閉じました。おじいさんは顎に手をあてて、身を乗り出しました。

「いや驚いた。まったく恐おそるべきこともらじやな。協力してやりたいのはやまやまじやが、うちの可愛いハリーを譲ゆずるわけにはゆかん。だいたい、あれはイマイチ調子が悪い。戦闘能せんとう力はほとんどないも同然じゃし、慣れぬものには操縦もできん。かと言って、わしは砂漠を離れられんしろう」

三人はしぶしぶうなずきました。

アナは、おじいさんとDPがこれからずつといっしょに行動してくれることになったら素敵だ、と思っていたので、とてもガツカリしてしまいました。そうして、こんな風に甘あまい考えを持っていたのは果たして自分だけだったんだろうか？　と思いました。

「ただしだ。どこか、おまえたちの好きな場所まで送っていつてやるのは構わぬ」

「ほんとうですか！」

「ああ」

「うひよほー、ラッキー♡」

「DPにまた乗れる……感激」

おじいさんは喜ぶ三人を微笑ましそうにながめました。

「で、どこがよい？」

「そりゃあもちろん、ホーリー・ローリー・マウンテンの……」

ケンは、言い掛けて口ごもりました。

「いけねえ。だめだ。まだ歌が揃っていない」

「おお、そうじゃそうじゃ。そう言えば、置き忘れられた歌のかけらを探しておるとか言っ
とつたな。実は、わしに、心当りがなくもないのだ」

「ええっ？」

「来るがいい」

カンテラを持って外に出ました。基地の裏手側に回ると、そこには温室のようなものがありました。茂りすぎた植物と枯れかけた植物がごちゃまんとしています。小さなトカゲや蜘蛛のたぐいが、光と足音に驚いてちよろちよろ走り回りました。もともとは食糧自給のための設備だったのでしょうか。トマトのようなものやきゅうりのようなものは、今でも真面目に手入れされているようです。人工的なものであることはまちがいが無いのに、小さなともしびで見る限りでは、なんとも不思議な異次元の森のような場所でした。

慣れた足取りでジャングルのようからみあつた植物を掻き分けて進むおじいさんについてゆくと、突然、ぼつかりと広い空間に出ました。

「……まあ……」

アナは感動してしまいました。

女神の像が甕をかかげる形の壊れかけた噴水の周りに、たくさんのお花が競い合うように咲き乱れておりました。大きなものもあれば、小さなものもあります。吹きだす炎にそっくりなもの、ころりと丸い鞠のようなもの、アカンベをしているひとの顔のようなもの。たつたひとつだけポーンと咲いているものもあれば、たくさんいっしょに温室の天井近くから床まですずつと滝のようになだれ落ちてくるものもあります。どれもこれも鮮やかで派手な熱帯らしい色と形をしていました。雪国に生れ育つたアナは、写真やテレビでしか見たことがない種類ばかりなのでした。

「……すごい……きれいだ……」

「うむ。なかなか豪華絢爛じゃろう」

カンテラを女神の足元に置きながら、おじいさんが得意そうにお髭をひねりました。

「こいつらがおるのでな、わしも無聊が慰むというものよ。ほっほっほっ。……おつといかん。そうじゃそうじゃ。あれはどこにいきおつたかの、歌うサポテンは」

「歌うサポテンですって？」

「そうなんじゃ。遺跡のそばに咲いとつたんじゃ」

「遺跡い？」

びっくりするようなことばかり言うおじいさんです。

「おお。あるんじやよ、そういうものが。なーに観光にやあ向いとらんよ。迷路みたいな廃墟じゃし、うるさいサルどもがいおつてな。まー、是非とも見たいというならば遊覧飛行をしてやってもよいが……こつから南東にほんの二十分じゃし」

しゃべりながらおじいさんは花壇の中に踏みこんで、葉っぱをどけたり巨大な鉢を動かしたりしてさかんに何かを探しているようです。でも、なかなか見つからないみたいです。三人も手伝うことにしました。散らばって、花のひとつひとつをよく観察してみました。

「まーわしもヒマだでな。何度か行ってるうちにそいつを見つけて……鉢植えにして持ってきたはずなんじやが……ふーむ、どこ行つたかのう？ まったく、しょうがないな。少しは剪定してやらねば」

「あ！ 痛っ！」

ロイドが声をあげました。

「どうした」

「だいじょうぶ、ちょっと棘をさしただけです……うわわわっ！ な、何だ？ こいつしゃべってるっ?!」

「えええっ」

「見て見てっ」

ロイドが小さな鉢を持ち上げました。鉢の中の花は、ちゅばちゅば唇くちびるのような形のはなびらを鳴らしてロイドの刺さしてしまった指をしゃぶります。ロイドがあわてて指を離すと、せつなそうに身悶みもたえしながら言いました。

「フィード・ミー……」

「あー」

おじいさんが手を振りました。

「あいにくじゃが、違ちがうんじゃそれは。かまうな」

「餌えさくれっていつてますけど？」

「悪いこと言わんから、ほっときなさい」

「はあ」

鉢を置くと、花はロイドにさかんに媚こびを売り、投げキッスみたいなこともしました。なんだかやたらになついてしまったみたいです。ほだされて、名残なごり惜しそうにじーっと見ているロイドに、アナは声をかけました。

「ここにはないかしら。カンノンの花は」

ロイドはハッと顔をあげてアナを見ました。

「そうだった。あるかな」

「どんな花か、知っている？」

「知ってる。伝説だけど。カンノンの花には七枚のはなびらがあるんだ。ガラスみたいに薄うす

くて透明^{ちやうめい}っぽい弱々しいはなびらだけど、よく見るとひとつひとつ色が違つて、虹^{にじ}の七色に対応しているはずだ。その七枚を調査すると、どんな病気で治る薬になるんだって」

「そう。そんな儂^{はろな}げな花は、ここにはないみたいね。残念だけど」

「……うん。熱帯の花じゃないと思う。どっちかっていうと、高山植物っぽいような気がするんだ」

ふたりが話している間にケンが気を利かせて、あの食いしん坊の花の鉢をどこかに隠^{かく}してしまいました。ロイドももう、あんなものことは忘れ、自分の使命をちゃんと思いだしていたのですけれどもね。

それからしばらく、战士们もおじいさんも熱心に探してみたのですが、やっぱりダメでした。歌うサポテンはどこに行つてしまったやら、見あたらないのです。

「はて。面妖^{めんやく}な。枯らしてしまつたかな。それとも足でも生えて逃^にげ出しよつたか」

「ひよつとして、遺跡に行けば……」

アナがつぶやくと、おじいさんはポンと手を打ちました。

「そうか。あそこには群生しておるのじゃった。わかつた。じゃあ、明日、飛ぼうじゃないか、遺跡まで。もう今日は休むとしよう。よい子はとつくに、ねんねする時間じゃしろう。

ほっほっほ」

今はもうない軍隊のマークの入つた寝袋^{ねぶくろ}をそれぞれひとつずつ借りました。三人は、おじ

いさんからは少し離れた場所に、川の字の形に並びました。カンテラを消すと、まっくらでした。

「……ねえ。場所をかえませんか？」

ロイドが言った時、ケンはまだ高いびきをかいていました。

「どうして？」

ロイドったら、急に何を言いだしたのだろう。

ドキドキしながら、アナが尋ねると。

「ほら、あっち側、でっかく屋根が壊れているでしょう。あの下あたりに横になったら、きつと星が見えるんじゃないかと思っただけだ」

「きゃあ、賛成！」

星、星、星、星……。

それはそれは、ほんとうにすごい星空でした。

真黒い天鵞絨を広げて、寶石をたくさんザツとこぼしたみたいです。あんまりたくさん見えずぎて見慣れた星座がとっさにわからなくなつたくらいです。天の川の流れがほんとうにミルクのように見えたりもします。邪魔な灯りがなく、砂漠の夜は昼間からは信じられないくらい冷えこむものなのです。だから空気がとても透明になって、星座観察には最適なのです。

ふたりが声もなく見つめている間に、流れ星が、ひとつ、またひとつ、流れては消えてゆ

きました。

「オリオンがいるから、サソリはいないな」

ロイドの声が、星灯りの薄闇うすぐらみの向うからそつと聞こえました。

「サソリと言えよ……アナ、昼間のこと、ありがとう。ほくのせいでケンと喧嘩けんかさせて、ごめん」

「やだ。そんなこと。気にしないでよ」

「地球上にはさ」

「え？」

「百五十万種類の生物がいて、五十億の人間がいる。だから、ほくは自分のことを、とてもちっぽけだと思つてた。百五十万分の一の、そのまた五十億分の一にすぎない、結局は、生れても死んでもどーつてことない奴やつなんだって、わりと冷めてて。あきらめてて。そういうほうが、カッコいいような気がしてただけど」

眼鏡をかけて真上を向いたままのロイドの顔を、アナはじつと見つめました。真横から見ると、なんだかけっこういい男でした。

「でもさ」

視線に気づいて、ふり向いたロイドは恥かしそうに笑つて、胸の上で組んでいたアナの手にそつと指を触れました。

「むだに死にたくなくなった。ケンと、……そして、きみに逢あつてから……」

「……ロイド……」

「でへへ。ちよつと、臭^{くさ}かったかな？」

「うううん」

「じゃ、思い切つて、もうひとこと言っちゃう」

星空に向き直つて、ロイドは、アナの手をさぐり、指に力をこめました。

「守ろうね。地球を……！」

アナも握^{にぎ}り返しました。星を見つめたまま。強く。とても強く……。

あまりにもすさまじい自分のいびきに夜中に眼を覚ましたケン^{ケン}は、残りのふたりがそばにいないのでギョツとしました。見回してみると、なんと部屋のあっち側で並んで眠つています。

ケン^{ケン}は天井をにらんで、十秒ほど考えました。

そうして、ふうつとため息をつく^{つく}と、ごろりとうつぶせになりました。寝袋に入^いったまま両手を使ってワニ歩^{わにぶ}きをして、眠^いっているふたりに並ぶ位置まで移動し、もう一度寝^いがえりを打^うつて、仰^{あたまむか}向けになりました。

「……あ……！」

ケンの顔に、ニカーツと笑^{わら}いが広がりました。

星空に気がついたのでした。

「あれだ」

往年の最新鋭機のコクピットの窓から赤茶けた遺跡が見えます。おじいさんはゴーグルをなおしながら、姿勢を正しました。

「降下する。全員最終点検を行ない、所定の配置につけ」

「へ？」

「って言われたって」

「えーい口癖だ。気にするな。降りるぞ」

「うわあああ」

機体はいきなり空気につき刺さるように角度を変え、すさまじいGに戦士たちはみな座席にへばりついてしまいました。まるでジェット・コースターです。ロイドの髪が全部つたつています。ケンは両手を上げてバンザイをしています。アナはちよつびり具合が悪くなりました。

右に左に踊るように旋回しながら、おじいさんは遺跡の真上ギリギリのところを飛びながら、親指をたてて得意がりました。

「どーんなもんじゃあつ。昨日は調子がでんかったがな、わしの腕もハリーのやつも、まだ毫碌しとらんで、わはははははは」

やつと地上に降り立つた時には、アナはふらふらで、まっすぐ立っていることができませ

んでした。しゃがみこんで額を支えて、貧血ひんけつがもどるのを待っていると、突然に。

「アナ！　ここだよ。この奥だよ！」

またあの、赤ちゃんの声が聞こえたのです。

「この奥には、マジカントに通じる秘密の通路がある。探すんだよ。必ずみつかるから。がんばって、アナ！」

「そうら、これが歌うサポテンさ」

おじいさんの声に、アナはハッと顔をあげました。

遺跡の外壁の裾すそ近くに、真つ赤な花をつけたサポテンがいくつもいくつも並んでいます。そうしてじつと耳をすましてみると、それらはみんなそろって短いひとつのメロディをつぶやいているのでした。どこかしら、物悲しい、懐なつかしいようなメロディを。

クイーン・マリーに教えてあげるべきメロディの五つめがみつかったのです！

「あと、残りはたったの二つだ！」

「いやあ、良かった良かった」

「じゃあ。でかけるか」

「そうですね、とりあえずイースターの街まで送っていただけますか」

「おお、いいとも」

「待って……！」

アナの声に、DPのステップを登りかけていた男たちはみな、怪訝けげんそうに振り向きましました。

「この遺跡に入りましょう！」

「えーっ？」

「なんで」

「声が出たの。前にも聞いたあの赤ちゃんみたいな声。この奥に、秘密があるって、そこに
行きなさいって、誰かが教えてくれたのよ！」

男たちは顔を見合せました。

「……ひよつとして」

ケンが眉をひそめます。

「おまえ、飛行機に酔ったんじゃないか？」

「違うわ。そんなじゃないわ！」

「だってよ。なんか、具合悪そうだったじゃないか。もう乗りたくないってことなら、正直
にそう言えばいいのに」

「あのなあ、お嬢さんや」

おじいさんが飛行帽のあご紐をはずし、ゴーグルをずらして真面目な顔をアナに向けまし
た。

「この中は複雑な迷路になつとるようだぞ。わしは一階の、それも入口の近くをちよこつと
しかのぞいたことがないが、それも、もうずいぶん昔々にだが、はつきり言つてかなり不気
味だったぞ」

「かまいません。それでも、行かなければならないんです」

アナの顔色はまだ青く、胸がムカムカしていて、あんまり丁寧ていねいに説明することができません。

「ケン。ロイド」

まっすぐに、見つめます。それぞれの眼めに、思いをこめた視線をぶつけます。

「わかつてくれるわね？ そう感じるの。確かに感じるのよ。だから、そうなの。お願い。この中に、いっしょに」

「ああ……」

「そりやまあ、アナが言うんなら」

少年たちが次々にステップを降りて、アナのそばに来ます。おじいさんは、なんだか傷ついたような顔になってもごもご口を動かしましたが、何にも言いませんでした。

またひとりぼっちになるのが寂さびしいんだろうな、とは思いましたけれども、しかたがありません。彼等かれらは戦士たちであつて、ひとり暮くしの老人相手のヴォランティアではないのですから。

変に名残りを惜おしんでいては、余計つに辛くなるばかりです。

「お世話になりました」

アナは頭をさげました。冷たく聞こえるかもしれないような声になってしまいました。

「おじいさんのことは忘れません。どうか、お元気で」

「うむ」

おじいさんは鼻の頭をつまんで、しばらく何か考えていましたが、やがてそっけなく言い
ました。

「なんだか知らんが、ま、がんばれ」

いったいどんな人々の建てたものなのでしょう。どんな文化や宗教の遺したものでし
よう。

遺跡の中の通路は意地悪くねじ曲り、あっちこちとつびょうしもない繋がりがたをして
いたのでした。すぐ隣の部屋に行くのにいやになるほど大きく迂回しなければなりません。
間違つたと思つても戻れない一方通行のくぐり戸もありました。柱があるのに天井がなかつ
たり、床がななめになつていたり、部屋が三角になつたりしています。階段があるのにその
先になにもなかつたり、ドアのようなものを開けると空中に出てしまつたり。まったく悪い
冗談みたいな作りです。

おまけに遺跡じゆうには、眼ばかりくるくるした小さな奴ら、こまっしゃくれたサルたち
がたむろしているのです。昼寝をしている奴、あくびをしている奴、自分の手相にじつと見
入つてる奴、壁のほうをむいたつきりじつと動かない奴、それに膝枕でうっとりノミを取つ
てもらつてる奴。そんな奴らはまだよいのですが、中にはひどく活発で好奇心の強いものも
います。階段などでもかまわずに足元を走り回るので危なっかしくてしかたありません。ち

よつとぼんやりしていると、いたずらをされてしまうので油断も隙すきもありません。髪をひっぱられたり、背中に飛び乗られたり、いつの間にかリュックサックに取りついて、中身をひっぱりだされたりしてしまうのです。追い払はらつても追い払はらつても寄つて来ては、冷たい手でいきなり頬ほおを撫なでてゆきます。三人はもうすっかり疲つかれてしまいました。

やつと、どこまでもどこまでも地下に降りる階段を発見して、これこそ「一番の奥」だろうと喜んで進んでみれば、突然狭せまい狭せまい螺旋階段らせんが不意に途中から登りになって、気がついた時には青空の下に出ていました。外壁のてっぺんです。

「エッシャーだ」

ロイドが言いました。

「トマソンだ」

ケンが言いました。

アナはどつちも知りませんが、前者は画家さんで後者は野球選手（ただしその名前にちなんである特殊な建築物をさししめすこともある）です。

「ごめんなさい、でも……あたし」

こんなところに出てしまうなんて、まったく予想外でした。きつとどこかで間違まちがったのです。勘違かんいしたのです。

「きやきやきやきやきや」

あちこちで、サルがいつせいに笑い声をあげました。

もしも、あの声をはじめから錯覚だったら？

アナは不安になってしまいました。ふといやなことを思いついて、アツと口を押えました。もしかしたら、敵側にもPSIの力のある何者かがいて、わざとだましたのじゃあないでしょうか？ アナの信じやすさのおかげで、みんな、まんまと罠に墮ちてしまったのではないのでしょうか。

だとしたら。

おじいさんの飛行機が行ってしまった今は、ここを出てゆくのも大変です。再び砂漠を渡るしかありません。みんな、口にはしないけど、相当に弱っています。ウンザリしています。そんな時に攻撃されたら、とても怖いことになってしまふのじゃ……。

アナはそつと男の子たちに眼を走らせました。ふたりとも、心配そうな顔をしてはいますが、何にも言いません。アナの直感を信頼しているのです。アナに任せようと思っっている顔です。

アナの胸はきゆうんと痛くなりました。怒鳴られたり責められたほうがいつそマシです。黙って信じてもらっているのに、ダメだったら……？ もう涙がにじみそうです。あわてて、そこらの壁や石をいじり、何か確信を持って探しているようなふりをしながら、アナは恐ろしさに震えました。

どうしてあたしは、あんなにはつきり確信してしまつたんだろう。あんなにきつぱり言い切ってしまったのだろう。あんなに気持ちが悪かつたのに、自分の判断が絶対正しいんだと

思ってしまった。そういう言い方をしてしまった。みんな飛行機に乗りたかったのに、拒んでしまった。

前にケンに注意されたのに。いつでもおまえが正しいってわけじゃあないって釘を刺されていたのに。なのに、あたしは……。

暗くなってる場合じゃありません。くじけた顔をするわけにはいきません。ごめんなさいって言ったって何の解決にもならないし、この不安と後悔を白状してしまえば、ふたりはパニックしてしまうかもしれません。

ああ、どうすればいいの。何とかならないの。

もう一度、呼んでくれたら。ちゃんと、あの声と相談さえできたら……！

アナは一見確信に満ちた様子で、そのあたりを探っているふりをしながら、片手を拳に握って、こころを遠くに飛ばそうとしました。

……『赤ちゃん』さん。聞こえる？ わかる？ 名前をしらないあなた。もう一度話し掛けてよ。あたしに教えてよ、正しい道を。どうかお願いだから。

助けて……！

がたっ……！

「あっ」

ごごごごご。

なんと言うことでしょう。アナの手が触れた岩が、突然にひとりでに動きだしたのです。

ごく軽い力で触っただけなのに、まるで思い切り叩いたみたい壁の中にすうっとひっこんでゆきます。

「ごごご……ごごご……ごごご……ごごご……ごごご……」

そのあたりの壁が揺れはじめたかと思うと、たちまち、あたりじゆうにひどい振動が広がりました。もう遺跡全体が動いているみたいです。サルたちが大慌てで逃げてゆきます。中にはつぶされたり落ちたりしてしまつて悲鳴をあげるものもあるようです。かわいそうですがどうしてやることもできません。

「うわわわわわわわわ、なんだっ?」

「ゆ、ゆ、揺れてますよ、地震ですよ」

「危ないっ、アナ、こっちへっ」

「い、い、行きたいけど、こ、こ、こんなに揺れるんじゃ、……きゃあああっ!」

「うわあっ!」

「ごごごごごごごごごご、ごっ!」

亀裂です! ひびわれです!

三人が立っていた回廊がぐんぐんと震えたかと思うと、突然、あちこちでガックリと割れ、深い深い地下まで届きそうな隙間が、いくつもいくつもできてしまつたのです……! 「アナーツ!!」

しゃれになつてますが、冗談ではありません。

立っていた場所が、前も後も割れ目に挟まれてしまったのです！ アナは孤立してしまいました。ロイドやケンと、きつぱり隔てられてしまったのです！

裂け目はみるみるうちに広がって行きます。割れた端からぼろぼろこぼれ、岩が、石が、煉瓦のようなものが、次々にはがれて、雪崩を打って落ちてゆくのです。もう一メートル五十……二メートル……ふたりとの亀裂は、どんどん広がっていつてしまうのです！

「飛べえーっ!!」

ケンが怒鳴りました。

「バツカヤロー、早く、早く飛ぶんだあーっ!!」

いっばいに腕を伸して叫んでいるそのケンの足元すら、後から後から崩れてゆきます。

アナはイヤイヤと首を振りしました。陸上競技は得意ではありません。高いところも苦手です。足がすくんで動けません。とてもこんな大きな幅は飛び越せません。

「ちくしよおっ!!」

「え？」

ケンがリュックを放り出そうとしています。どうやら自分がこつちに来てくれるつもりみたいです。でも、そんなの、何にもならないんです。ここは、アナひとりが立っているのがやっとなら、それもどんどん狭くなっています。

なのに。ケンはまた。

飛行機を抱き止めようとしたように。

アナはグツと唾を飲みました。両のてのひらに爪をたてました。眼をつぶって。祈ります。行きます。

飛びます……！

踏み切り足を蹴ったとたん、今まで立っていた狭い足場が、ガラガラと甲高い音をたてて崩れ去りました。空中で、アナは一瞬止ったように感じました。遺跡の周り三百六十度に広がった砂漠が見えます。砂まじりの風が、頬を打ちます。短くなつてしまつた三つ編みを後になびかせます。両手を広げて浮かんでいるアナのもうすっかり埃まみれになつてしまつた旅装束に、吹きつけています。

風よ……風よ……、助けて……あっち側に連れて行って……！

からだがり落ち始めました。だめです。足りません。距離が足りません。届きません。音もなく散つた涙の粒が頬に触れます。底の底にたどりつくまできつとずつといっしょに落ちていつてくれるのでしょうか……。

思わずギユツとまぶたを閉じてしまったので、アナは、ケンが飛び出すところを見ていませんでした。

だから。

がくん！

「あうっ！」

肩の関節がはずれたかもしれません。でも、止つてます。落ちてません。

小石が落ちてゆく亀裂の上で、つまさきが宙に浮かんでぶらぶらしています。恐ろしい高さです。何か赤いものがひらひら落ちてゆきます。あれは、ケンの帽子……？

見上げてみて、アナは悲鳴をあげそうになりました。

リキむあまり真つ赤になつたケンの顔。左手が、アナの右の手首を、血が止るほど強くつかんでいます。右手は……ああ、右手はバットを持っているのです。そうしてバットの向う側は、やつと崩壊の止つた崖つぶちに座りこんだロイドが、両手で抱えしほりこむようにして必死に押えているのです！ ずずつ、ずずつ。時々さがつてしまうのは、ロイドの手の中でバットが滑るからです。残りの長さが少なくなつて行くからです。

「……や、やめてえつ……！」

アナがつぶやいても、ケンは奥歯を噛みしめ左腕に力こぶを作つて、アナを持ち上げようとしています。

「落ちちやう、このままじゃみんな落ちちやうからつ、は、離してっ！」

「うるせえ、も、もがくなあつ……」

ふたりそろつて振り子のように揺れてしまいます。ケンは足先で崖をさぐりますが、足場はありません、へたに触ると、また崩れてしまいそうです。

「四の五の言つてないで、ちや、ちゃんと掴まれつ、は……離れるぞつ」

しびれた右手の指を、アナは思い切つてそろそろと伸ばしました。筋が違いそうになつた時、ようやく汗まみれのケンの腕にさわります。握れそうになります。

お互いに持ち替えようとした一瞬、ケンの手がひきつったようになりました。ずるつと滑って、どちらの背中もサアツと冷たくなりました。けれども、なんとか、危ないところで持ちこたえたのです。

ふたりはしつかりと、お互いの手首を握りました。これで、離れません。

「ふうっ」

ケンがゲツソリとして、ため息を洩らしました。

「やれやれ。まいったな」

「ごめん」

「おまえの念力で、なんとかならんか？」

「……ごめんなさい」

「ちよつとお、どうするんですかあ、あああ……だめだ、もういけない、滑る、滑っちゃうよおっ！」

ロイドの声も苦しそうです。ケンが持っているほうにはまだ握りがあるからよいのですが、バットの反対側はなにしろああです。ふたりぶんの体重がかかっているのです。ちよつと力を緩めたら、油断したら、汗で手が滑ったら？

落ちます。

まきぞえにするわけにはいかない。

アナは思います。

だって、ケンは地球を救う少年です、こんなドジな女の子たったひとりのためにムザムザ死なせてしまったら、世界は、人類は、どうなるでしょう？

新しい涙が散りました。

やっぱり、離して。あたし、ひとりで落ちる。

きっぱりと、そう言おうとしたとたん。

「ふんっ！」

いきなりケンの腕が細かく震えだしました。

「……………くくく……………」

上腕二頭筋がバンブ・アップします。Tシャツの肩が盛りあがって今にもはちきれそうです。そんな力が、どこに隠れていたのでしょうか。

じりじりとからだを持ち上がってゆくので、アナはびっくりしました。あわてて、空いているほうの手でつかまります。ケンの首に。胸に。

「おおーっと……………来たな。よおし。上出来っ」

ケンがアナを抱きとめます。さっきまで掴まれていた手首にもどってゆく血流が、じわり、とくすぐったく感じられました。激しくなった振り子運動が、ゆっくりと納ってゆきます。

「おまえ、軽いな。好き嫌い多^まいんだろ」

青い眼が、まっ白い歯が、すぐそばで、アナに笑いかけてくれています。それから、ふっと思ひ切り真面目になります。

「おかげでなんとかなったぜ。いいか、このまま、登れ。頭、踏んでっていいから」
「え」

「行くんだ。早く、ロイドがへばる」
「う……」

男の子たちって、なんてバカなんでしょう。なんて考えなしで、無茶なんでしょう。なんて強くて、なんて素敵すてきでしょう……！

「……うんっ！」

のどが詰って涙声になりそうだったので、こらえました。ごまかしました。瞳ひとみに思い切り力をこめて、うなずきます。

「わかった。やってみるっ」

「よし」

ケンの手が、はげますように背中を叩いてくれます。

アナはキツと顎あごをあげ上を向いて、まず、リュックサックを捨てました。リュックサックは落ちて落ちて、忘れたところに小さな音をたてました。

右足をそろそろと持ち上げてみます。最初の足場は、ケンの腰こしのベルトでしょうか。それから肩かたに、それから頭に足をかければいいでしょうか。失礼だなんて言ってる場合じゃありません。早く、確実に、登らなければ。そうして一刻も早くケンをひっぱりあげてあげなければ。

生きるために。戦うために。

登るのです……!!

アナが、最初の一步めをどうにかこうにか進めて、激しい息を整えている、その時でした。「なーにしとるんじやおまえたちは」

三人は見ました。おじいさんの飛行機が、すぐ上を飛んでいます！ 機体から繩なわばしごが降ろされています！ 助けに来てくれたのです！

あんまり必死で夢中だったので、気配にも音にも、誰だれひとりまるで気がついていなかったのです。

「はよつかまらんか、バカものどもおっ」

はしごが届きます。アナが、ケンが、素速くつかまります。急に軽くなったバットにロイドがデーンとひっくり返って、コブを作ります。

「まーったく、なんちゆうザマじゃあ。それでも正義の戦士か、地球防衛軍かね。ほっほっほー」

三人はあんまり息が切れていたの、拡声器に乗ったおじいさんの笑い声に、返事もできません。

「死ぬんなら、どこかよそでやっつくれ。この砂漠さばにまた新しい墓を作るのはごめんじやわい」

……おじいさんったら……。

涙と汗を拭きながらほうつと息をついて、顔をあげると。

「アナの眼が丸くなりました。」

「ケンッ！ 見てっ」

「なんだ？」

「あれ……！！」

遺跡のど真ん中に、細い塔がそびえています。てっぺんに、鐘楼しょうろうが見えます。金色の鐘が、砂漠の太陽にキラキラと輝いているのです。

そんなもの前には見あたりませんでした。きつと、たくさんの壁で覆おほわれ、隠かくされていたでしょう。貧弱な階段が塔の周りをぐるぐる登っていますけれども、そこにたどりつくには、たぶん、謎めづの出入口か何かを通らなければならなかったはずです。いかにも大切に嚴重に守られた、遺跡の秘密でした。

「行ってみよう！」

「うん」

ケン是一片手をメガホンの形にして、飛行機の方に怒鳴りました。

「じいさーん、おーい！ 相談だあ」

「なんじゃあ？」

「ロイドを拾ってから、あの塔に連れて行って欲しいんだあ」

「ふんっ、勝手なことを」

口では文句を言いながらも、おじいさんはすぐにロイドのほうに向ってくれました。

「いいな」

ケンが、聞きました。ふたりはうなずきました。

飛行機のおじいさんは、上空で見守っていてくれます。

ぺっぺつとてのひらに唾を飛ばすと、ケンは愛用のバットを握り、腰をくいくいつとやって構えに入り、金色の鐘の横よこつ面つらを思い切りひっぱたたきました。

りいりいりいりいりいりいん！

鐘が鳴ります。響ひびき渡ります。砂漠じゆうにこだまします。

鐘楼全体を包んだ不思議な光に、三人はふうつと気が遠くなりました……。

5 クイーン・マリーの贈りもの

いい匂い(にお)がします。不思議な音楽が聞こえます。暖かな気持ちのいい風がそっと吹(ふ)いていきます。

アナがゆつくりとまぶたを開くと、あたりは柔らかなピンク色にあふれ返っていました。地面はピンクの雲のよう。空にはピンク色のペールがいくつもいくつも下がってふわふわ揺れ、ピンク色のシャボン玉のようなものがゆったり漂っています。ピンク色のせせらぎがやがて滝(たき)になり、濃いピンク色の睡蓮(すいれん)のような花が咲き乱れる淡ピンクの池に流れこみます。並んだ建物(たけ)はどれもこれも、貝殻(かいがら)かお菓子(かし)のような可愛らしい形で、やはりすべてペールがかつたベビー・ピンクに輝(かが)いでいるのでした。

奇妙(きみょう)な形の帽子(ぼうし)をかぶった背の小さなひとびとがおおぜい、お芝居(しばい)の登場人物(とうじやうぶつ)のような緩やかな礼儀(れいぎ)正しい身のこなしで、たがいに挨拶(あいさつ)をしながら行き交(か)います。ひとびとの肌(はだ)や髪(かみ)や衣裳(いしょう)も全部、もちろん念の入ったピンク色のグラデーションで構成されているのです。

……ここがマジカントなのね……！

送られて来たイメージの中で、知(し)ってはいました。けれども、こうして実際に自分の足で

立ってみても、どうにも信じられません。まるで夢の中です。おとぎ話の世界です。小さなこどもの描いた絵です。もつと意地悪な見方をすれば、ヒット曲番組の清纯派アイドル用ステージみたいだと言えないこともありませぬ。なにしろ、あまりと言えばあまりに徹底的にキレイキレイで作り物めいているのです。

すっごいもんだわねえ。

肩かたをすくめながらゆるゆると視線を回して、アナはびつくりしました。

最初に見えたのは、あんぐり口をあけてぼうつと放心した顔のロイドです。その向うでは、ケンが、うつとりと眼を細めて頬を上気させているではありませんか。

ふたりとも、なんだかひどく幸福そうです。明らかに感動しています。感銘かんめいしてます。その身体言語は「うわあい」です。「やつぽー」です。快感です。

……呆あきれた！

アナのところにチクリと黒いインクのようなものが落ちました。じわじわ広がってゆく感じがします。あわてて擦こすると、ますます汚くなってしまう類たぐいの染みみたいです。

男の子たちは、ほんとうにこんな世界が好きなのでしょう。まるでこころのふるさとにでも帰って来たみたい、ぬくぬくとほのほのとはればれとしてしまっている。

普通ふつう、こういうのって「少女趣味しょうふみ」って言うけれど、あれは間違まちがいだわ。

と、アナは思います。

あたしは立派に少女だけど、ここまでやってくれちゃったら、ほとんど悪趣味だとも思うも

の。「少年趣味」と言いかえたほうが適切だわ!

それにしても不思議でした。アナだつて、ピンクはきらいじゃありません。スノーマンの教会の部屋では、ベッド・カバーだつてカーテンだつてピンク色っぽい生地を使っています。愛用のヘア・ブラシもピンク色だし、日記帳の表紙も淡い桜色です。お気にいりのよそ行きの靴は、トウ・シューズのような形にリボンのついたピンクのエナメル、欲しくて欲しくて、さんざんねだつて、やっと買ってもらった時には嬉しくて抱いて眠ってしまったほどの宝物です。普段は全く、ピンクに抵抗はありません。

なのに、どうして今に限つていやな気持ちになつてしまうのでしょうか。何が気にいらないのでしよう。こんなに濫用されたのではピンクがもつたいたいないとも思っているのでしょうか?

「あ、ケンちゃんだ」

「ケンちゃんだ、ケンちゃんだ」

小さなひとびとの中でも特に小柄な女の子がふたり、不意にこちらに気づきました。ちょこまかとやつて来て、首をかしげたおしゃまな挨拶らしい仕草をします。両側からケンの手を取つて、甘えるようにひつぱります。

「またきたね、あえたね」

「あそぼーあとぼー」

「ごちそう、あるよ」

「ぶれぜんともあるよ」

「じよおうさまが、まってるよ」

「さあさあ、いこう、きゆうでんに」

「きゆうでんに」

「いこういこう」

「はやくはやく」

競争するように早口に言い募るのです。返事も質問も、挟む隙さえありません。

「うんうん、わかつたわかつた。行くよ。行くから、そんなにひっぱらないでよ。しょうがないなあ。あはははははは」

なあに？ 気持ち悪い声だしちゃって。鼻の下伸ばして。歩きかたもデレデレしてさ。

……そうよ。あたしがこんなにイライラするのは、あんたたちが、あんまりバカみたいな顔をするからだわ！

気のせいでしょうか。アナの偏見なのででしょうか。ケンもロイドも、いつもの様子ではありません。凜々しくも頼もしくもない。正義の味方の地球防衛軍らしくない。顔のかたちは別にどこも変っていないのだけれど、なんだかどこにでもいるつまらない男の子たちみたいにみえます。ひどく幼稚に、無責任に見えます。世界の危機だと言うのに、鈍感にも自分さえ今さえ楽しければそれでいいって思っとうかれてはしゃいでいるそこのくだらない誰かさんたちみたいに見えてしまいます。そんな知らないひとびとのような顔をして、とりつく

島もないのです。アナのことなど、もうすっかり頭にないみたいなのです。

ケンは馴れ馴れしい女の子たちに強引に手を引かれるままズンズン歩いて行ってしまいました。ロイドも、ああくんまってえ、なんて鼻声を出して、蜜みつに惹かれる蝶々ちょうちょうのようにふらふらくつついて飛んで行ってしまいます。だいぶ遠くなつてから、ようやく思ひだしたようにこつちを振り向きました。でも、それは「あれ、まだいたの？」とでも言うような、冷たいよそよそしい瞳ひとみだったのです。

そう、アナのころには聞こえてしまったのです。

「へんなの。なにをおこつてるんだろ」

「こないなら、おいてつちやうよーだ」

「おいてつちやおうよ。うるさいよ、あのこ」

「うん。すぐがみがみいうんだよな」

「すぐつんつんすることは、もう、あそんでやらないことにしようよ」

「うん、そうしようよ」
って。

あの不思議な力なんでしょうか。それとも、ただ、そんな感じがただけなんでしょうか。アナには区別ができませんでした。

どちらにしても、シヨックです。やな感じですよ。

あの黒いインクの染みが、たちまちモヤモヤ胸いっぱいに広がります。内側から押しつぶ

されてしまいそうな、変な圧力です。

いったいどうしたって言うんでしよう。男の子たちは、急に小さなこどもみたいになってしまった。

そんなにイヤがられているのなら、邪魔者扱いされるくらいなら、このまま消えてしまいたい。どこかでしばらくひとりになれるものならば、是非ともそうしたい。

そう、思ったのですけれども。

今、彼らを見失ってしまいうわけにはいきません。これっきり、はぐれてしまったら大変です。なんとか元の戦士に戻ってもらわなきゃなりません。あんな普通じゃない手段でやって来たこの国から、いったいどうやって地上に戻ればいいのかもわかりません。たった三人っきりの仲間なのに喧嘩別れなんてしてしまったら、みんなが揃って助け合い力を合わせていかなければ、宇宙人をやつつけることなんか、絶対できないじゃありませんか！

そう、今は戦争中です！ いつ、どんなとんでもないことが起こるか、わかつたもんじゃあないんです。

意地を張ったり、尻込みしたり、拗ねてる場合じゃありません。

アナはグツと拳骨を固めて、駆け出しました。

ピンク、ピンク、ピンク。あくまでもどこまで行ってもピンクです。

めまいがしそうでしたけれども、アナはてのひらに爪を立てて歩き続けました。

ピンクの坂道をたどり、ピンクの階段を登り、ピンクの橋を渡り、ピンクの門をくぐり、ピンク色の石畳の道をどんどん進むと、やがてピンク色の森の向う、ピンク色の水に浮んだ、巨大なカタツムリの殻のような渦巻き型の建物が見えてきました。もちろん、それも、ぼつと透けるピンク色をしているのです。

女王陛下の宮殿でした。

ケンとロイドと女の子たちは小犬のようにじゃれあいながら、今、ピンク色のお仕着せの番兵さんたちに敬礼されて、ピンクの絨緞を敷き詰めた廊下に入って行くところです。遅れてなるものか、とアナは足を早めました。ひよつとしたら、入れてくれないかもしれないと緊張しましたけれど、大丈夫の問題ありませんでした。

「こんにちわ」

「ようこそ」

「ようこそ」

「お待ちしておりました」

ピンク色の回廊にいつぱいに並んだピンクの服の女官たちが、順番に首を傾げてお辞儀をします。まるでマス・ゲーム、波頭が崩れるような優雅な動きでしたが、アナは強情にまっすぐ前をにらんだままスタスタと進みました。油断大敵。注意一秒けが一生。張り詰めてます。神経を研ぎ澄ましています。

それにしても変です。

かなり本気で早歩きしているのに、ケンたちはあんなにふざけあっていてけして急いでいないように見えるのに、なかなか追いつくことができません。廊下を曲るたび、部屋をくぐるたびに、次の角に消えてゆく後姿がちらちら見えるだけ。思い切ってダッシュをしてみても、なぜかまるで距離が縮まらないのです。なんだか化かかされているみたいです。からかわれているみたいです。

よつぽど、声をかけて待つてもらおうかとも思います。でもそれは、悔しい。それに、実は、怖くもある。

黒く染った胸がきしみます。いやな予感を囁くのです。男の子たちはほんとうにアナのことなんか見捨ててしまったのでしょうか。ひよつとしたら、呼んでも、呼んでも、ふりむいてもらえないかもしれない。例えば追いつがって肩をつかんで、しっかりと見つめ合っても、

「きみ、だれ？」

「なんか、よう？」

言われてしまいそうな予感がするのです。

その時、ケンの瞳は、ロイドの瞳は、きつともうあの透き通ったブルーや思慮深いとび色ではなく、甘く濁ったピンク色をしているのではないのでしょうか……？

おののく唇をギョツと噛んで、アナはまたスピードをあげました。

そうしてひとときわ立派な扉を潜ると、そこが終点でした。

薄紅梅の絨緞がどこまでもどこまでも続いた先に、桃色真珠の玉座。そこに、ひとときわあでやかな薔薇色ドレスをまとい、つややかなストロベリー・ブ Rond を床まで垂らした美しい女性が、珊瑚樹の錫杖のようなものを手に、威風堂々座っています。こんな遠くからでも圧倒されてしまいます。その気品、その威厳、その華麗。

クイーン・マリーです………!

「いらつしゃい、こちらへ」

静かな声なのに、響き渡ります。

思わず息を飲んで立ち止まってしまっていたアナは、震えながらつかえながら、長い絨緞の上をなんとかかんとか転ばずに進みました。両側に並んだ兵士たちが突き出している長槍の飾り紐は、ピンクというよりはもうほとんどワイン・レッドで、まるで今さつき何かを刺し殺したばかりのように恐ろしく見えました。

玉座の下の短い階段の手前に、ケンとロイドが中世の騎士のように片膝をたてて畏まっています。あの女の子たちは、玉座の左右に別れ、両手を組合せて控えています。

アナは眼を伏せたまま、隅のほうにひざまずき、深く頭を垂れました。悔しいけれど、いやけど、自然とそうせざるにいられます。例えば許されもしないうちに、正面きつて女王の顔を見上げたりしたら、首を刎ねられないとも限らないではありませんか。

すると、兵士たちが槍を上げて整列しなおす、ザツザツ、という音が聞こえました。

「おかえりなさい、こどもたち」

乾いた大地に降る雨のように、女王の声があたりに沁みこみ、吸いこまれて行きます。「かまいませんよ、顔をおあげなさい」

アナは眼をあげ、そのひとをにらもうとしました。

……できませんでした。

そばで見ると、女王さまは、ちつとも恐ろしくありません。穏やかなそのお顔は、少しも威圧的でも権力的でもなく、整いすぎて冷たいわけでもありません。愛らしさや無邪気さ、瑞々しさにあふれておられます。アナなんかよりは絶対に偉いかたです。身分も年齢も経験も財産も力も魔法も何もかも、だんぜん上のレベルのかたであるはずです。なのに、守ってあげたくなるような、抱きしめてかばってあげたくなるような、不思議な雰囲気を持っている。戦う前に、こっちから負けましたと言ってしまったいたくなるようなかたなのでした。

これもクイーン魔法のうちなのでしょうか？

こんなちつぽけな女の子ごときが、例えばどんなに強がつて抵抗したって、きつとふうわりかわし、ピンク色のコットン・キャンディにすっぽりくるみこむようにして、なだめてしまふのではないでしようか。

「どうかみんな、くつろいでちょうだい。ここは誰もが帰ってくる場所、無意識の底にいつも留めている永遠の時。わたくしは、あなたがたすべてのこどもたちの母、クイーン・マリィなのですから」

女王さまは順々に三人を見つめ、花のつぼみがほころぶように、いつそう大きく微笑ま

ました。

「わたくしは知っています。あなたがたはわたくしが頼んだ仕事を既に半分以上果たされました。苦しい旅をしましたね。何度も、もう、ダメかと思いましたがね。でも、こうして無事に、みんな揃って、元気な姿を見せてくれた。とても嬉しい。とても感謝しています。さあ、あちらへいらつしやいな。ゆつくり休んで、たんとご馳走をめしあがれ」

「……待ってください……！」

気がついた時には、立ち上がっていました。声をあげてしまっていました。

いけないいけないと思いつながら、アナは、もう我慢できなかつたのです。胸の奥の黒いものがふくれてふくれて、とうとう破裂してしまつたのでした。

「お話の途中割りこむ失礼を、どうかお許しください。あたしだって、お眼にかかれてとても光栄です。でも、あたし、わかりません。あたし、不安なんです！」

宮殿じゅうの眼が全部自分に、ただ自分のからだだけに、注がれている感じがします。ケンもロイドも、他のみんなと同じようにまん丸い眼を向けているようです。なんてひとりぼっちで、なんて絶望的でしょう。

けれどもアナは、勇気を出して、昂然と頭をかかげ、両足を踏んばって、まっすぐにクイン・マリーを見つめたまま、はきはきと続けました。

「だって女王さま、ここはあんまり平和すぎます。どこもかしこも甘いピンク色で、夢みたい。うっとりしてしまうほど素敵ですよ。ここにおられるみなさんは、とても幸福そうで

す。世界じゅうの混乱も、まるで関係がないみたいです。ほんとに羨ましいうらやい。でも、あたしたちは見ました。侵略者たちの円盤の大群が、都市のほうに向って飛んで行くのを！ あたしたちは知っています。ポヤポヤしてたら、地球がまるごと滅ほろびてしまうことを！ だからあたし、だから……」

女王さまはぴくりとも動きません。少々の皮肉ではこたえないみたいです。アナは声のトーンをいっそう張り上げました。

「この平和を信じたいです。いっしょに楽しみたいです。でも、できません！ だって、地球には、あたしたちの世界には、今も苦しんでいるひとたちがおおぜいいるんだもの。あなはあたしたちの味方なんじゃあないんですか。地球を救うためにお力を貸してください。あなじゃあないんですか。なのに、どうして？ 聞かせてください、なぜ呼んだけたんですか？ なぜ今、あたしたち、ここにこなきゃならなかったんですか？ そんなヒマないのに、もう間に合わなくなっちゃうかもしれないのに……あたしは、あたしは……ああ、一刻も早くおかあさんを助けたいのに……！」

のどが詰って、話し続けられなくなつて、アナがことばを切ると、恐ろしいほどの静けさが宮殿を支配しました。それは、ずいぶん長いこと続きました。女官たちも、兵士たちも、何十人もいるのに、誰ひとり身動きひとつしなないのです。

……ああ、もうダメだ。

きつと、命令される。

アナは思いました。

こともあろうに、クイーン・マリーに楯突いて逆らうナマイきな娘を、つまみだすように、ひどい目にあわせるように、ひよつとしたら、殺してしまおうようにと！ 女王陛下が指を一本動かしてなにげなく命じるのを、みんな、じつと待っているんでしようよ。

どうぞ。やってちょうだい。

眼のあたりが熱いけど、アナはこのぐらいでは、もう泣いたりしません。今さらペコペコ謝ったりするくらいなら、あんなこと言いはしません。

さつさと命令するがいいわ！

それでも、あたしは、あんたの思い通りになんかさせないから……！！

「……アナ！」

気がつくと、すぐ隣となりにケンが立っています。ロイドもいます。

大丈夫か？

しつかりしろ。ほくらがついているよ。

そう言ってくれるように、やさしく笑ってうなずきながら。

どちらもう、変ではありません。いっしょに戦い、傷つき、旅をしてきた仲間の眼をしています。

あの不思議なピンク色の霧もやの影響から、女王の謎なぞの魔法から、やっときっぱり抜けだしてくれたのです！

安心して、安堵あんどして、張り詰めていた気分が緩ゆるんで、思わずぐらりと揺れてしまったアナの肩を、すぐさまケンが支えてくれます。ロイドもサツと回って、反対側に立ちました。もしまわりじゅうが飛びかかって来ても、なんとしてもアナを守ってくれるつもりでいるかのように。

やつと三人が並びます。揃います。横一列に並んで立てば、信じ合うもの同士の頼もしいチームワークが蘇よみがえります。

そうして今、六つの瞳がそれぞれまっすぐに一心に、クイーン・マリーを見つめました。アナの発した質問の答えを、じっと待ったのです。

クイーン・マリーは、しばらくの間、小さなおとがいの下で指を組んで何か考えこんでいるようにしたけれども、やがて、どこか儂はかなげな寂さびしげな微笑みを浮かべて唇を開きました。

「……そうね……確かに、もうそんなにのんびりしてはいられないのよね」

それにしても拍子抜けするほどのんびりした、女王の口調です。

「来てもらったのはね、他でもないの。贈りものをしたかったからなのです。みなさんの顔を、よく見たかったからなんですよ。悪気なんか、なかったんですけどね」

「顔を？」

「どうして？」

ロイドが、ケンが、鋭く尋たずねます。女王はくすくす笑い、笑いながら、ため息をつきました。

「ええ、そうね。それは、まあ、言ってみれば、わたくしのわがままなんでしょうね。でも、申しましたでしょう。わたくしはあなたがたのおかあさんなの。地球にいらっしやるあなたがたひとりひとりのおかあさんと、同じなのよ。そのすべてのおかあさんたちを合体させたようなものでも言えばわかってもらえるかしら？ 母が子どもたちを恋しがるのは、あたりまえでしょう？ 愛して、可愛がって、尽くしてあげたがるのは当然でしょう。いたわって、甘やかして、偉そうなふりをしたいのは、無理もないと思わない？ そうして……やれやれ、どんなにこつちが心をこめようとしても、必ず迷惑がられてしまうものなのよねえ」

「……………」

「ええ、いいの、いいの。それでいいのよ」

女王は自棄つばちみたいに手を振りました。

「誰でもおとなになれば、わたくしの元を巢立たなければ。母親の気持ちなんて、所詮（しょせん）もたちにはわからないもの。そういう定めなんですものねえ。だいたい、そんなものがナマジわかってしまったら、誰ひとり冒険（ぼうけん）になんかでかけられない。世界が滞（とど）って腐（く）ってしまうんですからねえ」

ことばを切ると、女王は、傍（かたわ）らの女官になにごとか合図をしました。女官は心得顔に奥（おく）ひっこみます。

「……………それにしても、とても残念よ。あなたがたに、たつくさん美味（おい）しいもの用意してたのに」

ケンのお腹が、グウツと鳴ってしまいます。

「気持ちのいいベッドと、あったかいお風呂も準備してたのに」

ロイドののどボトケが、ゴクンとします。

「うーんと甘えて、休養してもらいたかったんだけど。どんな立派な戦士にも、憩いは必要だと思っただけだね。……アナ、ごめんさい。あなたは間違っていないわ。わたくしの臆病にみなさんを巻きこむ権利なんかないの。あなたがたはわたくしが思っていたより、ずっと早く、ずっとたくましくなっていたのね。もう、ひとり歩いて行ける。わたくしの膝であやすことができるような幼いこどもたちじゃあない。でも……どうか、お願い。母の心尽くしのプレゼントくらいは、黙って受け取って欲しい」

何やら大きなお盆をささげて、女官が戻って来ました。

「ケン、来て」

玉座の上に、ケンが立ちます。

「あなたには、これが必要だと思おうわ」

女王さまが差し出したのは新しい帽子です。ほんのちよつとだけピンクがかっているけれど、ケンによく似合う真っ赤な野球帽。進み出たケンの頭に、女王さまが自らかぶせてあげます。まるで戴冠式のように。

「これは力と勇気のあかし。この帽子をかぶっていれば、正しいところを持つものは迷わずあなたに従うでしょう」

「ありがとう、クイーン・マリイ」

ケンは少し頬を緊張させながら、格式ばったお辞儀をしました。
「なくさないように気をつけます」

寂しそうにうなずくと、クイーン・マリイは、さっさと次の品を手にします。

「ロイド」

「は、はいっ！」

「眼鏡を取って」

「え？」

「こちらをかけて。だいじょうぶ、ちゃんと合います」

新しい眼鏡です。丸つばい縁はほんのちよつとピンクがかつた銀色です。何故かそんなに厚くありません。ロイドはしばらくばちばち瞬きをしていましたが、きりりとあげた顔つきは、なんだか急におとなつぽくなっています。賢さがパワー・アップした感じですが、

「これは叡知と忍耐のしるし。この眼鏡をかけていれば、どんな苦しい時にもきつとよい考えが浮び、あなたと仲間たちとを救います」

「似合う？」

振り向いたロイドに、ケンとアナが揃つてオーケー・サインを出しました。ロイドはニカッと照れ笑いをして、もう一度女王に向き直り、うやうやしく腰を折りました。

「身にあまる光栄です、女王陛下。慎んで頂戴します」

ロイドがさがります。

そうして、とうとう、アナの番になりました。

招かれるまま、おそろおそろ、階段を登ります。女王の美しい指がさしあげたものは、キラキラと輝く首飾りでした。

「これは、愛と真実のしるし、わたくし自身がかつて身につけていた大切なもの」

大きなハート型のルビーがアナの胸で星になりました。

それで、どんな役にたつのですか？

ほかのふたりの時のようにはことばを続けてくれないので、思わず問いかけるように見上げたアナの瞳を見つめながら、女王は急にいやに真面目な表情になって、こころの声で語りました。

「忘れないでアナ、すべての鍵は愛、最後の武器は希望です。そうして、少年たちを惑いから覚まさせ、ほんものの男にすることができるのは、ただ女だけ、心の底から彼らを愛する娘だけなのです。賢さとやさしさと純潔な魂のすべてを賭けて戦いなさい。少年たちのために、世界のために、そして、自分のために……！」

からだじゅうが冷たくなります。首飾りがズンと重く胸を潰します。

「そんな大変なものはいただけません。持っていられません。とても責任が取れません……！」

震えるアナに、クィーン・マリーは厳しい顔で首を振りしました。

「甘ったれるんじゃないわ！ さっきの勇氣はどこへ行ったの。よろしいですか、あなたとわたくしはある意味では、きっぱり敵なのです。そうしてその上、ある意味では、まったく同じものでもあるのです。ですから、わたくしがもう一度この手にそれを奪い返そうとする前に、さあ、さっさとお行きなさい……」

女王は、玉座から立ち上がり、高らかに叫びました。

「戦場へ！」

たちまちごうつと風が吹き荒れます。すべてのピンクが溶けて混ざって、渦巻き状に収束しはじめます。

「うわあああ」

「ひえっ」

「きゃあああっ！」

三人のからだは宙に舞いあげられ、ぐるぐる回され、ピンク色の台風の目の中心へ吸い込まれて行きました……。

「……だれ？」

「おとなよ」

「おとなってほどじゃないよ」

「どこのひと？」

「知らない」

「知らない」

つぶやく声がざわざわと、静かに寄せては引いて行きます。渚なみさきに落ちた貝殻かいがらになつて、波が来るたびに水をかぶつてゐるような気持ちです。

「死んでる？」

「死んでるかな」

「動かないよ」

「息してる？」

「わかんない」

「つついてごらんよ」

ウーン、うるさいな。ほうつておいてよ。

アナは小さくイヤイヤをしました。

「あ、動いた！」

「動いたよっ」

「眼が開く」

「起きる」

「……ええっ?!」

あんまり急に身を起こしたので、目玉の奥がくらくらしました。くらくらしながらも見た

のは、朝露に濡れた森と、半端に曇った空、ぼんやりした太陽、そして、「ヒッ!」という顔で凍りついているこどもたち。アナやケンやロイドよりもずっと幼い、小学校にもまだ上がっていないかもしれない年頃のこどもたちばかり、数人です。

「……あ……あなたたち、誰っ? ここは、どこ?」

こどもたちは幼い顔をうろろうろと見合せました。何人かがじりじり下がります。残った子も次々にダメダメと手を振ります。もじやもじやした赤毛がとんでもなくからまってしまった鼻ペチャ顔の女の子が、前面に押しだされるようなかっこうになって、ウンザリと（そんな小さな子にはずいぶん慣れた感じに）ため息をつき、ツンと顎をそらして、とびきりオシヤマな声で言いました。

「いーすたー、よ」

「いーすたー?」

それじゃあ、おかあさんが行方不明になった場所ではありませんか!

「戦場へ」なんて言いながら、あの気まぐれクイーン・マリーは、ちゃあんとアナの望む場所を知っていて、魔法の力で運んでおいてくれたのでした。

「じゃ、教会のおばさんを知ってる?」

思わず迫ってしまいます。その剣幕にビクツと震えた赤毛の子のちいさな腕を逃さないようにしっぴかり握って、鼻と鼻がくっつくほど顔を寄せて。

「知ってるわね? スノーマンから来た、色のうんと白いひと。背の高いひと。あなたたち

にお菓子やお洋服を持って来たはずよ。見たでしょ？ 知ってるでしょ？ 知ってるわね?!」

「う……」

赤毛の子の、もともと整っているとはいいがたい顔が、ゆがんで、ゆがんで、鬼瓦おにがわらみたいになつたかと思うと、

「うわあああああんっ!!」

思い切り泣きだしてしまいました。

「あ……ごめん、ごめんなさい! ごめんなさい!」

「わあああああつ、ぐつ、ぐつ、ぐあああああゝんっ!!」

いくら今さら抱きしめてやっても、赤毛の子は泣きやみません。どんどんひどく泣きだすばかりです。つられて、あつちでもこつちでもこどもがグズりはじめました。男の子も女の子もヒックヒック鼻をすすり、肩を震わせています。びっくりしたような顔のまま大粒の涙だけ、ぼろぼろこぼしはじめてしまった子さえいます。

「ごめんつたらっ! 悪かつたわ、おどかすつもりなんかなかつたの。だから、ねえ、ちょっとつたら。わあん、どうしよう。みんな、お願いだから泣き止んで、泣き止んでつたら、もうっ! 静かにして!!」

「なあにやっつんだあ?」

くさむらを分けて、片方の足をひきずりながらヨロヨロやっつて来たのはケンです。途方とほうにくれたアナに『やれやれ』と首をふるると、こどもたちに向きなおります。それから、急に歯

茎まで剣きだしにしてニカア〜と笑い、ドラ声で歌いながら踊りだしました。

呑気な三人組 ニールにマイクにエド

月世界旅行初体験 こいつあ滅法ツキがいいぜ

ほんとはこっそり思ってる

着陸一号なんかより 生還一号のほうがいい

はありたいへん たいへん たいへんだ

宇宙飛行士も楽じゃない

アポロ・イレブン いい気分

正しいメロディ・ラインを想像することもできないほどの、ひどい音痴です。大袈裟に振り回す腕も脚もヘタクソもいいとこ、おまけにさかんに腰を振ってクネクネ回ったりもします。下品だったらありません。

アナはすっかり呆れてしまいました。

なんとということでしょう。こどもたちはみんな次々に泣きやみ、瞳をキラキラ輝かせて、一心にケンの歌と踊りにいれこんでいるではありませんか！

陽気な三人組 ニールにマイクにエド

地球を離れて幾千里 いくせんり そろそろお家が恋しいが

仲間に隠れて泣こうにも

コレクト・コールをしようにも 月光 月光 (内職) 頼りにできやしない

はあく たいへん たいへん たいへんだ

宇宙飛行士も楽じゃない

アポロ・イレブン いい気分

三度めの「はあく たいへん たいへん」には、お調子者の何人かは、思わず可愛い声をはりあげていっしょに歌ってしまいました。誰かがブリキのバケツをみつけて来て叩きだし たた ました。そこらの草を千切って笛にして、器用にピイッと鳴らす子もいます。ケンはおどけた顔で驚いて おどろ みせておいて、ニコニコ招きます、全員を抱きしめようとするかのように、めいっばいに腕を うで 広げて。こどもたちがワアッと駆けてゆきます、集ります。みんな、あのとんでもない腰振りをなんとか早くマスターしようと、真剣な顔つきで踊りだすのです。

たいへん たいへん たいへんだ

たいへん たいへん たいへんだ……

超ロングのリフレインです。ケンを真ん中にして輪になって、みんなでぐるぐる回ります。

虎とらだったらバターになっちゃやうかもしれないような、すごい勢いです。目が回ったのでしよ
うか、バツタリ転んでしまふ子もいます。でも、すぐに自分で齒を食いしばって立ちあがり、
ひよこひよこ踊り続けるのです。

もう誰ひとり泣いてません。よだれも鼻水も全開にしてギヤアギヤアけたたましい声をあ
げていた子も、ひつくひつく震えるばかりだった暗い子も、みそつ齒がみんなのぞけるほ
ど大声をあげ、ぼろぼろになったばんつを剥きだしにする激しいアクションで「たいへん
たいへん たいへんだ！」をやつて、我を忘れて踊ります。

アナはぺたんと草の上に座りすわこんだまま、この奇妙な真昼の盆踊りボン・ダンスを見つめ続けていまし
た。入つていきたい気もするけれど、すくんでしまつてできません。あんなバカな真似まねを嬉
しそうにやつてみせることができるほど、柔軟ではありません。

すると、あの赤毛の子が、ふとこちらを見ました。アナと眼めが合うと、ははあんと両手を
腰にあてて立ち止まります。輪は、じゃまな彼女の背中にぶつかりながら、ゆがんだ形で回
ります。「おねえさんつたら、だめね！」首を振ります。あくまでとつてもナマイキなので
す。アナが思わず顔をそむけようとする、肩をいからせてスタスタこつちにやつて来ます。
抵抗するアナの手を取つて、ほら！ と引つ張ります。

そうして、とうとう、アナも輪に入つてしまつたのでした。最初は恥かしくて、手も足も
ギクシャク、ちゃんと踊れません。腰なんか全然振れません。声も出せません。でもどんど
ん回つてどんどん疲つかれてどんどん頭がぼうつとしてくると、なんだかパアツと気持ち明る

くなつて来ます。心配ごと迷つたことも、自分は結局はダメな女の子なんじゃないかと言
ういじけた拗ねた気持ちも、みんなどこかに消えて、からだじゅうが伸び伸びほぐれるので
す。解放感です。

長い長い踊りでした。すっかり汗をかきました。みんな芯までくたびれて、バタンと草の
上に倒れます。寝転びます。

はあはあ弾むアナの胸に、あのクイーンのルビーがきらめきました。ドキッとなりました。
あんなにはしゃいだりして。バカみたい。落としてしまつたら大変だったのに。あたしっ
たら……!

急にカアツと頬が熱くなりました。恥かしさが戻ってきました。なんだかやたらと虚しい
ことをしてしまつたような気がしました。

眉を曇らせてそつとルビーを押えたアナの肩の上に、ふと、あたたかなものが静かに重な
りました。

見ると、ケンがすぐ隣に寝転んでいます。ブルーの瞳が、からかうように笑っています。

「アナはこどもは苦手なのか？」

「……そ、そんなこともないけど」

教会に来るこどもたちは、みんなおとなしくてきちんと礼儀正しくしています。ちよつと
くらい驚いても、いきなり泣きだしたりはしません。おねえさんの言うことは、みんなよく
きいてくれるのです。信心深いこどもたちなのですから。

でも。

こんなの、女の子らしくないって思われちゃったかな。怒鳴ったりして、泣かせちゃって。そのあとだつて、ケンが来てくれなかったらどうなったことか。

……ごめんね？……

沈んだアナをなぐさめるように、ケンはパタパタ肩を叩きます。赤ん坊をあやすようなりズムです。

「俺も、前は得意じゃなかったんだ。うち、ふたごの妹がいてさ。うるせーんだ、これが。『おにいちゃん』『おにいちゃん』『おにいちゃん』『おにいちゃん』ステレオでわめくんだぜえ。気が狂うつーの。んで、しょっちゅうヒステリー起こして、ついでにゼンソクも起こして、母親なんかにきつぱりケーベツの視線送られてただけどさあ。去年の夏、ユニフォーム買ったくつてバイトして。シッターやってね。少年野球チームでも、だんだん先輩せんぱいつばくなつて来るじゃん。いるんだ、ハナタレが。どーしよーもないのが、中にはな。そーゆーのの面倒をしようがなく見てるうちに、なんか知らんが、けっこう平気になつちまつた」

「……そうなの……」

「ああ」

ケンは身を起こして、草の上を見て回ります。

疲れ果てて、緊張がとけて、あどけない顔でスウスウ眠ってしまったこどもたちを、ひとりひとり見て回ります。

「要は慣れとテクニックなのよ。ガキンちよどもがパニックして收拾つかなくなった時は、あれに限る。静かにしろっていくら怒鳴ったって、絶対静かにしねえ。でも、おもつきりわけわからない気分になるようなコトを夢中でやって見せると、びっくりして、それから、つい、つられちまうんだ。なにせ単純なんだ。こどもってな」

「ま、だいたいはね」

大の字になつて寝ころんでいた赤毛の子が、いきなりパチリと眼を開いたのでした。

「やあ、起きてたんだ」

「ふん。あたしなんか、年の割にはずいぶん長く生きちゃったって言うか、けっこうシツカリしちゃったほうだと思つてただけど」

もつれた巻毛をバサバサ振つて草っ葉を振りはらうと、彼女はほとんどセクシーと言つていいほどの仕草で肩をすくめました。

「まだまだね。どうもシヨックには弱いわ」

「立派なもんだよ」

「ふふん」

ほほ完璧な流し眼をすると、赤毛の子はケンに手を差し出しました。

「ハロー。あたしはエイミー。みなしごよ」

「それでしつかりしちやつたつてか」

苦笑まじりに握手をしながら、ケンはうなずきました。

「俺はケン。彼女はアナ」

「ハニー、ハニー。さつきはごめんね？」

「は……ハニー」

ひらひら指を振りながら、アナの口許くちもとはついこわばってしまいました。そう言わなきゃならないのはこつちなはずなのに。まったく、なんてこまっしやくれた女の子でしょう。

「お尋ねの件だけど、なにしろ複雑でねえ」

両足を投げだして腕組みをして、エイミーは「やれやれ」と首を振ります。

「ひとことじゃとつても説明できないつてのに。あんたが焦あせらせるからさ。まいったわ。みつともないつたらありやしない。……ふうつ。まあ、いいわ。いつまでもこうしてたつてなんだわね。ねえ、おにいさんたち、ちよいといつしよに来てくんない？ お茶くらい、出すわよ」

「うん。……だけど」

ケンは腰をあげながら、あたりを見回します。

「実は、もうひとり、いるはずなんだ」

「知ってる。眼鏡の彼でしょ。大丈夫、保護してあるわ」

「保護……？」

「公園の桜の木の途中にひっかかってさ。下ろすの大変だったんだからね。おまけに毛虫に刺されちゃって、こーんな顔になっちゃったから、今、ノエルが治療ちりょうしてるはずよ。あの

子にまかせとけば安心。保証する」

ふんつ、と立ち上がってばんつのお尻をばん叩くと、エイミーは胸を張り、短すぎるスカートすかーとの裾すそを優雅ゆうがにつまみあげて、ニッコリ笑いました。

「遅ればせながら……イースターによるこそ！」

「おとなたちが消えたのに気がついたのは、寒い寒い朝だったわ」

エイミーが語ります。

「あたしたちは……あたしたちつてのは、我がタンポポ女子孤児院こじいんのこどもたちつてことだけど……最初はちつとも気がつかなかったの。なにしろウチには四十人からの孤児こじに対しておとなはミス・ハニガンつて院長ひとりつきやいないでしょ。おまけに彼女はアル中のシンデレラ・コンプレックス患者、毎晩夜中まで悶々もんもんとしてるもんだから、朝はとつても遅いのよ。あたしら、ベッド・メイクもお炊事すいじも、自分たちでやるのあたりまえなんでね、その日もずつと何にも知らずにいつも通り過ごしてたの。……でも、窓から外をのぞいても新聞売りのオジサンがいないし、いつもキャンディをくれるやさしいお巡りまわさんさんも通りがからない。お店というお店の様子がおかしい。そこで、ジュリアとパンジーが偵察ていさつに出たら、まあ、驚いたわ。大異変よ。町じゅうが孤児院になつちゃう日が来るなんて誰だれが予想したつて言うのよねえ」

もとから巨大なカフェ・オ・レ・カップです。エイミーの手の中にあると、まるでSFX

の小道具みたいに見えます。

「……それから、あたしたちはがんばった。普通の子たちに、孤児として生きてくノウ・ハウを徹底的に叩きこんであげたわ。でも、他の町に親戚がいる子は地域別にグループ編成して、とつと送り出したの。なにしろ集団生活ってけっこう大変なんですね、むかない子がひとりでもいると規律が乱れてしまうがたいし。自分のことは自分でやるって基本さえ、マスターできないバカもいないじゃないし。この時とばかりにボスになりたがる、何か勘違いしてる奴らもけっこういたしねえ……」

「どうしたんだ、そいつら？」

口を挟んだケンの眼の前に、シュッ！ と小さな拳骨が飛び出しました。

「これよ」

エイミーは横目で不敵に笑います。

「あたしの右パンチは必殺なの」

「なるほど」

「……で、おとなたちがどうなったかって話だけど……」

「ど、どうなったの？」

乗り出すアナに、エイミーは気の毒そうに首を振ってみせました。

「わからない。実のところ、まるでわからないんだわ。ニッポンからカイガイフニンで来た子が『サキョー・コマツ』だかってひとの『オメシ』って短編がこんな話だつて言うんで

翻訳してもらって読んでみたけども……ニッポンジンの考えることって結局は全部『ゼン』とか『ミツキョー』なんじゃない？ さっぱりわかんないってことだけが、確実にわかった」

「……………」

「ごめん。力になれなくて」
アナが肩をすぼめると、エイミーは小さな手を伸して、カップに置いたままのアナの手にさわりました。

「でも、くじけちゃだめよ、アナ。あたしだって……このあたしだって、ずっと信じてるの。いつの日かパパとママがあたしを迎えに来てくれる。ただ、今はいろいろと事情があつて離れているだけなんだって。一日が過ぎて何にもなく終る時、いつも思うの。それでもとにかく、その素晴らしい日にまた一日分だけ近付いてることだけは確かだって。だからガツカリすることなんかないって。そうよ、明日はきつといいことがあるわ！」

「……………エイミー……………」
アナがせわしなく瞬きをしながら見つめると、エイミーの眼だつてやっぱり潤んでいるのでした。ふたりの瞳がからまります。まったくどつちがおねえさんなんだか、わかったもんじゃありませんけど。

頭を掻きながらそつと椅子をずらしたケンが、ギョツとしたように動きを止めました。

「ゆ……………UFO……………?!」

アナは急いで顔をあげました。何ともへんちくりんな物体が見えました。あわてて眼を擦りました。見間違ひではありません。籐で編んだ籠がひとつ、支えもないのに空中に浮んでいます。ぶかぶか揺れながら、部屋を横切つてこつちに漂つて来ます。確かに未確認飛行物体です。ただ、超ミニ・サイズで、しかもナチュラル嗜好だったりはするのですが。

「う、うわああ、なんだなんだ、なんだっつーんだ！ まさか、宇宙人ども、金属使用果たして自然に帰れ運動でもはじめたんじゃねえだろうなあっ」

ケンも同じことを考えたみたいでしたが。

「アッハハハハ」

籐籠が笑つたんです！

「それは傑作ですね。最近聞いたジョークの中で一番斬新だと思ひます」

「意地悪言つてないで、降りといで」

エイミーが乱暴に腕をしゃくると、

「おーらい」

籠がすーつと降りて来ます。ケンとアナが抱き合はんばかりにしているところにみるみるうちに近付いて、膝の上に乗りました。

「やあ。やつと逢えましたね！」

籠の中には、まるまる太った赤ちゃんがいるのです。こつちを見上げています。ぶくぶくした指を握つたり開いたりさせながら、まだ歯の生えていない唇をはぶはぶ開けて、笑つて

います。

「……あ……あなたなのね……？」

ようやくアナは気がつきました。砂漠さばくからこつち、時々アナを呼んでは、ヒントをくれたり、励ましてくれた、あの不思議な声です。あれはやつぱりほんとうに実際に、ちゃんとした赤ちゃんだったのです！

「そう、私がノエルです」

「逢いたかつたわ、ノエル！」

「こちらこそ。よしなに」

赤ちゃんと握手をするのは、なかなか気恥かしい経験でした。なにしろ、こつちがバカみたいに大きくてぶかつこうなものに思えてならないのです。ケンもおつかなびつくり、ちいさな手に指一本握られて、なんだか赤くなっています。

「クリスマス朝に、孤児院の玄関に捨てられていたから、こんな名前がついたのです。エイミーねえさんもこれでなかなか、ロマンチストでしたね」

こいつ！とエイミーは殴る真似まねをしましたが、ノエルは動じません。

「あいにくですが。さすがの必殺右パンチも私には絶対届きません」

「あーあ、どーせそーだよ」

「この子も、孤児なの？」

アナが尋ねると、エイミーはちよこんと肩かたをすくめました。

「そう言ってもいいんじゃないかとは思うんだけど。いまいち謎ではある。ま、とりあえず、うちでいっとー新しい、いっとーのチビさ。でも、いっとー役にたつ。あたしたちは、クリスマス・プレゼントに神さまが贈ってくれたんだと思ってる。感謝してんだぜ、これでも」

「存じております」
ノエルはバタバタ足を揺すぶります。

「役にたつって？」

「そう。この子は赤ん坊のくせに、いろいろと不思議なことができるんだ。怪我を治したり、ひとのこころを読んだり。さつきみたいに浮んだり、しゃべったり。うーんと遠い場所まで一瞬のうちに飛んでくことだってできるらしいよ」

「テレポーテーション！」

と、ケンが叫びます。

「じゃあ、ひよつとして、俺たちのことをホーリー・ローリー・マウンテンまで連れてけるか？」

「不可能ではありませんが」

ノエルはもぞもぞと動きました。

「ただ、ひとを連れて遠くに飛ぶとすると、相当な精神力を必要といたしますので。たいへん空腹になりますし、眠気もおおします。私の中からはこんなですからね、ミルクとペビー・フードがないと半日ともちません。それに、あなたがたは確か、もうひとつかふたつ、

何か探さなければならぬのではありませんでしたか？」

ケンとアナは顔を見合せました。

これはほんとうにほんものみたいですよ。アナよりもさらに強力なPSIなのに違いありません……！

「じゃ、じゃ、ねえ、次の歌がどこにあるかわかるの？」

「たぶん、バレンタインの町でしょう。詳しくはわかりませんが、匂いを感じます。クィーン・マリーに所属するものの独特の匂いを、かすかに」

「バレンタインですって……」

アナは悲鳴のような声を洩らしました。それは有名な不良の町です。よい子がけして行つてはいけない、麻薬と暴力と性犯罪で名高い町なのです！

思わず見上げてしまうと、ケンが、だいじょうぶ、と言うようにうなずきました。

「行つてみたい」

「わかりました。でも、少し待つてください。あなたがたのともだちの毛虫カブレを治すのに、私は実は、もう、相当に消耗いたしております。よその町まで飛んでいくような元気はありません、ふあゝゝゝああ」

まだ歯も生えていない赤ちゃんの大あくびでした。

「そうだわ、ありがとう。ロイドのこと」

「なんてことはありません。あゝゝふ。とにかく、まあ、ちよつと眠らせてください、あな

たがたも旅の支度を整えておいてくだちやい……んじやおヤスミ……むにやむにや」

「うわあっ！」

途端に、籠がズシリと重たくなつたのでした。ケンも満身の力をこめて、やっとそれを床に下ろしました。

「こうなつたら四・五時間は起きないから、焦つてもムダだよ」

エイミーがウフフツと笑いました。

「ま、ゆつくりのんびり、お風呂にでも浸かつてみたらどうかかな。はつきり言つてあんたたちに所属するものもかすかに匂つてるわ。それつてバラの匂いとは、ちよーつと違ふみたい。ウヒヒヒヒ」

「……悪かつたわね」

そういうあんたの髪の手毛だつて、もう少しなんとかすればいいのに。

と、アナは思います。

でも。ひよつとすると、みんなのまとめ役で必死で、そんなヒマもないのかしら。こんな小さな子なのに、うんとがんびりやさんだから。

梳かしてあげようかな。こんなにしつちやかめつちやかにならないように、編んであげたい。キッチンと三つ編みにしたら、この子つてけつこうファニー。独特な可愛らしさがあるものね。

やつと少しおねえさんらしいところが見せられそうな気がして、アナはちよつぱり、嬉し

くなりました。

「着替えは心配いらぬ。おとなの服とか鞆かばんとかいくらでも余ってるから、じゃんじゃん遠慮なく使つて。そうして……必ず、勝つてちょうだいよ！」

「うん」

「ありがとう！」

こどもたちしかいない町は、苦勞ばかりだった旅路たびじの中で、一番居心地のいい場所になり
そうでした。

6 不良の町バレンタイン

紙屑、缶から、割れた瓶。破れたシャツのきれっ端に、引き巻かれたチェーン。アスファルトには油染み、毒々しい看板、コンクリートのひびわれ。

壊れた栓からじよぶじよぶ音をたてて洩れている水が欠けたマンホールを迂回して舗道の石の隙間に吸い込まれて行きます。デコボコになったポストの下などにはちよつと詳しく形容することのできないゾル状物体があつて、視覚・嗅覚の両面からその存在を激しく主張してもいます。

ありとあらゆる種類のゴミが吹き寄せられ放置され集積した町。ダウン・タウン。ここは最果て、バレンタインです。

何もかも捨てられているみたいです。いい加減に放り出された感じがします。ここに残るすべてのものは誰かの足跡、ひとの名残り。自然のままのものなんて、ほんのかけらも見当らないのです。

整理整頓とか身だしなみとか公德心とかが徹底的に不得手なひとびとを百人ほども連れてきて、一週間ほどとじこめ、らんちき騒ぎをさせておいて突然解散させたなら、このくらい

になるでしょうか。

でも、今、ここにはまったくひとかげがありません。透明な光の中で、町は、しいんと息をひそめていました。

……おや。

アナは、汚れたピアノの毛ばたきが転がって来たのかと思いましたが、どうもガリガリに瘦せこけた野良犬だったようです。犬は、道端にうなだれて、落としたまんまの形で溶けたアイスクリーム・コーンを物悲しい顔つきで長いこと舐め続けましたが、ふともつと素敵なご馳走を発見し、つい一往復半だけ尻尾を振って、勢いをつけて駆けてゆきました。向う側の路地の陰で、ぐしゃりと潰れている赤白ストライプの箱は、どこかのジャンク・フード・ショップのテイク・アウト・ボックスだったのです。

アナは、ほうつと息をつきました。

「『ノアの方舟』級の大掃除が必要ね」

ロイドもケンもうなずきます。

四人は（籐籠のノエルを加えて、です）、バレンタイン大通りの端つこのほうに、ほんやり立ち尽くしていたのでした（あ、ただしノエルはご存じの通り、浮んでいたわけです。やれやれ、まったくややこしいですね）。

アナにとって「ほんものの繁華街」は、ほんの五分前までは、空想の中にしかありませんでした。有名な不良の町・悪い子のメッカは、とても不潔で恐ろしいに違いないとは思って

いきましたが、もう少しにぎやかで華やかな感じではあるはずでした。頹廢的で享樂的で、猥雑で傲慢で無責任で、でもそういうのを好きである愚かで幼稚で不幸なひとにとつては、それなりに天国みたいな場所であるのだらうと思つていたのでした。ここは、あんまり怖くはないけれど、どんな趣味の悪いひとにとつてもけして天国になど思えそうもないではありませんか。なんだか変な気持ちです。ガツカリ、と言つてしまつてもいいんでしょうか。

それはどうも、年長三人組共通の気持ちだったようです。みんなの様子を察したノエルは、言い訳をするように言いました。

「夜は、こんなにさびれてはいませんよ。あんまりひとが大勢いるところにテレポートして騒ぎを引き起こしたくなかつたものですから、わざとこんな時間を選んだのです。今のこれは所詮は舞台裏、ひとが出てくればわかる。変わる。わかる。わかる、わかる、わかる、わかる、わかるか……にやにやにや、だめだ、頭がワヤになつて来た。私はもうやすませていただきます」

「え？」

「ううくん、眠い眠い。じゃあ、あとで。オヤスミ」

「うわあ、待て待て！」

ケンが手を伸ばしながらすつとんで行きました。

籐籠はスーッと動くと、少なくともそのへん一帯では一番清潔そうな縁石の上に静かに降りて、勝手に止りました。三人がのぞきこむと、ノエルはもう、むにやむにや夢の国です。

「……しかしよく寝るなあ」

ケン は、羨ましそうに言いました。

「赤ちゃんは眠るのが仕事よ」

「困ったな。もう少し待って欲しかった。今後の方針を相談しておきたかったのに」

ロイドがしきりに首を振るので、あとのふたりは思わず眼と眼を見交わしてしまいました。いいおとな（？）がふたりもいるのに、よその赤ちゃんを頼りにするなんて。ちよつと失礼ですよ。

でも、まあ、無理もありませんけれども。

マジカントがらみで何度か似たようなものを体験してはいましたが、時間も場所も自分たちで選択して自由にレポートするなんてはじめてでした。どう選択し計画するのが正しいのか、わかっていたのはノエルだけだったわけです。三人とも、ゆうべからドギマギしてなんだかちゃん と眠れませんでした。はじめて飛行機に乗ってよその国に行くことになってる前の日みたいなのです。わくわくしながらも、心配でたまりません。大事なものをうっかり忘れていないか、無知のためにとんでもないドジを踏んでしまわないか、気分が悪くなつたらどうしようか。考えてもしようがないことが何度も何度も頭の中を回ります。かくして夢を見ているのか目覚めているのかはつきりしない、長いような短いような中途半端で苦ししい一晩が過ぎ、タンポポ孤児院の窓がしらじらと明けてゆき、さあもう出発だよと言われたのでした。

「……ほんとうに、どうしたものかな」

ロイドは引き続き困っています。

「たぶん夜になるまで待ってことなのだろうけど、まだずいぶんある。一刻も無駄にしたくないじゃないか。この余剰時間をいつたいどう過ごすのが合理的かつ建設的なんだろうか。きみらの意見は？」

「う、うーん……」

「ちなみに参考までに、今ぼくの脳に浮んでいる疑問および懸念を整理してみるとだな。まず、ひとつめ。こんなに誰も通りがからないじゃ情報を得るチャンスがないが、そこらの家を叩き起こすのは問題がありそうだ。ふたつめ。ぼくらは乳飲み児づれだ、へたに公的機関に助けを求めたりすると補導されかねないのではないだろうか。みつめ。ノエルは匂いがないとかがって言ってたそうだけど、こんな腐った町でも鼻がきくのだろうか。……つまり、まとめて言えば、目立った行動はしないにこしたことはないのだが、ここでは何をやっても目立つに決っている。かといって、何も行動しなければ何も起こらない。典型的な二律背反だ。コンフリクトだ。アンビバレンツだ。このダブル・バインド状況を打開するどのような手立てがあると言うのだろうか。ケン、アナ、何か意見は？」

ロイドはまだあのクイーンの眼鏡を使いこなせていないのではないでしょうか。ちょっと賢くなりすぎて、脳みそがオーバー・ドライブしているみたいです。ふたりには、何を言っているのかサッパリわかりません。

「……とにかく……」

恐る恐るアナが言いました。

「今のうちにちよつとそのへんを歩いてみない？　こんなとこでぼうつとしてたつてしょうがないでしょ。どこに何があるかを調べておくだけだつて、少しはものの役に立つんじゃないかしら」

「おおお！」

ロイドはよろめくほど驚愕きょうがくしました。

「これはしたり！　確かに、いったん土俵どひょうを降りなければその高さはわからないものなのだつた。テーゼとアンチテーゼにはアウフヘーベンがつきものなのだった。ほ、ぼくが愚かだった……」

「いいから、もう、行きましようつたら」

「あのさ、もしもし？」

歩きだしたアナとロイドの背中に、ケンが呼びかけました。

「これ、どーすんの？」

ノエルの籐籠を指差しています。ふたりが眉まゆを寄せて首を振ると、ケンはやれやれと肩かたを落おとしました。

「いーよいよよ、わかってるよ。ノエルは俺おれがおぶつてく！　でも籠はどうすんだつて聞いてんだよ。こんなもんごと背負うのはいくらなんだつてごめんだぜ」

「あたし、持つわ」

アナは下ろしてあつた持ち手をあげて、提げてみました。ちよつと大きすぎますけれども、似合わないこともありません。

「重くないわ。だいじょうぶ」

「なんだか赤ずきんちゃんみたいだな」

そう言えば、アナはちよつと、イースターの誰かの家から借りて来た真っ赤なフードつきのケープを着ているのでした。白兵戦にはあまりむかないかっこうですが、P S I担当なので、これで充分なのです。

あとのふたりのかっこうはと言いますとですね。

ケンはいっぱいワツペンのついた空軍のフライト・ジャケットのレプリカに、カーキ色のバックウォーム・パンツ。クイーン・マリーの野球帽の上から、白地に赤く太陽模様のハチマキをきりりと締めているのがなんとなくひょうまん剽軽です。

ロイドはチェックのマウンテン・シャツの上からブルーのダウン・パーカーそで（袖やライナーが外せるタイプです）を羽織り、ジーパンを履きました。ちなみに下着はカルバン・クラインだったりするのですが、それは本人と、それを用意してくれたエイミーとのふたりだけの秘密でした。

みんな、標高の高いホーリー・ローリー・マウンテンを基準に選んだので、ここではちよつと暑苦しい感じなのでした。

ゴミ溜めのような通りをいくつか過ぎると、広い公園がありました。どのベンチの上にも、真黒な顔のおじさんが眠っています。生気がなく、髪がぼうぼうで、着ているものがボロボロだったので、何となくおじさんに見えましたが、ほんとうはけっこう若いひとだったのかもしれない。

枯れかけた榆の木の下では、女のひとがひとりぼっちでたばこを吹かしていました。家じゅうの服を手当り次第に重ねたみたいなへんてこりんなかつこうをしていて、こどもたちと眼が合うと、猛獣みたいに唸りました。なんだか女のひとにしては低すぎる声だと思っていたら、うーんと通り過ぎてから、あのひとのどボトケがあったね、とロイドが指摘しました。三十秒考えて、アナはぶるるつと震えました。

深い藪の手前に華奢なパンプスが落ちていました。金色の、パーティー用みたいな、うーんと踵の高いオシャレな靴が片方だけ。お姫さまにだって似合いそうな立派な靴です。アナが思わず手に取ってみていると、藪の向うから、不意にクスクス笑い声が聞こえました。どうも、誰かいるみたいです。よく見れば、素裸の脚が二本も三本も動いています。バラバラ死体でないとすれば、最低三人以上が潜んでいるはずでした。何を見てしまったのかはつきりはわかりませんでしたが、アナは知らず知らずのうちに耳まで赤くなり、藪の中にそつとパンプスを押し込みました。

そんな公園にも、動物がいました。リスやハトやカラスです。ショッピング・バッグを山

のように提げたおばあさんがひとり、のんびりと動物たちに餌をやっていました。やつと、話がわかつてくれそうなのをみつけることができた！ 三人が喜んでどんどん近づいていくと、おばあさんは不意に顔をあげて、ビクッと飛び上がりました。そうして、一目散に逃げ出してしまいました。放り出されたショッピング・バッグに、餌の袋に、動物たちがわあっと群がりました。

公園を抜けると車道に出ました。車はみんな窓が真黒で、どんなひとが運転しているのか見えません。信号はいつになっても変わらず、交差点を中心に、なかなか動かない渋滞状況です。それでも長いことそんな平気でガラガラと列になって待っています。排気ガスがひどくて、ケンはとても長いことそんなところにいられません。三人はあわてて道を渡り、四角過ぎて無愛想この上ない建物がいくつも並んでいる向う側を見にいきました。

そこは棧橋でした。

ざあざあざあざあ。

波の寄せる音がします。

「……う、海なの……？」

アナは思わず駆けだしました。海に来たことはありませんでした。そりゃもちろん、どんなものなのかだいたい知ってはいたけれど、映画やテレビの中で見たことはあったけど、ほんものを見るなんてはじめてです。

こんなところで海に逢うことができるなんて、なんてラッキーなのかしら！

アナは思いましたが。

海は青くありませんでした。海は思っていたのとあまりにも違いました。

海はチャコール・グレイに曇って、のこぎりの歯のような細かい三角波をトゲトゲさせているのです。サーフ・ボードもヨットもピキニの美女も見当りません。ヤシの木も空飛ぶカモメも走り回るカニも見つけられません。海はひどく不幸そうに、不機嫌そうに見えました。手すりにつかまって足元に眼を落とすと、コンクリートとテトラポットで護岸されたあたりが洗剤の泡で白く濁っているのです。そうしてここにも、数え切れないほどのゴミが打ち寄せられているのです。だからここには、潮の香なんてまったくしないのです。

「……行こう？」

ノエルをおんぶしたままのケンが、隣に並んで低く言いました。

「あつちのほうに、スーパーマーケットがあるみたいなんだ。俺、そろそろオヤジに電話してみたし。もしかして、何か役に立つものが売ってないかどうか、行ってみるだけの価値はあるって、ロイドが」

「……うん」

手すりを離す前に、アナはもう一度だけ海を見ました。

あんまりきれいなじゃないけど、思ってたほど素敵じゃなかったけど。

でも、この水が世界じゅうの全部の海とつながっているんだと思うと、やっぱりすごいです。きつとどこかにはまだ、もっと素晴らしい海だってあるはず。昔の映画の中で陽に灼け

た若大将たちがにぎやかに楽しんでいたような、あんな海があるはず。そうして、もしもここから船出をせずとずつとずつと行けば、そこにたどりつくことができるかもしれないのです。

……またね……!

パイパイと手を振って海に別れを告げ、振り向くと、ケンとロイドが立ち止まっています。少し先の、建物の角のあたりで。

なんだろう?

急いで追いついて、アナは見ました。

港の倉庫の横つちよに、何台ものバイクが集って来ているところでした。うんとトレンディーな流線形のバイクもあれば無骨な昔風のバイクもありましたが、ライダーたちはみんなほとんどお揃いみたいなかっこうをしていました。サングラスをかけ、首から足先まで全部つながった皮の服を着ているのです。なんだかウナギの大安売りみたいですが、これがたぶん、あの有名な暴走族というひとたちなのでしょう。けしてお近付きになりたい集団ではありません。

「ね、早くスーパーに行きましょうよ」

アナがそつと袖を引くのにな。

「しっ!」

ケンは指をたてました。ロイドのほうに顎をしゃくりまします。

見れば、ロイドは、何とも言えないキラキラ輝く瞳をして、バイクに見入っているのです。どるるるる、どるるるる。どるるるるるるるる。

低く響くエンジンは、耳からと言うより、立っている地面ごしに足の裏から聞こえました。排気ガスのいやな匂いがじんわりと漂って来ます。アナはケンのゼンソクが心配ですが、ロイドは夢中で動きもしません。

天才少年でも、やっぱり男の子、こんなものには眼がないってわけなのね。

アナは腕組みをして、ため息をつきました。エイミーの癖が、いつの間にか伝染ってしまっています。

「……ちくしょう！」

不意に、ライダーのひとりが大声を出しました。

「このアバズレめ。なんて気まぐれなんだ！」

その劍幕に、アナは思わず身をすくめてしまいました。どこにも女のひとなんか見えません。黒い服のひとつの中に、こっそり混じっているのかとよく見ても、見当りません。

怒鳴ったのはものすごく大きくごついひとです。他のひとのと比べると相当に巨大なバイクにまたがっているのですが、まるで自転車に乗ってみせるサーカスの熊みたいに見えました。曲芸の、あれです。もじゃもじゃ顔じゆうに髭をはやし、黒いツナギの胸元からも赤茶けた胸毛があふれだしているのです。とても野性的なタイプなのです。

あの胸毛、ジッパーに挟んだりしないのかしら。

そしたら痛いだろうな、とアナは思いました。

熊のような男のひとは態度もものごしもとびきり堂々としていて、声にも威厳いげんがありました。きつと、このひとが、頭とかライダーとかいうものなのでしょう。

「カモンカモンカモン、ベイビー……なー俺が何かひどいことでもしたか？ いい加減いい子になって、機嫌なおしてくれ。頼むぜ」

どうやら「アバズレ」は、彼のバイクのこのようです。調子が悪いのです。

他のひとたちのバイクからはみんな、ちゃんと景気良く排気ガスが出ているのに、このひとの乗っているものすごく大きくて重そうな鉄かたまりの塊かたまりからは、頼りない紫色むらさきいろの煙けむりが、ぼっ・ぼっ、と出ては止り、出ては止りしているだけです。

体重制限、オーバーしているんじゃないかしら、とアナは思いました。

髭のひとは、エンジンを切ったりつけたり急に吹かしたりゆっくり吹かしたりしました。それから降りて行って、そこかしこをのぞきこみ、軽く叩いたり思い切ってコン！ と蹴けつとぼしたりしましたが、どうにもなりません。

他のライダーたちも寄って来て、かわるがわるしゃがみこんで様子をみました。みんなあれこれ試してみるのですが、バイクはちつとも直りません。しまいはとうとう、プスンとも言わなくなっていました。

「どうしたんだHEY HEY ベイビー？ バッテリーはびんびんだぜ。いつものように決めてぶっ飛ばそうぜ」

髭のひとは猫^{ねこ}なで声^{こゑ}で撫^なでたり頬^{ほお}ずりをしたりもしましたが、もちろん、バイクはすまして答えませんでした。

「ボス、ボス、ボス？　こいつあきませんぜ、ボス」
ライダーのひとりが言いました。ひよろひよろで、髪^{かみ}はパサパサで、眼^めや頬^ほになんだかともんでもないお化粧^{けしやう}をしています。熊^{くま}みたいなひとと並^{なら}ぶと、みごとなまでに対照^{たいさう}的です。
「お気の毒^{ごめんなさい}ですけど、ここがやられてまっせ」

ここ、と言う時には、自分のコメカミを差^さします。

「やられてるたあどういう了^{りよう}簡^{かん}だ」

「了^{りよう}簡^{かん}ってねえ。だからね、ボス？　ほら、こいつはホンダBLACK914の不正レプリカに、カワサキ044千211のエンジン積^{たく}んで、しかもハーレー・テクニカの違法^{へいはう}コピーソフトで走^はらしてらっしゃるでしょ。普通^{ふつう}じゃないよ。そんなんじゃ、どーしたって、電^{でん}子^し制御^{せいぎょ}系の相性^{さうせい}に無理^{むり}がでる」

「だがこいつが一等速^{いちどうそく}いんだ」

髭^{ひげ}のひとは仁王^{にぎぢう}立ちのまま、ビンビン響^{ひび}くバスでぶつぶつ言^いいました。

「俺^{おれ}はこれそっくりの単車^{たんぐる}で、何^{なん}度も何^{なん}度もカッブを取^とった」

「そらレースなら話は違^{ちが}いますわな。抜群^{ぬきぐん}のピット・クルーつきで、サーキットをたった何周^{しゅう}、とか言うんだもの。そういつた趣味^{しゆみ}のバイクは、やっぱりどうしたって、優雅^{ゆうが}なお遊び^{あそび}向け^{むけ}で……」

ドガシャーン！

いきなり、そばにあったバイクが倉庫の壁まで飛んで行きました。髭のひとが、張り手をかましたのです。両足は微動だにしていません。腕一本の力で、バイクを（そんなに大きなものではありませんが）ぶつとばしてしまつたわけです。

べらべら喋りつづけていた男は、たちまち蒼白になりました。ポスがゆつくりと近づいて来るのを見て、頭から爪先までガクガク震えだします。

「趣味、だと？」

熊のポスはじりっじりつと近づきます。

「優雅なお遊びと抜かしたな。それとも、俺には耳のかわりにアスパラガスでも生えちまつてるのか？」

「これは、バグですな」

アナは飛びあがりました。

ロイドです。ロイドが言ったのです。

なんとということでしょう。あんな乱暴そうな男たちの真ん中に、今にも喧嘩が始まりそうだと言うのに、ロイドは平気でどんだんしゃしゃり出て行くじゃありませんか！

ライダーたちはあつけに取られたように立ち尽くしています。

「あのう、試しにカレント・ディレクトリを変更してみたらどうでしょうか？ R オプシヨンを使つて、階層ディレクトリ構造で同一レベルにある別のディレクトリに移動をしますよ

ね、パス名をパラメータ%2に入力し、さらに拡張子のファイルのドライブを差し替えて、アスタリスク指定したすべてのファイルの文字列環境のデフォルト作業をバッチ処理するよ
うにすれば、取りあえずは動くんじゃないかな」

ロイドがボスの前に立ち止まると、ライダーたちが音も立てずにそろそろと動き始めました。ロイドを、そして、見つかつてしまったアナやケンやケンの背中の中のノエルさえも、見張るように、けして逃さないように、ゆっくりと大きな輪を描くように散らばり、少しずつその輪を縮めて行くのです。

「離れないで」

愛用のバットに触りながら、ケンが小声で囁きました。

「イザとなったら逃げるぞ。合図するから」

「……で、でもロイドは？」

「なんとかするんだろ。知るか」

アナはもう生きた心地がしませんが、ロイドはまるで平気みたいです。背ただけでもきつかり倍以上あるように見える、むっつりと押し黙ったボスの眼をまっすぐに見あげながら、身振り手振りを入れて、熱心に話し続けているのです。

「ちなみに、アセンブラのソース・リストのセグメント名をCとリンクするよう書き換えることもできますね。通常のファンクション・コールでは遅すぎるから、—ZEオブションを指定したいわけです。そうするとコマンド上でワイルド・カードが使えるから、バグを回避

しつづ内容はそのまま変数領域を解放し……」

「やってみろ」

低い低い地獄の底から響いてくるような声で、ボスが言いました。

「おまえ、できるんだろ？」

「え。いいんですか？」

ロイドは眼鏡がずり落ちるほどニツコリ微笑ほほえみました。

「じゃあ、いじらせてもらいますよ！」

ロイドは、腕うでまくりをしてコンクリートにどっかりとあぐらをかきました。熟練じゆくれんした手付きで、バイクの横腹のパネルを一枚だけ外します。そこには、遠目には飛行機のコクピットみたいだとしかわからない、スイッチやボタンやインジケーターやスロットやキーやジャックやその他その他がありました。眉まゆをしかめ唇くちびるを指でなぞりながらしばらく何か考えこんでいたかと思うと、ロイドはものすごい勢いでなにやらパチパチやりはじめました。

熊ボスも、アナやケンも、さりげなく退路を塞ふさいだライダーたちも、みんな無言で見守りました。重苦しい時間の中で、ただロイドだけが、せっせと働きました。時々フンフン鼻歌を口遊くちまわみながら。

パネルを閉めて立ち上がるまで、ものの五分とかかりませんでした。

「……できたのか？」

「たぶん」

ロイドは目を細めて肩をすくめず。

熊ボスはなにやらもごもご口の中で言ったかと思うと、巨体を揺らしてバイクに近付き、ため息をひとつついて、恐る恐る跨またがりました。二歩ほど下がって待っているロイドの顔をチラリと一瞥いちべつしてから、セル・スイッチをオンにします。

ぶろろろろろろろつ。

おおっ！

感動の聲が広がりました。熊ボスさえも、一瞬思わず無邪むじま気なこどものような笑顔になりかけましたが、ロイドの満足そうな微笑みに出会うと、また、むうつと顔をしかめました。

「待ってる！」

ひと声叫まじんで走りだし、たちまち倉庫の間を縫ぬって見えなくなってしまいました。

アナとケンはロイドに駆け寄ります。

「だいじょうぶなのか？」

ケンが切り込むように言いました。

「なにが？」

「あれ、ちゃんと動くようになったのか？」

ロイドは大きく口をあけて何かを言い掛け、やれやれ、と首を振って、そつと囁ささきました。

「見ただろ？ 走ってったじゃないか」

「そりゃそうだが」

「すごいね、ロイド。驚いたわ。オートバイに詳しいなんて知らなかったわ」

「うん。実はね」

眼鏡の真ん中を指でツイツと押しあげて、ロイドは言いました。

「こづかい稼かせぎに昔、電子バイクのシステム・ソフトのコピーだの改造だのを引き受けてたことがあるんだ。親父おやじがやってたのの引継ひきつぎなんだけど。口コミで持ちこまれる奴やつだけでも儲もうかるし。通信上でハッキングなんかをするよりずっとアシがつきにくい。おカミに眼をつけられちゃうと、大変だからね」

ロイドの家庭が離婚だの病気だの不幸にみまわれる理由が、なんとなくわかったような気がしてしまうアナでした。教会の女の子は、どうしたって、「罪つみと罰ばつ」ということを考えしてしまうのでした。

そうこうするうちに、熊ボスのバイクが戻もどって来ます。

バイクはさつきと同じ位置に、何の支障もなく停止しました。

「ゴージャスな走りだったぜ」

短く、言うとき、ボスは今度こそ完全にニヤリと笑いました。人食いグリズリーが笑ったら、きつとこんなだろうと思われる笑い顔でした。

「ありがとうよ、ポーズ」

「どういたしまして」

「だがな」

チツと舌を鳴らすと熊ボスはバイクを降り、どことなく巨体を恥じているかのようなテトテトした足取りでロイドのところまでやって来て、その肩にズシン！と手を置きました。

「どんな事情があるかは知らねえが、悪いこた言わん。早いとこ家に帰れ。ここはおまえらみたいな育ちのいいお子さまの来るとこじゃねえ」

言いかえそうとしたロイドを、ギロリ眼で止めます。アナとケンのことも、順番に値踏みします。ここまではまったくのコワモテでしたが。

ケンの背中 of 赤ん坊に気がつく^と熊ボスは無防備にもあんぐり口をあき、ぶくぶくした両手の指で眼をこすりました。また三人を見て、天国のほうを見て、もう一度赤ん坊を見て……眉毛を八の字にしました。

「……つたく末恐ろしい世の中になりやがったぜ……おうっ！ 野郎ども、行くぞ！」

何台ものバイクがいつせいにエンジンを吹かしたので、ケンはゴホゴホ発作^{ほっさ}を起こしてしまいました。アナがノエルを引き受け、ロイドが背中をさすってやっているうちに、暴走族たちはみんなどこかに行つてしまいました。

スーパーマーケットは、全国的に有名なチェーンのバレンタイン支店で、けっこう大きな店でした。でも広い広い駐車場がまるでからっぽだったので予想した通り、さっぱりお客が入っていません。

電話をかけてみると言うケンを残して、アナとロイドは売場に入つて行きました。買物カ

ートを借りて、前のほうの高くなった部分にまだ寝ぼけ眼まなこのノエルを座まらせました。ロイドが押します。

「そうだわ。ベビー・フード買わなきゃね」

「ミルクや哺乳瓶ほにゅうびんは？」

「持つて来てるわ。でもキレイなお湯を沸わかせないと思えない。ミネラルウォーターと、百パーセント果汁かじきのジュースも買っておいたほうがいいかな」

「よく知ってるんだ」

「そりゃあ、そのくらい」

「アナ、なんだかおおかあさんみたいだな」

「……え……」

ちよつとドキツとします。

ロイドは平気で笑っていますから、別に深い意味で言ったのではないでしょうけれども。考えてみれば、男の子とふたりきりで赤ちゃん連れて買物カート押してスーパーマーケットを練り歩いている……なんて、実はかなりすごい光景だったりするのではないのでしょうか。知らないひとが見たら、なんと思うでしょう。

「ひよひよひよ。なんだあ、おまえら『フレンズ』ごっこかあ？ ひよひよひよ」

そう思うみたいです。

からかったのは、大きなケージを引っ張って商品の入れ替えをしているおじいさんでした。

手にしていた「KAPPA EBISEN」の袋をガサガサ鳴らしながら、エールを送ってくれます。

「いいねえ、若者は。いいねえ。やりな、やりな、がんばってやるんだぞ。『ロミオとジュリエット』だってローティーンだったんだ。ヨーロッパ人種に負けるなよお！」

「理解あるひとだ」

肩ごしに彼を眺めやりながら、ロイドは眼を細めました。

「大前提が誤解ではあるけれども。そう言えば確か、カール・セーガンが著書の中で言っていたな。十代前半にありがちなパッシブネットな恋愛感情および思春期特有の激しい性衝動を家族や社会に不当に抑圧され、その結果自己嫌悪および罪悪感にとらわれたりすることがなければ、人間はずいぶん簡単に幸福になれるのだとかなんとか。アナ、この件に関して、きみの意見は？」

「し、知らないっ！」

「何を怒ってるのさ」

「怒ってなんかないわよつ、誰が怒ってるのよつ」

「……………」

「いいから、行きましょ！」

店の大半は食べ物です。ちよつとした洋服や日用雑貨、オモチヤ、靴の修理コーナー、薬局にペット・ショップまでありました。

ぐるりとひと巡りすると、カートの半分ほどが埋^{うま}ってしまいました。

熱心に爪^{つめ}を磨^{みが}いていたレジのおねえさんは、とても迷惑そうにヤスリを置いて、ゆっくりのんびり仕事をはじめました。ひとつのバーコードに読み取り機を押しつけることに、約一分間が必要なようでした。

やっとなんとか会計を終えて見回すと、ケンはまだ公衆電話にしがみついています。よっぽどややこしい話をしているのかなと思いつながら近付いて行くと、ケンがこちらに気づきました。たちまち、イライラと受話器を置いて「アウト」のアクションをします。

「つかしーんだ。ずっと話中なんだ。こんなことなかったのに。割り込みできる回路だったはずなのに」

「それ壊^{こわ}れてるんじゃないの？」

「ああ。俺^{おれ}もそう思ったから、道の向うのガソリン・スタンドまで行ってかけてみたんだけど。そっちの奴^{やつ}もダメだった」

「じゃあきつと全部壊^{こわ}れてるのよ、だって……」

だって、こういう町なんですもの。

続きを瞳^{ひとみ}で訴^{こた}えると、ケンも納得したらしくウンザリうなずきました。

「ロイドたちは？」

「あら？ どこかしら」

見ると、ロイドはお掃除のおじさんと話をしているのでした。水を含みすぎたモップでび

ちやびちや怠惰たいだそうに床を撫なで回していた黒人のおじさんです。にこにこ笑いながら、派手な手振りを入れながら、何か熱心に話しこんでいます。人見知りをしないロイドです。その横顔は不細工じゃあないけど……眼鏡がなかったらハンサムって言ってもいいくらいなんだけれど。

アナはなんとなくため息をついてしまったので、この際思い切って言ってみました。

「……ねえ、ケン？」

「なんだよ」

「さっきねえ……あたし、からかわれちゃったんだ。ほら、ノエルを連れていたでしょう。だから、ロイドとあたしがまるで……そのう……そういうカンケイであるみたく見えたみたいで」

「ふ、ふうん」

「どういうカンケイの話か、わかった？」

「いや、わかったけどさ」

うわ目使いに見ても、ケンはわざとらしく知らん顔をしています。それでも、黙ってずっとしつこく見つめつづけていると、チラチラこつちをうかがって、とうとうしかたなさそうに、

「それで？」

と言います。

「うん。そうしたらねえ。ロイドだったらすごい。十代前半の恋愛感情だとか、性衝動がなんだかんだって言いだして」

「せ、せーしょどー？ な、な、何を考えてるんだあいつはまったく」

ケンには耳まで真っ赤になりました。アナはなんだかとてもホッとしたのですけれども、反面ほんの少し寂しいような悔しいような、変な気持ちになりました。だから、わざと蓮つ葉な感じに電話の台にびよんと飛びのり、肩につくまで首を傾けて、言ってみました。

「あたしも、焦っちゃった」

「そうか。良かったな」

ケンは両手をスボンのポケットにつっこんで、ロイドのほうを見たつきりです。

「良かったってどう言うこと？」

「あ、いや。違う、大変だったなってことで」

「大変ってほどでもなかったけど」

「いや、だから大変でもなかったなってことで、うう、だからつまりだな俺が言いたいのは……おつ。戻って来たぞ！」

たちまち露骨にホッとした顔になるケンに、アナはまたしてもため息をつきながら、台を降りました。

「ニュース、ニュース！」

まったく悪意のないロイドのことを、つい知らんでしまったりもします。幸いにも、ロイ

ドは興奮していて、アナのそんな目つきになどまるで気がつきませんでしたけれど。「いやあ、やってみるもんだ。彼がさ、掃除しながらエルヴィスのナンバーなんか口遊くちまんでるから、上手うまい上手うまいっておだててみたんだ。したら、本業は歌手で、掃除はバイトだつて言うんだ。どこで歌つてるって聞いたら、ライブ・ハウスなんだつて。んで、今晚ダウン・タウンでとびきりのギグがあるつて教えてくれたんだ。な、そこで例のメロディ、拾えそうだと思わないか？」

「あつるいんだけっどお」

七色に塗り分けられたまつげの女のひとが、十センチも爪がある手をひらひら振ります。

「くわんばいなんだわー。まったきてちよんまげえ」

完売です。完敗です。

ここが最後の頼みのプレイガイドだったのでした。

どこのチケット売場に行つても、完売なのです。当日券も前売券も、みんなみんな出払つてしまったそうです。今夜のステージは超人気らしい。そうなると、なおのこと聞き逃したくないのですけれども、どうにもなりません。頼りのノエルはまたウトウト眠っています。ぼやぼやしているうちにギグの時間が近付いて来ました。やむにやまれず、四人はライブ・ハウスの近くまで行つてみました。

すごいひとです。どこからこんなにひとが出て来たのかと思えるほどです。ひといきれで、

あたりの空気がムンムンしています。

パンク頭のおにいさんがいます。裸はだかみたいになかつこうのおねえさんがいます。きつちりスクエアにスーツを着たひと、サーファーっぽく陽ひにやけたひと、カウボーイ・ファッションのひとつもいます。ざわざわ聞こえる話声は英語だけではありません。スペイン語やフランス語へブライ語にカンボジア語、中国語や日本語らしい響ひびきも聞こえます。なんだか世界じゅうのひとがこのライブのために駆かけつけて来たみたいです。ありとありゆる種類の人間が集っているのです。

それでもさすがに、赤ん坊づれのこども三人組などというグループは、他ほかには見当りません。みんながこつちを見ているような気がします。噂うわさの種くさにされている感じもします。こそばゆいので、四人は少しだけひとごみを離れました。

「こんなになくさん入るのかな」

「誰かひとりでも入れたらいいのにね」

「頼たのんでみようか。誰かに。券きん、譲ゆずってくれって」

「無理じゃないかなあ……この熱気じゃ」

ボソボソ相談していると、黒装束に眼鏡のいかにもうさん臭くさい感じのオジサンが、笑い顔のお面を張り付けたような顔で近付いてきました。

「アータたち、ひよつとして、券きんないのかな？」

「え、ええ。そうなんですけど」

「んじゃ。三人分で、百五十。ど？」

「ええっ」

だってほんもののチケットはひとり二十ドルです。いくらインフレの世の中でも、いきなり二・五倍にはねあがったりするなんて驚異的です。

ダフ屋です！

ひとが欲しがるとはチケットをすかさず大量に購入しておいて、開演ギリギリ前に高く売りつけるという職業に従事なさっていらつしやる紳士（紳士）を、ふだ屋をサカサにしてダフ屋と申しま

す。
「くそ……足元見やがって……」

「ひひひ。なんせこれが、アタシの商売ですから」

「百！」

自棄（やけ）つぱちのように、ケンが叫びます。

「百四十五」

オジサンのお面は口のところしか動きません。

「百十！」

「百四十」

「クレジット・カード使える？」

「アメックスかダイナースなら」

「ううう、赤いカードはダメか。じゃあ思い切つて全財産だ。百二十」

「んなら思い切つて売りましょう」

「やった！」

ふうふう息をつきながらケンは得意気にロイドとアナを見回しました。
偉い。

アナは音を立てずに拍手をしました。

けれども、ケンがサイフを出すと、オジサンはすかさず覗きこみ、仮面を「おやまあ」に変えました。

「なんですー、おぼっちゃま。アータもほんまにひとが悪いね。こんなに持つてるじゃないの」

「えっへっへ、作戦作戦」

「んーなせコいことしなさんなあ。百五十だしなさいね百五十」

「だって、百二十の約束だぞっ」

「んじゃサヨナラ〜」

「わあっ、待つて待つて」

「んじゃ……百と五十。ん。確かに。ほっほっほっ、まいどおーきにー」

「くそおおおっ！」

ケンはすっかり落ち込んでしまいましたでしたが、ともあれ、チケットは手に入ったのです！

公園に戻って、携帯燃料を燃やしてお湯を沸し、買って来たサンドイッチや果物を食べました。朝よりだいぶ増えた通行人が、時々怪訝そうにこつちを見て行きますが特に誰が咎めるわけでもないのです。

スノーマンだったらこうはいきません。

こどもたちだけで火なんか燃やしていたら、最初に通りかかったおとなが、いったい何をしているんだ、と聞きにくるはずですよ。よそのもので、赤ちゃん連れだったりしたら、まっすぐ教会に連れてこられるに決っていました。

そんなことをぼんやり考えながら、アナの手はノエルを抱っこして、ほとんど無意識のうちには時々ゆすつてあげたりなどしながら、上手にミルクを飲ませておりました。エイミーのところであつた一度練習させてもらっただけに、なんだかもう、ずいぶん昔からやってきたことみたいに、しっくりとできてしまうのが不思議です。細すぎるはずの腕が、ノエルのまだ柔らかい頭のかたちとちゃんとぴたり合います。重すぎるはずの赤ちゃんの体重が、ちつとも苦になりません。そりゃあもちろん、ノエルのほうが熟練してることだって言えるでしょうけれども。

「……そうすると、すっかりただの赤ちゃんだなあ……」

四箇めのBLTサンドに手を伸しながら、ケンが目尻に皺を寄せました。

「でも、ノエル。ほんとは誰もいなかったらいいなかつたで、ちゃんとひとりで哺乳瓶空中に

浮かべて飲めちまうんじゃないのかい？」

「そりゃあそうなのですが」

乳首を遠ざけてあげると、ノエルは三人にしか聞こえないくらいの声で言いました。

「スキんシップは大変重要なのです。ちゃんと愛情を持って授乳された経験を持たないと、人間、ゆがんでしまいますから……けぶっ！」

ノエルは美味しそうにミルクを飲みます。ノエルがお腹いっぱいになるまで自分の分はあずけにしていると、サンドイッチが全部なくなってしまうそうです。アナは、それでも別にかまわないと思いました。

この腕になにもかも預けて一心にミルクを飲む、まだ小さな小さな生命。この子のためならば、なんだってできる。ありったけの力を注いであげたいと、こころの底から思ってしまうのです。他人であるノエルにでさえ、つまり、お腹をいためて生んだ子じゃなくてさえ、こうなのです。ほんとうの自分のこどもだったりしたら、どんなに強い気持ちを持つことでしょう。

世の中のおかあさんたちは、誰もかれもみんな、これを経験したのでしょうか？ ケンのママも、ロイドのママも、そうしてアナ自身のおかあさんも、みんなみんな。そうして、すべてのこどもたちの母であると言うクイーン・マリーも、きつと。

おかあさんって、すごいな。

アナは思います。

昔々のその昔からうーんと未来まで、ずっと切れ目なく繋がってゆく生命の樹。子どもであることは、その数え切れないほどに分れた枝のうちのたったひとつの先つちよ、行き止まりの部分だと言うことです。そこで終わってしまつてるということです。けれどもおおかさんは終りません。次の芽を出し、育てます。そうして生命全体の枝を、そして幹を、たく立派にしてゆくのです。

あたしもいつか、ほんもののおかあさんに、なれるかしら。

アナは思います。
なりたい。

……でも、そのためには、地球をまるごと救わなくっちゃならないんだわ……!!

夕方になるとまわりはどんどん賑やかになつて来ました。少しずつ少しずつ暗くなるのに対抗するかのようには、さまざまなおネオンがともります。海の向うに沈んでゆく夕陽なんかよりも、ずっと明るい光です。人工的な灯りが勝ち始めると、一帯の雰囲気はまるで変つてしまいました。ノエルの言う通りです。あんなにくたびれていた町が、急にイキイキ素敵に見える始めます。通りすぎる誰も彼もが、すごい美人とハンサムばかりに思えます。どこかの商店がずっと垂れ流し続けていた単なる軽薄なポップスが、ここと今に最高に相應しいご機嫌なBGMに変わり、どちらを向いても視線の切り取る景色がそのまま青春映画の一場面になつてしまうのです。

遠くを走る高速道路が、渋滞中の車のテイル・ランプが、港の古ぼけた灯台が、みな宝石のように輝きます。ここでは、誰も彼もがヒーローとヒロインです！

そうして今夜は、ひとも車もみな同じひとつの方向を目指しておりました。もちろん、あのライプ・ハウスの方角です。そう、もうあとほんのちよつとすれば、世紀のギグがはじまるはずなのです……！

四人も急いで荷物を片付け、行ってみました。

ライプ・ハウス前のひとごみは、いつそうふくれあがり、いつそうテンションを高めていました。特大のネオンは「あのハリケーン・ジョーが帰って来る！ 今夜！」「最高だぜ、ベイビー！」と「愛しあおうぜ、ハニー！」が、シヨッキング・ピンクとサンシャイン・オレンジとスパークリング・グリーンにウインクをしています。どこかの誰かが持ちこんだらジカセが大音響のR&Rを響かせるのに合わせて、我慢できなくなつたひとびとが、もう夢中で踊っています。8ビートのリズムに乗ってとつもない大勢が揺れています、スウィングしています。パンク頭のおにいさんも、ほとんど裸のおねえさんも、プレッピーもサーファーもアーバン・カウボーイも、靴を鳴らし腕をふりあげお尻とお尻をぶつけあつてノッています。ビールが配られ、ポップコーンが宙に舞い、クラッカーが炸裂します。そこらじゅうのひとにキスして歩いてるオバサン。しっかりと抱き合つて勝手にチーク・タイムしているカップル。ローラー・スケートでとびきりのステップを披露してみせてる少年チーム。すごい熱狂です。でも、これでも、まだはじまつてさえないのです！

「うひょひよー。こつりやあかーなり期待できそうじゃーん？」

ケンが言いました。意識しているやらしていないやら、片手をぱちんぱちん鳴らしながら、もうあの妙な腰つきをしまつています。

「ハリケーン・ジョーってひとは、たいへんなスターみたいだな。知ってる？」

言いながらロイドがいやにギクシャクと手をあげあげしていると思つたら、ロボット・ダンスが上手だったりするのでした。

「知らないわ、あたしは」

あたしがそんなひと、知ってるわけがないでしょ！

アナは面白くありません。ついふくれつ面になつてしまいます。ほんとにいつて、涙だつてにじんで来そうです。

だつてR&Rなんて不良の音楽なんですからね！ くだらなくて軽薄で頹廢的たいはいてきで危険で始末におえません。歌詞なんてほとんどお手洗いの落書きです。イエスさまの教えに背くことばかり。麻薬とか暴力とか不純異性交遊とかは、みんなそのへんからはじまるんです。R&Rのテープが一本発見されたら、隠れたR&Rが三十本はあると思つていい。そしてR&Rはあつという間に増殖する。地域全員が協力していつせいに駆除しようとしても、いくら大量にR&Rホイホイをしかけてもなかなか絶滅ぜつめつさせることができない、いやらしいほどしぶといものなのです。教会の女の子はもちろんそんなもの、けして好きになつてはいけません。ノツたりしてはいけません。

……と、いつもおとうさんに言われて、すっかりその通りに違ちがいないと、今日の今日まで思っていたのですが。

このこのひとびとはみんな、あまりにも、楽しそうじゃありませんか。すごく陽気で、明るくて、開放的です。無邪むじや気きつぽくて、馴ひょうまん軽けいで、面白いです。そりゃ確かにとんでもなくみだらなかつこうのひとはいます。いかにも簡単に快楽くわいらくに溺おぼれてしまひそうなタイプのひとびともいます。教会になんか生れてから一度も行ったことのないひとだっているでしょう。そしてあのダフ屋さんのように、ひとの弱味じやくみにつけこんでお金儲かねもちけをする、罪人を作ってしまう、許ゆるしてしまうような素地そぢが、ここにはきつと確かにあります。

でも、でも、なんだか……。
羨うらやましいんです！

それでもアナは踊おどれません。十二年と何ヶ月の信心深い教育に、手も足もこころも縛しばられていて、動うごけません。とてもみんなのように自由になれません。ばあつと踊おどってしまったら、すぐく嬉うれしいに違ちがいないのに。あのこどもたちと踊おどった時と同様、ただやってみさえすれば、できないことなんかはないはずなのに。

とても悔くしいです。なんだかとても悲しいです。虚むなしいです。
でもアナにはどうすることもできないのです。

列れつが動きだしました。とうとう開場したようです。まだ踊り続けながら並ぶ根性のひとびともいないではありませんが、半分以上のひとが我にかえつて、チケットを確かめたりいっ

しよに来たともだちを探したりしはじめました。さすがの熱気も、ほんの少し納つたのです。アナはホツとして、そうして、ホツとしてしまった自分が、やっぱり相当にミジメでした。そんなにイヤだと思つてゐるのなら、聴かなきゃいいじゃありませんか。みんなと別行動を取つても、『薄汚い』R&Rなどからはうんと離れていればいいじゃありませんか。なに、いつしよにゐるなんて。

ええ、そうなんです。

実はアナだつてもう半分以上覚悟を決めてしまつてゐるのでした。生れてはじめて、ほんもののR&Rを、しかも生で、聴いてみることができなのです。とにかく、まず聴いてみなきゃわからないじゃないですか。食わず嫌ぢやういはよくありません。

さまざまない訳をして、実は、もうかなりワクワク・ドキドキしてしまつてゐるのでした。

ところが。

「……おーっと待った！」

四人が止められたのは、三十分も列の中で過すごして、ようやくたどりついたカウンターです。

「こいつじゃあ、入れるわけにはいかないね」

「ど、どうしてですか？」

ケンが声を荒らげても、受け付けのオジサンは眉ひとつ動かしません。

「こりや通用せんよ。違う」

「違うって、どこが？」

「なんだ。ポーズたち」

両手に事務用袖カバ^{そで}ーをしたオジサンの眼が、ほんの少しだけやさしくなりました。

「バカだな。知らずに掴^{つか}まれたのか。こりやあ、ニセモノだ。ほら、日付のところが変に薄くなっているだろう？ 前に印刷してあったものを削って、無理やり今日にしてるんだ。

おまけに、この三枚は全部同じ整理番号じゃないか。単純に、カラー・コピーをしたらしいな。ずいぶん手抜きなダフ屋に引ッ掛かったもんだなあ」

「……引ッ掛かった……？」

振り返らないケンの肩^{かた}が、震えています。

「気の毒だが、お帰り。若いんだ。まだチャンスはあるさ」

茫然とする三人を小突くようにして、後から後から大勢のひとたちが次々に正規のチケツトを出して、店の中に入ってゆきます。いつまでも立っ^たていては、邪魔^{じゃま}になります。

「……出よう」

ロイドがケンの肩を掴みます。

「ここにいてもしょうがないよ。出よう」

「お、俺……俺は」

「いいから。ほら」

「ちくしよう！」

ケンの蹴ったブリキのゴミ箱は、ライブ・ハウスの屋根のどこかに当って、ごうん、と鈍い音を立てました。

「バカヤロー！ おとななんて、おとななんて……大つきらいだあ！」

ハーバーに面した店の裏手です。やっと入れると思ったのに、最後から二番めのメロデイが手に入ると思ったのに、あんなに並んだのに。最後の最後に来てダメだなんてまったく悔しいったらありません。

グレて座りこむケンを、アナはことばもなく見守りました。

とても残念です。ほんといって、かなり残念です。

でも、こうして潰れてしまうと、それはそれで運命だったような気がしてしまいます。なんとなくことなく、やっぱり神さまがR&Rなんて聴いてはいけないんだっておっしゃっているようで、こうなったらこうなつたで安心だったりするんです。もちろん、そんなこと、みんなに言ったりはしませんでしたけれども。

店の中でファツと盛り上がる声があります。うなだれたままのケンの頭がピクンと動きます。とうとう前座の演奏がはじまったようです。

「……この眼鏡をかけていれば……」

ロイドが静かに言いました。

「どんな困難に陥った時にでも何かしらいい考えが浮ぶって、クイーン・マリイが言ったよね」

「そうね」

「ぼくは、あのダフ屋に逢う前からいろいろと考えてみた。ありとあらゆる角度からこの問題について検討した。他に手はないと思う。だから、たぶん、これが一番いい考えなんだろうなあ、きつと」

「どんな考え？」

「押しこむんだ、楽屋口から」

クイーン・マリイの眼鏡つて、あんまりたいしたもんじゃないのかもしれない、とアナは思いました。

ロイドの「一番いい考え」にも、まだいくつもの問題点はあつたんです。

その一。ライブ・ハウス側では、あまりのジョーの人気状況から、当然「すべての裏口の警備」を強化しようと計画していたこと。

その二。赤ん坊づれのこどもばかりと言うチームは、あまりにも押しだしが弱く、地球防衛のためだなどというセリフにもさっぱり説得力がなかったこと。

その三。真実の敵ではない生身・丸腰の人間あいてでは（たとえ警備員のみなさんが体術

が得意なひとばかりだったとしても、やっぱり地球防衛軍は、本来の力を発揮するわけに
いかなかったこと。

それでもなんでも突進しようなんて、はつきり言って、ずんぶん自棄^やつぱちでした。ロイ
ドが言うには、理屈が八方塞^{ふさ}がりな時には、気合いと運で勝負するのが統計学的に最も合理
的なのだそうですけれども。

気がついたら四人は無惨な乱闘に巻きこまれていました。なんとしてもひとりでも中に入
ろうとする地球防衛軍チームと、なんとしても、ただひとりたりとも入れはすまいとするラ
イブ・ハウス防衛軍チームの戦いです。

「ちよつとあんたっ！」

「おまえらなー、いい加減にしろよ。こどもだと思つて甘えろと」

「お願いですから、ちよつとだけでいいですから」

「だめだめっ！ 冗談^{じよんたん}じゃないよっ！」

「みんなお金を払つて見に来てるんだぞ」

「俺だつて金は払つたっ」

「ほらほら、こどもはさつきと帰つた帰つた」

「あつ、お願い、押さないで。押さないでください。赤ちゃんが、赤ちゃんがいるんです！」

「お嬢^{じよう}ちゃん。ライブ・ハウスに赤ん坊つれて来るおねーちゃんはどこにいる？」

「だつて、あたしたち……」

「うつるせーっ」

不意に、楽屋のドアが開きます。ひよろひよろのシルエットが現れます。

「くおおらっ！ 頼むぜ。静かにしてくれよ。演奏前の大事な時だつてーのにさ。うちのボスは、あれでもすつごくナイーヴなんだぜ？」

「すみません、すみません！」

警備係のおにいさんたちは、真つ青になつてぺこぺこします。

「どうかジョーさんに、よくとりなしてください」

「まーいーけどよ」

「ほんとに申し訳ない。このガキどもがあんまりしつこいもんで」

「なーんだよ、あんたらガキ相手にそんなバタバタしてるわけ」

ひよろひよろのシルエットのひとが笑いながら二歩三歩、裏口に近付いて来ました。月灯つきあかりに見えた顔は、お化粧が濃く、頬ほおがげっそりとこけていて……。

「あ~~~~~っ」

こどもらが叫きけびます。

「げえっ！ どびっくりっ」

瘦やせせシルエツトがオーバーなアクションでひっくり返ったかと思うと、すっ飛んで楽屋に戻ります。

「ボス、ボス、ボス！」

キンキン声がよく響くので、外の戦士たちにもみんな聞こえました。

「オイラの給料……じゃねえ、驚かないでくださいよ。あの子らがいるんつすよ。あのバイク修理の眼鏡野郎と、ともだちが！」

「なに？」

「思うに、修理代を取り立てに来たんじゃあ」

「あ。そりやウツカリしたな。払ってやるか」

「です？ です？ じゃ、ついでにオイラの給料もあげて……」

……どがしゃーん！

すさまじい音がしたかと思うと、それつきり、ひよろひよろのひとの声は、まったく聞こえなくなりました。

やがてのっそり現れたのは、楽屋口をすっぽり塞いでしまうグリズリー・ボディです。髭

だらけの顔が照れ臭そうに笑います。

「帰れって言ったのに、帰らなかつたのか。しょうのないポーズもだぜ」
そう。

ハリケーン・ジョーは、あの熊ボスだったのです！

「ヒマなんだつたら、俺の歌、聴いてくか？」

それはそれは、ほんとうに素晴らしい二時間でした。

ジョーのギグはいつもとびきり熱くなるのです。バンドのメンバーたちはかつこうこそ暴走族めいていましたが、演奏の腕はたいしたものなのでした。

彼らのつむぎだすさまじまな曲に耳をすましていると、アナの頭の中には、実にさまざまな情景や場面が浮びました。北国の荒涼たる山麓を渡る一陣の風が、南の島の気だるい午後が、どしゃぶりの雨に濡れた新緑の森が、次々に見えるのです。風見鶏の下で小さく丸まって眠る子猫を、密林の沼のひとりぼっちのワニを、ガラスのケースの中から瞬きをしない眼でじっとこつちを眺めている金魚を、はつきりと感じる事ができるのです。

それは、おとうさんの大好きなクラシック音楽を聞いている時と、同じでした。いいえ、厳密に言うならば、もっと素敵だったかもしれない。だって、ふと気づくといつの間にかアナのつま先は、とん、とん、とん、と、おしとやかに、彼等のリズムを刻んでしまっているのです。隣のひとやうんと向う側のひとやすつかり反対側のひとが、みんなその同じ鼓動に乗っています。まるで会場全体が一個の心臓で動くからだのあれこれの部分になったかのようです。その場の誰もかれもがひとつなのです。

それはなんだか、とても気持ちのいいことでした。とても、感動的なことでした。

いつか家に帰ったら。

と、アナは思いました。

おとうさんに話そう。あたしは、R&Rは、不良の音楽なんかじゃあないと思うって、言ってみよう。

全部で何曲かかったでしょうか。

やがて、会場が不意に静かになり、たった一本のライトだけを残して、すべての照明が消えてしまいました。

ぼろん、ぼろん。

あの大きな大きなからだに比べるとまるでこどものオモチヤのように見えるアコースティック・ギターをつまびきながら、ジョーが静かに、やさしく、歌いだします。会場じゅうのひとびとがみんなさつきまでの憑つかれたようなはしやぎぶりを嘘うそのように消して、とびきり真面目まじめな顔つきになりました。そうして、誰かがひとり、またひとり、ジョーに合わせて、そつと歌いだしました。

どこから来たんだ どこに行くんだ

聞かないでくれ

覚えてねえんだ 家を出たのが

いつだったかさえも

何かを探しに出てきたはずが

それもいまいち はつきりしねえ

時々ふつと こいつがそうだと

思う時もあるけど
たまにはとうとう 見つけたんだと
笑う日もあるけど
醒めてみりゃみんな夢さ
また足の向くまま 行くしかねえ

旅を続けて
旅を続けて

いつかどこかに
たどりつく

であう奴らと 別れる奴ら
いっしょに行く奴ら
ともだちだけは 星の数ほど
増やせたようだぜ
おまえも俺もどこまでも
どこまでも行くだけ

旅を続けて

旅を続けて

いつか何かを

見つけた

あちこちに飛火した歌の炎は少しづつ少しづつ周りを飲みこみ、しまいには満員の観客ほぼ全員の大コーラスになりました。そうして、サビの部分のリフレインがゆつくりと潮が引くように消えた時、今宵のコンサートも終わったのでした。

そんな風に、ほんとうに素晴らしい二時間だったのですけれども。

四人はため息をつかずにいられません。

クイーン・マリーの忘れてしまった歌のメロディのかけららしいものは、残念ながら、見当らなかつたのでした。

お礼に楽屋に立ち寄ると、ハリケーン・ジョーは三人にクリーム・ソーダをおごってくれました。ノエルはまたしても眠ってしまっています。いつかが必要になってもいいように、たくさん寝だめをしておくに限る、というのが、その理由らしいです。

「……あれか。昔々のヒット曲さ。ポーズどもは生れてないさ」

八本めの缶ビールをぐしゃっと潰して、ジョーは、ほんの少しだけ寂しさを含めた笑い顔

を作ります。

「俺もその頃はハナタレのガキだった。西も東もわからずに作ったんだが、そいつが生涯で一番いいデキだったなんて、まったく情けねえ話だ。グレてな、たくさんバカをやった。しまいには、音楽を捨てて、好きなバイクのほうで生きてこうともした。だが、そいつもやっぱり中途半端だった。金にやならなかつたんだ。だからこのトシになつても、呼んでくれる町がありやあへこへこ小遣い稼ぎににかけて来るってわけさ。ま、ここにはこいつがいるしなあ」

バンバン肩を叩かれたのは、例のひよろひよろのお化粧のひとつです。

「グシャープッだ」

「どうも」

「本名は俺も知らん。イッパシの仕切り屋の顔をしてるが、俺にはどーゆーわけかやたらにたかりやがる。昔つからそりやいつもゲルピンで」

「それはないでしょう、ボス」

「じゃあ、ほんとにずうっと旅を続けてるんだ」

と、ケン。

「ああ、連中とつるんでな。まったく歌の通りさ。旅は終りやしねえ。終点なんかねえ。そういうもんだ、そうだろ、ポーズ」

「でも」

ロイドは眼鏡の真ん中をツイツと押し上げます。

「ぼくたちの終点は、ホーリー・ローリー・マウンテンなんです。蓋然的がいぜんてきに言えば、そこは、人類全部の終点でもある可能性も高いわけだ」

「あ？」

ジョーは真黒い瞳ひとみをぱちぱちさせました。

「そりや何の話だ？」

三人は顔を見合せました。

ジョーは立派なおとなです。経験もあるし、いろんな町にファンのひとたちがいます。おまけに、音楽のプロなのです！ 味方になってもらうことができました、なんて心強いでしょう。

「ですから」

「実は」

「あたしたち」

三人が三人とも大急ぎで言いかけた、ちやうどそのとたんでした。ノック、ノック。

「失礼します」

「お花持ってきましたあ」

会場係のひとたちが、たくさんのお花束を抱えてやって来たのです。熱心なファンからの贈

りものです。ジョーもさすがに嬉しいらしく、どつちに置けとか、あつちにやれとか、にこにこ指示をしています。今は、詳しい話ができそうにありません。

なんとなく気抜けして、ぼうつと見るともなくお花を見ていたアナの眼に、信じられないものが飛び込んできました。ピンクの鉢はちに、ピンクのリボンを結び、メタル・ピンクの風船もくつつけてあるその花は……。

「ロイド、見てっ！」

「え」

「あれ、カンノンの花じゃない」

「え、これか？」

ジョーが手に取って、さし上げます。

ああ、確かに伝説の通りです。ガラスのように薄く透明な花びらが七枚、どれもこれも淡い色なのですけれども、確かに七つ、色が違っています！

「み……ミスター・ジョー」

ロイドは両手を組んで、床にひれ伏します。

「お願いだ、ぼくに、その花をください！ その花があれば、母の生命いのちが助かるんです！
お願いします、お願いします！」

「ふんっ、みすたー、だど？」

ジョーは鼻を鳴らしました。気にいらぬみたいです。

「ええと、スーパースターのジョーさん！」

「けっ」

「マエストロ・ジョー」

「よせ」

「ボス」

「誰がおまえのボスだ」

「うーんとうーんと……あ、そうか！」

ロイドはポン！ と手を叩きました。

「ハリケーン・ジョー！」

「違う」

ジョーは重々しく首を振りました。

「正しくは、『ザ・ハリケーン・ジョー』だ。……そらよ、持ってけ、ポーズ」

「わっ。あ、ありがとうございますう！」

その間にアナは急いでノエルを揺すり起こしました。

「むにやむにや……なんですか、そんなにあわててえ？」

ふくれています。どうもこの子は寝起きはグズる性格のようです。

「お花がみつかったの！ すぐにサンクスギビングのロイドの家に戻りたいの！」

「ふあああ、そうですか。んくじゃ行きますよ」

「え？ あ、ちょっと、ノエル待ってよだつてそんな」
……いきなり消えちやつたりしたらジョーさんがびっくりするじゃないの！
と、アナは言いたかつたのですけれども。

その心配はありませんでした。少なくとも、その、心配は。
寝惚けたノエルは、ジョーも、グシャープも、バンドのひとたちも、その部屋にいたひ
とをみんなみんな、いっしょよくたにテレポートさせてしまったのですから。

7 家 へ

がらんと広い立派な道路。その道から、うんと引つ込んで建てられた、瀟洒な邸宅群。一軒一軒がみんな大きくて豪華で立派です。日差しと緑と新鮮な空気にあふれ、とても清潔で健康的です。

アナはこれにそっくりな風景を見たことがあるような気がしました。そう、たぶん、とても憧れていた昔のSF映画の中で。その映画には友好的で食いしん坊な宇宙人が登場します。今地球にやって来ているやつらとは大違いの彼は、ともだちである地球の少年を、自転車ごと空に舞い上がらせてくれるのです。飛行中に見降ろした地面には、あちこちに、青々とした水を湛えたキレイなプールがありました！ なんてぜいたくで、なんて羨ましかったでしょう。スノーマンでは、例えばキヨミズの舞台から飛び降りる覚悟でプールを作ってみたとしても、結局アイススケート・リンクになっってしまうに違いありませんのですけれども。

いかにも裏手にプールのありそうな家がたくさんあるサンクスギビングのオシャレな町並みのど真ん中に、一行は唐突に出現してしまっただけでした。

超能力 赤ちゃんノエルと、ご存じ三戦士と、ハリケーン・ジョーはじめ数人のおとなのミ

ユージシャン。一番仰天^{ぎやうてん}してしまったのは、もちろん、超能力なんて初体験のオジサン音楽家たちでありました。

「な、な、なんじゃこりやあ〜っ?!」

「夢^{ゆめ}かうつつかまぼろしか」

「不条理^{ふじょうり}だ、カフカの世界だ」

「わ〜ん、おかあちゃ〜ん、もうしません、だしてえ」

「ひよっとして、『トワイライト・ゾーン』でもリバイバルしたのか?」

「ちがうよ、『どこでもドア』だよ」

感動してるオジサンもいれば、パニックしてしまったオジサンもいます。こどもに^も戻^もってしまつたみたい、きゃあきゃあはしゃいでいるオジサンも。

やつと事情を悟^{さと}つたノエルも、さすがに申し訳なさそうな顔にはなつたのですが。

「……ごめん……申し訳ない……あとからちゃんとお帰しますから……むにやにや、だめだ、またね。ぐー」

またしてもアツという間に眠^{ねむ}りこんでしまったのです。必要以上の質量を移動させたので力を使い果たしてしまつたのでしようが、ほんとうに燃費の悪い交通機関ですね。

そんなオジサンたちにもノエルにも見向きもせず、気付きもせず、ロイドはさつそくに^か駆^かけ出してたのです。もちろん、家に向つてです。

「ママ〜ッ！」

あ、そんなに走ったら、大事なお花が千切れちゃう！

アナはハラハラしましたが、眠りこんでしまった腕の中のノエルが重たくて、とてもついで行けません。ケンはおジサンたちを宥めるのに懸命で、ノエルを受け取ってくれそうにはありません。

それにしても。

ロイドはずいぶん良い暮しをしていたみたいなのです。今彼が駆けこんだ、道路際にメル・ボックスのある家は、あたりのどれと比べても負けないくらいリッチなコロニアル風二階建なのでした。こちら向きの窓のどれにも、真っ赤なゼラニウムが並んでいます。庭には、剣弁高芯のハイブリッド・ティー・ローズを中心に、よく手入れされたたくさんのお花が咲き乱れています。車寄せには、ヨーロッパのらしいキューブで個性的な車が、なんと二台も入っているのです。

……驚いたわ。

ずり落ちるノエルを、ヨッコラシヨと抱きかかえ直しながら、アナは思わず小さく頭を振ってしまいました。

はつきり言って、拍子抜けです。母ひとり子ひとりという話からつい想像してしまっていたのは、世界名作童話的な『貧しくて清らかな』ご家庭でした。おとうさんが出て行っちゃったつきりだと言うのですから、きつと、苦しい時も悲しい時も母子寄り添い慰めあつてど

うにかこうにか儉しく暮している、というノリを想像してしまうではありませんか。欲しいものも買えない、学業にも集中できない、ともだちなどにもいつもコンプレックスを感じたりしてしまうような、不幸で困難な生活なのだろうと思うではありませんか。とどめはおかあさんのご病気。ロイドがああ不法な「儲けかた」に熟練してしまっていたりするの、しかたのないこと、お薬代・お医者さん代にするためだからこそ、神さまもあえてお許しになつておられるだけのこと、と、アナは勝手に納得していたのですけれども。

なんだか、そういう感触ではありません。もつとずつとゆとりも潤いもある暮しぶりのようです。どうも、イメージ崩れちゃいますよね。

いや、もちろん、どんなお金持ちの暮らしをしていたって、見るからに不幸じゃなくなつて、不幸はやつぱりどこまでも不幸なんですけれども。

その証拠に。

「……ああ、ああ、あああ！」

ロイドがよろめき出てきます。

ひどいショックを受けています。まっすぐ立っていられません。大切なカンノンの花の鉢さえ、今にも落つこととしてしまいそうです。

「どうしたの？」

「いないんだ！ ママが！！」

「え？」

「ベッドも、部屋も、みんな空っぽだ。とうとう入院してしまっただんどうか。それとも、それとももつと悪いことが……せつかくの花が、間に合わなかったなんて……結局は遅かったなんて……いやいや、いや。違うっ！ 絶対に違うぞ、それなら、置き手紙ひとつないなっておかしい。そうだと。ママは死んでない。ママはまだ花を待っているんだ。花は必要だったんだ。そうだ。絶対だあっ!!」

真つ赤な眼を狂ったように見開いて、花は花は花はと何度もつぶやくロイド。

アナはふと、思いだしました。サンクスギビングの方角に飛んで行った、あの大戦団を。砂漠から見上げた、圧倒的な数の、あの銀色の円盤。整然と並んで大空を横切る姿が、くつきりとまぶたに浮びました。

でも、今こんなロイドに、そんなことを指摘してみてもはじまりません。ますます気を動転させてしまうだけです。残酷です。

「ね、お隣にでも聞いてみたら？ 何かわかるんじゃない？」

「あ、う、うん。そうか、そうだね！ ウォーカーさあん!!」

境目の垣根を蹴つまずきながら飛び越えて、ロイドはお隣の玄関を叩きます。

「アンディ！ パーバラ！ クリスにディーン、エセルつ。サムおじいさあん！ 誰かいませんか。となりのロイドです！ ちょっと出てきてくれませんか」

「ロイド？ ロイドだと！」

家の中ではなく、裏の畑のほうから、古いオーバーオール姿の鼻と頬の赤いおじいさんが

顔をのぞかせます。

「サム！」

「ロイドっ！ このバカたれ小僧が！」

おじいさんは、移植いじやくごてを振り上げてロイドに襲せいかかります。でも、一発もあたりません。どちらかの足がご不自由でいらつしやるようです。痛そうに引きずつていて、あまり機敏びんに動けないので、ロイドには簡単にかわせてしまうのです。

「ええい、ちよろちよろしおつて。おとなしく殴なぐられんか、この悪ガキめ！」

おじいさんの鼻声に、ロイドはとうとうあきらめました。今だとばかりに振り下ろしたこてを、おじいさんは結局途中ちゆうちゆうで放り出し、かわりにギュウツと力まかせにロイドを抱きしめて、オイオイこどものように肩かたを震よまわせました。

「どこ行つてたんだ、このバカぼん！ 糞くそポーズ！ かあさんの大変な時にいつ」

「どこつて、大変つて……いったい、どうしたんだ？ 何があつたの」

「おらんよ、みんなおらん！」

「どこに行つたんだ」

「知らんわい。宇宙船が飛んできた日にな、ここらじゆうの家から、母親という母親がみんな消えてしまうたんじゃっ」

「ええっ」

「そうしてな」

おじいさんの鼻は、泣いたので、ますます真つ赤になっています。

「息子どもも、隣のギリアムも、筋向いのハンクもみんな行つてしもうたわい！ 本屋も保険屋も犬の訓練師も。ピアノ教師のあの伊達フランクだの、修理工場の苦虫ジエイムズの奴までもがな。つまり、この町の男という男がみんな、みんなじゃ。消防隊長のマーシユのところに集まつて、猟銃やらサバイバル・ナイフやら武器という武器を持ち寄つて、どこかに出かけて行きよつたんじゃ。戦争じゃよ、戦争！」

「……………」

「残つたのはこどもと、わしのよーな役立たずのジジイばかりよ。ああ、情けない。いまましい。わしだつて、わしだつて、血が騒ぐのにのう……こんな屈辱を受けるくらいならばとつとと死んだほうがましじゃつたに、まつたく！」

サムは、シャツの袖でフーン！ と鼻をかみました。

「おまえまで家族の誰よりわしを最後に呼びよるし……ぶふふーんっ!!」

「ご、ごめん、でも実は」

「ふん。どーせ、アルファベット順だつたとしても言うんじゃろ」

「そうなんだ」

「どうしたんだ？ いったい何があつた？」

ようやく落ち着いたオジサン軍団をひき連れて、ケンがそばまでやつて来ました。アナはやつと、ノエルをタッチすることができて、ホツとしたのですが。

「むむつ。なんじやおまえらはっ!!」

サムおじいさんは、家の外側にたてかけてあつた庭ぼうきを取ると、たどたどしい足取りながら、敢然と彼等の前に立ち塞がりまふ。

「止れつ!! 悪党どもつ!! ここはこのサム・ウォーカーの家じゃつ。許可なく敷地内に立ち入るんじやないつ!!」

その剣幕に全員びたつと止ります。こうして見ると、確かに、ミュージシャンのみなさんなど、アクション・ドラマの敵側の下つ端に見えないこともありません。お互いにお互いのかつこうのウサン臭さを改めて確認し、照れ笑いななど浮かべてしまひます。

「じーさん、じーさん」

ケンは頭を掻きました。

「勘弁してくれよ。俺らそのロイドのともだちだぜ」

「ほんとうか」

ロイドは気障つぼく肩をすくめました。話しているうちに、やつと冷静な気持ちを取り戻してきたようです。

「そうか。ならば、よし! 怪しい奴らじゃが、全員、特に、わしの玄関をくぐり、わしの居間で、わしのとつときの紅茶を飲むことを許可してやるつ。恩に着るがいい」

「……あのな、じーさん……」

ハリケーン・ジョーが代表して何か抗議をしようとしたが。

「氣をオつけえっ!!」

開けた玄関のドアの脇で、サムが、ザツとほうきを「捧げ銃」にしながら鋭い声で号令をかけたものですから、思わずきつちり直立してしまいました。

「全員、整列うっ!!」

ケンもミュージシャンのみなさんも、みんな大慌てで、ジョーにあわせて並びます。

「揃ったか。揃ったな。そこ。こら、その太鼓腹をひっこめろっ。では。ぜんたーい、すすめっ。……はつぶ・とうー、はつぶ・とうー……こらそこ、だらだらするんじやなあいつ!! はつぶ・とうー、はつぶ・とうー。よし、その調子だ、みんなやればできるじやないか。はつぶ・とうー、はつぶ・とうー!!」

オジサンたちの行進が規則正しい二拍子で玄関の中に消えると、ロイドが片手にカンノンの花の鉢を抱えたまま、もう一方の腕をうやうやしく優雅にさしました。アナは、ケープの裾をつまんでちよこんと挨拶をし、その腕に手を預けて、ドアを潜りました。

とっておきと言うだけあって、おじいさんの紅茶はほんとうに美味でした。りんごの甘露をかけたそば粉のパン・ケーキと、たつぷりのホイップ・クリームで食べるもぎたての苺も、なかなか素敵でした。

悲しいことやみじめなことや辛いことがあってどうしようもない時、とりあえず美味しいものでお腹をいっぱいにするのは、よい方法です。元気がでます。力が湧いてきます。きつ

と、家族の中でたったひとり残されたおじいさんは、そんな風にして、しょっちゅう自分をはげましていたのでしょう。アナやロイドが手伝いはしましたが、こんな大勢分の支度しだくもとても手際よくしてくれてしまいました。

そうして、こんなお茶の時間を持つと、こころが落ち着きます。

熱いミルク・ティーのお代わりをしながら、こどもたちとジョーとサムおじいさんは、ようやくお互いの知っていることや持つているもの、考えていることについて、話し合うことができました。言ってみるものです。

「不思議な歌を探してるじゃと？」

サムおじいさんはお茶のポットを片付けながら、フンと顎あごをしゃくりました。

「そのジューク・ボックスはどうじゃろう」

「ジューク・ボックス？」

「ああ。昔、古道具屋でみつけたんじゃがな、なにしろただの一度も鳴ったことがない天下のクズじゃ。ほっほっほー、おまえさんら、そのPSIとやらの力で、そいつを鳴らすことができたら、何か起こるんじゃないかね？」

それはあまりにも派手など、ピンクでした。古めかしくて装飾まうじゆりてき的で、あまりにもケバケバシイので、へんてこな家具か、逆にものすごく由緒ゆいよたらしい骨董品こつどうひんか何かのように見えていたのです。けれども。

なにげなく近付いていったケンが、ああっ、と声をあげました。

「このマーク！昔もらったバッヂと同じだ！」

赤毛で三つ編みのピツピがくれた、友情のしるし、フランクリン・バッヂです。それは、今はもう通用していないトークンを利用したものでした。止め金の部分は、簡単に外れます。恐る恐るスロットに入れてみると。

ああ、メロディです！

確かにあの、懐かしい物悲しいメロディです。まだあまりよく事情の飲みこめていないオジサンたちまでが、思わずホロリとなつてしまふような、胸の奥の誰にもさわらせたことのない場所にしまいこんでいたものを目覚めさせるような。

これで七つのうち、六つまでが揃つたのでした！もうあとひと息です。

三人がここまでの旋律をオカリナと歌で復習します。二コーラス目には、ジョーのバンドのメンバーたちが次々にきれいなサブ・パートを加えます。素晴らしいハーモニーです。そのあまりにもきれいなアカペラぶりに、調子つばずれのオカリナはコソコソ引込んでしまいました。ジョー自身は、おじいさんに手真似で頼んで手にいれた古いギターで伴奏をつけようとしてくれたのですが、それはガットがおバカになつていてどうにもチューニングが合いません。しょうがなくジョーがあの深い声で歌いだすと、思わずみんな歌うのを止めて、じつと聞きいりました。アナの細く澄んだソプラノもなかなか捨てがたいものでしたが、おとなの男の訓練した声でゆつくりと歌われるそのメロディは、なんとも実に、神秘的な力を持つている感じがしました。あとほんの少しだけの欠けを補えば、まさに完璧です。

「やれやれ。それにしても、あんなにさんざん苦勞して探してたものが、隣の家にあったなんて」

ロイドはため息をつきました。

「バレンタインの町にあるはずだったのにね」

アナはチラリとノエルを見ました。

「うん……まあ、あそこに行ってみなければ、ここに戻っては来なかったってこともあるだろうけどねえ……」

「青い鳥、青い鳥。お家が一番」

にやにや笑いながら茶化したケンが、ふと我に返って青ざめます。

「家って言やあ……じーさん、ちよつと電話かしてくれ！」

「長距離か？」

「ケチるなよ。すぐそこだ」

悪い予感にあたってしまいました。

電話に出たケンのふたごの妹たちは、たちまちステレオで泣きだしたのです。

「おにいちゃん！」

「どこ行つてたのおにいちゃん！」

「どうした？ どうかしたのか？」

「おかあさんが」

「おかあさんが」

「なにっ！」

やっぱり、ある日突然、おかあさんがいなくなってしまうたと言うのです。サンクスギビングに起こったことは、ご近所のマザーズデイの町でも、郊外（こうがい）のケンの家でも、やっぱり起こっていたのでした……！

それからの半日は大忙しでした。ケンは妹たちを迎えに行き、ジョーとバンドのオジサンたちとアナは、手分けをしてそこらじゅうの家に残っているひとびとに最新情報を聞き回りました。ロイドとおじいさんは、おかあさんが無事帰って来た時まだちゃんと咲いていられるように、カンソンの花を、裏庭のいちばん土のよいところに移植しました。ノエルひとりには、ただただずーつと眠っていましたけれども、なにしろ赤ちゃんですからね、責めるわけにもいかないでしよう。

そうして、夜。

夕ご飯の後で、みんなはまたサムおじいさんの家の居間に集まりました。

「いよいよ最終段階がはじまったんだと思う」

ロイドはことばを切つて、自分のことばの重みを自分で受け止めるように、両手を握（にぎ）りしめました。

「もう一刻も猶（ゆっ）予（よ）はならない。ぼくは改めて、考えてみた。わからないことがいくつもある。

例えば、なぜ、イースターの町からおとなたちが消えたのか。なぜ今また、このあたり一帯から、おかあさんたちばかりが消えたのか。侵略者たちは、いったい何を求めているんだろ。だいたい、なんだって奴らは地球にやって来たのかもさっぱりわからないわけだけど……動物や人間にやたらに催眠術さいみんじゆつをかけたことでもあるし……どーもさ。何かを必死で探しているって感じがするんだが。違うかな？」

誰ひとり口を挟みません。ロイドは、おとなたちと旅の仲間たちを見回して、ちよつと照れたように頭を振りしました。

「そんなに暗くならないでくれよ。じゃあ、今度は、わかっていることを数えてみよう。まず、この件にはなんらかの形でクイーン・マリーが関係しているのは確かなわけだ。あと一つメロデイが集まれば何かが起こるというのも、たぶん、嘘うそじゃあないはずだ。そして、宇宙人も連れさられたひとびとも、みな、ホーリー・ローリー・マウンテンにいるはずだ……この町の男のひとたちもたぶんあの山を目指しただろう。じゃあ、ぼくらには、何ができるんだ？」

ケンがのそりと手をあげます。ロイドが顎でさします。

「PSIはどうだ？」

「どう、とは？」

「だからさ。あのな。おれのひいじいさんはPSIの研究をしてたらしくって、そうして俺はそのじいさんに似てるって言われててな……いや、つまり。うーん。うまく言えないけど。

そこらへんが、何かこう、何かとガチツとはまるんじゃねえかな。でもって、そうすると、全部の謎なぞがとけるような気がするんだが」

「そうよ！」

「そうよ！」

「ミミーとミニーが、ステレオでわめきます。

「おにいちゃんを頼たのりにしろって」

「おにいちゃんだけが頼たのみの綱つなだって」

「相当なブラコンです。」

「パパがそう言ってたもん」

「パパは何でも知ってるんだもん」

「ファザコンでもあるみたいです。」

「でもパパは」

「電話つながらなくなっちゃったし」

「だいじょうぶなのかしら」

「ママは？ ねえ、ママはどこに行ったの？」

「おにいちゃんもどっか行っちゃうの？」

「また行っちゃうのお？」

「ミミー怖こわいよ」

「ミニーも怖い」

「行っちゃやだ」

「やだよ。やだやだ！」

わああんと泣く声もユニゾンです。

「ミニー。ミニー」

ケンは妹ふたりを抱きしめました。

「ごめんな。すまないと思つてる。おまえたちの気持ちにはよくわかる。わかっているんだけどさ。おにいちゃんにもどうしようもないんだ」

「ぶー」

「ぶーぶー！」

「聞き分けなさい。ふたりとも強い子だろ。このおにいちゃんの妹じゃないか。頼むから、うんと踏ん張つて、がまんしてくれ。きつと、もうちよつとの辛抱だから。みんなハッピーにサイコーに、ご機嫌に片付くんだからさ」

「ほんとに」

「ほんとに?？」

四つの瞳で真剣に見上げられて、ケンは思わず、ロイドとアナを見ました。

「行きましょう」

アナは低く言いました。

「ホーリー・ローリー・マウンテンに。もう、行つてみてもいい頃だと思ふの」

「それはほくも考えていた」

ロイドがうなずきます。

「メロデイも残りはたつたひとつだ。全部揃う前に、一度、敵の陣地を下見しておいたほうがいいかもしれない。できれば、最終的な戦いの前に、囚われているひとびとを解放したい」

「そうだな……行くか。ホーリー・ローリー・マウンテンに！」

「うん」

「行こう！」

三人が眼と眼を合わせて、しっかりと決意しようとした時です。

「議長！」

ハリケーン・ジョーの丸太のような腕が挙げられました。

「あのなあ。年寄りから、ひとつ、提案があるんだがね」

「なんですか」

「おまえは、残んな」

指差されて、えつ、とロイドの眼が丸くなります。まあ、待て待てと動作をして、ジョーは膝の上に肘をつき大きなからだをロイドのほうに乗り出すようにして、言いました。

「いいか。例えばだ。俺らのみみたいな長いツアーにやな、クールになることが肝心なんだ。

最後のステージがはねるまでは、ぶつ倒れるわけにやあいかねえからな。下手に途中で熱くなりすぎて、ぶちかましすぎちまうとまずいんだ。その時は盛り上がるからいいようなもんだが、後が続かねえ。一回一回燃え尽きるのは大事だが、ほんとうに大切なことは、最後の最後までは、けしてほんとうのほんとうには燃えつきないでおく、つてことなんだ。そこらへんの匙加減を冷静にやつてのけて、ずっと全体を掌握してコントロールしておくことが、なんだって必要なわけだよ。ま、使い捨て扱いの尊い犠牲となるボーヤどもも、欠かせねえんだがな」

「……クール……」

ロイドは拳骨を唇にあてて考えこみました。

「だいたいな。どんな戦争だって、作戦本部つてもなあ、最前線よかはうーんと下がった守りの固いとこに置いとくもんじゃないやねえか、な、じーさん？」

サムおじいさんは急に呼ばれたのでビックリしたようでしたが、みんながじっと見つめてみると、威張った感じに胸を張つてもつたいぶつてうなずきました。

「で、提案だがな。このチームの頭脳つて言やあ、おまえだろうが」

ロイドはツイツと眼鏡を押し上げます。

「だから、おまえはどこか安全な場所、そのうるさい娘つコどもだのあの眠つてばっかの赤ん坊だのを守っていたらどうだと言うんだ。ホーリー・ローリー・マウンテンなら、バレンタインの町が一番近いぞ。あそこからなら、林道を通つて、山の中腹まで、車でも登れる。

普通のセダンじゃキツイが、実は「シャープ」がランクルを持つてる」

「え、ま、まさか」

飛び上がった「シャープ」はジョーに横目でにらまれて、あわてて座り直しました。

「いい車だ。テレポーターションほど速くはないがな。そうして、おまえらガキどもにや、運転ができないだろうし、あんな山道じゃあ、迷っちゃうに決ってる。だから」

ジョーは、ここですかさず、ニヤツと笑いました。

「俺が、行ってやるって！」

8 秘密の湖

長い長い登り坂の道を、ランドクルーザーはガタガタ弾みながら登りつづけました。石だらけのひどい路面、もの凄いカーブを、ジョーは口笛まじりで飛ばします。あんまりすぐく揺れるので、ハンドルを切るために動く肘が、横に座っているケンの頭をしょっちゅうひっぱたきそうになります。

ジョーは、実に屈強の戦士らしく見えました。なにしろこのからだです。タイガー・ストライプの迷彩柄が、ごついジャングル・ブーツが、めちやくちや似合います。アーミー・グリーン(Tシャツは特大のサイズなのですが、あんまりぴったりすぎて盛り上がった肩から腕にかけての筋肉をしめつけてしまうので、袖のところにちよんと切れ込みを入れてあつたりします。車を降りたら、さらに、弾帯をバツテンがけにしてカービン銃を背負い、蛮刀片手につき進もうというのですから、本格的です。

コージェイネイトを担当したケンが、思わず惚れ惚れするような、男っぷりでしたが、アナは正直に言つて、気分が良くありません。

悪路に酔いそうになっているのでもありますが、この、ふたりの『男の世界』に、入りこ

めない感じが面白くないのです。もともと、こんな乱暴っぽい、戦争っぽい雰囲気は好きじゃありません。たった三人で来ているのに、ひとり仲間外れみたいなのは悲しいです。

おまけに、ジョーのそばにいますと、ケンがなんだか頼りなくこどもっぽく見えてしまいます。小さく細く、か弱そうに見えてしまいます。比べる相手が相手ですからしかたがないと言えはしかたがないのですけれど。

運転席を占める小山のような背中と、助手席の華奢なうなじ。

なんだか、ため息が出てしまいます。

アナは眼を窓の外に向けました。

ちょうど道が山肌を回っていたので、張り出した岩を避けたとたん、あたり一帯がパノラマになって見えました。北部ファースト山系の小高い山々です。鋭く落ち込んだ岩肌むきだしの斜面の裾のほうにはスプーンですくえそうな霧がうずくまり、ゆつくりと吹き流されて行きます。標高はもう相当に高く、稜線のほとんどが、眼よりもずっと下にありました。

雪こそほとんどありませんが、この高さでは春はまだまだ遠く、木々は緑を取り戻していません。痩せて、ねじれて、厳しい環境にしがみつくようにして生えているのですけれども、枯れ木ではありません。長い寒さを辛抱して萌え出ようとする芽の、まだ隠れている生命の力が、色が、華やかな秋の紅葉とは微妙に異なる渋いニュアンスに、山肌のひとつひとつを色づけているのです。

雲の切れ間から注ぎ来る太陽の光が、霧ごしに、なにもかもを光と影とに塗り分けま

視野いっぱいを使つてもまだ全部見ることはできない、頭をぐるぐる回してようやくその大きさを掴むことができる、峻巖しゅんがんにして壮大な光景でした。

人工的なものばかりのあのバレンタインの町の奥に、こんな、人間の手の触れない自然が残っているわけです。いいえ、むしろ。こんな圧倒的な存在があったからこそ、人間たちは、あんな町をも作らずにいられたものではなんでしょうか。

「……すごい景色……」

思わずつぶやくと、ジョーがバック・ミラーごしに、歯みがきのコマーシャルみたいに笑いました。

「青い顔してたが、アナ。景色に感動するゆとりがあるんならだいじょうぶみたいだなあ」
「だ、だいじょうぶです」

「青いつて？ また酔つたのか？」

ケンがふりむきます。

「アナは、ほんとに乗り物に弱いな。お嬢さんじょうさんなんだなあ」

「だいじょうぶ！ そんなんじゃないつたら」

つい頬ほおがふくれてしまいます。ケンは黙だまって肩をそびやかすと、すぐに前に向き直つてしまいます。さつさとジョーと話しこんでしまいます。何か指差したりして、楽しそうです。

……なによ。本気で心配してくれるなら、もうちょっと、何か言ってくれればいいのに。

お嬢さん、ですって？ 弱いですって？

「そんなんじゃないったら」

誰にも聞こえないくらいの声でつぶやきながら、アナは、少しでも顔色がよく見えるように、こつそり両手で頬をこすりました。

峠を越えると、道はいつそうひどくなりました。おしゃべりなどしていると舌を噛んでしまいそう。だいたいエンジン音がすごいので、よほどの大声でないと聞こえません。だから、男たちの話声も、ぎやくに響いて聞き取れるようになりました。

「これが抜け道なんだよー。このへんにな、昔、よく仲間と来たんだわあ」
がたがたがたがた！ ばうばうばうばうばうん。

「オンナの子口説くにやあ最高のロケーションなんだぜえ。景色はいーし、空気はうまいし。なんだって、腕え見せるチャンスだしな。置いて帰るぞっっておどしや、なんだって言うこときくわけさ。わははははははは！」

「あははは。ワツルう！」

「ワルだあ？ 上等じゃねーか。まるでワルくねえ男なんかろくなもんじゃねーぞお、ケン。違うか？」

「んだかも」

「わはははははは、なに気取ってやがんでー。女つてのはな、最後の最後まではとにかく上品ぶりたいからさ、こつちが野獣のよーにふるまってみせりや、イチコロなのよ、実は『い

らっしやいませえ」なのよ。そーゆーものよ」

「ふーん……。ジョー、結婚したこと、あるの？」

「んがっ！ い、痛ててて、舌噛んだじゃねえかバカヤロ」

「好きな子いたんだろ。どんな子だったの？ 可愛かった？」

「おめ、そりや、だからよ。おりやあよ。自分がこんなだからあんまり乳のでかいよーなのはダメだよ。そりやもう楚々とした美人つてのがタイプだったんだが」

アナは聞こえないふりをしていましたが、胸がドキドキしてたまりませんでした。

なんかずいぶんひどい話をしてると思ったり、ほんとうにそうかもしれないと思ったり。教会のお嬢さんだつて（だからこそ？）、男の子は少しワルいくらいのほうがカッコいいつて、思います。真面目で清潔で規律正しいひとは、おとうさんひとりいればたくさんですものね。

好きな子。

ケンの声が耳の奥をいつまでもこだまします。

ひよつとして、これから話はケンの好きな子のことになるんじゃないか。ケンは、いったい、どんな子が、タイプなんだろうか。

考えてもしかたのないことが、頭の中をぐるぐる回るのです。

「……それがラドクリフの学生でさ。眉なんかこーんなに太くつて、おっかないのなんの。そりやほんとの性格はけっこういじらしいんだつてわかっちゃいるんだが、なにせ、言うこ

とがきついきつい。まあ、女なんでもんは、最後にやあ力で押えこんでやりやあなんとでも……おっと！」

幸いと言うか、不幸にしてと言うか。話がジョーの好きだったひとのところから出ないうちに、車を止めなくてはならなくなりました。

大きな木が横倒しになっています。雷にでも打たれたのでしようか、雪につぶされたのでしようか。まだ生木なのに、可哀想に、途中からベキバキへし折れて、道幅いっぱいをすつかり塞いでしまっているのです。これまでも、ちよつとした段差や張り出し過ぎている枝やなんかは無理やり押し通つて来ていたのですが、これはちよつと大物すぎました。乗り越えられそうにもありません。

ジョーとケンはランクルを降りて行きます。無言で、大木のおちちとこつちに取りつき、眼で合図をして、ふむっ！ と力みます。どちらの顔も真っ赤になりましたが、木はびくともしませんでした。

アナも車を降りました。地面にひっくり返つてはあはあ言つて苦しんでいるケンのすぐ横で、ジョーはそれほどたいしたことしていないような顔で、顎をこねくりながら考えこんでいます。

「ふーむ……このルートがいかなとなると……いやあつちはうんと遠回りだ。ガソリンがなくなる。まずいなあ」

「ジョー」

「アナは大きな大きな男のひとを見上げました。

「驚かないでね」

「あ？」

「アナは黙って木に向き直り、軽く眼を閉じて集中します。

光よ。

エネルギーよ。

生命たちよ。

あたしを通して出てお行き……！！

スパーク！！

「……それがあつた、忘れてた」

「にやにやするケンの横で、ジョーは（ちゃんと前もって注意してあげたのに）あんぐり口をあけて立ち尽くしてしまっています。アナは黙って車に戻り、なんにもなかったかのようにきちんと座って待ちましたが、ふたたび車が動きだすまでにはしばらく時間がかかりました。きつと、ジョーのこころは多少乱れたのでしよう。その後の会話にも、さきほどの勢いなど、なくなつてしまつたくらいですから。」

大木は、もちろん、あとかたもなく消えてしまつておりました。

ランクルは山を回り、谷に降り、せせらぎを渡つて、とうとうホーリー・ローリー・マウ

ンテンの麓^{ふもと}までやって来ました。

「よし。ここらで降りよう」

ジョーは巨大な山登り用のリュックサックを背負い（それでも普通のひとが普通のリュックを背負ったよりも、ずいぶん楽そうに見えました）、特大の懐中電灯^{かいちゆうとう}を手にしました。ケンはリュックサックをかけて、わりと大きいほうの懐中電灯を持ちました。アナは、オイル式のランタンをただひとつ、持ってゆくことになっています。三人とも、前の部分に照明装置のあるヘルメットをかぶりました。

頂上に抜ける一番速いルートは、鍾乳洞^{しょうにゅうどう}だったので！

「ほんとに、道、わかるんですか？」

「まかせろ！」

ジョーは胸板^{たな}を叩きます。

「せせらぎがあるんだ。そいつをたどつてきやいい。ガキの頃^{ころ}なんでもここで、トム・ソーヤごっこをやったから、よく知ってるんだ」

「そのたびに違う『ベティ』といっしょだったんでしょ」

ケンが鋭くつつこみましたが、ジョーはチラツとアナのほうを見て、オホンと咳^{せき}をして、続けました。

「だいたい、ここは自然のまんまじゃねえ。大昔、観光地化しようとしたらしくてな、ところどころに案内板がある。危ねえ場所には足場が組んであるし、入っちゃならねえところには

金網も張つてあつた。きつと道路をひっぱつて来る計画でも潰れたんだらう。迷うようなとこじゃねえ。ただ、滑るから気をつける。じゃ、行くぞ」

ぼとんぼとん、ぴちよん。ぼとんぼとん……ぴちつ。

とつくに降りやんだ雨の名残りのような水音が、どこか遠くから聞こえてきます。だからかえつて、鍾乳洞の中の静かさが際立つみたいです。

懐中電灯やランタンの灯りが届くと、壁と天井と地面と、あたり全部をくまなく覆つていゝる鍾乳洞独特の奇妙な石や岩が、ぬらぬら冷たく輝きます。どこもこれも、だいたいは白と言つていい種類の色ばかりなのですが、かすかに薔薇色がかつていたり、青みを帯びていたり、なかなか微妙な具合です。小さな茸が並んでいるようなもの、ひとの顔に見えるもの、うずくまつたカエルそつくりのもの。形も、実にさまざまです。

道は緩やかに登つたり下つたり、曲りくねつてうねりながらどこまでも続きました。通れないんじゃないかと思うほど狭くなつたかと思うと、天井も幅も広がつて、いきなり大聖堂のホールのような場所にぽっかり出たりもしました。ところどころに、ジョーのいうとおり、朽ちかけた看板が見えましたが、字はもうほとんど読めません。ぬつとそびえている巨大な石筍が、待ち伏せをしているひとそつくりに見える場所では、三人とも思わず身構えてしまいました。が、実際には、動くものとは言へば（彼等自身の他には）遠くのほうを飛んでゆく瘦せたコウモリくらいしかありませんでした。

洞窟は長く、どんどん歩いていけるうちに、なんだか少しずつ少くなく、ついでに魔法にかけられていくような気持ちになりました。あたりの景色はけして（例えば砂漠のように）単調ではないのですが、終点がどこにあるかわからない道は、遠く感じるもの。ぐるぐる同じところを歩いているように感じるもの。おまけに、実際の現実の普通の世界にあるのに、とてもそうとは思えない光景ばかりなんですからね。

歩きながらアナは、いつしかあのマジカントのことを思いだしていました。そして、そこに行つた時陥つてしまつたあの妙に寂しくこころ細い気分も、時と場所を越えて、はつきりと蘇つて来たのでした。

あの時は、ケンとロイドとアナの三人組でした。今は、ケンとジョーとアナです。偶然と
いうほど大袈裟なものじゃないけれど、またしても三人チーム。

ジnkクス、感じます。

三という数は、どうも縁起が良くないのではないのでしょうか。

簡単に、ふたつとひとつに分れてしまう。そうして分れた時、かつこで括れるのはいつもアナではないふたりのほう、アナは必ずひとりぼっちになつてしまうのです。どこがどうと
うまくは言えないけれど、男の子たちはいつだつて、アナは別、ぼくらはぼくら、つて態度
をしているような感じですよ。

でも、こんなのは、考え方次第だわ。

アナは思います。

元氣、元氣！ 元氣を出して。つまらないことでクヨクヨするのは、やめやめ！
そうそう。ロイドがいた時と今は、ずいぶん違はずです。

だってロイドとケン、アナの知らない冒険をいっしょに乗り越えてきた友達だったのだから、仲が良くてあたりまえ。男の子同士だし、住んでいるところも近いし、暮してきた世界が割合に似ているようです。後から加わった女の子であるアナが同等になりきれない気持ちを持つのは、しょうがないこと。

でも、ジョーはそうじゃありません。うんとおとなだし、ついこの間逢ったばかりのひとです。ひとり別扱いになるのは、アナじゃなく、ジョーであつたつて、いいはずです。

同じ三イコール二たす一のジnkクスでも、もしかしたら、今度は……。

「きやつ！」

あんまり真剣に物思いに浸つていたので、もう少しで転んでしまふところでした。いつの間にか足元に、ちよろちよろと水が流れていたので。

奥へ奥へ進むにつれて、流れは次第次第に大きくなっていきました。気をつけて歩かないと靴下を濡らしてしまふそうなくらいから、どうしたつて無視できないくらいに。それから、ごうごうと音を立てるように。今では、もう流れというよりも深みです。鍾乳石が張り出しているから全部一度に見えないだけで、ずいぶん巨大な湖のようです。水は青くて、どこまでも透明でした。光のささない地底深くを流れているので、とても冷たく、とても澄んでい

美味しそうな水。

と、アナは思いました。

でも、飲めないかもしれない。飲んだりしてはいけなかもしれない。こんなに敵地に近い場所なのですから、危険です。剣呑です。何か毒のようなものが溶けていないとも限らないし。もともとの成分だつてわかりやしません。

「摂氏零度なんだそうだ」

それでもずっと、じつと水に見入っているアナに気付いて、ジョーが振り返つて教えてくださいました。ヘルメットや手元の灯りがあたりの石に反射しているせいで、顔に妙な影ができていて、ちよつと不気味な感じがします。

「氷点、つまり、水が氷になる温度だな」

なんだかロイドの代理で教養の係をしているみたいです。

「つねに流れているから、やつとこどうにか凍らないでいるわけだ。めちやくちや冷たい。だからここには、魚もプランクトンも何にもいない。まあ、ミネラルくらいは溶けてるかもしれないが、あんまりにも透明すぎる、純粹すぎる水さ。昔、調査のために潜ったダイバーたちが、ずいぶん大勢事故を起こしたらしいぜ。たぶん、寒さと、あまりの透明度で距離感がおかしくなるせいだろうな」

アナはそつとうなずきました。

「怖いね」

「ああ」

「けど、きれいだな」

ケンは何かポケットの中にあつたものを水に放り込みました。広がる波紋が、そのやはり別人めいた奇妙な顔に、ゆらゆらと青みを帯びた光の模様を投げかけました。けれど、あのブルーの瞳は、そこだけが、この地の底深く隠された湖の水の色と同じ。どこまでも透明でどこまでも深い純粹の青さだけは、まったく変っていないのでした。

きれい。

アナは改めて思い、なんだかドキドキして来ました。

そう。きれいだわ。

ケンの眼つて、とつても。うううん、眼だけじゃない。いつもふざけてばかりいるからわからないけど、こんな風にじつともの思いにふけてる時のケンの顔つて、ほんとうはとつてもハンサムなんだわ。きつと自分でも気がついていないんだらうけれども。

「ここはなあ」

ジョーはまだ知識を披瀝しています。

「確か、世界じゅうのどんな海や湖よりかも、透明度が高いはずだぜ。ほら、そこいらへんなんか、全部底まで透けてるみたいに見えるだらう。だがな、たぶん、ゆうに五百フィートはあるだらう。おい、ケン、いっちよ、飛びこんでみないか？ 底にタッチして来れたら、イルカ勲章をやるぜ」

「なんだそれは」

「俺おれのハイ・スクールじゃ、水泳のうまい奴やつにイルカ勲章を出したんだ」

「やだよ。こんなところで死にたくないよ、俺」

「ひゃひゃひゃ」

そおかしら。

アナは思います。

いやかしら。なんだかとっても素敵すてきそうじゃない？

だって、そんなに冷たい水ならば、きつと落ちたとたんに心臓マヒです。痛くも苦しくもないはずです。おまけにこんなに深くてプランクトンも何にもいないというのならば、魂たましいが抜けてしまったからだそのものは、けっこう長いこと、もしかすると、いつまでもいつまでもそのまま変ることなく残り続けるのじゃあないでしょうか。

人間はみな誰だれだって、いつかは必ず死ななければなりません。どんなかたちで死ぬことになるのか、ほとんどの場合は選べません。でも、もしも選べるとするならば。

こんな場所です。

誰も知らない水の底に。

時の流れから切り離されて。

透明な純粋なブルーの中をいつまでもいつまでも永遠に漂っていくなんて素敵じゃあないかしら……？

アナは想像して、ついうつとりとなつてしまいました。

眠り姫は茨いばらに守られたお城の奥で、百年、としをとらなかつた。百年待ち続けたから、王子さまが、やつとキスをしに来てくれたんだわ。

青い青い水の宮殿はきつと茨の城なんかよりも、もつと素敵に強力だわ。そんじよそこの王子さまじゃあ、とても太刀打ちできっこない。だから、もしかすると、百年たつても、たとえ千年待つたつて、結局誰ひとりたどりついてはくれないのかもしれないけれど……。

あんまりじいつと見つめているうちに、水に吸い込まれそうになつて、ほんとうにふらりと身を投げてしまひそうになつて、アナはあわてて頭を振りましました。力をこめて、水から眼をひきはがしました。

気がつけば、男のひとたちは、いつの間にかもうどんどん先に歩いて行つてしまつています。あんまり離れると、迷子になつてしまふかもしれないません。急いで追いかければなりません。

でも、歩けないのです。遠ざかれないのです。

二・三步はなんとかかんとかがんばつても、すぐに足が止つてしまいます。また強く吸ひよせられてしまうのです。

誰かさんの瞳の色と同じ、神秘のブルーに。

水は眼に見えない力でアナをとらえ、やんわりと引き戻しました。よろめきながら、アナはしばらくのあいだ、あくまで抵抗をしていましたが、ふと、眼についでしまつたのです。

少し脇、水面に近いところまで岩を伝って行けそうな場所があることに、気がついてしまったのです。

そのとたん、アナの足はぐいぐいと道をそれました。どうしても、そうせずにいられない、今そうしないと、一生後悔する。そんな気がしていました。止めようと思っても、もう足が止りませんでした。

やっぱり降りていけます。すぐそばまで。水に手が届くところまで。

岩の上に膝をつくとき、アナは知らず知らずのうちにランタンを下ろし、大きすぎてぐらぐら邪魔なヘルメットを外していました。

震える手をそっと伸して、水に触れます。触れたか触れないか、ぎりぎりに、そっと。ゆっくりと波紋が広がります。

もう一度。まず指先だけ。それから、片手をいっぱい浸してみます。そうして、両手を差し伸べてみます。

冷たさはあまり感じませんでした。むしろ、ほてりを覚えます。水その爽やかで鮮烈で清浄なありかたに比べて、自分は、人間は、からだは、世界は、なんと生ぬるく汗臭いのでしょうか。こころは、なんと濁って重たいのでしょうか。

洗礼。

清めの水。聖水……！

ついさつき、危険かもしれないと思ったばかりなのに、もうどうにも我慢できませんでし

た。アナの小さな両手が不器用に青をすくいます。どんどんこぼれてしまうから、うやうやしく頭を垂れて、手のほうに顔を近づけてゆかなくてはなりません。くちづけます。冷たくて柔らかな水の接吻。すすります。

……飲みます……。

きらきらとしくが舞い散りました。

もしも月の光を飲むことができたなら、きつと、こんな味がする。

そう思ったのは、誰だったのでしょうか。

冷たさは靈氣のように一瞬のうちに駆け巡り、からだじゅうを満たしました。その時、アナの生命を作っているすべての細胞が、変化してしまつたのです。

「……何してるんだ？」

青い瞳の少年が、少女の瞳をのぞきこみます。

「おい、しっかりしろ。どうした？ 具合悪いのか？ なんか変だぞ。大丈夫か？」

少年の手は乱暴に無骨に肩を揺すります。少女がそつと咎めるように、その手に指を重ねると、少年はハツとして動きを止めます。

「美味しい」

少女は、大事な秘密を教える時の口調で、そつと囁きました。

「え？」

「これ、とても、美味しいのよ」

「へ……？」

青い瞳の少年は手をひっこめます。何か恐ろしいものにうっかり触ってしまったかのように。こちらを見つめる眼には、どこかしら、非難と不安の匂いがあります。何をいやがつていたのでしよう。何を怖がり、ためらっているのでしょうか。

少女は焦れて、小さくため息をつきます。

美味しいのに。こんなに素敵なのに。

「ねえ。あなたも、飲んでみない……？」

ほら、すくつてあげるから。

差し出した両手の隙間から絶え間なくこぼれて落ちていく水が、ふたりのあいだに七色の光線を散らして、ほら、なんてきれいでしよう。

少女は嬉しくってたまりません。

だって、だって、こんなにきれいなんですもの。

少年は突然、怒ったような動作で岩の尖端にしゃがみこみ、乱暴にがむしやらにヘルメットを脱ぎ捨てます。倒れるように、飛び込むように、自棄つばちのように、水面に顔を突っ込みます。

「……おはっ！」

ぶるぶるぶるっ！ 泳ぎ終わった犬のように金色の髪を揺らした少年が、その眼をカツとひ

らきます。

水のしたたる唇を大きく開いてあえぎながら、探します。求めます。

いました。

もちろん。

少女は、もうずうつとずうつと前からそこにいたのですもの。いつも彼のすぐそばで、彼のことを見つめていたのですもの。

ふたつの瞳が出会います。

今、やつと。ようやく。

ほんとうの意味で。

鍾乳洞しょうにゅうどうの壁の上で、離れていた影が互いに吸いよせられるように近付きあい、別々にばらばらにあつたものたちがただひとつに溶け合います。ふたつ離れた水のしずくが、流れ、出会って、ひとつのしずくとなるように……。

……あたしのこと、好き？ ああ。もちろん。いつから？ たぶんはじめてあつた時から。うそ。そんな風には見えなかつたわ。そりゃね。いろいろと。じゃあ、なによ、焦びらしていたのね。そんなんじゃない。素直じゃないのね。きみだつて。そうかしら。なんだかお互いばかだつたね。そうね。でもしようがないわ。わたしは怖こかつたから。怖こかつた？ 何が。そうね。不思議ね。いったい何が怖こかつたのかしら。笑わわれること。拒こまれること。自分

洞窟どうくつを通り抜けてずいぶん久しぶりに青空の下に出ることができたその瞬間にも、少女の小さなこどもっぽい手は、少年の頑丈がんじょうで不器用なてのひらの中に、すっぽりと包まれたままでした。

信じられないほど幸福です。

彼かれが手をつないでくれている、ただそれだけで。あまりにも幸福すぎて、涙が出てしまいます（もしかすると、暗闇くらやみになれた網膜もうまくにつきささる太陽の光のせいかもしれませぬけれども、少女はそうは思いません）。

その胸を満たしているのは激しい情熱。愛いとしさ。愛いとしさは譬たとえてみればガラスの針。そつと大事だいじに守つていなければ壊こわれてしまうし、うっかり強く搦つかんだらすかさず貫かれ、ポキリと折れてしまうのです。恐ろしくて、痛くて、儂はかなくて、そうして、とてもとてもきれいなのでした。あまりにもきれいなので、見つめ続けていたくてたまりません。冷たく、鋭く、洗練されたそのかたちと感触を、そつとそつと確かめずにはいられません。あまり撫なでまわすのは危険だということが、わからないではないのに。

ついさつきまでは、ただ祈りのためにばかり使われていた手と、喧嘩けんかのために作られたかのような手でした。今その役割はどちらも捨てられ、忘れられています。ふたつの手は、たがいにたがいの働きを殺し、美点を縛しばり、自由を束縛そくばくしているのに、ふたりにとってはそんなこと、もうどうだって構かまわないのです。

恋より素敵なものなんて、どこにもありません。大好きなひとのそばにいるより大切なことなんて、ひとつもありません。ここるところがひとつに、『いつしよに』なったことを実感する、『知ってる』こと以上に価値のある何か、なんて、世界じゅう、いいえ、銀河系じゅう探したって、絶対に発見できないに決っています。

たとえばたつた今地球がまるごと消えてしまっても、かまわない。
ふたりはあまりにも幸福でした。

だから、道の向うの丘の上に、趣味の悪い鯖色さばいろうに光るいかにも悪役らしいキャラクターが大量のロボット兵士を連れて登場したのを見ても、ケンもアナも、まるで眉まゆひとつ動かしませんでした。だいたい、外界がちゃんと見えていたのかどうかすら、はなはだ怪あやしいくらいのものです。

「お……おまえら……おいおい、どうしたんだよいったい！」

必死に叫ぶジョーの声も、もちろん一切耳に入りません。鯖色キャラが腕うでをふりあげて攻撃の合図をしても、ロボット兵士たちがバラバラと繰り出し殺人光線を放ちはじめても、ジョーが大慌おおあわてで背中のXM177カービンを構え、乱射しはじめても、それでもまだ、ふたりの手は固く固く繋がれたままです。もうけして離さない。離れない。そう思っているのですから。

ふと、互いに互いの瞳を見つめあつてしまえば、もう何も怖くなんかありません。だって、ふたりはピカピカの合わせ鏡、無限回廊かぎりどうろのゆらめきの中にとじ込められて、ふたり以外の全

世界と完全に関係なくなってしまったのですから。

ああ！

と、彼は思い、

ああ♡

と、彼女が答えます。

こころとこころはひとつです。ふたりはいつしよで、そして、全部です。硝煙弾雨のその中で、愛は永遠に不滅なものでした。

やがて光線が彼の頬をかすめ、破壊されたロボット兵の腕の一本が飛んで来て彼女のスカートを揺らしました。たちつくす恋人たちの周囲一帯は、実に非ロマンチックな、戦場風景でありました。

なんだか騒がしいね。

彼の眼が、迷惑そうにちよつとしかめられます。

あ、今の表情、素敵♡

と、彼女は思います。

ね、この際、バリア、張っちゃおうか。

いやあん。あなたって賢い♡

そう。実はふたりは、PSIだったのです。そんなふたりが一心同体になってしまった今、彼等のサイコ・バリアは、まさに無敵でした。

「ケンツ、アナーツ!!」

大歌手の必死のリアも蚊かの羽音ほどにも聞こえませんが、敵キャラの攻撃も全部、自動的にジャット・アウトです。となれば、無駄な弾は打たない実利主義がロボット兵士、気の毒にもジョーは、たったひとり、集中攻撃されることになってしまったのです。

「うわあああああつ!!」

……ああん。

あああああん。あああああん。

赤ちゃんが泣いています。遠くで泣いています。

あああああん。ああああああん。

ふたりがいるのは、深い深い闇やみに満ちた部屋です。

あああああん。

赤ちゃんの声ができるたびに、部屋を閉ざす重たい重たい檜かじの一枚板の扉しりが、ぶるると震えます。揺れます。まるで、あちら側から、力まかせに押されているように。

あああん。あああん。

聞きたくありません。開けて欲しくありません。このまま、誰にも、邪魔をして欲しくありません。闇の中でもかまわない、ずっとこのままここにいたい。ただ、ふたりだけで、過ぎたい。

だからふたりは力の限り扉を押し返して、完璧な闇を守ります。

……ああん、ああああああああああん。ああああああああん……。

ぎぎ……ぎぎ……ぎイッ！

だめです。鈍い、痛い、千切れるような音をたてて、とうとうかんぬきが壊れます。ほんの一瞬、扉がこじあけられてしまいます。ごくわずかなかすかな隙間ができただけでしたけれど、向う側の世界のまぶしい光がサアツとさしこんで、こちら側のふたりを照射したのです。

あわてて押える扉。再び訪れた深い静かな闇の中で、四つの瞳が当惑気にまばたきをします。

何？ 今の？

光だった。ここでない場所からやって来た。

ここでない場所？ そんなものがあつたの。

ああ、あつたんだ。俺もすっかり忘れてたけど。あるんだ。そうだ。他にも何か、大切なものを忘れてしまっているような……。

……大切な、もの……。

ああああああああん。ああああああん。ああああああああん。

ぎぎ。ぎぎい。ぎぎぎぎぎいいいい。

あなあああん。あなあん。なあああああああん。

ぎぎい。ぎぎい、ぎい。ぎぎい。ぎぎい。ぎぎい……。

しつこくしつこく、扉が押されます。だんだん一定のリズムになって、何度も何度も叩き続けられます。小さな隙間が、少しずつ大きくなります。隙間ができるたびに、四つの瞳に光が入ります。見るもののない世界の中で、ほうつと焦点をなくしていた瞳が、ゆつくりと視力を取り戻しはじめます。

あああなななあああああん……あああなあああ……。

ぎぎい。

ぎつ……ば・たあん！

「アナあつ！」

聞き取れたのは呼びかけ。蘇よみがえったのは名前。

アナの瞳がカツと開かれました。

「ノエルっ?!」

たちまち吹きつけて来たのは荒野の風。視界に飛びこんで来たのは激しい戦いの痕跡こんせき。何よりも強く鋭く感じられたのは、おびただしく流された血のムツとむせかえるような生温なまあたかい匂いです。

ふたりはもう恋人たちではなく、戦士たちなのでした。

「……じよ……ジョオオツ!!」

アナが駆けより、ケンが抱き起こします。

ぼろぼろになつて倒れているジョー。あたりじゆうに散らばる、敵の残骸。

「いったい、何が起こつたというのでしょうか。ふたりにはさっぱりわかりません。鍾乳洞を歩いていたあたりまでははつきり覚えています。その後、なにか、変に甘い夢をみていたような気がしますけれど……漠然とわかる内容は、なんだか顔が赤らむものなようですけれども、具体的には何がどうなつたのかさっぱり記憶にありません。意識もろくになかつたのに、どうして自分たちは無事でいられたのでしょうか。ジョーはたつたひとりで、ふたりを守つてくれたのでしょうか。あたりの様子は、一応勝つたようには見えませんが、ジョー自身もひどく傷ついています。大きなおとなであるとはいえ、地球防衛軍としては最も新人、最も素人のジョーが、そんなにも立派に戦つてくれたというのに。自分たちはどうでしょう？ うつとりと夢に浸つて、現実逃避をしていたのでしょいか。」

「どうもひでえ尻にかかつたらしいな」
ケンが自嘲的につぶやきます。

「俺たち、とんでもない間抜けだつたらしいぜ」

「油断しちやつたみたいね」
「填められたな」

戦友が戦っている時に戦わなかつた。戦線に出ていながら戦いを放棄した。どんな理由があろうとも、最低の行為です。最悪の裏切りです。そんな正義の味方があるのでしょうか？
ケンののがひきつっています。

アナの瞳にも悔し涙があふれます。

でもほんとうのことを言えば、アナは、今はもう形もはっきりしないさつきまでの「悪夢」を、ちよっぴり名残り惜しく思っていました。醒めてしまった夢の例にもれず、もうどんどん遠ざかっていく一方だけれど、それはせつないほど甘く、とびきり暖かく、信じられないほど幸福な時でした。そのことをただの『ひでえ罘』と言いきってしまったわれることがほんのちよっぴり不満で、アナは伏せた眼で、チラリとケンの顔をうかがいました。

厳しい顔でした。本気で後悔しているようでした。ケンには、もう何の未練もないのです。「ジョーッ!! しっかりしろよっ!!」

偉大なる歌手の顔の半分は、汗の上に土ぼこりがべつとりと張りついて黄土色になっていきます。苦しうに唇をゆがめたまま、片手に銃を握ったまま、びくりとも動かないジョーの大きなからだは、まるで、古い遺跡から掘り出された戦士の彫刻か何かのように見えました。悲しいけれど、寂しいけれど、今は確かに、スイッチト・メモリーズにうつつを抜かしている場合ではありません。

アナも急いで頭を振って、夢の尻尾を振りはらいました。

「サイコ・ヒーリング、してみましよう」

「ああ」

ふたりはそれぞれのPSIの力の限度いっぱいを使って、ジョーの怪我や失血を治療しようとうしました。PSI特有の白熱した光が生ずるたびに、ジョーの大きなからだがびくんと

跳ねました。それでも、指一本、まぶた一枚、自分からは動かそうとしません。

「うそだろお。だめなのかあ？ 死んじまったのかよお」

「もう一度！」

「ああ」

PSIとて、力です。エネルギーを使います。神経をうんと集中しなければならぬので、手や足や頭を使ってする行為よりも百倍くたびれるといつてもいいくらいです。ふたりが、何度も何度もくりかえし、へとへとになるまで気合いをこめても、ジョーの巨体は、やっぱりぴくりとも動きませんでした。

「頼むぜ、眼を開けてくれよ。ジョーのオッサンよお」

ケンはまだもうこどものようになきべそ顔になりかけています。

「ちくしよう。これがもしも R P G だったら、リセットかけて、こんなことになるよりも前に戻っちまえるのに！」

ひらたく言えば、タイムマシンが欲しい、というところでしょうか。

ほんとうに。

と、アナも思いました。

あの「悪夢」の前まで、ほんの一時間かそこら前まで戻ることができたら。「悪夢」抜きで今を迎えることができたなら。その今は、この今ではない。つかの間の夢のせいで、何もかもおっぴらに変わってしまった。

一生のうち、そんな時が何度来るのでしょうか。時計の針を逆さに回せたらと、何度本気で思うのでしょうか。けれど、悔んでも、齒齧みして地団太を踏んでも、時は決して戻りはない。人生にリセット・ボタンはないのです。あるのは、ただオフのスイッチだけ。それを使ってしまったら、ゲーム・オーバーです。もう一卷の終りです。どんな一瞬一瞬も、決して、やり直しは効きません。ぼうっと過ごしていてもうまくいく時もあるし、必死に考えて悩んで選択しても結果として間違つてしまう時もある。せいっぱいがんばっても、努力しても、最後の最後は運まかせだったりもしがちです。

でも。
楽なゲームじゃないから。やり直せないから。

「だから、やっていけるんじゃない？」

うづくまるケンの背中にそっと手を当てて、アナは囁きました。

「完璧じゃなくても。意味がなくても。……うまく言えないけど……みんながみんな失敗のたんびにやり直ししてたら、世界じゅうの誰も彼もが優等生になっちゃうわ。そんなの、きつと、面白くないわよ」

「冷たい女だっ！」

ケンはアナの手を振りはらいました。

「世界がなんだ。こんな時に、何理屈こねてんだよ」

「あ、あたしはただ」

「うるせー！ 俺は、今、とにかく、ジョーに生き返って欲しいんだっ!!」

「……こーえーだぜ……」

「えっ」

不意に、彫刻の唇が震えます。まぶたが開きます。腫れて傷ついてひきつって、ちゃんと全部は開かない眼で、ジョーはのろのろとふたりを見回しました。そうして、不敵にも、ニヤリと笑ってくれたのです。

「ジョーっ!!」

「へへへ。泣かせるじゃねーか、ケン。すまん。お楽しみのおおっ……じゃ、邪魔しちまつて」

「何言ってるんだよ」

「ジョーさん！ 大丈夫？」

「あ、あんま、だいじょーぶじゃねーがよ……つつつ」

力のない顔をどうにか笑いの形にしながら、ひらひらと力なく、ジョーが手を振ります。

「頼むから俺のせーで喧嘩はするなよ。惚れあつてやがるくせに」

「え」

「え」

「なんだなんだ。まーだ意地張ってるのかあ？ ひっひっひ。早く素直になりやいーものを……まー若い頃つっつーのは、そーゆーもんだがな。ああ、そうさ。オジサンはよく知って

るぜ。やれやれ。懐かしい青春の日々よ……ううう……胸が痛えぜ」

「しつかりして！」

「老兵は、死にゆくのみ、つてかあ。もーひと花咲かせてからくたばりたかったが、どうやらこいつが、おいらの花道つて奴らしいぜえ、ぜえぜえぜえ」

「なあにが花道だよ。ぴんぴんしてるじゃないか！ バカ言ってる暇ひまに、さっさと俺におぶされよっ！」

ケンがジョーに背中を差し出します。あまりに小さく見える背中を。

「とにかく、連れて帰るぜ。山は後回しだ」

威張いばっていることには変りはありませんが、どことなく、これまでのケンの言い方とはパターンが違う感じですよ。変に静かで、変に断定的で。わざわざ大声でわめかなくたって意思が通じると確信しているというか。絶対に反論はさせないぞというか。極めて専横せんおうてき的だったりしないこともないのですが。

そう、思いはするのですけれど。

アナのほうはアナのほうで、いやに単純に、うなずいてしまえるのです。これは、あの、悪夢の時を経たせいなのでしょう。

「ランクルまで戻もどる。ずっと見てたから、俺でも、なんとか運転できると思う」

「うん。わかったわ」

「あのな」

ジョーの左眼は半分潰れたようにふさがっているので、なんだかウインクをしているみたいです。

「気持ち嬉しいがよ、ケン、俺の体重、知ってつか？」

「頼むから言うなよ。聞いたら絶対に背負えなくなるに決ってるからな……ッコラシヨッ!!」

掛声勇ましく、ケンはジョーの巨体を担ぎ上げ……たかと思つたのですが。せいっぱい力んでがんばっても、どうしてもジョーのつま先が地面を離れません。あまりにもあまりにも重すぎ、大きすぎるのです。

「……うーんっ!! ぐあああああつ!! とおりやあつ!! ……はあはあはあ」

「しっかり!」

「悪いこと言わねえ。下ろせ」

「こなくそっ!! 負けるもんかあつ! でやあつ。いやああああああつ!!」

「よせてばよ。無駄だつて」

ああ。こんな時に、ノエルがいてくれたら。

アナは思います。

ノエルの力で一瞬のうちに移動できれば。三人とも、すぐに助かるのに。

こんな、いつまた敵が出てくるかもわからない場所で、動けないジョーを抱えこんでしまつたなんて。しかも、アナもケンももうPSIパワーがほとんどゼロだなんて。絶望的です。

振り返ったアナの眼に、レーダーを警戒しているのでしょうか、ホーリー・ローリー・マウンテンの険しく切り立った山肌をかすめるようにして低く飛んで来る銀色の円盤が見えたのです。

「て、敵よおっ!!」

神さまはアナの髪がお嫌いだったのでしようか。それとも、神と髪と、カミをかけたグジヤレみたいになったのを、こんな時にあんまり悪い冗談すぎると、お怒りになられ、お咎めになられてしまったのでしょうか。

たちくらみのようになって、血の気のひいた唇がぶるぶる震えた時。

「ケーン! アナーっ!!」

懐かしい声が聞こえたのです。

「ろ……ロイドおっ?!」

「今行くからーっ。待っててーっ」

ロイドです。確かにロイドの声が、敵機のほうから聞こえるのです。

でも、なぜロイドが円盤に乗っているのでしょうか? 敵からぶんどったのでしょうか。それとも、あれは偽物のロイドで、これはまた、巧妙な罠なのでしょうか。でもなぜ、今、罠なんか? だって、攻撃するなら絶好のチャンスです。三人が固まっているここに、抵抗できないでいる今、さっさと爆弾のひとつも落っこせばそれでおしまいなのに。

困惑しているうちに、そら豆に目鼻をつけたような形の銀色の物体が、どんどん近付いて

来ました。地上の景色が鏡面のような機体に映ります。信じていいのかいけないのか、とまどい顔の少女が逆さまにこちらを見降ろしながら、ぐんぐん大きくなって来ました。

ドキドキ鳴りはじめてしまった胸を押し殺しながら、アナは、今もう既にすでにだいぶ短い三つ編みの端をギュッと握りしめました。

9 最後の戦い

「最初は、ほくも疑った」

小さな声でロイドが言います。

「サムおじいさんの家のラヂオに、いきなり連絡が入った時なんて、絶対に買だわなと思っただけだね。なにしろ、すぐに円盤が迎えに来てくれちゃって」

「それにしても」

答えるケンも小声です。

「チビどもだけを残して来たのか。ずいぶんと思いつたじゃないか」

「サムを忘れちゃ悪いよ。それに。……きみたちが危ないって言われたんだ。あれこれややくしく考えている暇なんか、なかった」

「ありがとう。もうだめかと思つてたわ」

アナが言うと、ロイドはホッと口許くちもとを緩ゆるめました。ケンもあわてて、友人の肩かたに手をかけ、ギョッと力をこめました。

「悪い。責めるつもりじゃなかった」

「わかつてるよ」

連れられて来たのは、ホーリー・ローリー・マウンテンの西側の中腹の、自然の岩にうまく隠されて建てられた秘密の研究所でした。ジョーはさつそく奥の部屋で治療と検査を受けています。あんなに弱っている彼を知らないひとの手に委ねてしまうことに、アナは気が進まなかったのですけれども、ロイドが大丈夫だと言うのですから、強く反対することはできませんでした。だいたい、ひとさまのお家で、あまりついて来て欲しくなさそうな場所にどんでん入って行ったりするのは、失礼です。ましてやいかにも秘密の研究所。おとなしく座っているのが無難です。

今、その奥の部屋の扉が開き、小さな影が、ゆらり、と出てきました。

「案ずるでない」

三人の視線が集まるところで、影はニタリと笑います。

「あの男は無事だ。失血も危険なほどではないし、骨折も治癒している。もともと丈夫な性質のようだな。今は静かに眠っておる。しばらく寝かせておくがよい」

「ご紹介しましょう」

ロイドが重苦しい顔で立ちあがります。

「アナと、ケン。こちらは、湯上博士です。自己紹介の通りなら、ね」

明るい場所まで歩いて来ると、博士は名前の通り、少しデッサンの狂った感じのご容貌を呈してらっしゃることがわかりました。顎まで届く半白の前髪の下に、顔じゆうをななめに横

切つて走る深い傷跡が見え隠れしています。一步ごとに、からだがどちらかに傾いでいるように見えるのは、足の長さが左右相当に食い違っているからのようです。大きすぎる白衣は薄汚れて「ねずみ衣」と言うほうが正しいくらいだし、フランネルのズボンはやれよれのつんつるでんでツギがあたつていて、健康サンダルは千切れた跡を何度もタコ糸で下手くそに縫いとめてある始末。おまけに、右手の先と来たら、ハテナマークの先の形の金属なのです。「怖いかね、お嬢さん」

鉤爪をわざと見せびらかすようにして、博士はどす黒く笑いました。

「眼をそらさなくてもいい。構わないから、よく見るのだ。フツ。これが、裏切者の哀れな末路さ」

「裏切者？」

「そうだ。俺はあいつの高度な技術に、斬新な理論に、眼がくらみ、取り憑かれ、とりこにされた。あの圧倒的な『科学』をこの手に握んでみせようと思った。だが、ギーグの奴は、俺より二枚も三枚も上手だったってわけさ」

「ギーグって？」

「……宇宙人の名前なんだそうだ」

アナの問い掛けに博士は答えず、かわりにロイドが苦々しげに口を挟みます。

「つまり、このひとは一度、侵略者に協力をしたひとなわけだよ。敵のもとで働いていたのさ。動物園を占領したり、おとなたちの気を変にさせたりして、世の中を騒がせて、ずいぶ

ん得意がったみたいだよ。そうして最後の最後によく、自分がとんでもないことをしてかしたのに気がついて、改心して、逃げ出して来たんだね。その時に攻撃されて、そんな姿になった。そうですすね？」

湯上博士は肩をすくめるだけでやっぱり口をききません。

「うーん」

「まあ……」

ケンもアナも、どうコメントしたらいいやら、わかりません。

「七たび悔い改める者は七たび赦される、だっけ。確か聖書にあつたよね、アナ？ もちろん、ぼくたちは、危機一髪のところを助けてもらったんだから、文句なんか言う筋合じやないけどね」

すまし顔でイヤミを言うのはロイドの得意わざでした。が。

「アンマリ・デス！」

突然、部屋の隅から叱られてしまいました。

見ると、ロボットです。やさしい、美しい顔のロボットです。ずっと、じっとしていたので、銅像か何かのように見えていましたけれども、実は両腕を胸の前で交差させたエジプトの柩のようなかっこうで、壁にもたれているロボットだったのでした。ガラスの瞳が緑色の炎を宿して、弱々しく点滅しています。エネルギーでも足りないのでしょうか、やっとなんとか、唇の部分だけが動いているという感じですよ。

「テイセイ・シテ・クダサイ。ゴカイ・デス。ヒドスギ・マス。ハカセ・ハ・ソナ・カタ・デハ・アリマセン！」

「イヴ！」

「ス、スミマセン、サシデタ・マネ・ヲ……びゆるびゆる」

博士が片方の眼だけをギロリと向けると、ロボットは電話機のような音をたてて口ごもります。

「イヴ？」

ロイドの唇が皮肉っぽく震えます。

「なんてこった。うちのママと同じ名前じゃないか。そう言えば……なんだか面ざしもどこかしら似ているような……」

「ナ……ナラバ！ コノサイ・オカアサマ・ニ・メンジテ・キイテ・クダサイ！」

ロボットは急に元氣よく早口になりました。

「スベテ、ワタクシ・ノ・タメ・ナノ・デス。ゴラン・ノ・トオリ、ワタクシ・ノ・キノウ・ハ、イチジルシク・テイカ・シテ・イマス。コウ・ミエテモ、ワタクシ、ホントウ・ハ、セントウ・ノウリヨク・モ・ジュウブン・ナ・えくせれんと・ひゆるまのいど・ナノ・デス・ケレドモ。ワタクシ・ヲ・モウイチド・カンゼン・ニ・ウゴカス・タメ・ニ、ハカセ・ハ、チヨットダケ、ぎいぐ・ニ・キョウリヨク・ヲ・スル・フリ・ヲ・シテ……」

「そのへんにしとけよ」

「どこが悪いんだっ?!

博士の低い声とロイドの甲高い声かんだかが重なります。ロイドのほうが、より大きくて、勝ってしまったことは言うまでもありません。無視されてしまった形の博士はいじけて、部屋の隅で壁に向いて座りこんでしまいました。

「ハナセバ・ナガイ・コトナガラ、キケバ・ミジカイ・カモシレナイ……」

「まさか、カンノンの花があれば治るとかなんとか、言うんじゃないだろうな」
ケンがつぶやきます。

「PSIパワーでなんとかならないのかしら?」

アナもつぶやきます。

小さな声でしたけれども、イヴの耳は優秀でした。

「イイエ・イイエ。アイニク・デスガ。ポツチャン・ジヨウチャン、ホンニ・ホンニ、ゴシンセツ・ニ・アリガトウ・ゴザイマス」

からだが動かせたら、きつと、よよと泣きくずれていただらうイヴです。

「ケレドモ、ワタクシ・ノ・ビヨウキ・ハ、キカイ・ノ・ビヨウキ・デス。ブヒン・ノ・イチブ・ガ・レツカ・シテ、トリカエナクテハ・ナラナイ・ノ・デス。シカシ、ザンネン・ナガラ、キュウ・ハチ・ゼロ・イチ・UX・ガタ・IC・ちつぶ・ハ、セイサンチュウシ・ニ・ナツテ・ヒサシク、ナマジ・ナ・コト・デハ、トテモ・トテモ、テ・ニ・ハイラナイ・ノ・デ・ゴザイマス」

「9801UX型ICチップ?」

ロイドがうんざりしたように天井を見上げます。

「なあんだってまた、今時そんな旧型を使ってあるんだ」

「オモイイレ・デシヨウ。ハカセ・ハ・のすたるじつく・ナ・まっど・さいえんていすと・ナノデス」

「呆れた話だ」

「ケレドモ、ぎいぐ・ハ。ぎいぐ・ナラバ……!!」

イヴの眼が、ちかちかとせわしなく瞬きます。

「ぎいぐ・ハ、『キュウキヨク・ノ・りせつと・ぼたん』ヲ・モツテ・イル・ノ・デス。セカイ・ゼンタイ・ヲモ、ハハオヤ・ノ・タイナイ・ニ・アル・カノヨウナ・ジヨウタイ・ニ・モドシ・テ・シマウ・コト・サエ・デキル・トイウ、チヨウ・キヨウリヨク・ナ、たいむましん・ノ・イツシュ・ヲ・モツテ・イル・ハズ・ナノ・デス!」

「究極のリセット・ボタン」。世界全体をも母親の胎内にあるかのような状態に戻してしま

うことさえできる、超強力なタイムマシン!

なんて恐ろしい、なんてすばらしい機械でしょう。

アナはついさつき、ケンが「ゲームならば」と言った時に考えたことを思いだしました。そんなとんでもないものを持っている「ギーク」。ついに、敵の名前が、正体が、明らかにまりました。けれど、それはなんと恐ろしい敵でしょう。漠然と考えていたどんな怪物より

も、ずっとずっと強大です。普通の人間たちとは、いいえ、たとえPSIパワーを持つている地球防衛軍戦士チームとだって、ほとんど、生きている次元が違うと言っている存在ではありませんか。そんな奴と、いつたいどう戦うことができると言うのでしよう……？

アナは眼の前が真つ暗な気分になりましたけれども、ロイドはしきりに首をひねりながら、何か、別のことを考えているようです。

「……9801UX型ICチップ……」

左手首をさすっています。そこには、あの、すばらしい時計が、昔おとうさんからもらった、大切な腕時計が壊壊れているのです。

「たぶん……たぶん、こいつをバラせば……」

「バラス・デスツテ？ イイエ・イイエ！ ソンナ。モツタイ・ナイ」

イヴはまったく地獄じごく耳です。

「ヨシテ・クダサイ。ワタクシ・ノ・コト・ナンカ・ドウデモイイ・ノ・デス。タダ、タダ・デスネ、セツカク・ワザワザ・タスケ・ニ・イツテ・サシアゲタ・ミナサン・カラ・サエ・モ、ヒドイ・ゴカイ・ヲ・ウケタママ・デハ、ハカセ・ガ・アンマリ・オキノドク・ジャ・アリマセンカ。ダカラ……」

ロイドの眼が、イヴを見、隅っこでうずくまったままの博士を見、もう一度イヴを見て、泣き笑いにゆがみました。

「ダカラ・ドウカ・ハカセ・ノ・コトラ……」

「戦闘能力も充分だと言ったね？」

ロイドのことに、イヴはハッと一瞬^{だま}黙りこみました。

「イイマシタ・ガ？ タシカニ、ろぼつと・ハ・ウソ・ツキマセン・ガ？」

「いっしょに戦ってくれるか」

言いながら、ロイドはもうあの時計を外しています。

「ギーグは、きみにとつても敵なはずだな。今たとえ、ちゃんと蘇^{よみがえ}つても、どうせすぐに死んでしまうことになるかもしれないけれど。地球の平和のために、きみの力を貸してくれるか？ 貸してくれるのならば」

「ボ・ポツチャン……」

「博士！ さあ。これをさしあげます」

ロイドは博士のほうを見ずに、腕^{のぼ}だけ伸して時計を差し出しました。

「なんだそれは」

「時計です。インテリジェント・ウォッチです。分解してください」

「いいのか。大切なものじゃないのか」

「中に、たぶん、9801UX型ICが使つてあるはずだ。オヤジはあれが、どうしようもなく好きだった。旧式だとわかつていても、いつも使わずにいられなかつた。だからきつと、ここにも入つてゐるはずだ。……ぼく自身の手では、とても壊^{こわ}せませんから、どうか……どうか、勝手に使つてください」

「オヤジさんの形見なのか？」

「そんなようなもんです。でも、かまわない」

博士が近付いて、時計を取ろうとしました。ロイドの指は、ことばとは裏腹に、放すまいとするかのようにギュッと握りしめてしまいました。けれども、博士がバンドに手をかけたまま黙って待っていると、指はやがて、花が咲く時のようにゆるゆると開いたのです。

「ぼくは母を救えなかった……」

指を広げながら、ロイドはつぶやきます。

「だから、母と同じ名前、似た顔を持ったこのイヴの、ちゃんと生き返った姿を、せめて、見たい。見たいんです。どうか、おねがいます」

「わかった。無駄にはしない」

手の中が軽くなると、ロイドは、がくりと肩を落としました。あわててケンが駆け寄り、支えます。

「大丈夫か？」

「……ああ。いいんだ」

口許を震わせて、ロイドは笑います。

「いいよな。これでいいんだよな。オヤジだって、怒らないよな。きつと、許してくれるよな？」

「すまんが諸君。暇なら、ちよいと手を貸せ。こいつをここに乗せたい」

博士のあくまで冷静で事務的な声に、少年たちも我に返りました。指示通りに、テーブルの上に、重たいイヴの鉄のからだを横たえます。博士はまず片方の眼に望遠鏡のようなものをセットしました。そして、白衣のどこからか取り出した七つ道具を、鉤爪の右手に次々に差し替えながら、イヴの胸のあたりの鉄板をすばやく開いてみせました。中には、顕微鏡でもなければ触れないような細かさで、わけのわからないものが整然と入り組んで配線されています。いくつもいくつも並んだマツチの頭、細かい細かい格子こうし。ぴかぴか光るフューズのようなもの。超小型の剣山同士が組み合わさっていたり、色とりどりのケーブルが走つていたり。マメツブのようなネジで止っている部分もあるし、金ぴかのハンダでくっつけてあるところもあるようです。きちんとしてはいるけれど、どこかしら、手作りの匂いにおのする、ロボットの内臓でした。博士は手術をするお医者さんの手付きで、それらを掻きわけ、切り裂き、さぐりました。こんな時こそ、特別の手が役にたつというわけです。

「すっげえ……」

ケンがため息をつきました。

「みごとなものだぜえ……。お？ ロイド？ なんだ、どうした。顔を覆おおつたりして。見なくていいのか？ こういうの、好きなんだろうに」

「いや。きみたちには平気だろうけど……ぼくにとっては、生体解剖かいぼうみたいなものだからさ。どうも、痛ましくって」

「そんなもんか」

「だいたい、こういう時、仁義あるハッカーはちゃんと遠慮するもんなんだ。ひとのマシンの内部だの、テクニクの痕跡だのを盗み見るっていうのは、どうもな、良心が呵責して」
「かまわん。見るがいい」

博士は細かい作業に熱中しています。電気ドライバーになった右手が軽くうなり、心臓の形をした部品最後のネジを外した途端、イヴの緑の瞳の光がすうっと消えました。アナもケンも息を呑んで見守っています。今度は、時計の番です。ロイドの大切な時計の裏蓋があつと言う間に取り除かれ、ピンセットになった博士の右手が、小さな小さなICチップをつまみ出します。今度は時計がその生命を終える番でした。

機械に対してなど感情移入をしたことのないアナも、なんだか、しんみりしてきてしまいました。

そうしてこのころには、ロイドはもう、好奇心に勝てなくなってきたのです。覆った指の間から、チラチラ横目を使っていました。とうとうきっぱりこつちに向き直り、真剣な顔つきでのぞきこみ……不意に叫びました。

「……こ、これは……！」

博士は知らん顔で作業を続けます。

「ま……まさか……まさかっ」

「どうしたの？」

「だって。だって。この能率の悪い配線。ややこしい配列の癖。署名してあるのと同じ、信

じられないほど不器用なハンダのやりかた」

悪かったな、とても言うかのように、博士が普通のほうの瞳で、一瞬だけロイドをにらみます。

「ほらっ！ その意地の悪い眼つき。ああ！ そうだよ。そうだとも。イヴ。イヴの顔。9801への偏愛……ああ……」

ロイドの顔がぐしゃぐしゃにゆがみます。

「パパ!!」

「ええっ!」

「そうなんだろ？ ねっ、そうなんだろ？」

声も表情も、ロイドは一気に五歳のこどもみたくになってしまいました。

「パパだよ、あなたは、ほくの、ほくの、パパなんだね?!」

「やっとなかかったか」

パチリと何かを止めつけると、イヴの手術は完成しました。瞳がきらめき、起き上がりま

す。

「そうですとも、ロイド!」

話し方も、仕草も、今ではひときわ人間っぽく、自然です。銀色に輝かがやいている以外は、まるで、ほんもののおかあさんみたいです。

「でなければ、あの危機にあんなに機敏きびんに対処できたわけがないじゃありませんか。博士は、

その時計を通じて、いつもあなたがたを見守っていたのです。旅のはじめから、ズーッとね」

「そ、そうだったの……?」

ロイドが熱く見つめても、湯上博士はあくまでクールに知らん顔をしていました。眼から拡大鏡を外し、ゆっくりとした動作で、右手をあの前爪かぎつめに付け直します。焦じらしているような照れているような、戸惑とまどっているような様子です。なにしろゆがんでいらつしやるので、その唇の形が、微笑ほほえみなのか怒りなのかさえも、ちっともわからなかつたりします。

「知らなかつた……わからなかつた……」

ロイドは茫然ぼうぜん自失じしつです。

「ふん。落ち込むことはない。ここまで変つていちゃあな、無理もない」

「そつ、そうだよ。ひどいよ! そうならそうと、どうして早く教えてくれなかつたのさつ」

ロイドはもう小さな子みたいにダダをこねてしまいます。

「だって、だって。パパって言えばさ、万年運動不足と、出前ピザと中華料理のテイク・アウトとダイエツト・コーラばかりの食生活のせいで、こーんなに太つてたじゃないか」

「人間苦労すると瘦やせるのだ」

「おまけにさ、いつも髭ひげもじゃで、ぶかぶかのジーンズで、一週間もお風呂ふろに入つてないって匂においだったぜ。仕事の邪魔じゃまになつちやいけなからって、ゆっくり話わをすることもなくて

……ああ、でもちゃんと見れば、そうだ、そうだよ、パパだよ。パパの顔だ！ ああ」
「わっ、こちらら」

「パパあー！」

抱きついて甘えるロイドに、ケンもアナも、思わず顔が赤くなってしまう。今のロイドは、とてもいっしょにあの数々の戦いをくぐりぬけてきた勇者とは思えない様子です。うちのおとうさんは、元気でいるかしら。

あの朝、ひとけのない御聖堂おみどうで一心に祈っていたおとうさんの、妙みょうに小さく見えた背中を思いたして、アナの胸はちよっぴり痛くもなりました。

「どうしてどうして、パパは、出てったりしたのさ！ ママは、ほんとうに、ものすごく泣いたんだから」

「うむむう」

「だからね、言いましたでしょ？」

イヴがしゃしゃり出ます。

「私」を蘇らせるためにこそ、博士は、一見裏切りに見えるような行動をお取りになったのだと。あれは、わたくしのことだけではなくて、ほんもののイヴ、つまり、おかあさまのため、という意味もあつたのですよ。博士は、いいえ、おとうさまは、奥さまを痛ましく思われるあまり、そばにいることができなかつたのです。なんとかしてさしあげたいと思いつめて、じっとしていられなかつたのです」

「……………」

ロイドは黙っておとうさんを見つめました。

ああ、それじゃあ、同じなんだわ。

と、アナは思いました。

だとしたら、ロイドとおとうさんは、同じことを、とつてもよく似たことをしたんだわ。

さすが、親子、と言ったところでしょうか。

「もう、よかろう」

湯上博士ことロイドのパパは、冷たい鉤爪を上手に使って、息子のからだを押しやりました。

「行け。あまり時間がない」

「時間？」

「そうだ。ギングは、昨日から明日にかけて、囊のうに入っているはずだ。もしかすると、今が、最後のチャンスかもしれない」

「囊？」

「チャンス？」

戦士たちは眼めを丸くするばかりです。

「いいか」

博士は鉤爪の先を使って、机にその生物の概略図がいりゃくずを彫うって見せました。きっと、小学校の

頃には、授業中に机にいたずら彫りをするのが得意な子どもだったのでしょう。なかなか達者な線です。

「ギーグは、一種、昆虫に似た生物だ。成長の過程で、何度も、体液から作りだす専用の囊に入って休息を取らなければならぬ。囊に入るのは、人間で言えば、眠っている時にあたる。その最中だけは、力が衰える。俺は奴を観察してタイミングを計り、あの円盤を奪って、マザー・シップから逃げ出したのだ。オメガ・ソーサーどもに攻撃されたおかげでこんなからだになってしまったが……フツ。今なら、まあ、きみたちにも、勝つ可能性があるやもしれん」

「でも、ジョーはあんなんだし」

「ノエルに相談してみないと」

「クイーン・マリーの助けがなくなっちゃ、とても……」

三人は顔を見合わせました。

「なんだ。怖いのか」

湯上博士は、机に腰をもたせかけ、いつの間にか小さな手鏡に換えた例の右手をのぞきこみながら、剃り残しの髭をひっこ抜きはじめました。

「ま、無理ないか。しよせん子どもなんだからな」

ケンの額に巨大な「む」の字が浮びあがります。ロイドは眉尻を下げ、どっちの味方をすればいいのかわからない顔で、黙りこくります。

「だいたい、地球の危機だなんだつてのは、ま、個人の力でドーコーできるレベルの問題じゃあないよな」

アナには、博士が、悪ぶつて、わざと戦士たちに勇気を出させようとしていることが、察せられました。けれども、こんな時女の子というものは、あまりしゃしゃり出てはいけないものなのだということもよくわかっていました。だから、博士がいつそのこと、もつともつとひどいことを言ってくれるよう、一刻も早くケンがその気になってくれるよう、祈ったりもしました。

まったく男の子たちつて、世話が焼けますね。

「そーそー。人類の歴史だ、進歩だ発展だなんだつて言つたつて、ドーせ、大したもんじゃない。いつ果てたつて、終つたつて、まったく大したもんじゃない」
ぶちっ。

ひっこ抜いた白黒だんだらの髭を、博士は、うつとりと眺めました。

「う……うるせえっ!!」

やれやれ。

やつとケンが、怒鳴りだしました。

「四の五の言うんじゃあねえや、このストコドッコイ！ ご立派なおまえさんだつて、その大したもんじゃない中のひとりだろうがよっ」

「……フ」

博士がちよつと名残り惜しそうに息を吐くと、関節の目立つ指の先にあつたものは、どこかに飛んで行きました。

「ばかにするな。俺たちは……俺たちは諦めないっ!!」

「ほほお」

「これまでだつて、もうだめだと思つたことも何度もあつた。けれど、俺たちは、いつだつて進み続けるほうだけを選んで来たっ」

「そりゃ偉い」

「もちろん、全部が全部自分たちの力だつたとは言わない。いろいろと他人に助けられた。けど……だからこそ、そのひとたちのためにも、ここでくじけるわけにはいかないだつ!!」

「そーかそーか」

もうそろそろだなと思つたので、アナは、三つ前のセリフあたりから、いつでも歩きだせるように身の回りの準備を整えて待つていました。が、ケン^{こぶし}は拳を固め両足を踏ん張つて、思いのたけをぶちまけることに熱中したままです。

「宇宙人がなんだ。究極のナントカがなんだ。ううっ、負けるもんか。俺たちは、地球防衛軍だあつ!!」

「わかつたわかつた」

博士は、うんざり手を振りました。

「テーマ・ソングでもかけて欲しいのか？」

「いや、だからねパパ」

ロイドがついに、割って入ります。

「探しているメロデイのことは知ってるだろ。ぼくらのテーマ・ソングは、まだ完成していないんだ。そのところが問題なんだよ」

「問題、か」

博士は急に背筋を伸すと、ロイドの顔をまっすぐに見据え、これまでのからかうような調子を改めて言いました。

「問題というものはな、生きている間は、けして皆無にはならないものだ。最後のメロデイとやらは、ここにはない。いつまでもここにいたって意味はないぞ」

「……………」

「あれがない、これがない、だからできない、行けない、か。文句が多いな」

ロイドの唇の端がぴくりと震えます。博士はそんな息子をじろじろ遠慮なくながめながら、なおも言いつのります。

「昔からできることでもやろうとしない、最後の最後で弱気になってしまふ、おまえには、変に女々しいところがあつたよな。かあさんに似たか？」

博士はイヤミつたらしく微笑んでおいて、横を向くとまた鏡をのぞきこみ、ひとりごとのように小さくつけ加えました。

「それとも……………まだ、青い、か」

眼鏡の下で、ロイドのはしばみ色の瞳が一瞬カッと開かれました。

ああ、まったく！

と、アナは思います。

男の意地だかなんだか知らないけれど。わざわざこんな時に、親子喧嘩しなくなつたつていいのに。

だいたい、長いこと離れ離れになつていた父と子です。はっきり言つて、本人たちが自覚しているにないに関わらず、かなりそつくりなふたりです。イヤミが得意なところなんて、きつぱり遺伝しています。どうしてこんなにいがみ合わなきやならないのか、アナにはきつぱりわかりません。

いたたまれない気持ちのまま見つめ続けていると、ふと、ロイドの顔つきが變つていふことに気がつきました。なんだか急に、やさしく、おとなびた感じになつていふのです。

「乗せられたみたいなのは、悔しいけれど」

声はやさしく、瞳にももう敵意はなくなつただその強い光だけがそのまま、振り返つたおとうさんをまつすぐに見つめていふのでした。

「おっしゃることは、よくわかりました。すみませんが、イヴをお借りしてゆきます。返せないかもしれないけど」

「……かまわん」

博士は、氣のない声で返事をします。

「円盤も持ってけ。イヴが操縦できる」

「それはありがとうございます。ご恩に着ます、湯上博士」

「……おいおい」

ケンが何かを言おうとしましたけれども、ロイドは片手を上げて止めました。

「ジョーの意識が戻ったら、事情を説明してやってください。その後の判断は、彼に任せます。では。たいへんお世話になりました。お元気で。……さあ、みんな、行こう。出発だ！」

春まだ浅い山の空はどこまでも透明に澄み切って、筆で描いたような雲を際立たせています。南側の斜面では、名残り雪のこんもり解け残った塊の脇に、気の早いウスユキソウがひと群れほの青く可憐な花を見せておりました。

そんな景色の中を、円盤は、定規で引いたような線を描いて飛んでゆきました。

まるで銀色のそら豆です。めざしているのは、もちろん、頂上。風圧に、草が、木が、波立ちます。超低空飛行のあまり、森のすぐ上を飛んでいる時など、しばしば伸びた枝を跳ねとばしてしまいます。揺れる機影がかかると、あちこちから、鳥や虫やけものたちが何十匹も逃げ出しました。まだよく飛べない若鳥たちや、まだよく走れない仔鹿たちが、いっしょうけんめい、おかあさんの後を追いかけてゆくのが、スクリーンいっぱいに見えました。

ごめんね、ごめんね、怖がらせて。

アナは両手を握りしめました。

でも。もしも、あたしたちがギングに負けてしまったら、こんなもんじゃあないんだわ。地球が全部、めちやくちやになつてしまふ。あなたたちも、他の誰だれもかれも。世界じゅうのおかあさんが、罪のない子どもたちさえもが、みんなみんな、巻きこまれてしまふ。

だからどうか、許してちょうだい。

きつと、守ってみせるから。勝ってみせるから……!!

「まもなく標高三千メートル地点」

操縦席のイヴが鋭い声で報告しました。

「二百五十七秒後に、目的地に到達します」

「敵基地の全貌ぜんぼうを拝めるかな？」

ロイドはコンピュータ前に陣取つて、まるで船長です。

「できるだけ発見されにくい進路を取ろう。太陽を背にできるか」

「はい。では、南南西にそれます。到達時刻は百七十五秒ほど遅れますが」

「了解」

「……ねえ。今、ちよつと、いい？」

アナはロイドの椅子いすに近付くと、背もたれに手をかけて、そつと顔をのぞかせました。
「なんだい」

「もう言う時がないと思うから、言っちゃうけど。あれは、あんまりだったんじゃないかと思うの。今からでも、連絡できないかしら？」

「何が」

「おとうさまよ」

眼鏡の下で、ロイドの眼が少し咎めるように細められましたが、アナは思い切って言ってしまいました。

「だって。あんな口きくなんて。おとうさまに向って。ひどいわ。あんまりよ。『博士』だなんて、イヤミつたらしく他人行儀な呼びかたなんかして。冗談にしても、ほどがあるでしょ。やっと逢えたのに、……もう二度と逢えないかもしれないのに、どうして最後の最後に喧嘩別れなんて。悲しすぎるじゃないの。ねえね、早く、無線か何かで、ごめんなさいって言って……」

「アナ」

ロイドはゆっくりと首を振ります。

「そんな心配はいらないよ。ほおんと。だいじょうぶ」

「バーカ」

そのへんのボロきれて愛用のバットを磨きながら、ケンが言います。

「あのな。オヤジに吞まれちまうような息子が、地球を救えるわきゃねーだろーがよ。あれでいーんだ、あれでよ！ オヤッサンだって、満足してたさ」

「そうなの？」

「まったく……見てりやわかったらーが。女つつーのは、ドーしてこう鈍にぶいんだ。鈍にぶいくせに、なんだかんだ、うるせーし」

ふくれっ面になるアナの手をそつと取って、ロイドが囁ささやきます。

「あのね。オヤジはほくのことを、すごく齒痒はがゆく思ってたと思うんだ。ひとりっ子で、勉強の虫むしっぽくて、かなり、おかあさんっ子だったからね。女々しくって、優柔不断で、勇気も根性もない奴だつて、冷たい眼で見られてること、知ってたんだけど。ずっと、どうにもならなかった。だから、ようやくと男同士らしく話をするのができて、ほくはすごく嬉うれしかったし。たぶん、オヤジだつてそうさ。はじめて、ほくのことを、認めてくれたんじゃないかな。だから、このまま逢えなくなつたつて、それでかまわないんだ」

「……………」

「けど」

ロイドの瞳が、からかうような色で、アナの瞳をのぞきこみます。

「ありがとう。気にかけてくれて」

なんだか、ドキドキしてしまいます。

ロイドしたら、やけに立派です。余裕よゆうしゃくしゃくです。横目で見れば、ケンケンはケンで、無言のまま、ただただバットを磨いています。そうすることで、精神を集中させ、最後の戦いに備えている気配がします。

アナの胸はキュツと痛くなりました。

こんな時に、なんてつまらない、くだらない、おセンチなことを言ってしまったんでしょ。まるで、受験の朝「ハンカチは持ったの?」「道順、わかるのね?」「いっしょにお弁当食べるひと、誰かいるの?」等々、しつこく聞きただす、バカな母親みたいじゃありませんか。

……母親……!!

いつかクイーン・マリーが言ったことばが、脳裏に蘇ります。『あなたとわたくしはある意味ではきつぱり敵、そうして、まったく同じものでもあるのよ』まさかと思っていたのでした。そんなはずはないと確信していました。母性本能なんて自覚したことはなかったし、例えば遠い将来に誰かのおかあさんになることがあっても、きつと理性と理解のある偉い母親になろうと、決心していたのでした。こどもを自分の所有物のように考えたり、相手のためにならないような甘やかしかたをしたり、ヒステリックに厳しくしたりは、けしてしないはずでした。息子や娘が自分のそばを巣立ってゆくその日にも、笑って、いつてらっしゃい、しつかりね、と言える、強いところを持つていくべきだと思っていました。

呑気のんきにも。それが、どんなに難しいことなのか、知りもせず。

……だって、この痛み……!!

何かをなくしてしまったような、大切なものが奪うばわれてしまったような、二度とこの手に戻ってこないような。寂さびしいと言ったらおおげさかもしれない。悔しいと言ったら間違つて

いるかもしれない。けれど、痛いのです。痛みがあふれて、涙になりそうです。がらんと広い部屋の中にたったひとり取り残されたら、こんな感じでしようか。

そうして。同時に、安心と、誇らしさ。旅の仲間の少年たちが、いつの間にか、こんなに頼もしく男らしくおとなになっていくれたことが、嬉しくてたまらなくもあるのです。意味のないマイナー気分を全部きっぱり覆いつくし、充分に埋め合せてくれるほど、たつぷりと、力強く感じられるのです。

もしも、これが、自分のお腹なかを痛めたこどもの場合だったら。

こういつた感情のすべてが、十倍、二十倍になるのではないでしょうか。

ケンもロイドも最初は全くの他人でした。そうして、ふたりとも、自分と同じくらい幼く、いいえ、どこか、それ以上にこどもっぽく思われていました。例えば、自分のPSIパワーの凄じさすさまじさを実感した時、マジカントに行った時、ノエルからの声をひとり聞きつけて案内役のようになっていた時。そして、二対一に分裂してしまう時。アナはいつも不安と孤独を感じ、なんとかかかんとかそれをごまかし、耐えて来ました。だからつい、おねえさんぶってガミガミ言ってしまったりもしました。

けれども、もう、そんなことは、できません。

単立つてゆくこどもたちに「母親」は、うるさく干渉してはいけません。心配でも、気掛りでも、不安でも。彼等には彼等の道があります。ただ信じて。任せて。遠くから見ていることしか許されません。まして「母親もどき」なんか。手だしはできません。触れませ

ん。

どんなに深く思っている、強いきずなを感じていても。ふたつはひとつにはけしてならないのです。生命はみな、ひとつがひとつ。ひとつずつ、かけがえのない、独立した存在なのですから。

それでも、クイーン・マリィ！

アナは赤いハート型のペンダントをギョツと握りしめました。

あなたは、愛せよとおっしゃいました。愛こそが鍵だと、希望こそが武器だと。とてもとても、難しいことを言われたのですね。あたしは、あたしには、今もまだ、よくわからない。教えてください。

愛って、なんですか。希望って、なんなんですか……？

「あ。しまった。敵です!!」

イヴの声が響きます。

「回避に失敗しました。七十パーセントの確率で被弾します!」

「天気予報みたいに言うなよな」

「うわあ、みんな、掴まれっ!!」

あわてて見上げたスクリーンに、アナは見ました。青黒い巨大ロボットの凶悪な目つきと、蛇のようにくねりながら飛来する数機のミサイルとを。

ごうん!!

「でえっ」

「きゃあああっ」

鈍い音がした途端、床がスツと消えるような感触がしました。髪が逆立ち、背中が冷たくなり、床が座席に張りつき耳が変になるくらい急激に上昇したかと思うと、ななめに滑るように落ちながらねじれて、逆さまになってしまったりします。あっちこつちがぶつかって、アザになってしまったに違いありません。まるで、思い切り凝った絶叫ジェット・コースターみたいです。しかも、終点は来そうもないのです。

急激に変わる前方スクリーンには、空や山や森の他に、時おり、滑走路のようなもの・ぴかぴか光る塔のようなもの・ドーム型のなにやら大きな建造物その他その他がめちやくちやな順番で映りました。これが敵の基地！とは思いますが、なにしろ場面転換がめまぐるしすぎ、映るのがごく一部分の映像でしかなさすぎて、全体を理解しようと眼を凝らせば、たちまち酔っ払ってしまいそうです。

「うわああああ」

「もしもし、ロイド？ 知ってるとは思うけどさ。落ちてるぞ」

「わかっ……っ、痛ててて！ うが、舌噛んだ」

「どうする？」

「のーひひよー（どうしよう）」

「……た、頼むから、早く、ま、まっすぐにして……うえっぶ……」

「吐くんならトイレ行って欲しいけど……無理か」

「なんとかならないのお？ ねえ、イヴ?!」

「だめですね。当機は、完全に、操縦不能となりました」

「ははあ。完全に、と来ましたか」

「はい。完璧に、完全に、百パーセントですね。だめです。大阪弁で言えば、アキマヘンナ、ホンマニ、です」

「強調してくれなくてもいいのに」

アキマヘン状態になっていると言うものの、そら豆型円盤はなかなかかけなげでした。落ちたかと思うとまた登り、右にずれると左に戻ります。このまま落ちるもんかとかんばっている気配がしています。そのおかげで中はあたかも洗濯機のごとく、ミキサーのごとく、シェイカーのごとくになってしまっているのです。

どこからかキナ臭い匂いまでして来ます。そろそろ力尽きて来たのでしょうか、スクリーンに映る地面が、なんだかやたらに近すぎます。今度こそ、もういよいよ、ついについに掛値なし嘘つき抜きこの絶体絶命です……!!

「すみません。離陸前に緊急脱出時の解説をしなきゃならないんです。忘れてました。お手元のパンフレットをご参照ください」

「おいおいっ」

「あのねー」

操縦席を離れるイヴに、三人は眼を丸くしました。

「救命胴衣はみなさまのお座席の下に入っております。酸素マスクは自動的に降りて来る……はずだったんですけど。ま、なんとかしてください。では」

「で、では？」

「どこ行くのよっ、イヴ!!」

「もちろん」

緑の眼をウインクするように瞬かせて、イヴは非常扉前で振り返りました。

「あれと戦いに、です」

銀色の指が示しているのは、スクリーンいっぱいには不敵なガッツ・ポーズを見せている巨大ロボットでした。

「本気か」

「ロボットは、うそ、つきません。申し上げましたでしょ、わたくし、これでも、戦闘能力があるんですからっ。……えーつと、レーザーのスイッチが、これでえ、ミサイルがあ……盾、盾と……あれ？ どこ行ったかな」

「……だいじょうぶかな……」

「だいじょうぶよ、きつと」

「たぶんだいじょうぶだろう……ははは」

苦笑いする三人ですが、はつきり言っ自分たちこそ、あんまりだいじょうぶじゃなかつ

たりもします。円盤は、もうきっちり、墜落しつつあるのです。それでも、イヴから、眼が離せません。

銀色のパイロットは片手に光線銃・片手に盾を持つて、ニッコリ微笑み、非常口のドアを開きました。ゴウツと風が唸ります。舞い飛ぶ砂ぼこりに三人はそれぞれ顔をかばいました。イヴのからだだが、陽光にきらめきます。そうして、明るい空の中へ、大きな一步を踏み出し……。

「あ、いーっけなあい♡ ロケット背負うの、忘れちゃったあん♡」
戻って来ました。

「……………」
「……………」

「……誰が設計したんだったか、ようやく思いだしたぜ……」
イヴは扉前の床にきっちり正座をすると、まずゆるやかに光線銃を下ろし、四十五度回して整えました。次に、盾を両手で掲げ、裏表それぞれをゆつくりと鑑賞したあげく、優雅な手付きで傍らに立てかけ、いかにも感心した風にうなずきました。表千家流のお作法ですが、ちなみにこの間じゅうも円盤はめちやくちやに揺れながら、墜落しつつあったのですから、大したものです。師範代のお免状くらい持っているのかもしれない。それからイヴは芍薬のごとくすつきりと立ちあがり、床パネルの縁を踏まずに四・五歩ばかり歩み、手近な壁の中からキラキラ輝く物体を取りだしました。下面にバーニアの並んだロケット式ランド

セル型飛行装置です。背中の部分に「イヴの」とマジックで大書してありました。

「よおいしょつと」

せつせとコード類をつなぎとめ、スイッチを入れ、リモコンを試し、円盤の内壁を鏡に使ってくるりと一回転、全身くまなく点検してよおしと満足すると、イヴはやおら直立不動のポーズを取りました。両手をベルトにかけて満面に笑みをたたえた「ピッカピカの！」姿は、まずまず絵になっておりました。

それにしても、三人が拍手をして「似合ってる」「かつこいいよ」「サイコー」と誉めてあげるまで、そのままずっとじっと待っていたりしたのは、あんまり感心できたことではなかったかもしれない。

さてさて。イヴは、ふたたび扉前に戻り、もう一度正座すると……中略……片手に光線銃・片手に盾を持った凜々しい姿で、三人を振り返りました。

「では」

「……オヤジのバカ野郎……」

地獄耳のはずのイヴでしたが、この時は聞こえなかつたふりをしました。

「イヴ、行きまーす!!」

ちゅどーん……!!

サンシャイン・オレンジの炎を吹き出させながら、イヴは青空に飛びだして行きました。残された三人の顔はススで真黒、髪の毛はチリチリに焦げ、煙をあげておりました。

「……ねー。覚えてる？ この円盤、墜落しているんだけど」

「そうだったわね」

「脱出、しようか」

「そう、しようか」

「救命胴衣、どこだっけ？」

「だから座席の……」

どがしゃか・ぼーん!!

円盤は、激突しました。

せつかくの救命胴衣も酸素マスクも、役に立ちませんでした。あの凶悪な『ジェット・コースター』気分さえ心地好いゆりかごだったと思えるほどのすったもんだ騒ぎで、円盤が、弾み・転がり・崩れ・壊れる間じゅう、アナは半分失神し残りの半分で気絶していたので、何がどうなったやら、さっぱりわかりませんでした。

とにかく。

気がついた時には、ざわざわとわやわやと大勢のひとに囲まれ、覗きこまれ、からだじゅうを撫で回されていたのです。あたりの空気はむっと熱く、何かが腐ったような悪臭や、ツンと鼻や眼の奥に響くイヤな匂いもしました。

「こどもだ」

「こどもだ」

「こどもだわよ！」

「どこの子」

「誰の子」

「うちの子よ！」

狂気走つたざわめきがあたりじゆうに小波こなみのように広がります。

「さわらないで」

「邪魔じやまするな」

「なんだよ」

「こつちへ、こつちへいらっしやいな、ベイビーちゃん」

「離せつ、離せよ、ばかつ」

「……き……きやああつ!!」

それは、憑つかれたような腫をした大勢のおとなたちだったのでした。

みんな泥どろと垢あかにまみれ、汗と脂肪でべとべとの髪をし、ポロポロの服を着ています。男なのか女なのか若いのか年寄りなのかも、ほとんど区別がつきません。動作もせりふも変に重たく遅くもどかしく、わやわやとお互いに重なりあっていて、全体がひとつの生物みたくに見えることもありません。まるで、映画に出てくるゾンビです。げっそりと頬ほおがこけたひともいれば、変にむくんだ感じのひともいます。ひどい怪我けがをしているらしいひともあるし、

この調子では、既に死んでいるひとだつてこつそり混ざっているかもしれないません。

ひよつとしたら、イースターからさらわれたひとたちなんじゃないかしら。

アナは思いました。

もしかしたら、サンクスギビングのひとも、マザーズデイのひともいるんじゃないかしら。ならばどこかに、うちのママがいるんじゃないかしら。ケンのママも、ロイドのママだつているかもしれないわ……?!

「……ま……ママ！」

考えたたん、口のほうが勝手に喋りはじめてしまいました。

「ママ、ママ、ママ！ アナよ！ ママ、いないのっ?!」

もがいてあがいて、なんとかひとごみを擦り抜けようとするのですが、誰ひとり遠慮をしてくれません。みんな、アナを自分のこどもだと思つて、必死で捕まえようとしているのです。ひとりの手をやつと剝がしたかと思うと、別の二・三人の手がからみつきます。この調子では、とても歩けません。

アナは焦りました。泣きだしたくなりました。ここの一とたちはみんなズタボロです。知らないオジサン・オバサンにべたべたされるのは最悪です。抱きすくめられると、生理的に、ブルブルツとなつてしまいます。悪いなとは思いますが、抑えられません。

「……ごめんなさい……えいっ！」

アナは思い切つて、できるだけ弱く、PSIパワーを使ってみました。

「ああっ」

「ぎゃわっ」

ほんの刹那せつなのかすかな光でしたけれども、やはり邪悪の世界に踏みこみかけているひとびとには、絶大な効果があります。アナに触れていたおとなたちは、たちまち、火傷やけどでもしたかのように手を引つ込めました。

この隙すきに、急いで逃げ出します。潜りぬけます。

けれども、おとなたちはあとからあとから押し寄せます。まだ触っていない人かたひとびとは、くじけてなんかないのです。

「ああ、行かないで、ローラ！」

「ジョニー。可愛いジョニー」

「ビッキー。ビッキー、わたしの宝物」

「わあん。お願い、通して。邪魔しないで。通してください！ ママ、ママあつ!!」

ママは、ほんとうに、こんなところにいるのでしょうか。ケン、ロイドは、いつたいどこに行ってしまったのでしょうか？

ゆつくりちゃんと探したいのですが、ちよつと油断をすると、すぐに関係ないひとに捕まりそうになります。ひとがどんどん重なつてゆくので、四方がみんな壁みたいになつてしまします。

チラリと見回した感じでは、そこはあのドームのようなものの中のようなようでした。半球形の

屋根の一部がベキベキに壊れていたのが、きつと円盤が突つ込んだ跡です。そこから覗ける空の高いところで、青いものと銀色のものが互いに互いのそばを回るようにして飛んでいたような気もします。どちらかが、黒い煙をはいていました。あれはイヴでしょうか。ちゃんと戦えているのでしょうか。ともかく、あの怖^{こわ}そうなロボットにたつたひとりです。立ち向かっているのだとしたら、大したものです。見損^{みそこな}つちゃあいけないな、とアナは思いました。どこも壊されずに、戻つて来て欲しい。もちろん、できるなら、敵を倒して来てくれるほうがずっとずっと嬉しいですけれども、とりあえず無事に逃げて来てくれれば充分です。もう一度よく見て確かめようと、つい上を向き、ふと気を抜いたその瞬間。

「エリザベス！ リズう」

ぎゅむっ!!

あたりのひとを跳ね飛ばして突進して来た、他より三十センチは高い背と三倍の横幅^{たきばた}を持ったスモウ・レスラーのようなオバサンに、いきなり羽^は交^がい絞^じめにされてしまったのです。揺すり上げられ、高い高いをされ、さらに放り上げられます。オバサンはとびきりの力持ちで、アナなんか、軽々と宙に浮かべてしまうのです。

「逢^あいたかった、逢^あいたかったよお、あたしのリズちゃん」
「きゃああ、ち、違いますつたら、うわわ、いやあん」

ぼーん、ぼーん。勢いをつけて、飛ばされます。

最初はおっかなびっくりでしたが、慣れてみると、けっこう便利です。他のひとに邪魔さ

れず、空のほうを見る暇もできませんでした。けれども空中戦は、移動したと見えて、イヴも青いロボットも影もありません。がっかりです。

となれば、いつまでも、おスモウ・オバサンのおモチヤになつてはいられません。

「下ろしてっ、下ろしてくださいったら」

「ほーら、高い高い高い。ママの高い高いは面白いねえ」

「面白くないっ！ あんたなんか、あんたなんか、あたしのママじゃないもんっ！」

パシッ！

PSIの光を飛ばすと、さすがのオバサンも、あうっ、と叫んで手を引つ込めました。どうして可愛いわが子から、こんな仕打ちをされなければならぬのだろう。驚いたような、脅えたような、悲しんでいるような瞳からあわてて眼を背けて、アナは駆け出しました。おとなたちの群れもアナを中心にしたまま、いつせいに移動を開始します。まるでアイドルと「おっかけ」のみなさんです。

ああ。体育の時間にもっとがんばっておけば良かった。

アナは後悔しました。

バスケット部にも入ってピシパシに練習していれば、ゾーン・ディフェンスのかわしかた、得意になつてたかもしれないのに。

PSIにだって限りはあります。こんなに大勢のひとびとのひとりひとりに使っていたのでは、きりも限りもありません。疲れ果ててしまいます。

どうしよう。どうしよう。どうしたらいいの。

涙がにじんできそうな眼に、不意に、ひとりの、狂女のような姿が飛びこんで来ました。

「リリー、あたしのリリーちゃんっ!!」

「あっ、ナタリーおばさん!」

リリーちゃんのお母さんは知り合いです。イースターの教会でお手伝いをしているひとなので、時々、アナのおかあさんのところに遊びに来ていたのです。クッキーを焼くのが上手な、おしとやかなひとでした。おしやまなリリーちゃんのいたずらにも、やさしく眼を細めてたしなめるくらいで、けして大声を上げたりしないひとでした。

けれども、今、おばさんの様子やかっこうはあまりにも異様でした。いつだってきれいに編みこまれていた髪はぐしゃぐしゃのざんばら、スカートも上着もずるずるで半分千切れています。お酒でも飲み過ぎたような真つ赤な顔で、潤んで血走った瞳ばかりギラギラしていますが、それさえまるで焦点しょうてんがあつていません。そうして、あんまり長いことペット・シヨップで育ちすぎてすっかりひねくれてしまったオウムのようないやらしい声で、ぎゃあぎゃあわめき散らすのです。

「リリー、リリーったら、どうしたの、はやくこっちにいらっしやい!」

「いやだ……おばさんったら、なんてことなの……!」

思わず立ちすくんでしまうと、おばさんは、アナの手をむんずと掴んで、すごい力で引っ張り、他の誰にも触られないようにギュッと抱きしめました。

「ナタリー、ナタリーおばさん、しつかりして。やめて！」

「おお、よしよし。ねんねなの。あんまりぐずらないでおくれ」

「おばさんったら……」

たちまちまたまわりじゆうに人垣ひとがきができました。

「グレーシー？ グレーシーなんだろう？ こっちをお向き」

「ちよつと、おばあちゃん、押さないでよ」

「おっさんなにするんや」

「ハロルド、ハリー!!」

「誰だわしの足を踏んだのは」

「ああ……もう。もう、いやっ！」

ナタリーおばさんを抱きしめ返しながら、アナは自分のおかあさんのことを考えていました。このひとがこうだとしたら、おかあさんは今頃どんなひどい姿になっているのでしょうか。心配です。恥かしいです。胸が焼けるようです。

「ママ、どこにいるの。あたしはいつたい、どうすればいいの。ああ……ママ! ……ケ
ン! ロイド。……ママあ!!」

そこらじゆうのおとなたちが、なんとかアナに近付こうとし、黒い手を伸のびして我先に触ろうとするものですから、とうとう押し合いへし合いがはじまりました。あちこちで、正視できないような本気の勝負も起こっています。髪を掴み、爪つめを立て、噛かみつき攻撃もアリ。男

のひと同士は、もう露骨に血みどろの殴りっこです。

いいおとなのすることではありません。どうみても、みなさん正気ではありません。感傷かんしょうにひたつてる暇などないのです。手加減をしている場合ではありません。

「リリー、リリーちゃん」

「もうやめて！ お願いだから、みんな、眼を覚まして。喧嘩けんかなんか、しないでえっ!!」

ビシイイッ!!

凄じい電撃すさまです。おとなたちは外側にふっ飛んで、アナの周囲半径五メートル以内がぼっかりと開きました。

ハッと我に返ったアナは、見てしまいました。

ミイラのように干からびてしまったオジサン。ありえない方向にガクリと折れ曲った誰かの手。でく人形のように、ガックリと崩れ落ちる瘦せたひとかげ。そして。びっくりしたように、信じられない裏切りにも出会ってしまったかのように、茫然ぼうぜんと丸く眼を見開いたまま、気絶してしまつたナタリーおばさんを。

ゾンビ化したひとびとも、この光景にはさすがに恐れをなしたのか、近付いて来ません。震えながらざわざわと重なり合いながら、こつちを見守っています。その暗く寂しい、顔、顔、顔。戸惑いと不安と、悲しみの顔。

誰もがみんな、実は、普通のオジサン・オバサンです。家に帰れば、いいパパやママなのです。

まさか、今弾き飛ばしてしまった中に、ケンの、ロイドのママはいなかったでしょうか？
アナ自身の大切なママはいなかったでしょう。いいえ、いいえ。ともかく、このひとたちはみんな、どこかの誰かにとっては、かけがえのない大事な家族なのです。打ったり叩いたり、意地悪をしたりしていいはずはありません。なのに。

攻撃してしまつた。

反抗してしまつた。

とりかえしのつかない傷を与えてしまつた。

「……あ……あ……ああ」

こんなの、もう、いやよ！

アナは両手で頭を抱えてイヤイヤをしました。思いがあふれて、スパークしてしまいそうです。なんとか我慢しようと思いました。けれども、取り乱した感情を、全身を震わせる力を、抑えることができません。

いや……いや……いや。

「……いやああああああつ!!」

「待てえつ!!」

「あうつ!」

ふくれあがり爆発しようとした気合いが、危ういところで抑えこまれます。眼に見えないその力の気配に、ああケンが止めてくれたんだわ、と思う間もなく、たちまち、すさまじい

反動がやって来ました。

全身の血が泡立ち、骨が軋み、内臓という内臓がミンチになるような、恐ろしい衝撃です。全ての痛みが五重六重のエコーを引きました。からだじゅうが痺れて、もう自分のものではないようなのに、頭の中だけはいやに冴えていて、時の中をいつもの五倍十倍ものスピードでジグザグに駆け抜けるのです。音のない悲鳴を絞りだしながらあえぐのどはひとつの痙攣を幾度も繰り返して体験し、百キロも彼方にあるような指は百年もの間虚しく宙を掴もうとし続けました。

ああ、でも。でも。しかたがないんだわ。

悲しいほど、はつきりしたままの意識の中、なすすべもなく漂いながら、アナは思いました。

あたしが悪かったわ。絶対に、してはいけないことをしちゃったんだわ。

こんなとてつもない力を、ひとにぶつけてしまうとどこだった。こんな痛みを誰かに押しつけてしまふところだった。それだけの可能性を持った以上、もっと、もっと、強いところでいなきゃいけなかったんだ。どんなに苦しくたって、我慢しなきゃならなかったんだ。なのに、ちゃんとコントロールできなかつたんだから。

当然なんだわ。罰を、受けるのは。

それに。

今はじめて、あたしは、自分がひとに、どんなにひどいことをすることができるのか、実

感することができた。これは、必要なこと。いい経験。試練だった。

ちゃんと、耐えなきゃならない。乗り越えなきゃいけないのよ。

痛みくらい、なによ。

死んでしまつたら痛いこともわからない。この力は、ひとを殺すことだつてできてしまう。でもあたしは死なない。

痛いってことは、生きてるってこと。まだ、生きてられてるってこと。その証拠。

あたしは、まだ、死んでない。死なない。この力をもう一度、ちゃんと、ひとの役に立てることが出来るまでは、死んだりしちゃいけないだわ。

……ああ、神さま。どうか、どうか助けてください……。

木の枝に積つた雪がそつと落ちるように静かに地面にくずおれるアナのからだを、たくましい腕が抱き止めました。

「アナ！ アナ、だいじょうぶか？」

「……ケン……ロイド……」

うつすらと眼を開けば、こころ強い仲間たちの顔が見えます。永遠かと思われたあの責め苦も、どうやら、もう、おしまいになったようです。

「ああ……ありがとう。ケン、良かったわ。止めてくれて」

「俺が？」

怪訝な顔をされて、アナもびっくりしました。

ケンじゃないとしたら、誰だれでしょう？　今やまさに流れ出そうとするPSIの力を抑えこむ、なんて、とんでもないことができたのは。……ノエルでしょうか？　でも、ノエルは遠くにいるのだし、それほどもだに強いとは思えません。ひよつとしたら、クイーン・マリ
ー？

でも不思議です。あの時、聞こえた声は……ひよつとすると、こころで聞いただけかもしれませんが、**「待て」**と叫んだあの声は、確かに、ケンの感触を持っていたのです。少なくとも、ケンにそっくりだったのです。

「わけがわからないわ」

まだめまいがします。考えがまとまりません。

「動物園や、ハロウィーンの時と同じだ。宇宙人に、おかしくされてるんだ」

ロイドが質問の意味を取り違えて、既に気がついていることをわざわざ指摘してくれたのはもちろんわかりましたが、訂正するのもおっくうなほどだるかったので、アナはおとなしくなりました。

「さらわれたひとたちね。あなたのママ、いた？」

「いや。でも、あっち側に別のドームが続いている。探そう」

「うん」

「……アナ」

「なに？」

ケンが急に手を伸し、頬ほほに触れそうになったので、アナはドキッと身をひきました。
「可哀想かわいそうに……気づいてないのか」

「なにが」

「おまえの、髪」

「え？」

サラサラサラ。ケンの指が梳とかすものが眼の端に見えて、アナはアッと息を呑のみました。
それは白かったのです。故郷の村をかこんだ山の高い峰かみねの雪のような、輝かがやかしい純白にな
っていたのでした。

「……………」

「さっき一瞬のうちに変わってしまったんだ。よっぽどのショックだったんだろう」

「……………」

捧まさげると、約束をした髪でした。思い切り短く切ってしまうことになってもいいと、覚悟かくご
を決めていた髪でした。けれど、こんな風に変るなんて、思ってもみませんでした。

自慢の髪だったのに。昔むかしは、旅をはじめの前には、夜空のように漆黒しつこくで、たつぷり背中を
覆おほうほどもあったのに。金髪に憧あこがれた時もなくはないけれど、でもやつぱり、自分には、あ
の、まっすぐで黒くて健康的な、エキゾチックな髪が、絶対に似合うんだと思っていたのに。
短い前髪を引っ張りおろすようにして何度ためつすがめつして見ても、それはやつぱり、
信じられないほど真っ白なのでした。

もう、二度と、戻らないの……？

そんな場合じゃないといくら冷静になろうとしても、涙がどんどんこみあげて来ます。あのすさまじかった痛みよりも、このことのほうがずっとこたえてしまうのが、アナ自身にも不思議でした。

「泣くな。泣くことなんかじゃないか」

「……だって……ケン」

「きれいだぜ」

しゃくりあげるアナを、ケンは、不器用に抱きしめました。

「ほんとさ。すぐきれいだよ。きれいだから。泣くな」

「そうだよ、よく磨いたメタルみたいでとってもオシヤレだ。流行るかもしれない」

ロイドも真顔で保証してくれます。

「それにね。どう変ったって、アナはアナだろ？」

「……うん……うん」

がんばって、何度もギョツと眼をつぶって。

アナは身を離します。

「ほんとに、変じゃない？」

「変じゃない変じゃない」

「カッコいい！ サイコー」

「……そうなら、いいけど……」

笑おうとしたら、また涙があふれてしまいました。でも、もうひと粒だけでした。

「大丈夫か？ 歩けるか？」

「平気」

立ち上がろうとしたものの、膝ひざに力が入りません。

「無理するな。おぶされ」

ケンが背中を差し出します。

「いいよ」

「遠慮するな。おまえなんか、軽いもんだ」

一瞬だけためられました。結局はうなずいてしがみつかせてもらったものの、ケンの肩かたや背中は、なんだかやけにぶるぶる震えています。

アナは思わず、笑ってしまいました。

「やあだ。相当疲れがたまってるんじゃない？ やっぱり、降りようか」

「ち、違ちがう。こ、こ、これは、ち、地震だ。地面が揺れてるんだ！」

「え？」

「う、うわあああつ！」

ごごごごごごごごごつ!!

おなじみの効果音をあげて、床ゆかが崩れ、持ち上がります。何かが地中から出てくるので

す！ たちまち大きく傾いた足場に、ひとびとはみな将棋倒しになり、泣き叫びながら壁際まで滑り落ちて重なっていきましました。三人とても例外ではありません。せめてバラバラにならぬよう、必死で互いの手を繋ぐことができたばかりです。

「見ろ！ 宇宙船……マザー・シップだ……!!」

誰かの上にはじょうずに着地しながら、ロイドが叫びました。

ほんとうです！ 何かの映画の中で見たような、電飾もたつぷり豪華に鮮やかな貝殻型巨大宇宙船が、ドームの床も壁も屋根も次々に突き破りながら、ぬうつとどこまでもどこまでも伸び上がって、高くそびえて行くのです。

「……ダレだ……？ ジャマをすルのは……!!」

耳にでしようか、頭の中になのでしようか。キィキィと感じの悪い何かの「声」が、圧倒するように響き渡ります。

「……しよウのない『バグ』だ。まったく『ばぐ』ばツカリだ。セツかくおもしろくなつてくると、すぐコレだ……」

「ちくしよう！ ぶっ飛ばしてやる」

「待て！」

どこで手に入れたやら、パイナップル型手榴弾の安全ピンを抜こうとしたケンを、ロイドが止めます。

「よく見ろっ、下のほうを」

「ああっ……人質がいるっ！」

見れば、今はもう支えもなしに中空遙かに浮び上がった宇宙船の一番下側のガラス張りになった部分にも、おとなたちがぎっしりと乗せられているではありませんか！

「おお、ギーグ!!」

「ギーグ」

「可愛いギーグちゃん」

「わたしの坊や」

「ふふん。フはは、ははははハはハ！」

おとなたちがことに母親たちが口々に叫ぶと、気味の悪い声はひどくうつろな笑いかたをしました。マザー・シップ全体が、ゆさゆさと揺れたように見えました。

「……バカナ「ばぐ」たち。ほんとおに、シヨウがナイ「バぐ」たちダ……おヤ？」

「ハ―イ、みなさくん!! お待たせしました」

オレンジ色の炎をなびかせながら、ああ、イヴが飛んで来ます! どうやら、例の巨大ロボットを倒したみたいです。

「……偉い」

ロイドがしみじみつぶやきました。

「ご安心ください。わたくしこと、正義のロボット、イヴがやって来ましたからには、もう、こくんな宇宙人なんてちょちょいのちよいです」

三人は無言で顔を見合せます。ほんとうにそうならこれほど嬉しいことはありませんが。マザー・シップとイヴは、ただ大きさの点からだけ見ても、ゾウとアリンコほど違います。おまけに、向うには例のなにやらないへんそんな兵器だつてあるはずなのです。

腕時計の部品一個で直つたばかりのイヴです。おまけに、あの性格です。いったい、どんな攻撃をしようと言うのでしょうか。とても樂觀はできません。

「さぞ待ちかねたことであろうぞ『ギীগ』どの。やあやあ尋常に、勝負、勝負」
これですからね。

「……なんだ、おまエ?……」

さすがのマザー・シップも動きを止め、なにやら茫然とした様子で、あちこちの窓を無意味に点滅させました。

「やーね。ちゃんと名乗つてあげたでしょ。イヴだったら」

「……あ、おもいだした。ゆがみはかせのおんぼろぼつとだナ。カイぞうしテもラつたのか……」

「やだわ。昔の名前で呼ばないで」

「……がらくタにはよウはない。アつちにいケ……」

「あつ。きやーっ!!」

大見栄を切つたのはどこの誰なのでしょう。巨大ロボットを倒したのは、どんな技だったのでしょうか。

マザー・シップがその一千個もありそうな棘^{とげ}々のどれかからレーザーを一閃^{いっせん}し、ボディからランドセル型の飛行装置までを貫くや、銀色のイヴは四肢をつっぱらせ、きりきり舞いをしながら、まっ逆さまに落つこちて来ました。附近^{よきん}のおとなたちがあわてて四方に散つて、スペースを開けます。

「ああっ」

「そんなっ」

「イヴ——ッ!!」

三人は駆け寄りましたが、何もできません。

ぐしゃり!

床に叩きつけられてべっしやんこになってしまったイヴの、半分潰^{つぶ}れた微笑に間に合っただけです。

「ああ、ぼっちゃん、じょうちゃん……ここにいたんですね」

片方だけの緑の瞳^{ひとみ}が、消える前のろうそくのように燃え上がります。

「イヴ!」

「しっかりして」

「心配するな、また直してやるから」

「いいえいいえ。わたくしはもう壊^{こわ}れます。やっと壊れることができそうです。どうかちゃんと耳をすまして、聞いてくださいよ」

「え？」

メロデイです！

「イヴは七番めのメロデイを、遺言代りに置いていったのです。揃ったあつ!!」

その瞬間。

世界はぼやけ、空間は溶け、時間は混ざりました。

三人は、自分たちが無限が増えてしまったかのような、すべての場所とすべての時を漂っているような奇妙な感じを覚えました。まるで多重露光にした画面の中に入ってしまつたみたいです。目まぐるしいジャンプの連続のようなものだとも言えます。

ほんのりピンクのベールがかかって感じられるのは、きつとマジカントが混ざっているからです。ノエルの泣き声が、砂漠のおじいさんの高笑い、エバンジェリンの儂い微笑みが、次々に現れては薄くなり、次に来るものに場所を譲ります。そこはバレンタインの栈橋、ストバイが唸る音が聞こえます。そして。

「ジョージ！ ジョージい！」

「マリアあああつ！」

……遠い遠い昔、銀河の中心のほうから巨大な宇宙船でやって来たひとりぼっちの宇宙人のこと、彼女とかかわりあったたふたりの地球人のことも、みな、まるで、今いつせいに眼の前で起こっていることのように、はつきりとわかるのです！

「おお、ジョージ。ここはどこ？」

「たぶん、さっき見たあのバカでかい宇宙船の中だ」

「……見て！ あれ。なに？ なんて大きな虫……きやあつ、尻尾しっぽがあるわ！」

「傷つけはしません。あなたがたは、貴重なサンブルです」

「ちくしょうつ。モルモットになんかされるもんかっ!!」

「おどろいた……おどろいた……こんな辺境わくせいの惑星にも、亜PSI人種が存在したのか！」

「るー、るーるるー、るるるーるー」

「それはなんですか？」

「るーるるー……え？ これ？ やだ。恥かしいな。子守り歌のつもりよ」

「こもり歌……教えてくダさい。どう歌うのですか」

「あら、宇宙人さんにも、こどもがいるの？」

「わたしたちの種族は卵で生れるのですが……はい、います。まだ孵化していません。こどもが、あの奥に。そういうあなたもなのですね、マリア？」

「ええ。もうじき生れるのよ」

「でハ、ニンゲンの産仔を観察することができませぬ」

「やーね！ ……ねえ、じゃあ、もしかすると、あたしたち、おかあさん同士なのねえ。なんだか不思議な気分」

「はい。だから、わたしも覚えて歌ってやります。わたしのこどもに、子守りうたを」

「彗星が……?!」

「このままだと太平洋を直撃する？」

「あああつ」

「どうしました、マリア」

「じ……陣痛よ……生れる……あたしたちのこどもが……」

「こども……」

「ああつ」

「しっかり、マリア！」

「……わかりました……なんトかしましょう」

「なんとかって？」

「まかせてください。わたくしはPSIなんですから……！」

……スパーク……!!

「なんてことを！」

「ごめんなさい、ごめんなさい、地球のために」

「……お願いですマリア、ジョージ。この子を……この子を……」

「卵ね！ わかったわ、ちゃんと孵かえします。育てます。約束します。でも、いったい、どうすればいいの？ 暖めるの？」

「そのまま……ただ、孵化かえするまで、地球の年で、百五十年ほどかかります……」

「百五十年ですって？」

「ほくらはそんなに長いことは、生きていられないぞ！」

「知っています。でもこの船には、PSIパワーによる一種のタイム・カプセルがあるので
す……どうかうまく使ってこの子がちゃんと生れるまで、見守ってやってください……ごぶごぶ
んぞ」

「宇宙人さん、宇宙人さんたら、しっかりしてっ」

「わたシの名はギーグ。この子にも、同じ名を……」

「ギーグ」ね」

「そうです。もっと早く教えれば良かったのに（笑）……サようなら、ジョージ、マリア。あなたがたと出会えて楽しかった。やっぱり宇宙はひとつなんでスね。……種族が違っても、ともぐちになれ……」

「ギーグうつ!!」

「……………」

「あ、ありがとう、ギーグ。ほんとうにありがとう！ 約束は、きつと守る。地球は、きみのことを、けしてけして忘れないよ……!」

それが、ジョージとマリアの、つまりは、ケンのひいおじいさんとひいおばあさんの、誰も知らない秘密でした。大切な約束でした。

そうして、おかあさんギーグに地球まるまる一個分の恩を受けてしまったふたりは、相談して、役割分担をすることに決めたのです。ジョージは生れたばかりの赤ん坊をつれて地球に戻り、高い文明を持った他の星の生物たちがまたやって来る日のために、PSIを研究すること。マリアは宇宙船に残り、タイム・カプセルに入って、ギーグの卵が孵る日に備えること。うまくPSIの研究が進めば、夫婦がふたたびいつしよに暮すことだって夢ではないかもしれない。若いふたりはそう信じ、涙をのんで、互いに離しがたい指と指とをもぎ離し

たのです。

けれども、不幸なことに。

乳飲^{ちの}み児を背負ったまま奇妙な研究に没頭したジョージは近所じゆうから白い眼で見られることになりました。その一生は、PSIの秘密を明かすには少々足りませんでした。

そして、マリアのタイム・カプセルはちゃんと働かなかったのです。人間が使うとすること自体にもともと無理があつたのか。それとも、その後、地球上をおそつたさまざまな変化（大気や海の汚染、異常気象、地磁気の乱れや放射能兵器の濫用^{らんよう}などなど。この百五十年間はそれ以前とはずいぶん違つてしまいましたから）が悪い影響を及ぼしたのでしょうか、確かなことはわかりません。ともかく。

マリアはギーグの船の強力なPSIフィールドの中で、クイーン・マリーに生れかわり、人間だった時の記憶をなくし、マジカント国を発生させてしまったのです。あの甘つたるいピンク色の、赤ちゃん部屋の国を。

そして、子ギーグは、守ってくれるものとてなしに、卵から孵つてしまったのでした……！

「思いました！」

彼女は叫びます。

「なにもかも、はつきりと。おおジョージ……あなた。ギーグ!! あの歌も、もちろん、思いましたわ!!」

ホーリー・ローリー・マウンテンのてっぺんに、すべてのイメージと音を圧して、クイー
ン・マリーの歌声が響きました。

♪るー、るーるるー、るるるーるー

るーるるー、るるるるー……。

全部でたった八小節の、とても短い歌でした。けれど、何度も何度も繰り返します。最初は、ちゃんと確かに覚えているのかどうか、確認するかのよう。それから、誇らかに高らかに、世界じゅうに聞かせるように……！

いつしか、無意識のうちに、声を合わせて歌っていました。アナも、ケンも、ロイドも。物悲しい、懐かしい、甘いメロディです。自分の唇から漏れる音にも涙が出てしまいな、いつかおかあさんの膝で胸で聞いたことのありそうな、そんな歌なのです。

「……な、なんだ、それは……？ ヤめてくれ……！」

空を圧倒するようにそびえていたマザー・シップが、大きく揺らぎはじめます。尻尾のある巨大な宇宙人が、バタバタと赤ん坊のようにもがいている気配が伝わっているのでしょいか。

♪るー、るーるるー、るるるーるー

るるるるー、るーるるー、るるるー……。

「う、うるさい……。よせ……。ヨスんだ……。ソれを……。うたを……。やメろおおつ！」
マザー・シップの表面にぴかぴかつと赤い稲妻いなぎのような光が走ると、急にのどが苦しくなりました。どうやらギーグの攻撃のようです。あたりの空気を薄くして、声が出せないようにしようとしているのです。

それでも、クイーンも三人も、歌をやめませんでした。てのひらに爪つめをたて、顔が真っ赤になるほど力をこめて。さらに強く、さらに大きく、さらにはつきりと歌います。美しい、母の愛の歌を……！

「ぼっ、バグどもっ！ ぼグどもめガっ!! ダマれだマれだマレウタうんじヤないいいい
いっつ!!」

いちだんと音がふくれあがります。

ああ、ここにいるおとなたちが、とらえられていたおかあさんたちが、おとうさんたちが、いっしょに歌ってくれたのです……！

「……ウ……うたウな、そノ……うたを……」

最初はおずおずと、次第次第に力強く。大勢のひとが加わります。もう、ドームじゅうが震えるほどの大合唱です。

ここだけではありません。世界じゅうのあちこちが、歌い始めているのです。

ジョーのいい声が、エイミーの照れ臭はにかみそうな声が、ほら、あなたにも聞こえて来ませんか。

オルゴールが、歌うサルが、カナリヤ村のローラさんが、かつて自分が預っていたパートに
来ると、ひときわ得意そうに声をはりあげるでしょう。ふたごのミニミとミニミが、遠くに
住むともだちの赤毛のピッピが、元氣よく加勢してくれますね。紫色のピアノが、不思議な
サボテンが、サムおじいさんの家のジューク・ボックスが。みんなみんな肩を組んで揺れな
がら、ひとつの歌を歌うのです。倒れていたイヴも立ち上がり、あの最後の歌をもう一度、
誇らしそうにソロします。

百五十年の昔、遠い遠い見知らぬ星から来たともだちが覚えたいと言った、あの素朴なひ
とつの歌が、今、地球じゅうに生命を得て、みごとに蘇ったのです……！

森や山や草原から、虫たちとけものたちの声が沸き起り、混ざり合います。海の底で雲
の上で、魚たちが鳥たちが参加します。いい声のものは堂々とリードを取り、イマイチのも
のもそれなりに。鳴き声を持たないものだって、こころの中ではちゃんど。みんなみんなひ
とつです。舞い散る粉雪も、風に揺れる花々も、空を飛ぶ雲の流れも、ほら、宇宙のあつち
側で瞬いている星々さえもが、まるで、歌声に合わせてスウィングしているように見えませ
んか。

幼いものたちは、もうみな幸福そうにうっとり瞳を閉じて。親なるものたちは、誰しも
きっぱりと胸を張って。そばに誰かがいれば互いに手を取り、ひとり彷徨っているものたち
もたいせつなひとのことをしつかりと考えながら。同じひとつのメロディに、みんなのここ
ろがひとつに溶けます。この愛すべき世界を、次代への期待を、生命のめぐみへの感謝の祈

りを、高らかに謳い上げるのです。

るーるーるるー、るーるーるるー

るーる、るーる、るるるー

るーる、るーる、るるるる……。

「やメろおっつ！」

地球が歌います。

「や……」

ハミングします。

「!!!!!!」

マリアの、子守り歌です……!!

「……………」

「なぜ ナぜ ほくだけひとりぼっちなの。ドウして みんなとチがうんダ。カあさん
オカあさん ママ おふく口。どこ？ どこニいるノ？ でてきてよ。かくれテないで。だ
っコして。かおミせて。おかあさん？ ほくの だいジな おかあサああん……?!」

「おお、よしよし。よしよし、泣かないで」

ピンクの宮殿の真ん中で、母なるマリアは、たつぷりと両腕を広げました。

「いい子ね。いい子ね。ギーグ。さびしがらせてごめんなさい」

「……まマ……？」

時も場所も、種族も越えて、マリアは尻尾のある赤ん坊を、愛しげに抱きしめてあげるのです。

ひよつとしたら、生れたばかりで手放してしまったほんとの赤ちゃんの身がわりなのかしら。

と、アナは思いました。

むしろ、罪滅ぼし？ 守れなかった約束の後始末？

けれどマリアの表情は、あくまでも穏やかでやさしく、そんな勸導りなど不必要に、無関係にも見えるのです。やっぱりマリアは「すべてのこどもたちの母」クイーン・マリーなのだとも言えるのではないでしょうか。

「ギーグ、ギーグ」

小さな白い手が、尻尾の長い昆虫こんちゅうのような生物の頭を、何度も何度も撫なでました。

「約束を守れなくてごめんなさい。辛つらかったでしょう。こころ細こまかったでしょう。でも、もう大丈夫よ。もうひとりじゃない。わたくしがついていてあげる。だから。さあ、行きましょうね、ギーグ。おかあさんのところへ」

「おかあさんの？ ……ママのところ？」

「そうよ」

「知ってるの？ほんとに？ ほくのおかあさんを？」

「ええ。よおく知ってるわ」

やさしく微笑むクイーン・マリー＝マリアに、しっかりと手をつないでもらうと、子ギグはキラキラとその表情のわからない瞳を輝かせます。はしゃいだ様子で、大きくうなずきます。

「うん！ なら、ほく、行く！」

「でもほかの子はダメよ。いっしょにはいけないの」

「ほかの子……ああ、ワかった。こいつらだね！ 降ろすヨ、降ろす」

マザー・シップから不思議な色の光の帯が伸びて来ました。捕えられていたひとびとが、ゆつくりと歩いて降りて来ます。

「……あつ……ママだっ！」

ロイドが叫びます。

「あれは……おふくろ？」

ケンがなきべそを堪えているような顔になります。

アナはたまらず、走りだしました。降りてくるひとをかきわけて、光の帯を登って登って

……飛びつきます！ おかあさんの胸に！

「……………!!」

無言でしがみつきます。抱きしめ合います。おかあさんです。おかあさんの手触り。おかあさんの匂い。いつもと同じ。おかあさんのぬくもり。

宇宙船の中にとじ込められていたひとびとは、ドームにいたひとたちほど悲惨にはなっていないかったのです。

……良かった！

うちのおかあさんは、ちゃんとうちのおかあさんのままだった……………！

やがて、マザー・シップは静かに浮き上がると、ぐんぐん登り、空の高いところで見えなくなりました。

最後にチカツと光った時、思い切りクイーン・マリーに甘えてじゃれている、子ギーグの^{まぼろし}幻を、アナは、見たような気がしました。

かくして、地球の危機は回避されたのです！

10　そして次の旅へ

ホーリー・ローリー・マウンテン頂上の周囲に、飛行機やヘリコプター、飛行船などがいくつもいくつも集まって来ました。食糧や衣料、救急用品などの包みが、パラシュートつきで、いくつもいくつも落とされます。これまではギーグのサイコ・バリアーに阻まれて近付くことができなかった、国連軍や各国政府、報道機関のひとたちが、さらわれていたひとびとの救出に来てくれたのでした。

後から聞いたところでは、ジョーと湯上博士が相談して呼んでおいたのだそうです。三戦士（足すことのイヴ）の勝利を、すっかり確信していたのですね。

空は青く、雲は白く、山を渡る風はあくまですがすがしく。鳥が歌い、花が咲き、蝶々が舞う。けものたちのこどもも、次々に生れて来るはずです。

季節はこれから、爛漫の春なのでした。

乱れた金髪がはみ出した赤い野球帽子。輝く白銀のオカッパ頭。おでこが広そうな輪郭の一部に眼鏡のつるが見える栗色のくせつ毛。小さな戦士は三人、なんとなく横一列に並んで、空の高いほうを見上げました。

「……終ったな……」

ケンがつぶやくと、ロイドが黙だまつてうなずきます。

アナは、何かうまいことを言いたかったのですけれども、あいにく何にも思いつきませんでした。

今になってみれば、まるで、何もかもが夢ゆめだったみたいです。結局、ギーグとは、クイー
ン・マリーとは、マジカントとは、いつたいなんだったのでしょうか？ ほんとうにいたひ
とたち、あつたできごとなのでしょう。だいたいこの世の中に、ほんとうにほんものだと
言えるものなんかあるのでしょうか。

ずしりと重いあのルビーのペンダントが、何かの証拠のように、残されてはいるのですが、
なぜかからだがスウスウします。どこか頼たよりないのです。

だからアナは、ただそつと両側に腕を伸のびして、それぞれ男の子たちの手に指先で触れてみ
ました。ケンの手はちよつと逃げ、ロイドの手はぴくんと震ふるえます。でも、結局どちらも、
ギユツと握にぎつてくれました。ふたりとも、未だいまにちよつぴり照れ屋なんです。こんな時だつ
ていうのに。まだカッコなんかつけてるんです。

ああ、そうです。

アナは、寂さびしいのです。

とてつもなくおセンチな気持ちになってしまっていて、たまらないのです。

でも。地球防衛軍は、もう必要ありません。もうじき、解散。さようならです。永遠の友

情を誓つても、これからは別々の町で暮してゆくことになります。何度も運命を共にし、生命をかけて守りあつた仲間なのに……もうすぐ、お別れなのです……。

ちなみに、三人のおかあさんたちも仲良しになって、脇のほうで、もうすっかり所帯じみた世間話をしていました。どこそこの靴下は安いわりに丈夫だとか、どこの洗剤がよく落ちるとか。まったく、オバサン魂はたいしたものです。地球の危機やその回避くらいでは、そうそう動じやしないのです。

「……おい、そのーっ」

真上でホバリングしていた大きなヘリコプターから、野太い声が降って来ます。戦士たちは……いいえ、もと戦士たちは、思わず、手を離してしまいました。なんだか担任の先生にみつかつたような気分がしたのです。別に悪いことをしてたわけじゃないんですけれどね。なんとなく、赤くなつてしまつたりして。

アナの眼に最初に飛び込んで来たのは、横腹にNBS国際ネットワークのマークの入つたカメラでした。ぴつたりこつちを向いています。

「ケン？ ひよつとして、そこにいるのは、ケンじゃないかあーっ?!」

「……パ……じゃねえ、オヤジい！」

「いようっ！ 大変だつたようだなあ。よくやったあ。ケンはおかあさんに似て、がんばり屋だからな」

「よせやい」

「おまけにハリケーン・ジョーだのなんなの、いろいろと知り合いができたらしいじゃないか。いいドキュメンタリーができそうだ。さっそく、特番組むからな特番！ よろしく頼むぜ」

「知るか、そんなもん！」

「こづかいへらすぞっ」

「き、汚ねえっ！」

笑っているオジサンは、マイクつきのヘッド・セットをかけ、茄子型サングラスなんかも似合っていて、やっぱり相当にカッコ良いのです。操縦席のひとやカメラのひとに、テキパキ質問や指示をしている感じも、いかにもでした。

「俺はもう社に戻るんだが。なんなら乗ってくかー？」

「う……」

うんっ！

と、単純に喜びかけたのは、たぶん、飛行物体一般が好きでしようがない性分のせいでしょう。と、単純に喜びかけたのは、たぶん、飛行物体一般が好きでしようがない性分のせいでしょう。

途中でことばを飲みこんだケンは、くるっとこっちを振り向きます。なんとなく気遅れして、後ずさりしてしまっていたアナを、ちゃんと見つけてくれるのです。

そうして、氣遣わし気に首を振り、あの素敵で青い眼を細めた表情は、はじめて逢った頃よりは、ずいぶんおとなびているのです。

「アナ。どうして逃げるのさ」

「別に」

「教会に、帰りたいか？」

「え？」

「じゃ、いっしょに、行くだろ」

「な、何の話よ。どこに行くっていうの？」

「もちろん」

ケンこぶしは拳を固め、声をひそめます。

「新しい冒険ぼうけんに、さ！」

「行こうよ、行こう！ だって、ぼくらはもうこどもじゃない」

「……あ……！」

なんて不思議なんでしょう。ずっとだめだったケンの放送局が、アナのラヂオが、いきなり働きはじめたのです！

『今さら良い子になんか戻れるかよ。家に帰ったってつまんねーし。学校に戻ったって退屈だろ。おとなの都合に巻きこまれるのはごめんだ。育ててもらった分の恩義おんぎは、今度の旅でりっぱに返したじゃあないか。難しい理屈は抜きにして、とつとどつかに行つちまおうぜ。きみやロイドといっしょなら、行く先なんかどこだっていい。どこだってサイコーさ。今度こそ、誰だれのためでもない、ぼくら自身のための冒険の旅に、なあ、みんな、早く、出発しよ

うぜー!

「……………うんっ!!」

力いっばいうなずくアナの手は無意識に、おへそのあたりを撫なでました。その微笑ほほえみはどこかしら、クイーン・マリーに似ていないことありません。

ふもとでは、もう桜だつて咲きいているのです。

おわり

あとがき

こんにちは。はじめまして（かな？）。
『MOTHER』の世界に、ようこそ。

あなたはもう、ファミコン・ゲームのほうの『MOTHER』をクリアできましたか。わたしはね、今これを書いている時点では、まだバレンタインの町を発見できていないのです。シナリオだの設定表だのキャラ一覧だのを参考にし、先にアガッてしまった上手な人が作ってくださったアンチョコ（どこでどんなアイテムを手にいれておかなきゃならない、とか）を見ながら、着実に、ズルツルに、どんどん進めたのですけれども。完全攻略を果たすまで書かないなんていつてると、絶対に原稿がおちそうだったもので。泣く泣く、途中であきらめたのでした。

それにしても。

シゴトのためにRPGをするのは、少々複雑な気分でした。

おもしろいゲームは一種の麻薬。ストレス解消のため、生命の洗濯のため、気分転換のため……とかなんとかいいながら、すっかりはまりこんでしまうもの。

「ああ、あたしってなんて意志がよわいんでしょう。グータラでノロマでダメな奴やつなんですよ、しくしく」

自虐じぎやくの快感にひたりつつ、長いほうの時計の針が何度ぐるぐる回っても、指はけしてコントローラを離そうとしないのであった……というのが、うれしはずかしゲーマーの普通ではないでしょうか。「ファミコンは一日一時間にしよう!」と、かのタカハシ名人もおっしゃっておられます。つまり、それだけではすまないひとが、日本じゅうに大勢おられるということだよねえ。

なのに。

今回あたしは、一日何時間でも使えるだけ使い、ご飯も外出も寝る間も犠牲ぎせいにし、ただただゲームに没頭すればするほど、なんと、熱心にシゴトの準備をしていることになってしまった。多少原稿のスタートがおくれても、言い訳できる。しかも、今、ゲームをやっていますから、というのが、言い訳になってしまふ。幸せです。ありがたいことです。でも、なんとなく、どことなく変な感じがする、ハズカシイような、調子がくるつちやうような、どうもイマイチ不満なような気分がする……なんていったら、やっぱり罰ばちがあたるんでしょうか。

しかも。

発売前のゲームをやったのなんてはじめてでした。基板ムキダシのROMカセット、最終決定ヴァージョンとはちよつとちがつているソフトです。日本じゅうのほとんどのファミコ

ン・ファンが、まだ知らない、手にすることのできないものを、いち早くやってしまうなんて。えっへっへっへ、やっぱり、かなり得意ですよねえ。

もつと恵まれて(?)いたのは、ウチのカレです。ファミコンなんて持ってない、ほとんどやったこともないタイプだったのに。ちょうどわたしが、砂漠さばくに一步ふみこんで真つ青になつているところにアソビにきまして。他の場合ならさっさとやめるところですが、なにする今回ばかりはきっぱりシゴトでしょう。

「わるいけど、今手が離せないの。あ、やれやれ。大変なこと」

むずかしい顔をしつつ、しつかりちゃっかり遊び続けておりましたところ。

「ふうくん。……ねー、それって、どうやるの? ちょっと、貸して」

「お。やつてみたいの?」

「うん」

「じゃ、ま、いいか。代って代って。殺さないでよ」

はまりましたね、カレ。ビギナーズ・ラックといいますが、シロートさんが夢中になるとおつかないといえますか。なんだか、やたらにどんどんすすみましたね。ひよっとすると才能があつたりするのかもしれない。いやいや、この私が、へたすぎるってことかもしれないが。

おかげさまで、砂漠ジジイにあうところとか、超能力赤ちゃんのその超能力の秘密とか、いくつかの重要ポイントを見せてもらえたのですから、まったくありがたいことでした。そ

うしてあたしはカレに、RPG初体験が発売前のソフトだなんてすっごいゾ、と恩をきせちやうわけです。そんな奴めったにいないよね。イマドキまで大事にまもっていたファミコン・ヴァージンをやぶるのに、これなら、はずかしくなかつたりしないかしらん。

ゲーム版の「MOTHER」がめでたく発売になったら、改めて、仲よくいっしょに戦っちゃおう、と思つてます。うふふ♡

ところで、この本の内容は、ゲームのシナリオとは、かなり違つたものであることを、きつぱりとお断りしておきます。よつて、攻略本としてお使いになる場合は、充分ご注意ください。小説に出てきた特殊アイテムをゲームの中で探しても、半分以上は、虚しいだけですからね。

どこがどう違うか興味を持たれたかたは、ぜひ、両方お楽しみくださいませよう。

それにつけても。「なんでも好きなようにやってください」とおっしゃってくださいました（さすがに有名人はふとつ腹）の原作者さま。大量の資料をたびたびFAXしてくださいました（わたくしめの冗談を受けて、わたくしめを「くみビューン」と呼んでもくださいました）糸井重里事務所のイシイさん。二章も残して高飛びしてしまつた私を笑つて許してくれ続けたやさしい（でも、しっかり原稿は取り立てる）新潮社のAさん。その他でくくると申し訳ないエトセトラのみなさん。たいへんお世話になりました。すぐ楽しいシゴトだったです。おかげさまで三キロ痩せ、五キロ太りました。こんなに冷や汗をかいたのだから、もう夏バテ

なんか怖くありません。ほんとうにありがとうございます。お買上げくださいましたあなたさまにも、感謝です。

わたくしめもまた、チャンスがあり次第、新しい冒険の旅に出たいと思っています。もしまた機会がありましたら、どこかでお逢いしましょう（あ、言い忘れてましたけど、この本にはいろんな映画や本やなんかのパロディがいっぱいあります。ちなみに、この最後の文章も、とある女流作家の真似っこです。誰だかわかる？）……。

寝惚けマナコのくみビューンこと

久美沙織



本書は新潮文庫に書下ろされたものです。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

- 一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。
- 二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
- 三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。
- 四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

田中雅美著

星くず殺人事件

待ち合せの公園であたしを待っていたのはクラスメートの無惨な死体だった。そしてあたしのバッグの中に、血まみれのナイフが!?

田中雅美著

クラスメイトに 手を出すな!

大友くん、理香ちゃん、耕一くん、奈美子。ユニークでミスマッチな四人の、おかしくてちょつと悲しい、青春コミカルミステリー。

田中雅美著

クラスメイトに御用心

ジョギングしていた大文字教授が花壇に横たわる死体を発見して城南大は大騒動。愛と勇氣と友情のクラスメイトシリーズ第二弾。

高橋源一郎著

虹の彼方に オーヴァー・ザ・レインボウ

アメリカ行きの地図を創り、お弁当をもって晴れた日の昼下がりに出発すること——ポツポツでキュートな、明るいポストモダン新物語。

高橋源一郎著

ジョン・レノン対火星入

頭の中がスプラッタしてしまつた「すばらしい日本の戦争」を救うべく、わたしとT・Oの奮闘は続く。六〇年代三部作堂々完結編。

高橋源一郎著

ぼくがしまつた語を しゃべった頃

現代文学、少女マンガ、アイドル、歌謡曲……現代のすべてが一冊でわかつてしまつた伝説的百科全書エッセイ、ついに文庫化する!

筒井康隆著

家族八景

テレバシーをもって、目の前の人の心を全て読みとつてしまう七瀬が、お手伝いさんとして入り込む家庭の茶の間の虚偽を抉り出す。

筒井康隆著

俗物凶鑑

評論家だけの風変わりな梁山泊プロ出現——現代のタブーにばかり秀でている俗物先生たちと良識派との壮烈な闘いが始まった……。

筒井康隆著

狂気の沙汰も

金次第

独自のアイディアと乾いた笑いで、狂気と幻想に満ちたユニークな世界を創造する著者のエッセイ集。すべて山藤章二のイラスト入り。

筒井康隆著

将軍が目醒めた時

“将軍”として精神病院に君臨してきた蘆原老人が長い狂気の眠りから目醒めた時、何が起ったか？……表題作ほか、全10編を収録。

筒井康隆著

おれに関する噂

テレビが、だしぬけにおれのことを喋りはじめた。続いて新聞が、週刊誌が、おれの噂を書きたてる。あなたを狂気の世界へ誘う11編。

筒井康隆著

男たちのかいた絵

おくびようで意気地なしでも、拳銃が片手になれば怖いものはない——チンピラやくざの世界にくりひろげられる奇妙な味の連作集。

新潮文庫最新刊

五木寛之著

哀しみの女

たまたま見かけたシーレの絵の中に、自分の未来の姿を予感した女の運命は!? 男の野心と女の愛を描く大人のための恋愛小説。

連城三紀彦著

もうひとつの恋文

言葉ではいいあらわせない想いを抱きながら、都会の片隅で生きていく男と女を鮮やかに描く。直木賞受賞作「恋文」と姉妹編の5編。

田中康夫著

昔みたい

アップバー・ミドルの素敵な女たちの現在と過去、幸せと悲しみを東京、芦屋、ヴェネチア、パリなどを舞台に鮮やかに描く15の掌編。

山口洋子著

東京の女

偶然乗り合せたタクシー運転手の言葉から蘇る過去の激しい日々。東京の街で生きる男と女の様々な人間模様を描いた、七つの物語。

日下圭介著

偶然かしら

偶然が重なって一人の男が死んだ。この平凡な事件に違和感を抱いた刑事がいた……。「偶然かしら」など9編を収めた短編集。

古川薫著

不逞の魂

下層階級出身の優秀な青年はいかにして歴史の舞台に躍り出たか。宰相田中義一を主人公に、明治の男の青春を描く書下ろし長編小説。

新潮文庫最新刊

柳田邦男著

最新医学の現場

最先端技術を駆使し〈治療困難〉を〈治療可能〉に変える医師たちのたゆまぬ努力とその着実な成果。28の現場取材した熱い報告書。

本田靖春著

警察のサツ回り

昭和30年代前半、時代を謳歌した若き新聞記者たちの生誕と、彼らに「ババアさん」と親しまれたバーのママムの波瀾の半生を描く回想録。

鈴木健二著

男は20代に何をなすべきか

20代は人生の最後の準備期間であり、きみの人生の価値はここをどう過すかによって決る。大先輩が教える20代テキスト・ブック。

日経ビジネス編

会社の寿命

—盛者必衰の理—

会社の寿命は三十年——では、どうすればあなたの会社は生き延びることが出来るのか？必読のベストセラー三部作第一弾！

島尾伸三著

中華凶案見学

中国や香港の市民が日常生活で愛用する雑貨には必ず凶案がついています。本書は、そのデザインの意味や謎解きを楽しむカラー文庫。

久美沙織著

MOTHER

—The Original Story—

地球の危機を救え！三人の子どもたちの闘いが、いまはじまる——糸井重里入魂、愛と感動の超大型ファミコンRPGを完全小説化。

新潮文庫最新刊

J・ケラーマン
北村太郎訳

殺人劇場
(上・下)

切り刻まれ、入念に洗われた死体——変質者による連続少女殺人事件を追う刑事たちの艱難辛苦を、重厚な筆致で描くサスペンス大作。

J・J・サヴァリン
井坂清訳

戦闘ヘリリンクス
—工作員救出作戦—

中国に潜入した工作員を救出すべく香港へ向かうプロスを、執拗な妨害が待ち受ける……。高性能ヘリが活躍するシリーズ第一作。

J・デイリ
小沢瑞穂訳

ローソン・ブルーの瞳
(上・下)

海の色よりもなお深いブルーの瞳の持ち主、アビーとレイチェル。ふたりの美しい異母姉妹が織りなす愛憎のドラマを華麗に描く。

サガ
朝吹登水子訳

愛の中のひとり

嵐のように激しいこの恋慕は、彼女には伝わらず私の心の中に静止する……。諦めをもって若き未亡人を愛した男の牧歌的な恋物語。

R・ジャン
鷺見和佳子訳

読書する女

幻想的熱情、性的憧憬、頹廢的媚薬——どんな本でも美しい声で朗読するマリー・コンスタンス。彼女が体験する不思議な愛の時間。

西村京太郎著

大垣行345M列車
の殺意

東京駅23時25分発の夜行列車に乗っていた若い女が殺された。その容疑者に十津川警部の友人が!? 傑作トラベル・ミステリー4編。

M O T H E R

—The Original Story—

新潮文庫

く - 16 - 1



平成元年八月二十五日
平成元年九月二十日
発行

著者 久美沙織

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七
電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替いたします。

印刷・東洋印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

© Saori Kumi 1989 Printed in Japan

ISBN4-10-116611-0 C0193

